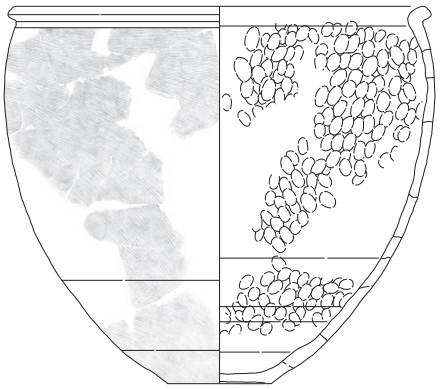
富 山 県 文 化 振 興 財 団
埋蔵文化財発掘調査報告第68集

中波後山遺跡
宇波ウワノ遺跡　発掘調査報告
惣領野際遺跡

── 能越自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘報告XV ──



２０１６年

公益財団法人 富山県文化振興財団
埋 蔵 文 化 財 調 査 事 務 所

中波後山遺跡
宇波ウワノ遺跡　発掘調査報告
惣領野際遺跡

―― 能越自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘報告XV ――

２０１６年

公益財団法人 富山県文化振興財団
埋蔵文化財調査事務所

序

能越自動車道は，北陸自動車道の小矢部砺波ジャンクションから北上して，高岡市，氷見市を通り，石川県輪島市に至る高規格幹線道路として計画されました。この能越自動車道と関連アクセス道の建設に伴い，当事務所では平成４年度から路線内の多数の遺跡を発掘調査してまいりました。

本書は，平成25年度と26年度に発掘調査を実施した氷見市の中波後山遺跡，宇波ウワノ遺跡，惣領野際遺跡の成果をとりまとめたものです。

中波後山遺跡では，丘陵斜面に中世の集石遺構がみつかり，石仏や珠洲等が出土しました。宇波ウワノ遺跡では，丘陵頂部から尾根上に弥生時代終末期の竪穴建物，古代の掘立柱建物や焼土坑，中世の集石遺構がみつかりました。氷見市の中でも，丘陵が海岸近くまでせり出し，平野部が少ない灘浦地区の歴史の解明につながる成果が得られました。また惣領野際遺跡では，平成15年度の調査でみつかった古墳時代の河川や中世の集落跡の延長部分が確認されました。中世の集落跡は，南北朝期の史料に見える耳浦荘に関連する遺構である可能性があります。

こうした発掘調査の成果が，文字の記録に現れることのない往時の生活をひもとく一助となり，地域の歴史と文化財の理解に役立てば幸いです。

本書をまとめるにあたり，ご協力とご指導を頂きました関係機関および関係諸氏に厚く感謝申し上げます。

平成28年３月

公益財団法人 富山県文化振興財団
埋 蔵 文 化 財 調 査 事 務 所

例　言

1　本書は富山県氷見市中波地内に所在する中波後山遺跡，同宇波地内に所在する宇波ウワノ遺跡，同惣領地内に所在する惣領野際遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査は国土交通省北陸地方整備局からの委託を受け，公益財団法人富山県文化振興財団が行った。

3　本遺跡の発掘調査期間と本書刊行までの整理期間は下記のとおりである。

調査期間	中波後山遺跡	平成25（2013）年10月29日～12月19日
	宇波ウワノ遺跡	平成25（2013）年９月17日～10月18日，平成26（2014）年６月10日～９月12日
	惣領野際遺跡	平成26（2014）年10月１日～12月10日
整理期間	平成26（2014）年４月9日～平成28（2016）年３月31日	

4　調査に関する全ての資料，出土遺物は，本書刊行後，富山県埋蔵文化財センターで保管する。

5　遺跡の略号は市町村番号に遺跡名を続け，以下のとおりとし，遺物の注記には略号を用いた。
中波後山遺跡「05NU」，宇波ウワノ遺跡（旧熊野神社古墳群）Ａ地区「05KJ」，Ｂ地区「05KJ-B」，惣領野際遺跡Ｃ地区「05SN-C」

6　本書の編集は越前慎子が担当した。執筆は越前慎子，青山晃，島田亮仁，新宅茜が担当し，分担は文末に記した。自然科学分析は諸機関に委託し，その成果を収録した。

7　遺構の略号は以下のとおりである。
ＳＩ：竪穴建物，ＳＢ：掘立柱建物，ＳＰ：柱穴，ＳＤ：溝･自然流路，ＳＫ：土坑，ＳＸ：集石遺構

8　遺構番号は，各遺跡とも調査時に地区ごとに付した番号にある一定の数値を加算して遺構番号とした。番号は，遺構の種類にかかわらず連番とするが，掘立柱建物には新たに番号を付した。
各遺跡，各地区の遺構番号に加算した数値は次のとおりである。但し複数の地区にわたる遺構は，小さい方の遺構番号で示す。
中波後山遺跡　加算せず，宇波ウワノ遺跡　Ａ地区：加算せず，Ｂ地区：＋100，惣領野際遺跡　Ｃ地区：＋700

9　本書で示す座標は平面直角座標系第７系（中波後山遺跡・宇波ウワノ遺跡は世界測地系，惣領野際遺跡は日本測地系）を基準とし，方位は全て真北，標高は海抜高である。

10　挿図の縮尺は下記を基本とし，各図の下に縮尺率を示す。
遺構　竪穴建物：1/40，掘立柱建物：1/100，古墳：1/150，溝・自然流路：1/40・1/80，土坑：1/40，集石：1/60
遺物　土器・陶磁器：1/3・1/4・1/6，木製品：1/3・1/6，石製品：1/3・1/6，金属製品：1/1・1/3

11　土層及び遺構埋土，土器・陶磁器の胎土色調・釉色調については，農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』，財団法人日本規格協会「標準色票　光沢版」を使用し，後者の和名は小学館『色の手帖』より似たものを使用した。

12　遺物は種類に関わらず連番を付し，斜体で示す。本文・挿図・一覧表・写真図版の遺物番号は全て一致する。

13　遺構の地山，遺物の赤彩等は以下のとおりに示す。これ以外については図中に凡例を示した。
ス　ス　　地　山　　○赤　彩

14　施釉陶磁器の釉の掛かる範囲は一点鎖線で示した。

15　遺物の煤や炭化物の付着する範囲は，二点鎖線及びスクリントーンで示した。但し，煮炊具に付着する煤や炭化物は図示せず，付着の有無を一覧表に記載した。

16　本文・挿図で扱った遺構･遺物は，一覧表に掲載している。その凡例は以下のとおりである。
①遺構の埋土に切り合い関係がある場合は，備考欄に「新＞古」と示す。
②規模の（　）内は現存長を表す。
③土器法量の（　）内は現存長を表す。残存部が少なく計測不能なものは空欄とした。
④重量はｇ単位で示す。計測は大きさによって台秤と電子秤を使い分けた。

17　発掘調査から本書の作成に至るまで，下記の方々から多大なご教示・ご協力を得た。記して謝意を表します。（敬称略，五十音順）
池野正男，岡田一広，鈴木景二，中村由克，松島　洋
氷見市教育委員会，富山県教育委員会，富山県埋蔵文化財センター

目　次

第Ⅰ章　調査の経過

1　調査に至る経緯 …… 1

（1）調査の契機…… 1　（2）既往の調査…… 2

2　発掘作業の経過と方法 …… 7

3　整理作業の経過と方法 …… 7

4　調査成果の公開 …… 8

第Ⅱ章　位置と環境

1　地理的環境…… 9

2　歴史的環境…… 9

第Ⅲ章　中波後山遺跡

1　概　要 ……15

2　層　序 ……15

3　遺構・遺物……15

4　自然科学分析 ……28

（1）放射性炭素年代測定（ＡＭＳ法）……28

5　総　括 ……30

第Ⅳ章　宇波ウワノ遺跡

1　概　要 ……32

2　層　序 ……32

3　遺構・遺物……33

（1）弥生時代終末期……33　（2）古墳時代……34

（3）古代……35　（4）中世……37

4　自然科学分析 ……61

（1）放射性炭素年代測定（ＡＭＳ法）……61

（2）植物珪酸体分析・花粉分析・樹種同定 ……64

5　総　括 ……71

第Ⅴ章　惣領野際遺跡

1　概　要 ……82

2　層　序 ……82

3　遺構・遺物……83

（1）古墳時代……82　（2）中近世……83

4　自然科学分析 ……97

（1）樹種同定 ……97

（2）種実同定 ……99

5　総　括 ……103

報告書抄録

挿図目次

第１図　能越自動車道関連本調査遺跡位置図…… 3
第２図　氷見市内能越自動車道関連埋蔵文化財包蔵地位置図…… 6
第３図　調査地区区割図…… 8
第４図　地形図……12
第５図　中波後山遺跡・宇波ウワノ遺跡周辺遺跡位置図……13
第６図　惣領野際遺跡周辺遺跡位置図……14
第７～10図　中波後山遺跡全体図……17～20
第11～15図　中波後山遺跡遺構実測図……21～25
第16・17図　中波後山遺跡遺物実測図……26・27
第18図　中波後山遺跡暦年較正年代グラフ……29
第19図　宇波ウワノ遺跡現況測量図……40
第20図　宇波ウワノ遺跡全体図……41
第21～24図　宇波ウワノ遺跡遺構実測図……42～45
第25～27図　宇波ウワノ遺跡全体図……46～48
第28～36図　宇波ウワノ遺跡遺構実測図……49～57
第37～39図　宇波ウワノ遺跡遺物実測図……58～60
第40図　宇波ウワノ遺跡暦年較正年代グラフ……63
第41図　宇波ウワノ遺跡植物珪酸体分析結果……65
第42図　宇波ウワノ遺跡主要遺構変遷図……72
第43図　宇波ウワノ遺跡・宇波西遺跡（古代）平面図……74
第44図　宇波ウワノ遺跡・宇波西遺跡断面図……75
第45図　宇波ウワノ遺跡Ｂ地区古代土器出土分布図……75
第46図　宇波ウワノ遺跡からの眺望解析……76
第47図　渤海・日本間の渡航経路推定図……77
第48図　惣領野際遺跡層序模式図……83
第49・50図　惣領野際遺跡全体図（古墳時代）……87・88
第51図　惣領野際遺跡遺構実測図……89
第52・53図　惣領野際遺跡全体図（中世）……90・91
第54・55図　惣領野際遺跡遺構実測図……92・93
第56～58図　惣領野際遺跡遺物実測図……94～96
第59図　惣領野際遺跡中世遺構変遷図…… 104
第60図　氷見平野の条里復原図…… 105

表目次

第１表　能越自動車関連埋蔵文化財包蔵地一覧…… 4
第２表　調査体制・調査一覧…… 8
第３表　整理体制…… 8
第４表　周辺遺跡一覧……14
第５表　中波後山遺跡放射性炭素年代測定結果……30
第６表　中波後山遺跡放射性炭素年代測定結果……30
第７表　中波後山遺跡土器一覧……31
第８表　中波後山遺跡石製品一覧……31
第９表　宇波ウワノ遺跡放射性炭素年代測定結果……62
第10表　宇波ウワノ遺跡放射性炭素年代測定結果……63
第11表　宇波ウワノ遺跡植物珪酸体分析結果……65
第12表　宇波ウワノ遺跡花粉分析結果……67
第13表　宇波ウワノ遺跡樹種同定結果……67
第14表　宇波ウワノ遺跡建物一覧……79
第15表　宇波ウワノ遺跡柱穴一覧……79
第16表　宇波ウワノ遺跡溝一覧……79
第17表　宇波ウワノ遺跡土坑一覧……79
第18表　宇波ウワノ遺跡土器・陶磁器・土製品一覧…80
第19表　宇波ウワノ遺跡石製品一覧……81
第20表　宇波ウワノ遺跡金属製品一覧……81
第21表　惣領野際遺跡樹種同定結果……97
第22表　惣領野際遺跡出土の種実遺体一覧…… 101
第23表　分類群の記載…… 101
第24表　惣領野際遺跡建物一覧…… 106
第25表　惣領野際遺跡柱穴一覧…… 106
第26表　惣領野際遺跡溝・自然流路一覧…… 106
第27表　惣領野際遺跡土坑一覧…… 106
第28表　惣領野際遺跡土器・陶磁器・土製品一覧… 107
第29表　惣領野際遺跡木製品一覧…… 108
第30表　惣領野際遺跡石製品一覧…… 108
第31表　惣領野際遺跡金属製品一覧…… 108

写真図版目次

図版１　中波後山遺跡　遠景・全景
図版２　中波後山遺跡　集石遺構・平坦地
図版３　中波後山遺跡　集石遺構
図版４　宇波ウワノ遺跡　遠景
図版５　宇波ウワノ遺跡　全景
図版６　宇波ウワノ遺跡　竪穴建物
図版７　宇波ウワノ遺跡　集石遺構
図版８　宇波ウワノ遺跡　集石遺構・焼土坑
図版９　中波後山遺跡　航空写真
図版10　宇波ウワノ遺跡　航空写真
図版11　惣領野際遺跡　航空写真
図版12・13　中波後山遺跡　集石遺構
図版14　中波後山遺跡　珠洲・石仏
図版15　宇波ウワノ遺跡　全景
図版16・17　宇波ウワノ遺跡　竪穴建物
図版18　宇波ウワノ遺跡　古墳・土坑
図版19　宇波ウワノ遺跡　掘立柱建物
図版20　宇波ウワノ遺跡　掘立柱建物・焼土坑
図版21　宇波ウワノ遺跡　集石遺構
図版22　宇波ウワノ遺跡　集石遺構・溝
図版23　宇波ウワノ遺跡　土器・石製品
図版24　宇波ウワノ遺跡　土器・土製品
図版25　宇波ウワノ遺跡　土器・陶磁器・石製品
図版26　惣領野際遺跡　遠景・全景
図版27　惣領野際遺跡　全景･自然流路
図版28　惣領野際遺跡　全景
図版29　惣領野際遺跡　掘立柱建物
図版30　惣領野際遺跡　溝
図版31　惣領野際遺跡　土器・陶磁器
図版32　惣領野際遺跡　珠洲
図版33　惣領野際遺跡　土器・陶磁器・木製品　石製品・金属製品

第Ⅰ章　調査の経過

1　調査に至る経緯

（1）調査の契機

能越自動車道（一般国道470号）は，富山県砺波市と石川県輪島市を結ぶ延長約100kmの自動車専用道路で，昭和62（1987）年に高規格幹線道路網計画の一部として策定された。富山県内の総延長は約45kmで，平成16（2004）年に北陸自動車道・東海北陸自動車道と連結する小矢部砺波JCT（ジャンクション）から高岡北IC（インターチェンジ）までの約18.2km（高岡砺波道路）が，平成19（2007）年には高岡北ICから氷見ICまでの約11.2km（氷見高岡道路）が開通している。平成24（2012）年３月に氷見ICから灘浦ICまでの約8.5km（七尾氷見道路）が完成し，残りは灘浦ICから県境までの範囲となっていた。

能越自動車道の建設計画は平成２（1990）年４月に建設省（現国土交通省）から富山県教育委員会（以下，県教委）に示され，路線予定地内の埋蔵文化財の取り扱いについて，建設省北陸建設局（現国土交通省北陸地方整備局）・県教委・小矢部市教育委員会の三者により協議が行われた。その結果，埋蔵文化財の分布状況を把握するため，小矢部市の用地買収完了地域で早急に分布調査を実施することとなった。以後，平成２（1990）年から平成16（2004）年まで断続的に，小矢部市・旧福岡町・高岡市・氷見市域の分布調査を県教委が主体となり，当該市町村の協力を得て実施し，52箇所の埋蔵文化財包蔵地が確認された。

平成14（2002）年には氷見ICから灘浦IC間の分布調査が実施され，熊野神社古墳群を含む５箇所の周知の埋蔵文化財包蔵地を再確認し，新たにNEJ－22～27遺跡の埋蔵文化財包蔵地が設定された。また平成16（2004）年には能越道建設予定地内の稲積・宇波・姿～県境までの分布調査を実施し，NEJ－28～30遺跡の埋蔵文化財包蔵地と２箇所の埋蔵文化財包蔵地推定地（中波）が設定された。分布調査の結果から埋蔵文化財包蔵地の今後の取り扱いについて検討が行われ，遺跡のより明確な範囲と内容について把握するため包蔵地確認調査を実施することとなった。

分布調査の結果を受けて，建設省（平成11年７月から国土交通省）から埋蔵文化財包蔵地確認調査の要望が県教委に出され，協議の結果財団法人（現公益財団法人）富山県文化振興財団（以下，財団）及び当該市町村が受託することとなり，財団は平成４（1992）年度から平成23（2011）年度までに小矢部市～氷見市の埋蔵文化財包蔵地43箇所の確認調査を実施した。なお，平成25（2013）年度は平成24（2012）年10月の県教委の試掘調査の対応方針に従い，富山県埋蔵文化財センター（以下県センター）が２箇所の確認調査を実施している。確認調査の結果，本調査が必要と判断された36遺跡のうち32遺跡について，建設省（国土交通省）と県教委の協議により，平成４（1992）年度から平成26（2014）年度までの間に財団が本調査を実施した。

調査終了後，能越自動車道は平成27（2015）年に県内全線が開通し，未開通区間は田鶴浜ICから七尾ICまでの9.5kmを残すのみとなっている。

（2）既往の調査

宇波ウワノ遺跡は本調査終了まで「熊野神社古墳群」として登録されていた。熊野神社古墳群は，昭和58（1983）年３月発行の『氷見市遺跡地図』では２基からなる古墳群として記載され，群中１基は中世墓かとされていた[注1]。平成12（2000）年１月の氷見市史編さん委員会による踏査で新たに丘陵頂部に古墳が１基追加され，遺跡範囲も西側へ拡張された[注2]。平成14(2002)年発行の氷見市史では，新たに追加した古墳を２号墳とし，尾根方向の長さ29m，直交幅30mの方形を呈するとされた。墳頂平坦面の南東端には直径６mのマウンドがあり，中世墓の可能性もあるが風倒木の転覆痕かとされた。既知の１号墳については直径約16m，高さ1.5mの円墳とされた。中世墓かとされていた場所では低平な方形マウンドの頂部に10㎝前後の川原石からなる集石が確認され，中世の集石墓とされた。

熊野神社古墳群は１号墳と集石墓が能越自動車道建設予定地から外れたが，２号墳を含む遺跡の北西部分が路線内に該当したため，路線内の確認調査を実施することになった。確認調査は，南側を平成23（2011）年に財団が調査することとなり，新たに円墳とみられる高まりを１箇所確認したほか集石を確認し，中世の集石墓がある可能性を指摘した。北側は平成25（2013）年に県センターが確認調査を実施し，２号墳と墳丘上にある塚状の高まりを再確認した。確認調査の結果を受けて，財団は平成25・26（2013・2014）年度に熊野神社古墳群の本調査を実施した。

しかし本調査では２号墳とされていた部分は古墳ではないと結論づけられ，塚状の高まりと認識されていた部分は中世の遺物を伴う集石遺構であることが確認された。財団の確認調査で新たな古墳とみていた３号墳も，調査区内では墳丘盛土や埋葬施設が検出されず，古墳とは言い切れない調査結果となった。また予想されていなかった弥生時代の竪穴建物や古代の掘立柱建物等が検出され，熊野神社古墳群は幅広い年代の遺構が存在する複合遺跡であることが判明した。この調査結果の報告をうけて，氷見市教育委員会（以下市教委）では平成27年４月，「熊野神社古墳群」としていた遺跡範囲を「宇波ウワノ遺跡」に名称変更した。このため本書では「宇波ウワノ遺跡」の名称を用いて報告する。

なお，平成24（2012）年12月，宇波ウワノ遺跡の北側の能越自動車道建設予定地で測量作業中の測量業者が集石遺構及び五輪塔を発見し，市教委が現地を踏査した結果，新規の遺跡であることが確認された。遺跡は「宇波ヨシノヤ中世墓（仮称）」と命名され，市教委が平成24年度に範囲確認のための測量調査を，平成25年度に本調査を実施した。本調査の結果，火葬骨を埋葬した石組墓や集石遺構が複数確認され，遺跡名は「宇波ヨシノヤ中世墓群」と改められた[注3]。

中波の埋蔵文化財包蔵地推定地は，谷を挟んだ丘陵上に２箇所設定され，南側を平成22（2010）年に財団が，北側を平成25（2013）年に県センターが調査した。その結果，北側で中世墓・平坦面・集石・道跡を確認し，中世墓では一石一尊仏・珠洲が見つかり，「中波後山遺跡」と命名された。確認調査の結果を受けて，財団は平成25（2013）年度中に中波後山遺跡の本調査を実施した。

惣領地内の能越自動車道関連の調査として，県教委は平成12（2000）年に高岡北ICから氷見IC間の分布調査を実施し，調査結果からNEJ－15・16を設定した。財団が包蔵地確認調査を実施し，NEJ－15では古墳時代と中世の２面の遺構面を確認した。NEJ－15は遺構が確認されなかった南端部分を除いて「惣領野際遺跡」，NEJ－16は「惣領浦之前遺跡」と命名され，平成15年度に財団が能越道本線敷の本調査を実施した。この時，国交省との協議の上，暫定２車線分の工事を優先するということで東側境界から幅10mの範囲の調査を実施していない。

惣領野際遺跡の本調査では市道を挟んで北側をＡ地区，南側をＢ地区とした。Ａ地区では縄文時代晩期，弥生時代中期～後期の自然流路，中世の掘立柱建物等を，Ｂ地区では古墳時代の自然流路，中

第１図　能越自動車道関連本調査遺跡位置図

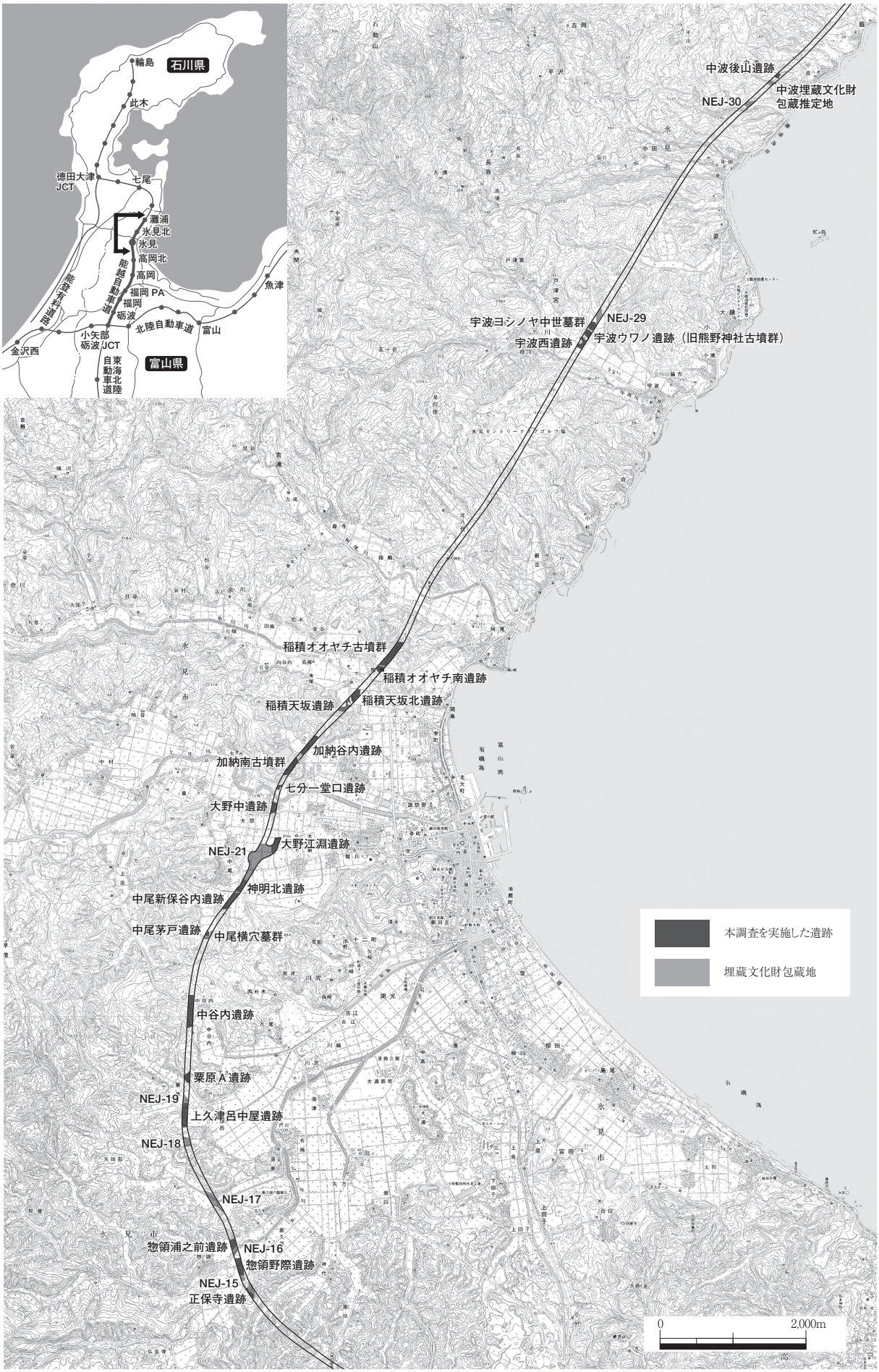
第１表　能越自動車道関連埋蔵文化財包蔵地一覧（１）

No.	埋蔵文化財包蔵地名	所在地	確認調査						本調査											
			調査主体	調査面積（㎡）	対象面積（㎡）	調査期間	調査結果	文献※	調査主体	調査面積（㎡）	調査延面積（㎡）	調査期間	遺跡の特徴	縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世	文献※
1	NEJ－01	小矢部市水島	小矢部市教委	271	5,600	1990/10/31～11/1	本調査不要	1												
2	NEJ－02	小矢部市水島	小矢部市教委	237	8,000	1990/11/2	本調査不要	1												
3	NEJ－03	小矢部市道明	小矢部市教委	1,184	16,800	1990/11/5～11/12	本調査不要	1												
4	NEJ－04	小矢部市五社	小矢部市教委	2,977	67,000	1990/11/13～11/20	五社遺跡を設定	1	財団	23,010	38,100	1992/7/20～12/27	古墳時代・古代・中世の集落			○	◎	◎	○	21
										3,970	6,209	1993/4/19～12/8								
										2,330	6,990	1994/5/18～10/25								
5	NEJ－05	福岡町開酵・大滝	財団	4,660	78,400	1992/6/19～7/7	開酵大滝遺跡を設定	2	財団	20,744	28,063	1993/5/19～12/21	木舟城の城下集落					◎	○	22
6	NEJ－A－01	小矢部市石名田	小矢部市教委	1,462	25,200	1990/11/21～12/10	石名田遺跡を設定	1	財団	12,853	14,493	1993/5/11～12/15	古代村落，中世城下町			○	◎	◎		23
7	NEJ－A－03	福岡町木舟	財団	2,100	32,600	1992/6/16～7/1	石名田遺跡と同一遺跡 石名田木舟遺跡を設定	2		26,265	40,781	1994/5/18～1995/1/19								
										2,050	2,050	1995/5/17～7/25								
8	NEJ－A－02	小矢部市地崎	小矢部市教委	1,049	19,800	1990/12/11～12/20	地崎遺跡を設定	1	財団	1,636	1,636	1993/5/11～7/27	近世の集落						◎	22
9	NEJ－A－04	小矢部市芹川	財団	900	19,400	1992/6/15～6/16	本調査不要	2												
10	NEJ－06	福岡町簑島・江尻	財団	2,900	72,500	1992/6/17～6/29	簑島遺跡を設定	2	財団	3,476	3,476	1995/5/18～8/11	縄文晩期の土器出土	○	○	○			○	24
							江尻遺跡を設定	2	財団	10,602	22,204	1995/5/19～12/18	近世の屋敷	○	○			○	◎	24
11	NEJ－07	福岡町下老子・一歩二歩	財団	4,900	74,800	1992/6/1～6/17	下老子遺跡を設定	2	財団	9,994	9,994	1995/5/25～12/11	弥生後期の玉作集落，弥生後期～古墳中期の水田	○	◎	○	○	○	○	25
										34,700	78,688	1996/5/13～12/24								
12	NEJ－08	高岡市笹川・千鳥丘町	財団	3,800	76,800	1994/6/6～7/4	下老子遺跡と同一遺跡 下老子笹川遺跡を設定	3		52,730	79,388	1997/5/13～12/19								
										34,860	56,869	1998/5/26～11/30								
13	ＨＳ－01	高岡市内島・六家・池田	高岡市教委	8,628	78,000	1996/7/15～10/14	本調査不要	4												
14	近世北陸道推定地	高岡市笹川	財団	111	67,000	1998/6/1	近世北陸道遺跡を設定	－	財団	489	489	1998/6/10～6/30	近世北陸道の側溝						◎	26
15	NEJ－10	高岡市手洗野	財団	3,247	45,600	1998/11/24～12/8	手洗野赤浦遺跡を設定	5	財団	4,646	7,546	1999/5/21～10/19	中世井戸から呪符木簡出土					◎		26
16	NEJ－11	高岡市岩坪	財団	4,181	46,800	1998/11/9～12/12	岩坪岡田島遺跡を設定	5	財団	430	430	1999/10/18～11/29	古代・中世の集落	○		○	◎	○	26
										8,002	17,514	2000/5/22～12/19								
										8,675	12,435	2001/5/22～11/30								
17	NEJ－12	高岡市五十里	財団	3,193.2	37,500	1999/10/18～12/1	本調査不要	6												
18	NEJ－13	高岡市五十里	財団	189	14,570	2001/5/16～5/17	五十里沼田遺跡を設定	7	高岡市教委	945	945	2003/5/21～8/4	古墳時代～古代の溝・溜池	○		○	○			27
19	板屋谷内Ｂ古墳群	高岡市五十里	財団	279	13,200	2003/11/17～12/2	古墳２基を再確認	8	財団	4,465	4,465	2004/6/7～12/16	円墳２基			◎				28
20	板屋谷内Ｃ古墳群	高岡市五十里					古墳３基を再確認し，新たに古墳１基を確認	8	財団	4,417	4,417	2004/6/7～12/16	円墳３基，方墳２基，鉄剣・鏡・玉類出土			◎				28
21	NEJ－14	高岡市西海老坂	財団	90	3,700	2001/7/30～7/31	堂前遺跡を設定	7	財団	834	1,668	2001/10/22～12/11	白鳳時代の四面庇建物	○			◎	○	○	28
22	正保寺遺跡	氷見市飯久保	財団	228	16,950	2002/9/30～10/25	古代・中世の集落を確認	9	氷見市教委	1,050	1,050	2003/8/25～12/17	中世寺院へ続く道路	○	○		○	○	○	29
										1,500	1,500	2004/6/1～9/10								
23	NEJ－15	氷見市惣領	財団	1,064	16,950	2002/5/27～5/31	惣領野際遺跡を設定	9	財団	9,808	19,616	2003/5/27～12/24	弥生後期～古墳初頭の木製品出土，中世の集落	○	○	○		◎		30
									財団	1,200	1,200	2014/10/1～12/10	古墳・中世の集落			○		○		本書
24	NEJ－16	氷見市惣領	財団	767	10,200	2002/6/3～6/6	惣領浦之前遺跡を設定	9	財団	7,268	13,378	2003/5/27～11/12	弥生溝から朱漆塗り盾出土，古代～中世の集落	○	○		◎	◎	○	30
			氷見市教委	15	236	2014/3/18	弥生～中世の集落を確認	10	氷見市教委			2015調査予定								
25	NEJ－17	氷見市矢田部	財団	639	14,890	2002/7/17～9/26	本調査不要	9												
26	NEJ－18	氷見市上久津呂	財団	477	4,910	2002/6/18～11/1	本調査不要	9												
27	NEJ－19	氷見市上久津呂	財団	1,492	26,555	2003/5/13～11/14	上久津呂中屋遺跡を設定	8	財団	1,020	1,020	2003/11/13～12/16	縄文貝塚・谷，弥生・古墳・古代～中世の集落	◎	◎	○	◎	◎	○	31
										14,169	17,490	2004/5/28～12/14								
										3,012	4,555	2005/5/19～9/31								
28	粟原Ａ遺跡	氷見市粟原	財団	76	3,100	2002/6/25～6/28	古代・中世の集落を確認	9	氷見市教委	500	500	2003/6/12～8/20	散布地				○	○	○	11
			氷見市教委	289	8,000	2003/5/29～6/2	弥生・古代・中世・近世の集落を確認	11	氷見市教委	1,230	1,230	2004/9/6～12/17								
29	中谷内遺跡	氷見市中谷内	財団	1,455	42,870	2002/6/6～12/3	縄文・古墳・古代・中世の集落を確認	9	財団	11,720	30,672	2003/5/26～12/25	古墳後期・中世の集落，古墳・古代の土器廃棄			◎	◎	◎		32
										16,196	26,429	2004/5/27～12/17								
										1,484	2,968	2005/4/7～5/30								
30	NEJ－20	氷見市中尾	財団	882	18,100	2001/10/25～10/29	中尾茅戸遺跡を設定	7	財団	1,236	1,236	2002/9/24～12/17	弥生～古墳・古代の集落		○	○	○	○		33
										1,361	1,361	2003/6/23～11/18								
			財団	198	6,500	2002/11/19～11/20	本調査不要	9												
31	中尾横穴墓群	氷見市中尾	財団	252	4,210	2002/6/19～7/5	本調査不要	9												
32	中尾埋蔵文化財包蔵推定地	氷見市中尾	財団	109	16,200	2004/11/18～11/19	本調査不要	12												
33	中尾坊田遺跡	氷見市中尾	財団	1,143	21,450	2001/10/22～10/25	中尾新保谷内遺跡とする	7	財団	9,377	13,076	2002/5/22～12/6	古代・中世の集落，中世～近世の溜池	○			○	◎	○	33
34	中尾新保谷内遺跡	氷見市中尾								7,415	7,415	2003/5/27～10/3								
										2,552	2,839	2004/5/25～12/9								
35	NEJ－21	氷見市中尾	財団	4,194	99,710	2001/10/9～10/22	神明北遺跡を設定	7	財団	3,120	3,120	2002/7/3～9/25	弥生～古代・中世の集落		○	○	○	○	○	33
		氷見市大野					大野江淵遺跡を設定	7	財団	12,229	12,229	2004/5/27～11/9	弥生河川から田下駄出土，中近世の溜池		○			○	○	33
36	NEJ－22	氷見市大野	財団	184	1,800	2004/5/25～5/26	大野中遺跡を設定	12	財団	1,064	1,064	2005/5/12～7/19	古代の集落				◎	○	○	34
		氷見市大野 （大野中遺跡隣接地）	財団	120	7,012	2005/10/25～10/26	遺跡の範囲を拡張	13		3,018	3,018	2006/5/24～10/2								
37	NEJ－23	氷見市七分一	財団	630	12,470	2004/5/27～6/1	七分一堂口遺跡を設定	12	財団	2,608	2,608	2005/5/12～10/3	弥生の谷，中世の集落		○	○		◎		34

第１表　能越自動車道関連埋蔵文化財包蔵地一覧（２）

No.	埋蔵文化財包蔵地名	所在地	確認調査						本調査											
			調査主体	調査面積（㎡）	対象面積（㎡）	調査期間	調査結果	文献※	調査主体	調査面積（㎡）	調査延面積（㎡）	調査期間	遺跡の特徴	縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世	文献※
38	加納南古墳群	氷見市加納	－	－	－	－	旧称加納中程古墳群，尾根部分を本調査対象とする	－	財団	8,241	8,241	2006/6/12～12/15	円墳8基，筒形器台出土，中世加納城			◎		◎		35
			財団	18.2	－	2005/12/8	本調査不要	－												
39	NEJ－24	氷見市加納	財団	1,496	25,700	2004/5/24～6/4	加納谷内遺跡を設定	12	財団	17,898	25,953	2005/5/16～12/21	縄文前期の埋設土器，中近世の集落	○				◎	◎	34
										4,813	9,422	2006/5/17～11/28								
40	加納谷内遺跡隣接地	氷見市加納	財団	60.8	1,100	2006/5/16	本調査不要	14												
41	NEJ－25	氷見市稲積	財団	630	9,800	2004/12/6～12/9	稲積天坂遺跡を設定	12	財団	5,650	5,650	2006/6/19～9/27	弥生後期の五角形建物，中世井戸から木像出土	○	◎		○	○	○	36
		氷見市稲積（稲積天坂遺跡隣接地）	財団	48	653	2005/10/24	遺跡の範囲を拡張	13		2,847	2,847	2007/5/24～8/10								
42	NEJ－26	氷見市稲積	財団	256	5,921	2005/5/30～6/1，10/17	稲積オオヤチ南遺跡を設定	13	財団	972	972	2006/9/25～10/25	中近世の集落			○		◎	◎	36
										4,040	8,080	2007/5/29～11/28								
43	NEJ－27	氷見市宇波	財団	864	18,600	2004/11/29～12/8	宇波西遺跡を設定	12	財団	15,524	15,524	2007/6/4～11/22	弥生後期の木組遺構，古代～中世の集落		○	○	◎	◎	○	36
			財団	123	1,000	2006/10/30～10/31	本調査不要	14												
44	宇波西遺跡隣接地	氷見市宇波	財団	488	7,200	2007/5/28～6/1	本調査不要	15												
45	NEJ－28	氷見市稲積	財団	1,032	22,805	2005/5/30～6/1，2005/10/18～10/21	稲積天坂北遺跡を設定	13	財団	10,908	14,837	2006/5/15～11/13	須恵器把手付中空円面硯出土	○		○	◎	○	○	36
46	稲積オオヤチ古墳群	氷見市稲積	財団	417	19,800	2006/8/28～9/4	古墳・山城関係の遺構を確認	14	財団	2,803	2,803	2007/6/11～11/6	前方後円墳１基，円墳４基，中世山城			◎		○		35
47	NEJ－29	氷見市宇波	財団	675	13,000	2004/11/29～12/3	本調査不要	12												
48	宇波ウワノ遺跡（旧称　熊野神社古墳群）	氷見市宇波	財団	345	6,000	2011/11/14～11/18	新規の円墳・中世墓？を確認	16	財団	1,040	1,040	2013/9/17～10/18	弥生・古代の集落，中世の集石遺構，本調査終了後，宇波ウワノ遺跡に名称変更		○		○	○		本書
			県教委	85	11,240	2013/6/12～6/17	古墳１基を再確認，新たに塚？を確認	17		1,890	1,890	2014/6/10～9/12								
49	宇波ヨシノヤ中世墓	氷見市宇波	氷見市教委	－（測量調査）	400	2014/1/29～3/15	宇波ヨシノヤ中世墓群に名称変更	18	氷見市教委	29	29	2013/7/8～8/29	中世の石組墓					○		37
50	NEJ－30	氷見市中波	財団	198	6,500	2009/11/24～11/25	本調査不要	19												
51	中波埋蔵文化財包蔵地推定地（遺跡番号205396）	氷見市中波	財団	316	9,000	2010/11/30～12/2	本調査不要	20												
52	中波埋蔵文化財包蔵地推定地（遺跡番号205397）	氷見市中波	県教委	59	2,440	2013/6/17～6/20	中波後山遺跡に名称変更	17	財団	3,140	3,140	2013/10/29～12/19	中世の集石遺構					○		本書

※文献
1　富山県埋蔵文化財センター　1991『富山県埋蔵文化財センター年報　平成２年度』
2　富山県文化振興財団　1993『能越自動車道関係埋蔵文化財包蔵地調査報告　小矢部市～福岡町間』
3　富山県文化振興財団　1995『能越自動車道関係埋蔵文化財包蔵地調査報告　NEJ-08遺跡』
4　高岡市教育委員会　1997『富山県高岡市HS-01遺跡第４次調査　試掘調査概要報告書』
5　富山県文化振興財団　1999『能越自動車道関係埋蔵文化財包蔵地調査報告　NEJ-10・NEJ-11』
6　富山県文化振興財団　2000『埋蔵文化財調査概要　平成11年度』
7　富山県文化振興財団　2002『能越自動車道関連埋蔵文化財包蔵地調査報告　NEJ-13・NEJ-14・NEJ-20・NEJ-21・中尾坊田遺跡・中尾新保谷内遺跡』
8　富山県文化振興財団　2004『能越自動車道関連埋蔵文化財包蔵地調査報告　NEJ-19（上久津呂中屋遺跡）・板屋谷内Ｂ古墳群・板屋谷内Ｃ古墳群』
9　富山県文化振興財団　2003『能越自動車道関連埋蔵文化財包蔵地調査報告　NEJ-15（惣領野際遺跡）・NEJ-16（惣領浦之前遺跡）・NEJ-17・NEJ-18・正保寺遺跡・粟原Ａ遺跡・中谷内遺跡・中尾横穴墓群・中尾茅戸遺跡』
10　氷見市教育委員会　2015『氷見市内遺跡発掘調査概報Ⅴ』一般国道415号道路改築事業に伴う試掘調査ほか
11　氷見市教育委員会　2006『粟原Ａ遺跡』能越自動車道建設に伴う発掘調査報告Ⅱ
12　富山県文化振興財団　2005『能越自動車道関連埋蔵文化財包蔵地調査報告　中尾埋蔵文化財包蔵推定地・NEJ-22（大野中遺跡）・NEJ-23（七分一堂口遺跡）・NEJ-24（加納谷内遺跡）・NEJ-25（稲積天坂遺跡）・NEJ-27（宇波西遺跡）・NEJ-29』
13　富山県文化振興財団　2006『能越自動車道関連埋蔵文化財包蔵地調査報告　大野中遺跡隣接地・稲積天坂遺跡隣接地・NEJ-26（稲積オオヤチ南遺跡）・NEJ-28（稲積天坂北遺跡）』
14　富山県文化振興財団　2007『能越自動車道関連埋蔵文化財包蔵地調査報告　加納谷内遺跡隣接地・稲積オオヤチ古墳群・宇波西遺跡』
15　富山県文化振興財団　2008『平成19年度埋蔵文化財年報』
16　富山県文化振興財団　2012『平成23年度埋蔵文化財年報』
17　富山県埋蔵文化財センター　2014『富山県埋蔵文化財センター年報　平成25年度』
18　氷見市教育委員会　2014『宇波ヨシノヤ中世墓群』能越自動車道七尾氷見道路整備事業に伴う発掘調査報告
19　富山県文化振興財団　2010『平成21年度埋蔵文化財年報』
20　富山県文化振興財団　2011『平成22年度埋蔵文化財年報』
21　富山県文化振興財団　1998『五社遺跡発掘調査報告』能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅰ
22　富山県文化振興財団　2000『開蕣大滝遺跡・地崎遺跡発掘調査報告』能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅱ
23　富山県文化振興財団　2002『石名田木舟遺跡発掘調査報告』能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅲ
24　富山県文化振興財団　2003『江尻遺跡・蓑島遺跡発掘調査報告』能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅳ
25　富山県文化振興財団　2006『下老子笹川遺跡発掘調査報告』能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅴ
26　富山県文化振興財団　2007『岩坪岡田島遺跡・手洗野赤浦遺跡・近世北陸道遺跡発掘調査報告』能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅵ
27　高岡市教育委員会　2005『五十里沼田遺跡調査概報』平成15年度能越自動車道の建設工事にともなう発掘調査
28　富山県文化振興財団　2008『板屋谷内Ｂ・Ｃ古墳群・堂前遺跡発掘調査報告』能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅶ
29　氷見市教育委員会　2006『正保寺遺跡』能越自動車道建設に伴う発掘調査報告Ⅰ
30　富山県文化振興財団　2010『惣領浦之前遺跡・惣領野際遺跡発掘調査報告』能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅸ
31　富山県文化振興財団　2013『上久津呂中屋遺跡発掘調査報告』能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅹ
32　富山県文化振興財団　2013『中谷内遺跡発掘調査報告』能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告ⅩⅠ
33　富山県文化振興財団　2009『中尾茅戸遺跡・中尾新保谷内遺跡・神明北遺跡・大野江渕遺跡発掘調査報告』能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅷ
34　富山県文化振興財団　2014『大野中遺跡・七分一堂口遺跡・加納谷内遺跡発掘調査報告』能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告ⅩⅡ
35　富山県文化振興財団　2014『加納南古墳群・稲積オオヤチ古墳群発掘調査報告』能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告ⅩⅢ
36　富山県文化振興財団　2014『稲積天坂遺跡・稲積天坂北遺跡・稲積オオヤチ南遺跡・宇波西遺跡発掘調査報告』能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告ⅩⅣ
37　氷見市教育委員会　2014『宇波ヨシノヤ中世墓群』能越自動車道七尾氷見道路整備事業に伴う発掘調査報告



第２図　氷見市内能越自動車道関連埋蔵文化財包蔵地位置図（１：75,000）

世の掘立柱建物等を検出した。古墳時代の自然流路からは建築材や槽・刳物桶等の木製品が多数出土し，中世の遺物としては青磁人物像等，所持者の格の高さを示す稀少品も出土した。

その後，本調査を実施した惣領野際遺跡・惣領浦之前遺跡隣接地において，氷見南ICの建設が計画された。惣領浦之前遺跡のIC計画地については，市教委が平成26（2014）年３月に試掘調査を，平成27（2015）年度に本調査を実施した[注4]。惣領野際遺跡のIC計画地については，財団が本調査を受託することとなり，平成26年度にＣ地区として本調査を実施した。

2　発掘作業の経過と方法

発掘調査の作業工程及びその方法・内容は，平成16（2004）年10月に文化庁から示された『行政目的で行う埋蔵文化財の調査についての標準（報告）』に則って進めた。

発掘調査の基準となるグリッドは，南北方向をＸ軸，東西方向をＹ軸として設定し，２ｍ方眼とした。各グリッド名は北東角のＸ軸・Ｙ軸の座標とした。中波後山遺跡・宇波ウワノ遺跡では，世界測地系による座標を基に設定し，中波後山遺跡ではＸ105640，Ｙ－11720，宇波ウワノ遺跡ではＸ102050，Ｙ－14420をＸ０Ｙ０の起点とした。惣領野際遺跡では，平成15年度の発掘調査で日本測地系による国土座標（平面直角座標第７系）を基に設定し，Ｘ88900，Ｙ－19000を起点としており，今回の調査でもこれを踏襲した。なお，惣領野際遺跡の起点は，国土地理院のWeb版TKY2JGDの変換プログラムにより世界測地系に変換すると，Ｘ89246.4950，Ｙ－19268.9966となる。

宇波ウワノ遺跡の調査区は，２号墳とされていた北西側の丘陵頂部付近をＡ地区，南東側の丘陵先端に近い部分をＢ地区とした。惣領野際遺跡の調査区は，平成15年度に調査した能越道本線敷を北からＡ地区・Ｂ地区としており，今回の調査区はＣ地区とした。

掘削方法は，中波後山遺跡と宇波ウワノ遺跡はすべて人力で掘削し，惣領野際遺跡は表土を重機で除去した後，包含層と遺構埋土を人力で掘削した。惣領野際遺跡の下層については，上層の調査終了後にまずトレンチを設定して遺構・遺物の有無の確認に努めた。検出した遺構は自然流路のみで遺物もほとんど出土せず，検出した遺構付近を中心に調査を実施した。

3　整理作業の経過と方法

出土遺物は調査年度内に可能な限り洗浄・注記・分類を行った。木製品・石製品・金属製品はメモ写真を撮影し，整理台帳を作成した。木製品及び金属製品は収納・管理の便宜を図るためオートシーラーと専用フィルムを用いてパックし，仮保管している。

調査概要については『埋蔵文化財年報』（平成25・26年度）として発刊している。

報告書刊行に向けての本格的な室内整理作業は，平成26（2014）年度に開始した。平成26年度は，土器の接合，自然科学分析を行った。平成27年度は，土器の復元，遺物の写真撮影及び実測・挿図図版作成，遺構の挿図作成，写真図版作成，自然科学分析，原稿執筆，編集，印刷，校正を行った。

土器・陶磁器の接合・復元は整理作業員が行った。遺物の実測は職員と整理作業員が行い，遺物実測図は種類別の遺物カードに直接書き込むか貼り込んで整理した。遺物の写真撮影は職員が行った。遺構実測図・写真は各台帳を作成して整理し，遺物カードとともにパーソナルコンピューターを使用してデータ入力した。データ入力は職員が行い，整理作業員が補足した。遺構・遺物のデータは観察表として掲載している。遺構・遺物の挿図と写真はデジタルデータ化を行い，印刷原稿とした。自然科学分析は専門業者に委託し，結果報告を掲載した。

4　調査成果の公開

（1）遺跡説明会等

中波後山遺跡については，平成25年11月に発掘調査状況について説明した資料を作成し，中波地区の全戸に配布した。

（2）調査成果報告会

宇波ウワノ遺跡（旧熊野神社古墳群）と惣領野際遺跡については，平成27年３月21日に富山県民会館で開催された「とやま発掘最前線－平成26年度調査成果報告会－」において，発掘調査成果について報告し，出土遺物の展示を行った。　（越前慎子）

注

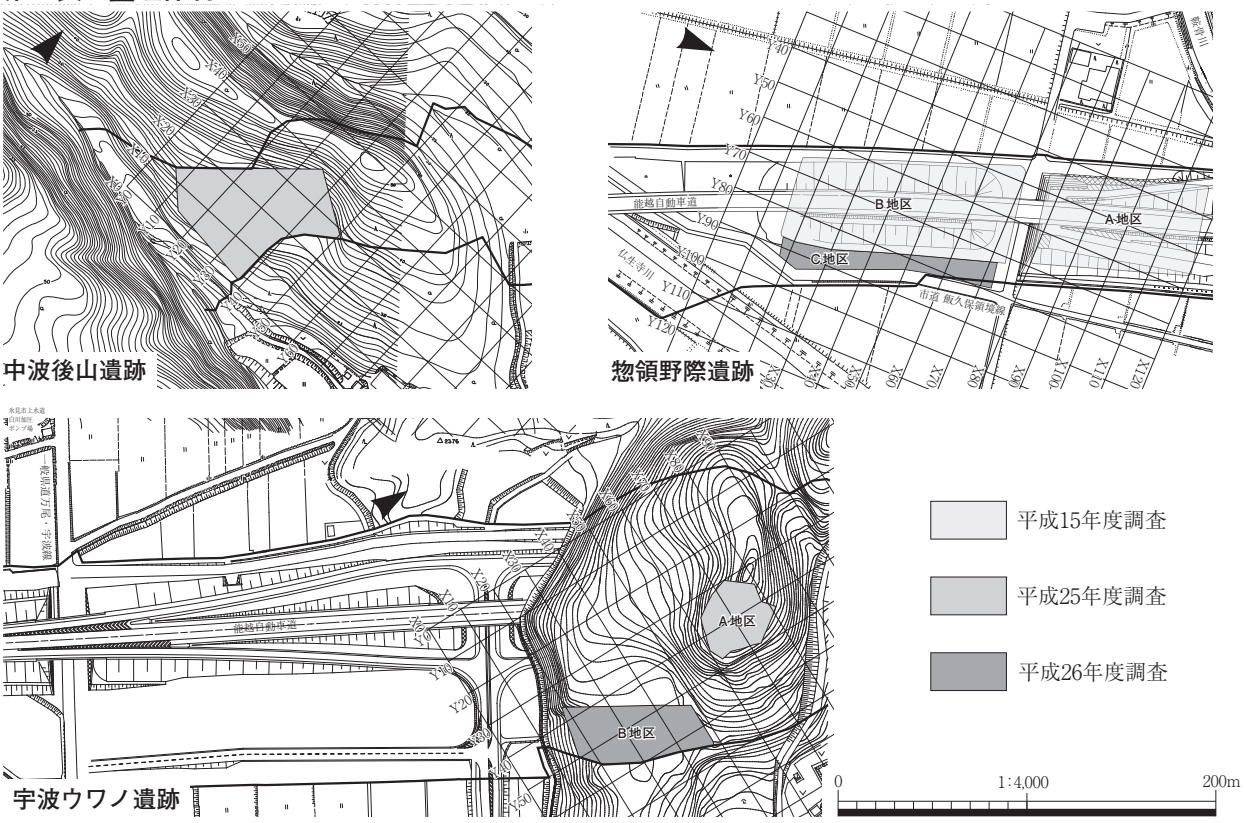
注１　氷見市教育委員会・氷見市立博物館　1983『氷見市文化財所在地図　№1　氷見市遺跡地図』
注２　氷見市史編さん委員会　2002『氷見市史７　資料編五　考古』
注３　氷見市教育委員会　2014『宇波ヨシノヤ中世墓群』
注４　氷見市教育委員会　2015『氷見市内遺跡発掘調査概報Ⅴ』

実施年度	調査事業担当							
平成25（2013）	総括	所長　岸本　雅敏 副所長　池野　正男	総務	課長　松尾　亙 主任　江本　裕一		調査統括	調査課長　島田美佐子	
						調査員	チーフ　田中　道子 主任　青山　晃	
平成26（2014）	総括	所長　岸本　雅敏	総務	課長　松尾　亙 チーフ　青山　晃		調査統括	調査課長　島田美佐子	
						調査員	チーフ　越前　慎子 主任　新宅　茜	
遺跡	地区	年度	期間	延べ日数	面積	担当者	検出遺構	出土遺物
中波後山		平成25（2013）	H25.10.29～12.19	28日	3,140㎡	田中　道子 青山　晃	集石遺構・平坦面	珠洲・土師質土器・石製品
宇波ウワノ（旧熊野神社古墳群）	A	平成25（2013）	H25.9.17～10.18	21日	1,040㎡	田中　道子 青山　晃	集石遺構	珠洲・石製品・金属製品
	B	平成26（2014）	H26.6.10～9.12	49日	1,890㎡	越前　慎子 新宅　茜	竪穴建物・掘立柱建物・集石遺構・溝・土坑	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・灰釉陶器・珠洲・青磁・青花・越中瀬戸・唐津・伊万里・土製品・石製品
惣領野際	C（上層）	平成26（2014）	H26.10.1～11.16	27日	1,200㎡	越前　慎子 新宅　茜	掘立柱建物・溝・自然流路・土坑	土師器・須恵器・中世土師器・珠洲・越前・青磁・瀬戸美濃・越中瀬戸・唐津・伊万里・土製品・木製品・石製品・金属製品
	C（下層）	平成26（2014）	H26.11.17～12.10	11日	1,200㎡	越前　慎子 新宅　茜	自然流路	土師器

第２表　調査体制・調査一覧

実施年度	整理事業担当							
平成26（2014）	総括	所長　岸本　雅敏	総務	総務課長　松尾　亙 チーフ　青山　晃		整理総括	調査課長　島田美佐子	
						担当	チーフ　田中　道子	
平成27（2015）	総括	所長　岸本　雅敏	総務	総務課長　松尾　亙 主査　青山　晃		整理総括	調査課長　島田美佐子	
						担当	主査　越前　慎子	

第３表　整理体制



第３図　調査地区区割図（１：4,000）

第Ⅱ章　位置と環境

1　地理的環境

中波後山遺跡・宇波ウワノ遺跡・惣領野際遺跡は，富山県西部の氷見市に位置する。氷見市は能登半島東側基部に位置し，三方を石動丘陵・宝達丘陵・二上山丘陵に囲まれ，東は富山湾に面する。市域の約８割を占める丘陵は新第三紀と第四紀層の泥岩が広く分布し，地滑り地形が多く認められる。市北半部は，丘陵が大きく占め，宇波川・阿尾川・余川川・上庄川などの小河川とその支流によって形成された谷底平野が発達し，上庄川中流域から下流域にかけては小規模な平野が広がる。海岸部には，第三紀層の泥岩が波の侵食を受けて出来た海食崖が見られる。市南半部は，仏生寺川とその支流によって開析された十三谷と呼ばれる谷底平野と，かつての潟湖が埋積した氷見平野が広がる。海岸部には，氷見砂丘と呼ばれる砂丘地帯がある。縄文海進期には，平野はすべて海面下に沈み，谷の奥深くまで海が入り組んでいたが，海流によって運ばれた砂が現在の海岸線付近に砂州を形成して，外海から隔てられた内海となった。さらに，縄文時代中期以降の気候寒冷化による海退により，内海はさらに外海から切り離され，淡水化した潟湖へと変貌した。上庄川下流左岸の平野には，弥生時代から古代にかけて，加納潟と仮称される潟湖が広がっていたと推測されている。また，仏生寺川下流一帯にも，布勢水海と呼ばれた潟湖が存在したが，中世以降には干拓が進み，水田が広がった。現在では十二町潟として，その名残りをとどめている。

能越自動車道は，仏生寺川流域の十三谷を南北に縦断し，北東に向かって上庄川・余川川・阿尾川・宇波川流域の谷底平野を通る形で計画された。本調査を実施した中波後山遺跡は，市北部にある上原川左岸の丘陵緩斜面上に位置する。上原川によって形成された狭小な谷地形の奥まったところにあり，対岸は急峻な斜面となっている。標高は約21m～42mである。宇波ウワノ遺跡は，市北部にある宇波川左岸の丘陵尾根上に位置する。宇波川によって形成された谷底平野が眼下に広がり，富山湾越しに立山連峰を眺望できる。標高は約25m～57mである。惣領野際遺跡は，市南部にある仏生寺川とその支流である鞍骨川に挟まれた谷底平野の中央に位置する。南北は丘陵に挟まれ，北西には氷見平野が広がる。標高は約7.5～8.5mである。

2　歴史的環境

中波後山遺跡と宇波ウワノ遺跡が所在する灘浦地区は，丘陵が海岸までせり出し，海食崖の連なる海岸線をみせている。主な河川は下田川と宇波川で，平野の少ない地形であるが，縄文時代前期末から中期には人々が残した痕跡をみることができ，縄文海進によって生じた海食洞を利用して，大境洞窟遺跡（10）・大境エンニャマ下洞窟遺跡（11）・宇波洞窟遺跡（27）が営まれている。大境洞窟遺跡（10）は縄文時代中期～中世の複合遺跡で，４回の落盤によって６層に分けられ，住居説の他，墓域説等がある。縄文時代では，これらの洞窟遺跡の他には，前期末・古代・中世の遺物が採取され，近世では高岡城の石垣用材を切り出した虻が島遺跡（７），中期後葉の中波貝塚（４）などがある。

弥生時代では，前述の大境洞窟遺跡・大境エンニャマ下洞窟遺跡の他には遺跡が少ないものの，宇波ウワノ遺跡がある丘陵から眼下の平野に広がる宇波西遺跡（23）では，終末期の河川跡から集水遺構が検出されており，近くに集落が営まれていた可能性を示している。

古墳時代では，宇波川流域の左岸丘陵上に脇方十三塚古墳群（13）・脇方西古墳群（16）・宇波安居寺古墳群（17）が５世紀から６世紀にかけて築造される。いずれも未調査のため，古墳群築造の前後関係などは不明である。６世紀後半には，宇波川右岸の河口に近い高台に宇波古墳群（26）が築かれ，１号墳では，明治33年の宇波神社社殿改築の際に，主体部である石槨の中から人骨１体・鉄刀２点・須恵器２点が出土している。古代になると，海岸に突き出た丘陵斜面に脇方横穴群（14）が築かれる。古墳時代中期から古代にかけて，谷底平野の丘陵上から海を見渡せる場所へと墓域を移しており，海と密接な関係をもった有力者層が存在したのであろうか。

古代では，脇方横穴群の他に，８世紀の集落が営まれた宇波西遺跡（23），製塩が営まれた九殿浜遺跡（９）があり，宇波の地は和名抄にみえる「宇納郷」に比定されている。

中世では，石動山に所在する石動山天平寺が最盛期を迎え，その信仰が人々に強く影響した。脇方谷内出中世墓（15）・宇波ヨシノヤ中世墓群（20）・長坂行入塚（31）・長坂落合中世墓（32）などの中世墓群，また石造物や塚が残る中波天神の森遺跡（５）・髪塚（12）など，信仰に由来する遺跡の数が増加している。また，南北朝の動乱に際しては，能登と越中の間で戦闘が激化しており，宇波川流域の丘陵上に宇波城（18）・白河城（30）が築かれた。その後の戦国期には，海岸際の丘陵上に一夜城（６）・姿城（８）が築かれ，これらは上杉氏の能登攻略の拠点かと考えられている。

惣領野際遺跡が所在する惣領地区は，仏生寺川と鞍骨川が形成した狭小な谷底平野に位置しており，縄文時代前期には平野部が全て海であったが，中期初頭の海退と，河川からの土砂の堆積によって，陸地になっていったと考えられている。仏生寺川を挟んで北に位置する惣領浦之前遺跡（35）では，後期～晩期の土器・土偶などが出土しており，また，上久津呂中屋遺跡（79）では，早期末～中期初頭の貝塚と早期後半～後期前葉の谷から，人骨，土器・漆製品・木製品・石器・骨角器などの膨大な遺物が出土している。海に面した丘陵裾で，人々が長期間にわたって生活していた様子が窺える。

弥生時代には，中期以降に丘陵裾から平野へ遺跡が展開する。気候は冷涼で，縄文海進期には現在より６ｍ高かった海面は，逆に２～３ｍほど低くなっていたため，布勢水海も縮小し，周辺には低湿地が広がっていた。神代羽連遺跡（57）は，弥生時代から近世まで，多時期にわたる遺物が出土する遺跡だが，中期の土器が見つかっている。上久津呂中屋遺跡（79）では，丘陵裾の低地に，後期後半の建物18棟が展開し，石製玉作関連遺物も見つかった。惣領浦之前遺跡（35）からは，後期後半～終末の溝から，多量の土器と共に，朱塗りに装飾を施した盾や甲，刀剣を模した祭祀具，建築部材や刳物桶などの多彩な木製品が出土しており，支配者層にあたる集落の存在を予想させる。終末期には，神代羽連遺跡・矢ノ方一丁目遺跡（54）で土器が見つかっており，人々は徐々に平野の中央へ，生活基盤を広げていったのであろう。

古墳時代には，平野を囲む丘陵上に惣領古墳群（38）・惣領コツデラ古墳群（41）・光西寺山古墳群（50）・飯久保後山古墳群（53）・堀田ニキ塚山古墳群（60）・深原古墳群（69）など，数多くの古墳が築造された。惣領古墳群（38）は，仏生寺川と鞍骨川に挟まれた平野にある独立小丘陵に位置し，円墳２または３基からなる。そのうち１基は，大正末頃の開墾で遺物が出土し，昭和38年に調査が行われた。埋葬主体部は礫床で，直刀・刀子・鉄鏃・碧玉製管玉・ガラス小玉・須恵器提瓶・須恵器高杯が出土しており，６世紀後半の築造と考えられている。惣領コツデラ古墳群（41）は，惣領古墳群の南西側にある丘陵上に位置し，周溝がめぐる円墳２基からなる。未調査であるが，惣領古墳群に先行するとみられる。光西寺山古墳群（50）は谷底平野の入口にあたる丘陵先端に位置し，４支群24基からなる。古墳数は仏生寺川流域最大で，中期～後期まで長期間にわたり築造されたとみられる。これ

らの古墳群を支えた集落は未だ見つかっていないが，古墳群が築造された丘陵眼下の平野には，中期～後期の土器が出土した惣領遺跡（37）･惣領Ｂ遺跡（39）･矢ノ方一丁目遺跡（54）･神代羽連遺跡（57）などが存在し，惣領野際遺跡（34）では，平成15年度の調査で，古墳時代初頭の土師器のほか，自然流路から槽・琴・鞘などの木製品が出土している。古墳時代中頃からは気候が温暖になり，水位は上昇して，現在とほぼ同じ程度になっており，布勢水海の周辺に広がる低地は稲作に適した地になっていたと推測されている。古墳群を築いた人々の集落が，近辺に存在したことは間違いない。

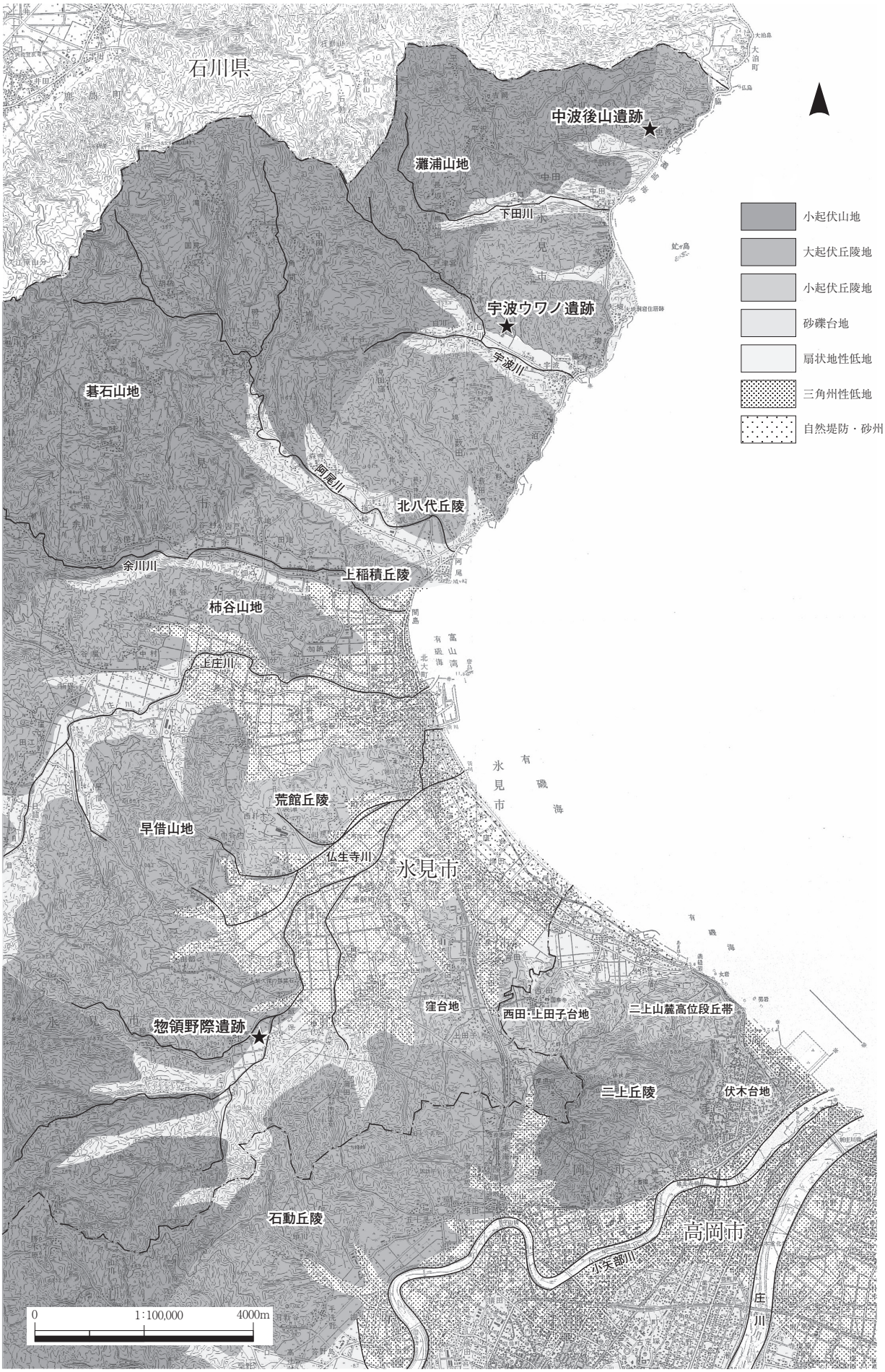
古代では，惣領浦之前遺跡（35）・飯久保山ノ下遺跡（49）・飯久保ナガモン遺跡（51）・堀田竹端遺跡（61）・堀田大久前遺跡（62）などがある。堀田竹端遺跡からは墨書土器，堀田大久前遺跡からは多数の転用硯が見つかっている。布勢水海の南側に条里地割の跡が残っており，この開発に携わった拠点集落であると推定されている。惣領浦之前遺跡では，古代～中世前半の集落が営まれており，円面硯や多数の墨書土器などが出土した。建物群の立地と土器組成から，水運流通を基盤とした公的様相の濃い集落であろうと推測されている。

中世では，丘陵上に惣領砦跡（40）・惣領コツデラ城跡（42）・寺中竹端城跡（46）・飯久保城跡（48）・神代城跡（55）・堀田城跡（63）などの山城が築かれた。飯久保城跡は郭・土塁・堀切・竪堀・切岸などの施設をもち，16世紀後半の遺物が出土している。飯久保・惣領・仏生寺・鞍骨の４村を領した国人狩野氏の本城にあたり，出城として惣領砦・神代城跡，詰城として御林山（鞍骨山）城を構えた。丘陵の麓の飯久保集落を「城ノ下」，仏生寺川べりを「鍛冶屋町」と呼ぶことから，城下集落が存在したと考えられる。狩野氏は神保氏，上杉氏，織田方に属し，戦国末期に城の大手口を織豊系のものに改修したと推測され，天正13年に佐々成政が降伏した際に，城を退去したとみられている。集落は前述した惣領浦之前遺跡（35）と平成15年度に調査した惣領野際遺跡で，中世前半に位置づけられる建物群がみつかっているが，いずれも中世後半には続かない。上久津呂中屋遺跡（79）でも古代～中世前半の集落がみつかっており，中世後半以降は別の場所に集落を移している様子が窺える。このほか，鞍骨集落を見下ろす山腹に鞍骨岩屋遺跡（44）がある。山腹に穿たれた岩屋内に龕が作られ，石仏が安置されていた。広平山の山号をもち，多くの坊寺を擁していたと伝えられており，銅像如来立像（白鳳仏）が安置されていたともいう。石動山信仰の盛期に造られたものと推測されている。

（新宅　茜）

参考文献

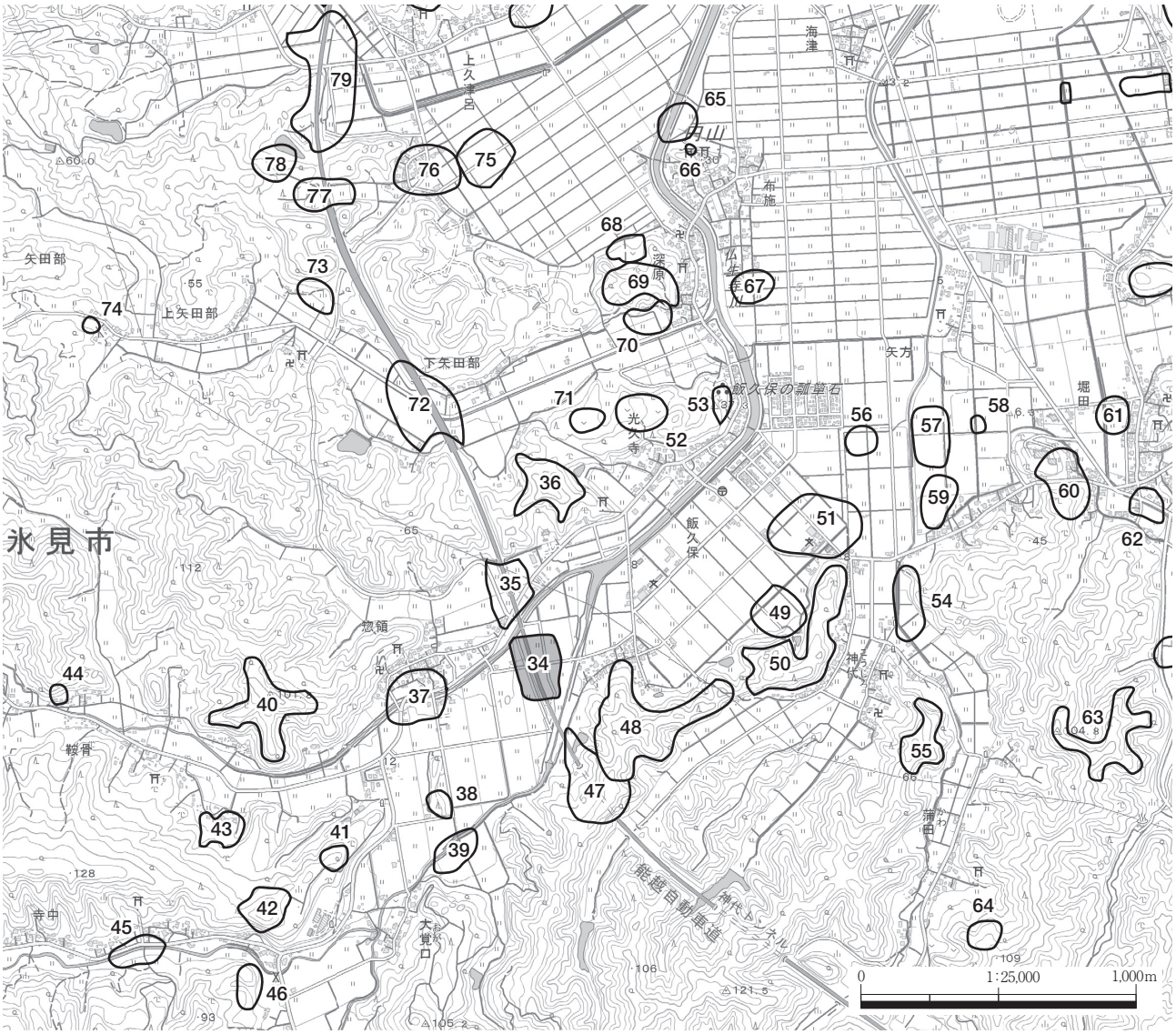
富山県文化振興財団　2010『惣領浦之前遺跡・惣領野際遺跡発掘調査報告』
富山県文化振興財団　2014『稲積天坂遺跡・稲積天坂北遺跡・稲積オオヤチ南遺跡・宇波西遺跡発掘調査報告』
富山県埋蔵文化財センター　2006『富山県中世城館遺跡総合調査報告書』
氷見市教育委員会　2007『氷見市遺跡地図［第３版］』
氷見市教育委員会　1989『脇方横穴群　一般国道160号灘浦トンネル拡張工事に先立つ埋蔵文化財発掘調査』
氷見市教育委員会　2001『氷見市埋蔵文化財分布調査報告（丘陵地区）Ⅰ』
氷見市教育委員会　2003『氷見市埋蔵文化財分布調査報告（丘陵地区）Ⅲ』
氷見市教育委員会　2003『飯久保城跡』
氷見市教育委員会　2007『大境エンニャマ下洞窟遺跡　大境地区急傾斜地崩壊対策事業関連発掘調査報告』
氷見市教育委員会　2014『氷見市内遺跡発掘調査概報Ⅳ　加納金宮遺跡　宇波ヨシノヤ中世墓群』
氷見市教育委員会　2014『宇波ヨシノヤ中世墓群　能越自動車道七尾氷見道路整備事業に伴う発掘調査報告』
氷見市史編さん委員会　1999『氷見市史９　資料編七　自然環境』
氷見市史編さん委員会　2002『氷見市史６　資料編五　考古』



第 4 図　地形図（1：100,000）

国土地理院　2002『1：50,000 地形図　虻ヶ島，氷見，石動，富山』を元に，経済企画庁　1970『地形分類図　氷見・虻ヶ島，石動，富山』を合成して作成

第５図　中波後山遺跡・宇波ウワノ遺跡周辺遺跡位置図（１：25,000）



第 6 図　惣領野際遺跡周辺遺跡位置図（1：25,000）

No.	遺跡名	種　類	時　代	No.	遺跡名	種　類	時　代
1	中波後山	集石遺構	中世(鎌倉室町)	41	惣領コツデラ古墳群	古墳	古墳(中)
2	埋蔵文化財包蔵地推定地	散布地	不明	42	惣領コツデラ城跡	城館	中世(戦国)
3	NEJ-30	散布地	中世	43	鞍骨オヤノヤチ	散布地	古代・中世(末)～近世(初)
4	中波貝塚	貝塚	縄文(中)	44	鞍骨岩屋	祭祀	中世
5	中波天神の森	祭祀	中世	45	寺中向	散布地	中世
6	一夜城跡	城館	中世(戦国)	46	寺中竹端城跡	城館	中世(戦国)
7	虻が島	散布地	縄文(前)・古代～近世	47	正保寺	散布地・寺院	縄文～弥生・古代・中世・近世
8	姿城跡	城館	中世(戦国)	48	飯久保城跡	城館	中世(戦国)
9	九殿浜	製塩	縄文～中世	49	飯久保山ノ下	散布地	古代・中世
10	大境洞窟	洞窟	縄文(中)～中世	50	光西寺山古墳群	古墳	古墳(初～後)
11	大境エンニャマ下洞窟	洞窟	縄文(中)・弥生	51	飯久保ナガモン	散布地	古代
12	髪塚	塚	中世	52	飯久保後山	散布地・塚	縄文・弥生・近世
13	脇方十三塚古墳群・集石墓	古墳・中世墓	古墳(中～後)・中世	53	飯久保後山古墳群	古墳	古墳(中～後)
14	脇方横穴群	横穴・中世墓	古代(飛鳥白鳳)・中世	54	矢ノ方一丁目	散布地	弥生(末)～古墳
15	脇方谷内出中世墓	中世墓	中世	55	神代城跡	城館	中世(戦国)
16	脇方西古墳群	古墳	古墳(中)	56	神代ハタケダ	散布地	中世
17	宇波安居寺古墳群	古墳	古墳(中)	57	神代羽連	散布地	縄文～近世
18	宇波城跡	城館	中世	58	堀田モリノ田塚	塚	中世
19	NEJ-29	散布地	古代	59	石崎	散布地	古代・中世
20	宇波ヨシノヤ中世墓群	中世墓	中世	60	堀田ニキ塚山古墳群	古墳	弥生(末)～古墳(初)・古墳(後)
21	宇波ウワノ	集落･古墳？･集石遺構	弥生・古墳・古代・中世	61	堀田竹端	散布地	弥生(後)・古代・中世・近世
22	宇波ヨシダ	散布地	古墳・中世	62	堀田大久前	散布地	古墳～中世
23	宇波西	集落	弥生・古墳・古代・中世・近世	63	堀田城跡	城館	中世(戦国)
24	宇波コウラウラ	散布地	古代・中世	64	蒲田B	散布地	中世
25	宇波庚申塚	塚	不明	65	布施八ヶ田	散布地	縄文(後)・古代
26	宇波古墳群・宇波神社	古墳・散布地	古墳(後)・中世	66	布施丸山古墳	古墳	古墳
27	宇波洞窟	洞窟	不明	67	布施若宮	散布地	古墳
28	宇波高坂	窯	近世か	68	深原前田	散布地	古代・中世・近世
29	盾鉾神社	散布地	縄文(後)	69	深原古墳群	古墳	古墳(中～後)
30	白河城跡	城館	中世	70	深原打越	散布地	古代
31	長坂行入塚	塚	中世	71	矢田部ナカタ	散布地	中世
32	長坂落合中世墓	中世墓	中世(鎌倉)	72	NEJ-17	散布地	縄文・弥生・古墳・古代・中近世
33	平沢一里塚	経塚	中世・近世	73	矢田部六反坪	散布地	中世
34	惣領野際	集落	古墳(前)・中世	74	矢田部カワベリ	散布地	中世
35	惣領浦之前	集落	縄文・弥生(後)・古墳・古代・中世	75	上久津呂A	散布地	古代
36	惣領古戸	城館	中世	76	上久津呂B	散布地	縄文～古代
37	惣領	散布地	古墳(中)・古代・中世	77	NEJ-18	散布地	縄文・古代・中世
38	惣領古墳群	古墳	古墳(後)	78	上久津呂ゴタンダ山	散布地	縄文・古墳
39	惣領B	散布地	古墳～古代	79	上久津呂中屋	集落	縄文・弥生(後)・古墳・古代・中世
40	惣領砦跡	城館	中世(戦国)				

第 4 表　周辺遺跡一覧

第Ⅲ章　中波後山遺跡

1　概　要

中波後山遺跡は上原川左岸の丘陵地にある。南向きの斜面上に位置し，現況の標高は約21～42mを測る。大きく分けて上下２段の平坦地が確認された。上段平坦地は標高約31～35m，下段平坦地は標高約24～26mで，下段平坦地と上原川との比高差は約６ｍを測る。さらに上段では２つ，下段では３つの平坦面に分かれる。遺跡からは集石遺構11基，土坑１基，道路状遺構１条を確認した。出土遺物は珠洲・土師質土器・石製品（砥石）がある。出土遺物が少ないため，時期を判断し難い遺構が多いが，集石遺構と平坦面については中世に形成されたと考えられる。

2　層　序

基本層序はⅠ層：黒褐色粘質土（表土），Ⅱ層：にぶい黄褐色粘質土・灰黄褐色泥岩（地山）である。Ⅰ層は0.03～0.1mの層厚を測る。この表土直下で地山のⅡ層を確認した。Ⅱ層では基盤である泥岩が風化した粘質土を基本とするが，部分的に泥岩が露出する。泥岩は遺跡の位置する丘陵地が中波泥岩層の分布域であることから，これに相当すると考えられる。

3　遺構・遺物

（1）集石遺構

集石遺構１（ＳＸ１，第11・12・16・17図，図版２・３・12・13）

ＳＸ１は上段平坦地の南端に位置する。平面形は隅丸方形を呈し，規模は7.8×6.2m，高さは1.2ｍを測る。頂部の北西隅には直径１ｍ，深さ0.25mの穴がある。この穴は埋没しておらず，比較的新しい倒木痕と考えられる。マウンドは地山のⅡ層を高さ約0.5mの基部として削り出し，その上に暗褐色粘質土を盛土して形成される。マウンド頂部を中心に拳～人頭大の礫による集石が形成される。また，頂部には直径１～３㎝程の小礫が表層に散乱する。これらの石材は花崗岩・閃緑岩・片麻岩・安山岩・チャート・凝灰岩が確認された。遺跡の眼下を流れる上原川は中波泥岩層を基盤とする丘陵地の谷筋から流れ出ており，河川の転石は泥岩となっている。集石の石材は別の流域から運び込まれた可能性が高い。盛土を除去したところ，頂部南側でＰ１を検出した。Ｐ１は楕円形を呈し，規模は1.0×0.8m，深さは0.3mを測る。埋土は黒褐色粘質土で，炭化物を含む。炭化物の放射性炭素年代は720±20yrBP，暦年較正年代は1270～1286calADの結果が得られた。

出土遺物には珠洲（*1*～*6*・*8*）・土師質土器（*9*）・石仏（*10*・*11*）がある。*1*～*4*は壺である。*1*は外傾する口縁の端部が嘴頭状となり，なで肩・長胴気味の胴部を呈する。Ⅲ～Ⅳ期に比定する。*5*は擂鉢の口縁部で，端部は水平面をなし，Ⅳ２期とする。*6*～*8*は甕である。*6*は短い方頭の口縁形態を呈し，Ⅳ２期～Ⅴ期に比定する。*6*の下半部はマウンド北側斜面に埋設されており，原位置を保っていると考えられるが，上半部は散在している。他の珠洲は，破片がマウンドの表層及び盛土中に散在する。*9*は盛土中から出土した土師質土器の底部で，器面が荒れているため，指頭痕が確認できるのみである。*10*・*11*は粗粒質砂岩製の石仏で，マウンド南東部の表層から仰向けに倒れた状態で出土した。いずれも如来形の一石一尊仏で，風化や欠損により細部の判別は難しい。下半部の造形は

省略されていることから，15世紀代の所産と考えられる。

集石遺構２・８・９・10（ＳＸ２・８・９・10，第13図，図版２・３・12・13）

上段平坦地の北西側で，丘陵斜面との境界付近に位置する集石を４箇所確認した。ＳＸ２は1.6×1.2m，ＳＸ８は2.4×1.4m，ＳＸ９は1.2×1.0m，ＳＸ10は1.4×0.8mの範囲に礫が集中する。明確な配列・配置や掘り込みは確認されない。原位置を保っていない礫も多数あると考えられる。出土遺物は無いため時期も判然としないが，ＳＸ１と同様な時期に形成されたものと想定しておく。こうした礫の出土状況や遺物の無い点は，後述するＳＸ３・５・６・７・11にも共通する。

集石遺構３・11（ＳＸ３・11，第８図）

下段平坦地の西側に続く斜面上で確認した。ＳＸ３は５m四方の範囲に礫が漫然と散らばる。ＳＸ11は下段平坦地と斜面の境界付近で南北９m程の列状に礫が散らばる。

集石遺構５・６・７（ＳＸ５・６・７，第９図）

上段平坦地の北側に続く斜面上で確認した。ＳＸ５は4.0×2.0m，ＳＸ６は0.7×0.5m，ＳＸ７は1.5×0.7mの範囲で礫が出土する。

集石遺構12（ＳＸ12，第14図，図版３）

上段平坦地と下段平坦地の間となる斜面に位置する。7.4×2.0mの範囲に礫が集中する。明瞭な石列・石組みは認めらないが，その位置は斜面の角度が変換する箇所を意識したものと考えられる。珠洲甕の胴部破片が出土するが，時期は判別できない。

（２）土　坑

４号土坑（ＳＫ４，第14図）

上段平坦地にある平坦面２の北側に位置する。全体の規模は不明だが，長軸1.6m×短軸1.2m以上となり，深さは0.16mを測る。出土遺物は無い。

（３）平坦面

平坦面１～５（第15図）

上段平坦地では平坦面１・２を確認した。平坦面1は東西25m×南北19m程の範囲で，南東側は調査区外に続く。その南西隅にはＳＸ１，北側の傾斜面にはＳＸ５が位置する。ＳＸ５周辺は部分的にテラス状となる。平坦面２は平坦面１の西に隣接し，約0.3～0.5m高い。東西20m×南北14m程の範囲で，北・西辺に沿って低い段差がある。この段差より北・西側には緩斜面が広がり，ＳＸ２・６～10が位置する。平坦面２の南側にも東西25m×南北６m程の範囲が緩斜面となり，その南辺から下段平坦地へと落ちる急斜面になる。

下段平坦地では平坦面３～５を確認した。平坦面３は東西15m×南北7.5m，平坦面４は東西５m×南北8.5m，平坦面５は東西13m×南北７mの範囲となる。東側から平坦面３，平坦面４，平坦面５の順で高くなり，それぞれの比高差は約0.3～0.5mとなる。平坦面３～５の北側は，東西27m×南北３mの範囲が狭いテラス状を呈する。なお，平坦面３～５の南側にも一段低い平坦面があり，調査区外へ続いている。こちらは近年まで畑として利用されていた。

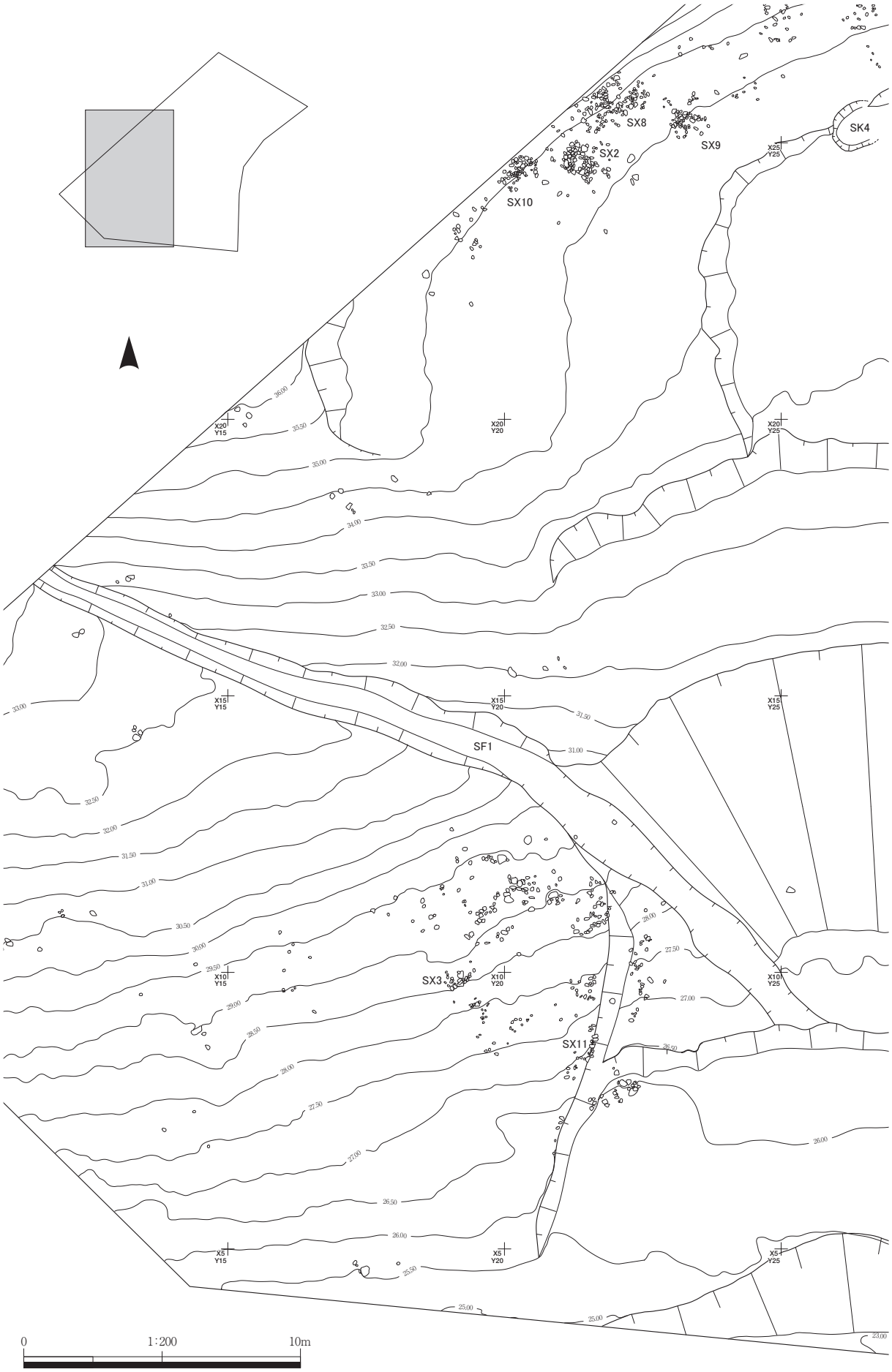
各平坦面ではⅠ層を除去した段階で地山のⅡ層となり，部分的に基盤の泥岩層が露出する。人為的な盛土をした痕跡は無いため，平坦面は傾斜地を削り込むことによって形成されたと考えられる。

（４）道路状遺構

１号道路状遺構（ＳＦ１，第８図）

平坦面５の北側から北西方向へ斜面を登り，調査区外へと続くように浅い溝状の窪みが確認された。

第７図　中波後山遺跡　全体図

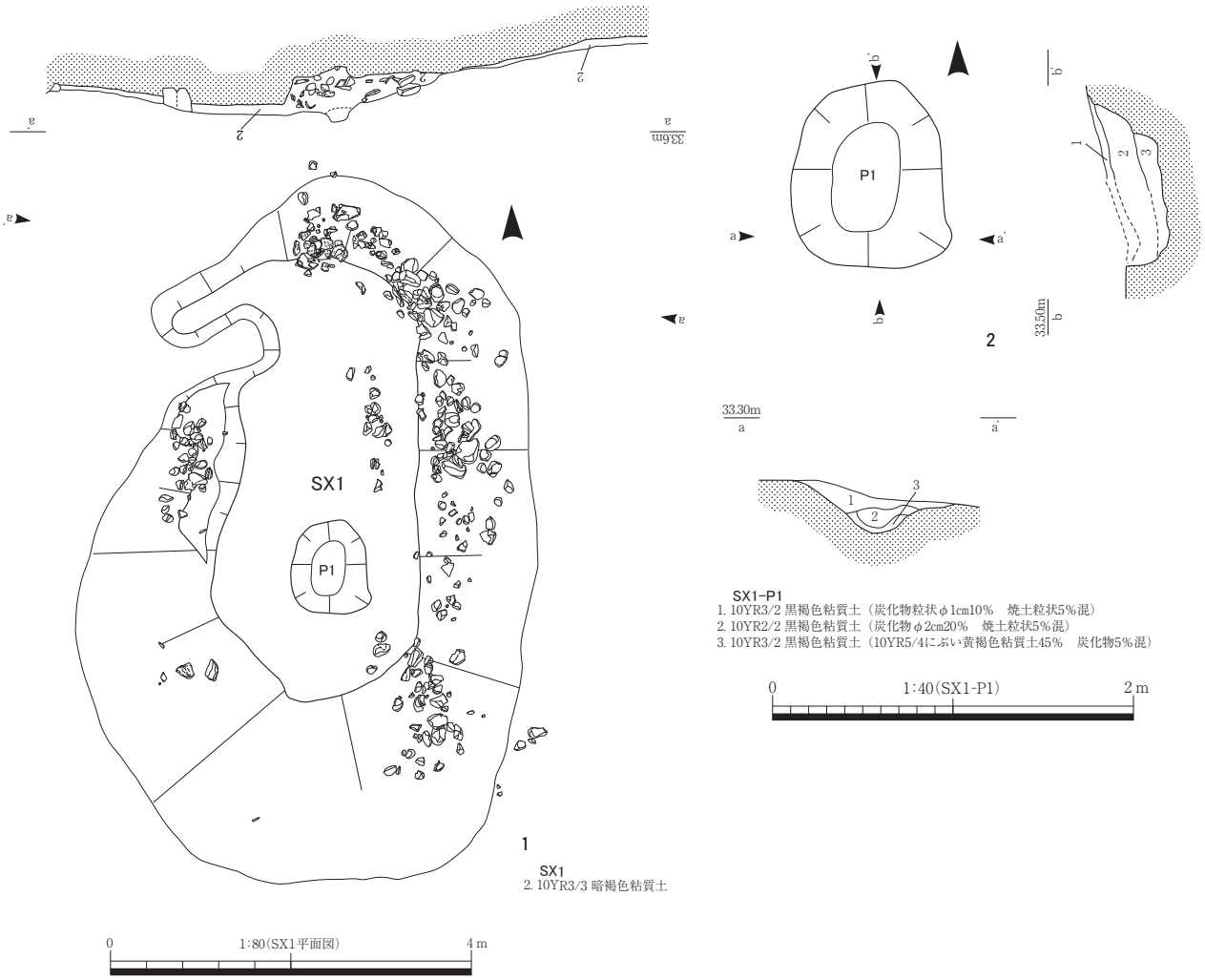


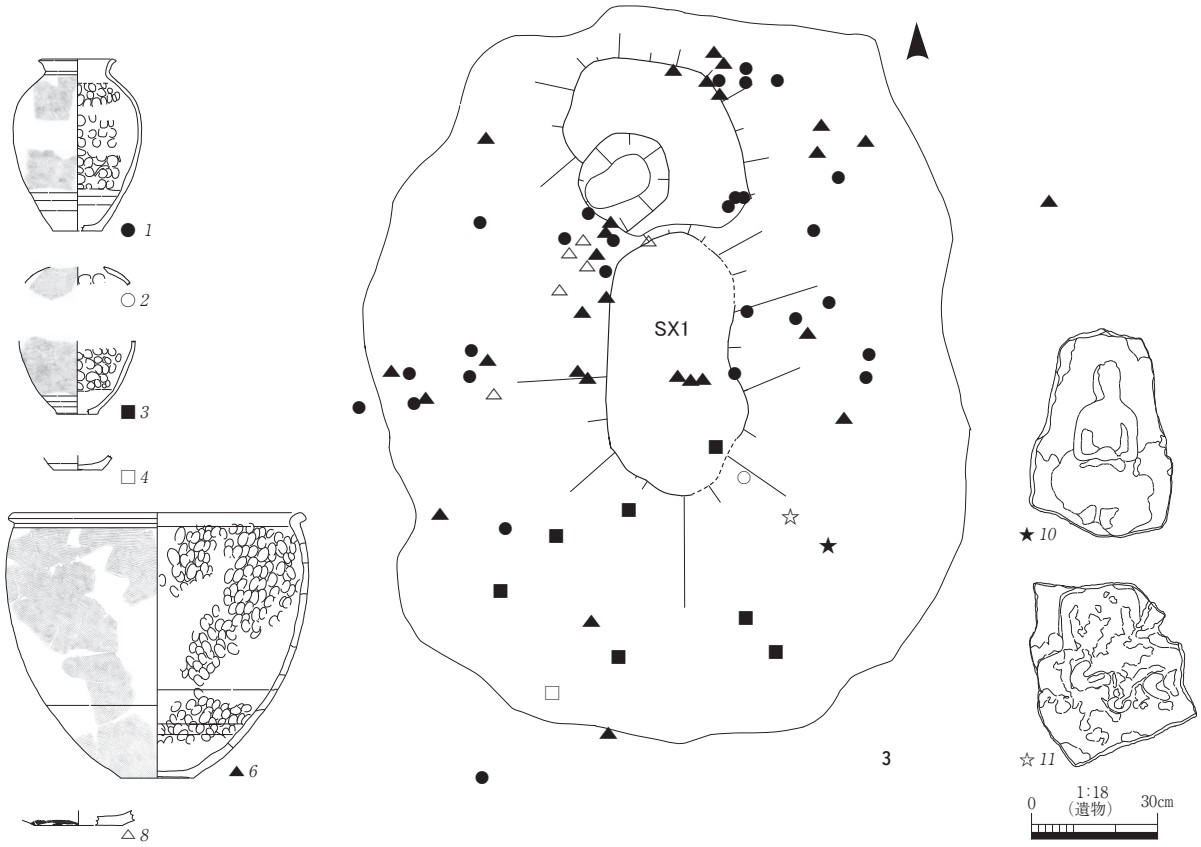
第 8 図　中波後山遺跡　遺構全体図

第９図　中波後山遺跡　遺構全体図

第10図　中波後山遺跡　遺構全体図

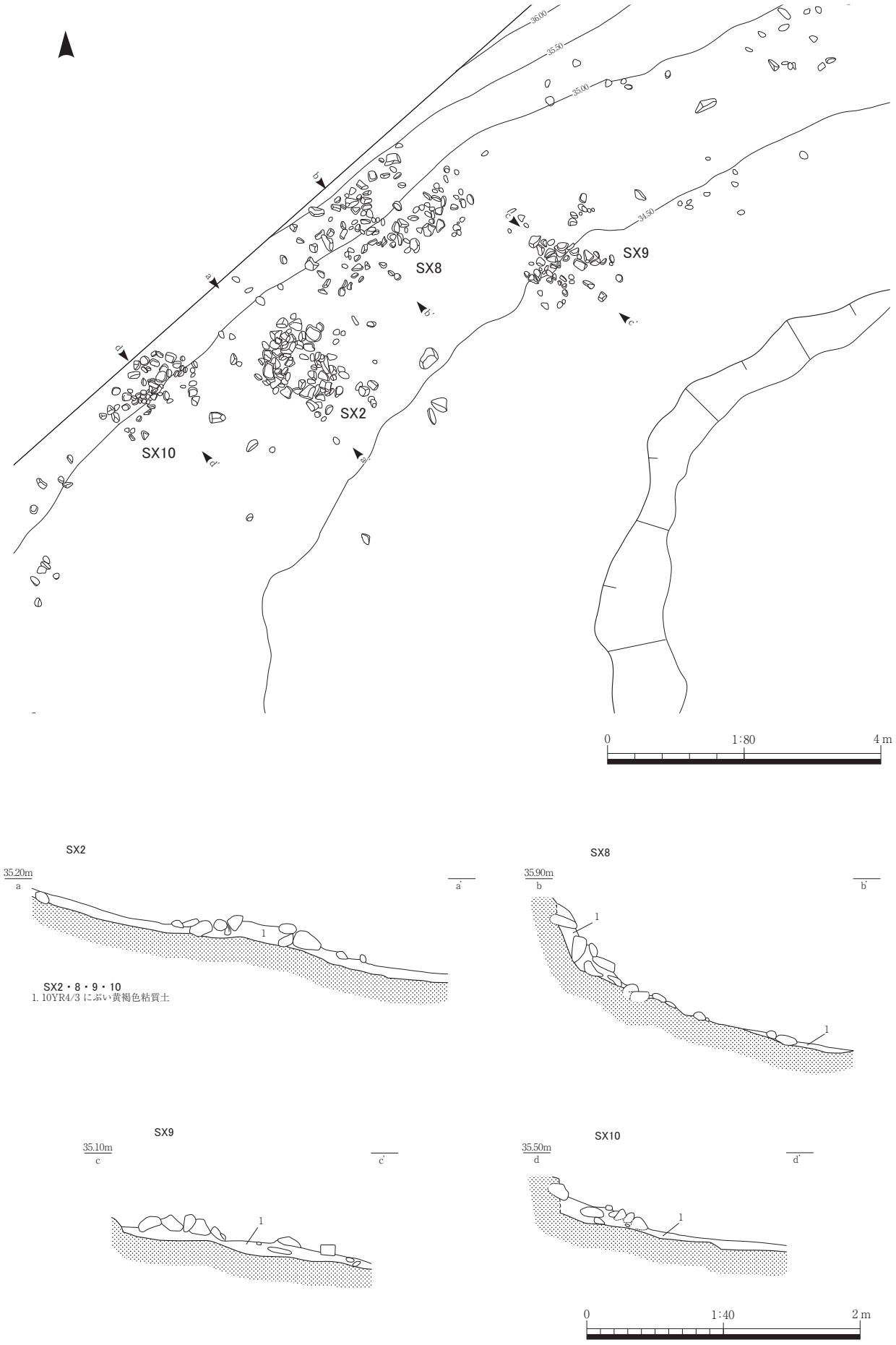
第11図　中波後山遺跡　遺構実測図
SX1



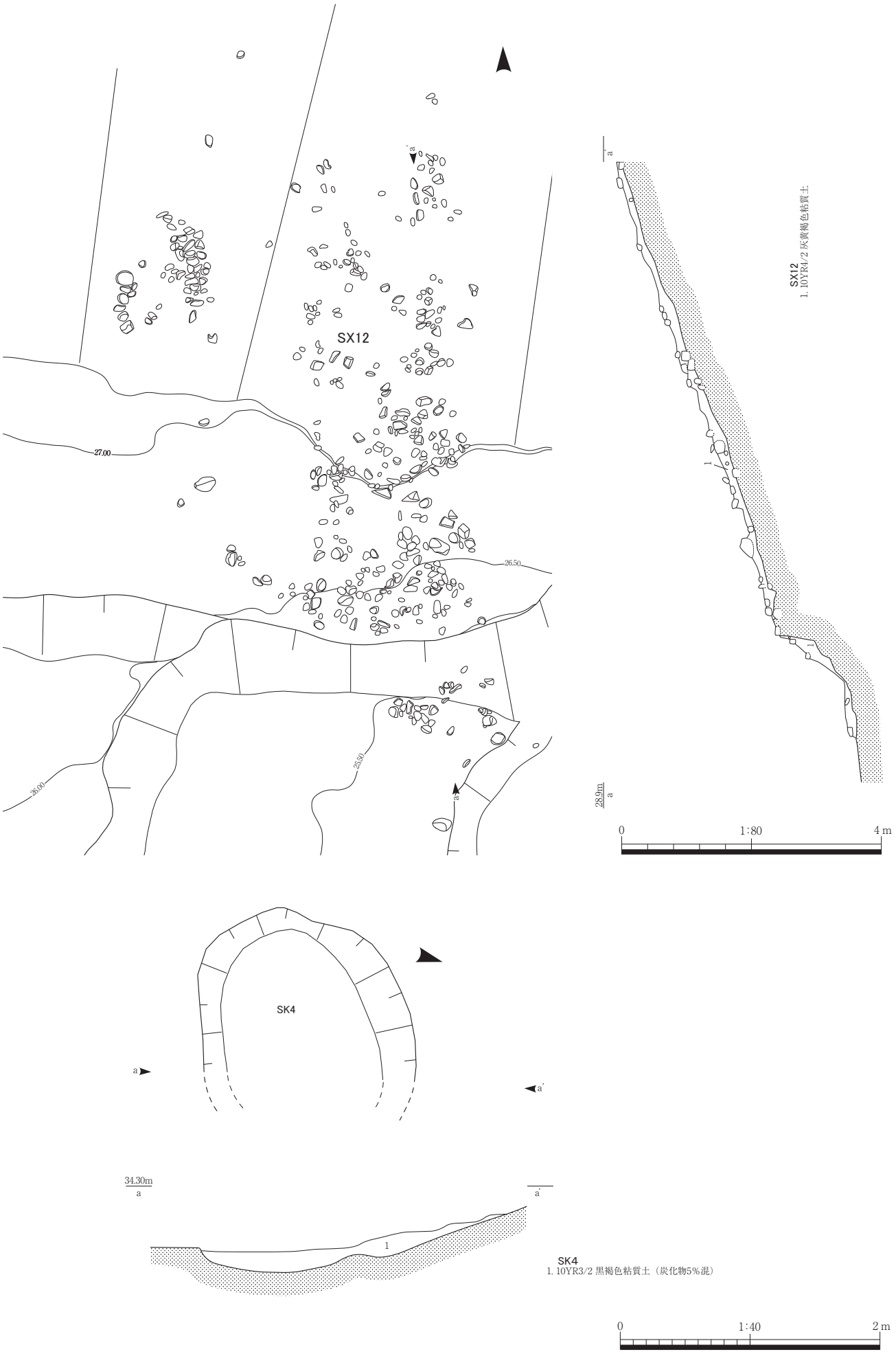


第12図　中波後山遺跡　遺構実測図

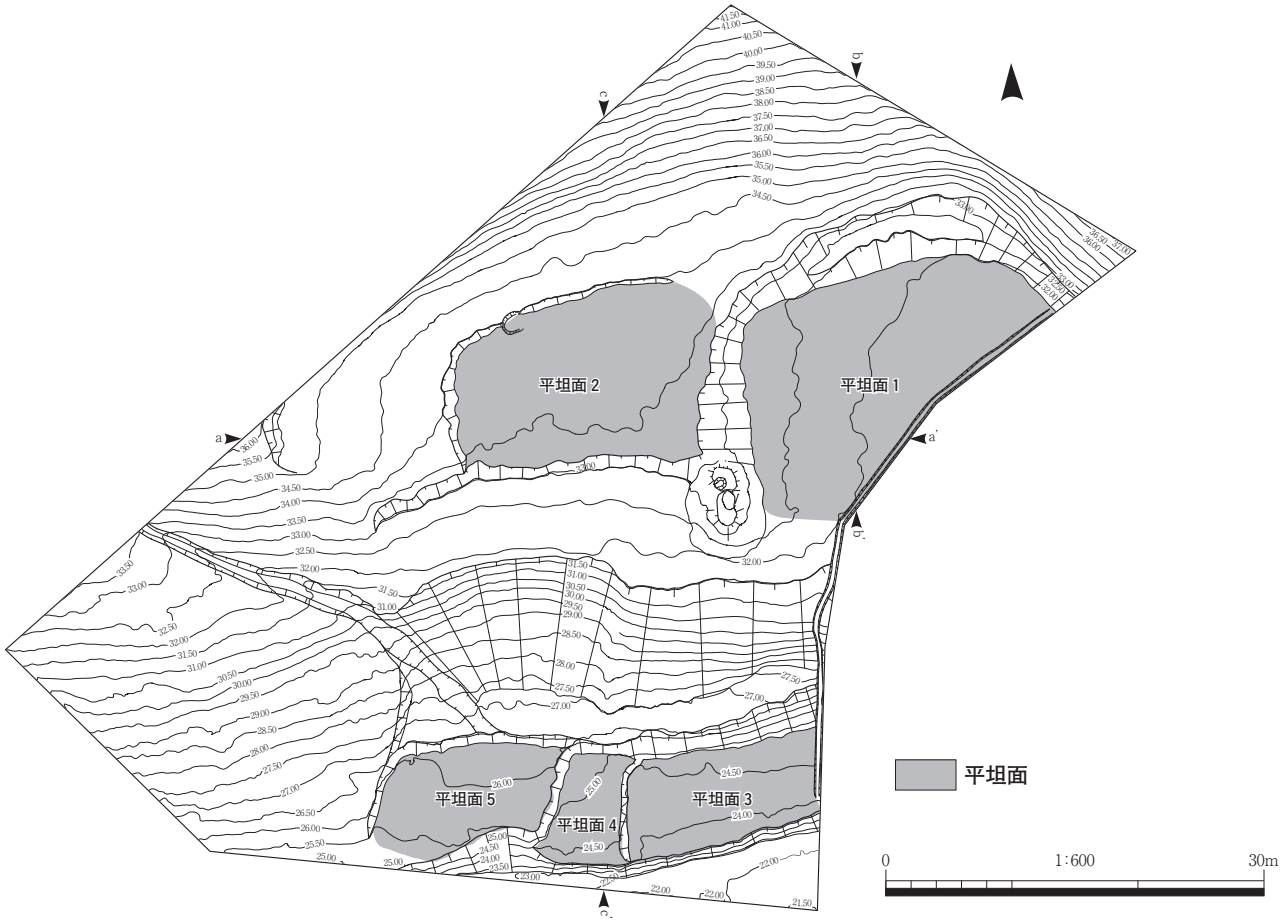
1．SX1盛土除去後　2．SX1-P1　3．SX1遺物出土分布

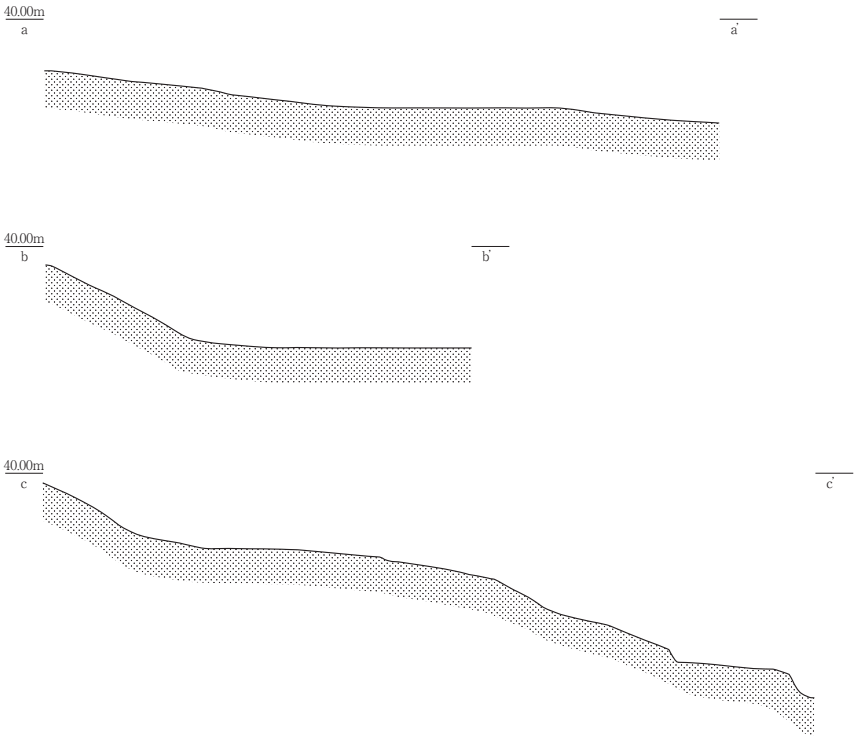


第13図　中波後山遺跡　遺構実測図
SX2　SX8　SX9　SX10

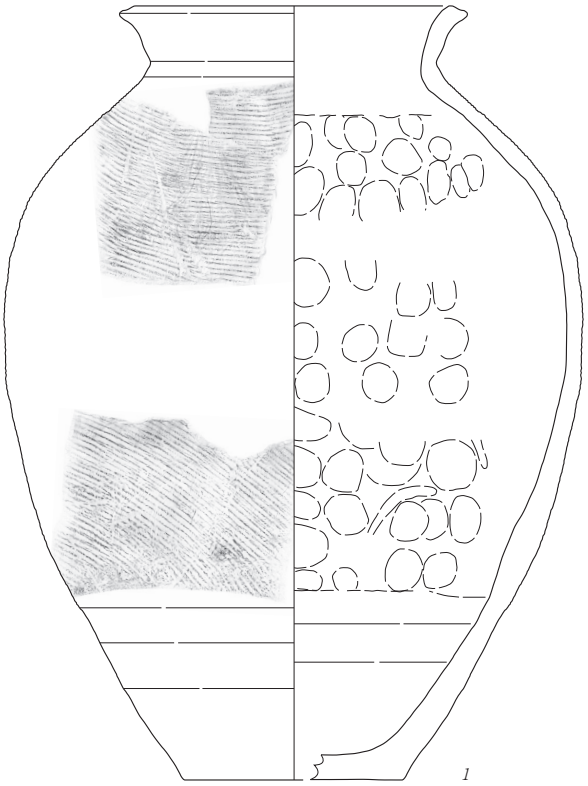


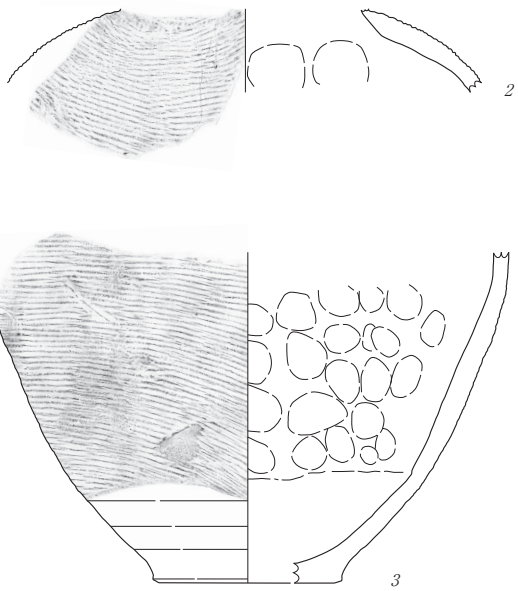
第14図　中波後山遺跡　遺構実測図
SX12　SK4

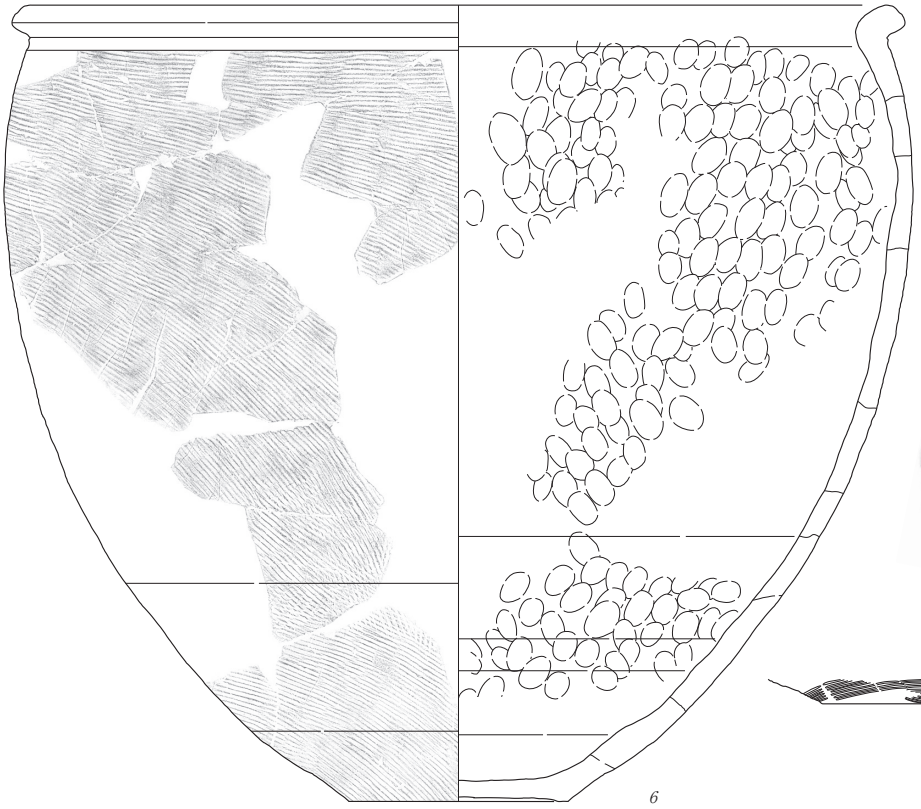


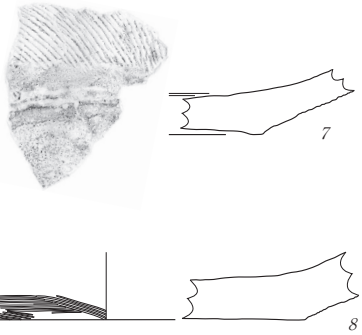


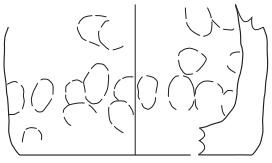
第15図　中波後山遺跡　遺構実測図
平坦面１～５

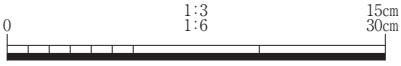




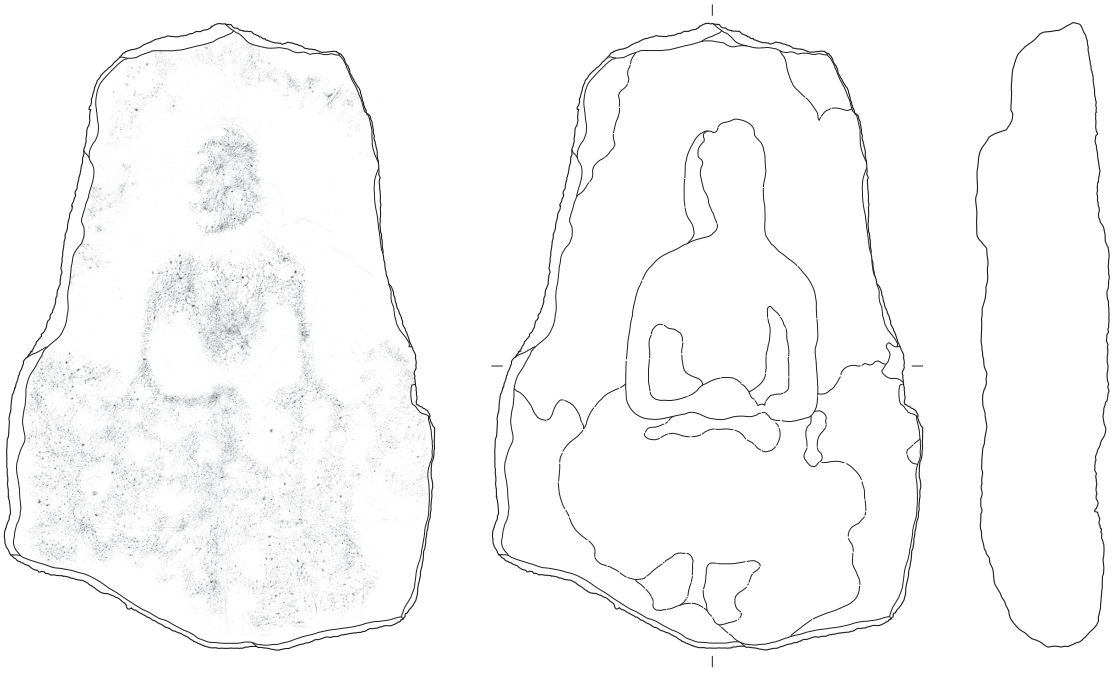


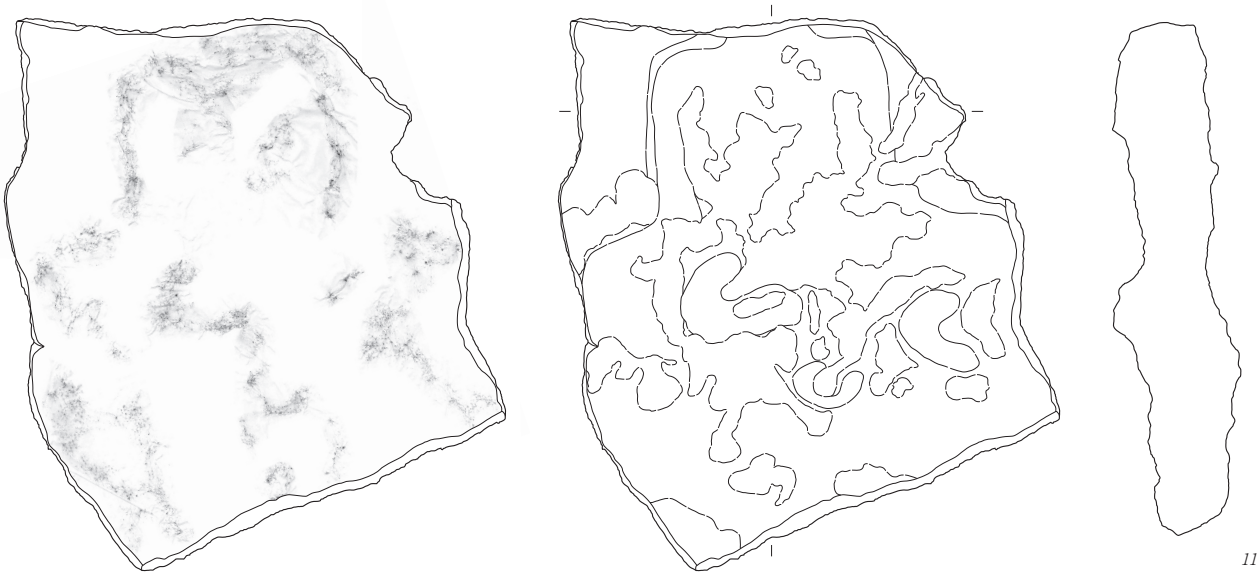


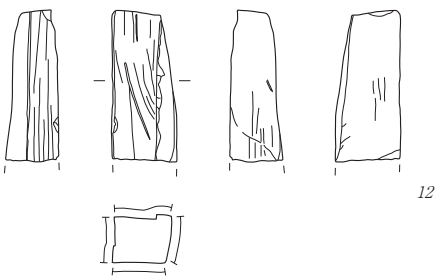




第16図　中波後山遺跡　遺物実測図（*9*　1/3，*1*～*5*・*7*・*8*　1/4，*6*　1/6）
SX1（*1*～*6*・*8*・*9*）　包含層







第17図　中波後山遺跡　遺物実測図（*12*　1/3，*10・11*　1/6）
ＳＸ1（*10・11*）　包含層

周囲からは0.05～0.2m程低くなっており，硬化面や側溝など明瞭な痕跡を残している訳では無いが，道路状遺構としておく。出土遺物は無く，形成された時期は判断しがたい。

（5）包含層出土遺物（第16・17図）

*7*は珠洲甕の底部，*12*は砥石で（流紋岩質）凝灰岩を石材とする。両者とも平坦面１の北側斜面にて出土した。ＳＸ５の近辺であるが，関連は不明である。（青山　晃）

4　自然科学分析

（1）放射性炭素年代測定（AMS法）

A　測定対象試料

中波後山遺跡は，富山県氷見市中波字後山（北緯36.9520°，東経137.0351°）に所在し，上原川左岸の丘陵地緩斜面に立地する。測定対象試料は，ＳＸ１頂部の土坑から出土した木炭１点である（第５表）。ＳＸ１は，石仏や珠洲焼の破片が上面に見られ，中世のものと考えられている。表面の石を除去した後に確認された土坑は，埋土に炭化物が多量に混入し，焼土も認められることから，埋葬に関わる可能性も指摘される。

B　測定の意義

木炭が出土した土坑の年代を明らかにする。

C　化学処理工程

①メス・ピンセットを使い，根・土等の付着物を取り除く。

②酸－アルカリ－酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後，超純水で中性になるまで希釈し，乾燥させる。AAA処理における酸処理では，通常１mol/ℓ（１M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い，0.001Mから１Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が１Mに達した時には「AAA」，１M未満の場合は「AaA」と第５表に記載する。

③試料を燃焼させ，二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

④真空ラインで二酸化炭素を精製する。

⑤精製した二酸化炭素を，鉄を触媒として水素で還元し，グラファイト（C）を生成させる。

⑥グラファイトを内径１㎜のカソードにハンドプレス機で詰め，それをホイールにはめ込み，測定装置に装着する。

D　測定方法

加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し，^{14}Cの計数，^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C），^{14}C濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

E　算出方法

①δ^{13}Cは，試料炭素の^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し，基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（第５表）。AMS装置による測定値を用い，表中に「AMS」と注記する。

②^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は，過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され，1950年を基準年（０yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には，Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C年代はδ^{13}Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を第５表に，補正していない値を参考値として第６表に示した。^{14}C年代と誤差は，下

１桁を丸めて10年単位で表示される。また，^{14}C年代の誤差（±１σ）は，試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2％であることを意味する。

③pMC（percent Modern Carbon）は，標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。pMCが小さい（^{14}Cが少ない）ほど古い年代を示し，pMCが100以上（^{14}Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値もδ^{13}Cによって補正する必要があるため，補正した値を第５表に，補正していない値を参考値として第６表に示した。

④暦年較正年代とは，年代が既知の試料の^{14}C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ，過去の^{14}C濃度変化などを補正し，実年代に近づけた値である。暦年較正年代は，^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり，１標準偏差（１σ＝68.2％）あるいは２標準偏差（２σ＝95.4％）で表示される。グラフの縦軸が^{14}C年代，横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は，δ^{13}C補正を行い，下１桁を丸めない^{14}C年代値である。なお，較正曲線および較正プログラムは，データの蓄積によって更新される。また，プログラムの種類によっても結果が異なるため，年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは，暦年較正年代の計算に，IntCal13データベース（Reimer et al. 2013）を用い，OxCalv4.2較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については，特定のデータベース，プログラムに依存する点を考慮し，プログラムに入力する値とともに参考値として第６表に示した。暦年較正年代は，^{14}C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

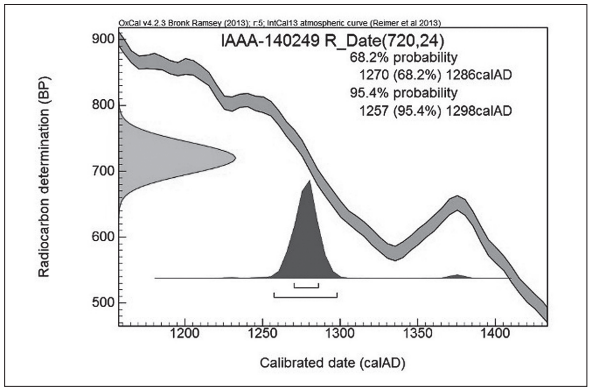
Ｆ　測定結果

測定結果を第５・６表に示す。

中波後山遺跡出土試料IAAA-140249の^{14}C年代は720±20yrBP，暦年較正年代（１σ）は1270～1286cal ADの範囲で示される。試料が出土した土坑の時期は，土坑が検出されたＳＸ１での出土遺物から中世と見られており，おおむねこれに整合する測定結果となっている（佐原2005）。

試料の炭素含有率は60％を超える十分な値で，化学処理，測定上の問題は認められない。

なお，本分析の試料は，公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所にて株式会社加速器分析研究所の管理技術者山田しょうが貸与された。その後，同社にて小原圭一らが必要量の試料を採取し，化学処理，測定，算出の作業を行った。本報告は，山田，小原との協議を踏まえ，早瀬亮介が執筆した。



第18図　中波後山遺跡　暦年較正年代グラフ（参考）

（株式会社加速器分析研究所　早瀬亮介・小原圭一・山田しょう）

参考文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55(4), 1869-1887

佐原眞 2005 日本考古学・日本歴史学の時代区分, ウェルナー・シュタインハウス監修, 奈良文化財研究所編集, 日本の考古学　上　ドイツ展記念概説, 学生社, 14-19

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363

第５表　中波後山遺跡　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C補正値）

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C(‰)(AMS)	δ^{13}C補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-140249	4	中波後山遺跡 ＳＸ１頂部の土坑	木炭	AAA	−26.08±0.66	720±20	91.42±0.28

第６表　中波後山遺跡　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C未補正値，暦年較正用^{14}C年代，較正年代）

測定番号	δ^{13}C補正なし		暦年較正用(yrBP)	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
	Age(yrBP)	pMC(%)			
IAAA-140249	740±20	91.21±0.25	720±24	1270calAD-1286calAD (68.2%)	1257calAD-1298calAD (95.4%)

［参考値］

5　総　括

中波後山遺跡では鎌倉時代後半から室町時代にかけての集石遺構ＳＸ１と，それに関連すると思われる平坦面を確認した。ＳＸ１は構造や遺物出土状況から，少なくとも３段階の変遷が考えられる。

第１段階では，盛土を除去した時点でＰ１とマウンド斜面上の礫が確認されたことから，当初は地山から削り出したマウンドに集石が伴い，頂部にＰ１が掘り込まれたと考えられる。Ｐ１出土炭化材の放射性炭素年代測定は鎌倉時代後半の時期が示された。Ｐ１からは炭化物のみ出土しており，その性格は判断しがたい。出土遺物では珠洲壺（*1*）が当段階に伴うと考えられるが，盛土中や表層から破片で出土する。蔵骨器の可能性があるが，焼骨や埋設施設は確認できなかった。後に盛土がなされる段階で破損し，散在したものと思われる。また，ＳＸ１のマウンドを地山から削り出すためには，隣接する平坦面の造成が必要となることから，それらの形成も当段階と考えられる。

第２段階はマウンド北端に珠洲甕（*6*）が正位で設置される。その年代は鎌倉時代末期から室町時代前半頃の時期幅をもつ。甕上半部は次段階の盛土形成時に破砕されたためか，盛土中や表層に破片として散在している。設置時には甕を覆う封土や集石などがあった可能性もあるが，前述のような出土状況であるため明らかではない。こうした大型甕の埋設は土葬墓に事例がある。近隣では氷見市長坂ソウト遺跡（氷見市教育委員会1984）や七尾市細口源田山遺跡（七尾市教育委員会1982）がある。ただし，これらでは逆位の甕で遺骸を覆っている。一方，甕を正位に据えた事例には小松市牧口中世墓（小松市教育委員会1965・垣内他1994）がある。そこでは塚の下にある方形石組み遺構に，人骨の入った加賀焼大甕が設置され，その上に木材と中世土師器14枚を置き，さらに粘土で封をしている。人骨は火葬骨ではないと推測されている。また，魚津市石垣遺跡（富山県教育委員会1972・酒井1994）でも珠洲甕が正位で埋設された状態で出土したが，埋葬に用いられていたのかは明らかでない。さらに，狭川真一（狭川2011）によれば，埋設された大甕を多数納骨の施設としている事例が全国的にあることが示されている。以上のように，埋設された大型甕が埋葬に関わる施設となる場合があることを踏まえると，ＳＸ１にもその可能性が想定されるところではあるが，人骨の出土はないため確定には至らない。

第３段階は盛土により，現況に近い規模のマウンドとして整備される。この段階，あるいはそれ以前に第１・２段階の遺物は破損し，盛土中や表層に混入する。マウンドの表層では頂部を中心に集石が確認されているが，礫が転落・散逸した可能性もあり，当初の範囲や密度などは明らかでない。マ

ウンド南東側で出土した石仏２体は，その場に設置されていた確証はなく，付近にあったものが後世に片付けられた可能性もある。このため，第３段階を石仏の時期を短絡的に結びつけることはできないが，調査区内からは石仏よりも新しい時期を示す遺物は皆無であるため，第２段階以降の室町時代に収まる時期を第３段階の下限としておきたい。石仏が供養塔あるいは墓標であったかは明らかでないが，葬送に関わる場や宗教的な空間であった可能性が高いことを示していよう。

以上のように，各平坦面では建物等は検出されなかったが，各段階を通してＳＸ１を中心に宗教関連活動の場として利用されていた可能性が高いと考えられる。中世における当地域では，石動山信仰を背景とした宗教活動が活発であった。遺跡の所在する中波地区においても石動山の五社権現の一つである火宮があり，中波天神の森遺跡でも経塚あるいは中世墓と板石組の供養塔が確認されていることから石動山信仰との関連が指摘されている。また，中波地区は女良浦と呼ばれた海岸線の北部に位置し，この女良浦と石動山を結ぶ平沢道は「重要な軍用及び糧秣道路」とされている（氷見市教育委員会1984）。こうした様相から中波後山遺跡においても石動山との関係は軽視できず，遺跡の形成には石動山に関係する僧侶や在地の有力層が介在していた可能性が高いと思われる。

（青山　晃）

参考文献

垣内光次郎・石井由美　1994「加賀（石川県）５．牧口中世墓」『中世北陸の寺院と墓地』北陸中世土器研究会

小松市教育委員会　1965『小松市史（４）』

酒井重洋　1994「越中（富山県）18．石垣遺跡」『中世北陸の寺院と墓地』北陸中世土器研究会

狭川真一　2011『中世墓の考古学』高志書院

富山県教育委員会　1972『魚津市石垣遺跡発掘調査概報』

七尾市教育委員会　1982『細口源田山遺跡』

氷見市教育委員会　1984『富山県石動山信仰遺跡遺物調査報告書』

吉岡康暢　1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館

第７表　中波後山遺跡　土器一覧

挿図	遺物番号	写真図版	遺構番号	出土地点	種類	器種	法量(cm)			時期	詳細時期	残存率(%)	胎土色調		胎土の特徴	備考
							口径	器高	底径				胎土色調	胎土色		
16	*1*	14	ＳＸ１		珠洲	壺	18.4	41.0	11.8	中世	Ⅲ～Ⅳ期	(底)40	5Y5/1	灰色	白色粒　黒色粒	
	2		ＳＸ１		珠洲	壺		(4.3)		中世			5Y5/1	灰色	白色粒　黒色粒	
	3		ＳＸ１		珠洲	壺		(17.5)	9.2	中世		(底)47	2.5Y5/1	黄灰色	白色粒　黒色粒	
	4		ＳＸ１		珠洲	壺		(3.5)	11.4	中世		(底)36	5Y5/1	灰色	白色粒　黒色粒　骨針	
	5		ＳＸ１		珠洲	擂鉢		(3.1)		中世	Ⅳ２期		5Y5/1	灰色	白色粒	
	6	14	ＳＸ１		珠洲	甕	70.0	61.9	17.0	中世	Ⅳ２～Ⅴ期	35(底)100	2.5Y5/2	暗灰黄色	白色粒　骨針	
	7			Ⅰ層	珠洲	甕		(2.3)		中世			N5/0	灰色	白色粒　黒色粒　骨針	
	8		ＳＸ１		珠洲	甕		(3.6)	21.0	中世		(底)45	5Y6/1	灰色	白色粒　黒色粒	
	9		ＳＸ１		土師質土器			(6.0)	9.2			(底)27	7.5YR5/4	にぶい褐色	石英　雲母　骨針	製塩土器？

第８表　中波後山遺跡　石製品一覧

挿図	遺物番号	写真図版	遺構番号	出土地点	種類	法量(cm・g)				石材
						長さ	幅	厚さ	重さ	
17	*10*	14	ＳＸ１	№58	石仏	48.7	33.5	10.6	20,100.0	石灰質砂岩(極粗粒)
	11	14	ＳＸ１	№59	石仏	43.0	39.1	9.9	14,300.0	石灰質砂岩(極粗粒)
	12			Ｘ35Ｙ38Ⅰ層	砥石	(6.1)	2.5	2.1	51.4	(流紋岩質)凝灰岩

第Ⅳ章　宇波ウワノ遺跡

1　概　要

宇波ウワノ遺跡（旧熊野神社古墳群）は宇波川左岸の小枝状に派生した丘陵の先端部，戸津宮集落への谷口に立地する。Ａ地区は丘陵の頂部にあたり，現況の標高は約47.5m～57.2mを測る。Ｂ地区はＡ地区より丘陵先端に近く一段低い部分で，南側の斜面の一部を含み，現況で標高約24.8～31.7mを測る。

宇波ウワノ遺跡では弥生時代終末期，古代，中世の遺構を確認した。調査当初，Ａ地区とＢ地区にそれぞれ１基の円墳があると想定されていたが，Ａ地区では古墳は検出されなかった。Ｂ地区では，古墳の可能性がある墳丘状の地形と周溝の可能性がある溝を検出したが，埋葬施設や盛土は確認できず，古墳推定範囲の半分は調査区外にあたるため，古墳であるかどうかは結論を出すことができなかった。ただし以下の報文では３号墳として記述しておく。今回の調査対象外となった丘陵先端部にも古墳が想定されている。なお，第Ⅰ章でも述べたが，当遺跡は複合遺跡であることが判明したため遺跡名を「熊野神社古墳群」から「宇波ウワノ遺跡」に改称されている。

弥生時代の主な遺構は，Ｂ地区の中央東側で検出した竪穴建物１棟である。古代の主な遺構はＡ地区の裾部で検出した３基の焼土坑と，Ｂ地区の北側で検出した掘立柱建物２棟と焼土坑１基等である。中世の主な遺構は，Ａ地区中央の丘陵尾根頂部で検出した塚状の集石遺構１基と，Ｂ地区南側の丘陵上の平坦部落ち際から斜面にかけて検出した集石遺構である。Ｂ地区の集石遺構は範囲にまとまりがないが，斜面落ち際の等高線に沿ってほぼ水平に分布する西側集石ＳＸ183と，落ち際から斜面へ転がり落ちた状態の東側集石ＳＸ182に分けて報告する。この他に近世以降の溝１条と時期不明の土坑がある。遺物には弥生土器・土師器・須恵器・灰釉陶器・珠洲・中国製染付・越中瀬戸・唐津・伊万里・石製品（磨製石斧・台石・砥石・石仏？）・金属製品（銭）がある。

2　層　序

Ａ地区の基本層序はⅠ層：黄灰色粘質土（表土），Ⅱ層：暗褐色粘質土（遺物包含層），Ⅲ層：褐色粘質土（地山），Ⅳ層：にぶい黄色泥岩（地山）である。Ⅰ層は約0.1～0.2mの層厚を測り，調査区全体で確認される。Ⅱ層は約0.1～0.2mの層厚を測り，調査区北側の尾根分断箇所より北側では確認されない。遺物包含層としているが，出土は極めて少ない。部分的に色調が暗くなる箇所や，ブロック状のⅣ層が混入する箇所がある。Ⅲ層は約0.1～0.5mの層厚を測り，調査区東側の斜面で確認される。Ⅳ層が風化して土壌化した粘質土を基調とし，ブロック状のⅣ層が混入する。Ⅳ層については，遺跡の位置する丘陵地が姿泥岩層の分布域であることから，これに相当すると考えられる。

Ｂ地区の基本層序はⅠ層：黒褐色粘土質シルト（表土），Ⅱ層：黒褐色粘土質シルト（遺物包含層），Ⅲ層：暗褐色シルト，Ⅳ層：にぶい黄褐色粘土質シルトまたは明黄褐色泥岩（遺構検出面・地山）である。Ⅰ層は約0.1～0.6mの層厚で調査区全体に堆積する。Ⅱ層は北東端や南側斜面にはなく，中央の谷部を中心に最大で約0.8m堆積する。Ⅱ層と谷部上層の埋土は区別し難く，主に古代の遺物が出土した。谷部下層からは弥生土器が出土した。Ⅲ層は北端から東側にかけて約0.1～0.2m堆積するが，遺物は出土していない。Ⅳ層はＡ地区と同様に姿泥岩層に相当すると考えられる。

3　遺構・遺物

（1）弥生時代終末期

A　竪穴建物

1号竪穴建物（ＳＩ１，第28・37図，図版６・16・17・23）

Ｂ地区の中央東側の３号墳の墳丘上に位置する。平面形は隅丸方形を呈するが，墳丘の斜面となる西側は削られて，壁の立ち上がりは確認できない。南北は約５ｍと推定され，深さは墳丘頂部に近い東端で0.48mである。屋内部の埋土は暗褐色粘土質シルト，にぶい黄褐色粘土質シルト，黒褐色粘土質シルト等を基調とする。屋内部の最下層のにぶい黄褐色粘土質シルトは床面全体に約0.08mの厚さで堆積し，貼床とみられる。柱穴と貯蔵穴は貼床の上から掘り込まれている。壁溝は幅0.15m，深さ0.05mで，貼床の土で埋められており，生活面としての貼床上面はほぼ水平である。炉は確認されなかったが，建物の中心付近の広い範囲で炭が多く混じる層が検出された。主柱穴は４基で，楕円形または円形を呈し，深さは0.37～0.58mである。埋土は暗褐色粘土質シルトを基調とする単層であるが，柱を据えたとみられる一段深い部分がある。南東の壁際には貯蔵穴とみられる方形のＫ１がある。Ｋ１は３方に浅い段をもち，蓋を受けたものと考えられる。Ｋ１の底面は平坦で，最下層に炭が多く混じる。花粉・植物珪酸体分析を屋内部埋土，炭混層，Ｋ１内炭混層において行った結果，すべての試料からイネの植物珪酸体が検出され，稲藁が何らかの形で利用されていた可能性もある。とくに多く検出されたのは屋内部埋土であった。また，特徴的な分析結果として，各試料から海面骨針が多量に検出されたが，故意に持ち込まれたものか否かは不明である[注1]。建物の時期は，出土した土器から弥生時代終末期と考えられる。

出土遺物には，弥生土器，台石，石英石核，石英剥片，種実がある。土器は屋内部に甕・壺・高杯が破片の状態で散在しており，Ｋ１内では甕･高杯が比較的まとまって出土したが完形のものはない。台石は，屋内部の貼床直上で平坦な面を上にして出土した。石英石核は21.82ｇの小振りのもの１点で，他に石英の破片が3.1ｇ出土しており，生活に必要な道具を少量製作していたものと考えられる。Ｋ１からは，土器の他に長さ約９㎝の割れた自然礫が出土したが，人為的な加工はみられない。石材は片麻岩である。柱穴からは，Ｐ３で甕の破片数点とモモ核[注2]が１点出土した。

1～*6*・*11*は屋内部から出土した。*1*は擬凹線甕である。有段部は長くやや外傾し，下半に擬凹線が施される。内面は摩滅が著しい。*2*は器種不明の底部である。脚部外面は縦方向の細かいユビオサエ，内面は粗いナデを施す。胴部外面はハケメ，内面はケズリ後ナデを施す。*3*～*6*は高杯である。*3*は内面にヨコミガキ，外面にナデを施し，内外面に赤彩される。*4*は有段高杯で，外面は口縁部に斜位のハケメ，杯底部にはミガキ，内面はミガキを施す。*5*は脚部で内外面摩滅する。*6*は脚裾部が有段になる高杯で，外面に赤彩される。*11*は台石である。上面はほぼ平坦であるがわずかに凹んでいる。表面はざらついており擦痕など明瞭な使用痕は確認できないが，使用により凹んだものとみられる。石材は軽石質の中粒砂岩で，裏面は凸面となっておりラミナの発達が観察される。

*7*はＰ３から出土した甕の底部である。平底で内外面にハケメを施し，外面の一部に煤が付着する。

8～*10*はＫ１から出土した。*8*は有段高杯で，伸張化した口縁部がやや外反する。内外面が摩滅している。*9*は有段甕で，口縁部はヨコナデ，胴部は外面にハケメ，内面にナデを施し，頸部内面の一部にヨコハケが残る。胴部外面の一部に煤が付着する。*10*は甕底部で平底である。胎土には粗砂粒が多く，胴部は外面上部と内面をケズリ，外面下半は縦方向のハケメを施す。

B　土　坑

109号土坑（ＳＫ109，第34図）

Ｂ地区の南側斜面の落ち際からやや北に位置する。平面形は円形を呈し，直径1.08m，深さ0.20mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とし，炭化物が混じる。出土遺物は弥生土器であるため弥生時代の土坑としておくが，埋土からは古代の土坑と区別できない。

C　谷（第25～27・29図）

Ｂ地区の北半から中央部にかけては，西側の広い範囲が埋没谷となっている。この谷は，平成23年度に実施した包蔵地確認調査において，Ｂ地区より西側の調査対象地外へと続いていると推定されている[注3]。西壁のＸ36付近が最も深く，地山の標高は約28.2mを測る。最も高い北西隅では標高約30.6mで，標高差は約2.4mとなる。南端は標高約29.7mまで緩やかに上がり，地山は小平坦面をなすが，約10m先は丘陵斜面となる[注4]。東端は，Ｘ40付近が流路状に浅く凹むが水成堆積は認められない。

埋土は，最下層に地山の混じる黒褐色粘土質シルト・暗褐色粘土質シルトが約10～40㎝堆積し，下層には黒色粘土質シルトが厚いところで約１m堆積する。その上に，北西部では表土や盛土，近代以降の攪乱土が載るが，南側や東側ではⅡ層が落ち込むように堆積する。遺物は，厳密にはⅡ層出土として取り上げるべきものも，谷からの出土としているものがあるため，包含層出土の遺物と一括で時代別に報告する。出土状況としては，古代以降の遺物は谷の落ち際など比較的浅い部分から出土しており，下層から出土した遺物は弥生土器に限られる。このことから，弥生時代には谷であった場所が徐々に埋まり，浅い谷状地となった古代以降，さらにⅡ層が堆積し埋没したと考えられる。

D　包含層出土の遺物（第37図，図版23）

*12～24*は弥生土器である。*12*は擬凹線甕である。胴部外面にハケメが残るが内面は摩滅している。*13*は有段甕である。胎土に粗砂粒を多く含むが器壁は薄く作られている。外面にハケメが残るが内面は摩滅している。*14・15*は甕底部である。*14*は底外面中央を浅く凹ませ，接地面の平らな輪高台状とする。*15*は中心を深く凹ませるが接地面の調整はなく断面は丸みを帯びている。*16*は甕の底部か。器壁が厚く尖底に近い丸底である。外面は摩滅しているが，内面には斜位と横位のハケメが器壁を抉るように施される。*17～23*は高杯である。*17*は口縁部がやや伸張化した有段高杯で，口縁端部は面を取る。外面はミガキ後ナデ，内面はヨコミガキを施し，内外面の一部に薄く赤彩が残る。*18*は口縁端部に広く面を取り縁帯状とする。内外面にヨコミガキを施し，内面から口縁端部にかけて赤彩痕が残る。*19～23*は高杯脚部である。*19*は杯部外面の一部にハケメが残り，脚部外面は縦方向のナデを施す。杯部内面は中央付近が剥離しているが一部に赤彩痕を残す。*20*は有段高杯で外面は杯部・脚部ともにミガキを施し赤彩するが，内面は摩滅している。*21*は脚裾部が有段になる。*22*は摩滅が著しい。*23*は外面下半にハケメが残る。*24*は器台の脚部で，脚基部が太く裾部は短く広がる。摩滅が著しい。

*27*は磨製石斧である。基部両側面に，潰し加工による抉りを入れている。石材は透閃石岩である。

（２）古墳時代

A　古　墳

３号墳（第29～31図，図版18）

Ｂ地区の中央東側に位置する小丘状の高まりで，盛土や埋葬施設が確認されなかったため現状では古墳と断定できないが，東側半分は調査区外にあり，裾に溝ＳＤ144・145・157が廻ることから，周溝を伴う古墳の可能性を否定できない。平面形は南側の裾の形状をみると円形を呈するが，北側と西

側の裾の形状からは北西に角をもつ方形となる可能性もある。墳丘の規模は直径約20m，高さ約1.6mで，墳頂の標高は31.43mを測る。裾部周辺の地形は周溝付近で傾斜が緩やかになり，北側がほぼ平坦になるが，西側は谷部の深い落ち込みへと傾斜が続き，南側は周溝から約３m先で丘陵斜面となる。

墳丘上の表土からは弥生土器が多数出土したが，墳丘上で検出した弥生終末期の竪穴建物ＳＩ１に関連する遺物と考えられる。

Ｂ　溝

144号溝（ＳＤ144，第30・31図，図版18）

Ｂ地区３号墳の北側に位置する東西方向の溝で，ＳＤ157と分岐する。幅0.76m，深さ0.12mを測る。３号墳の周溝の可能性があるが，現状では断定できない。埋土は黒褐色粘土質シルトの単層である。出土遺物はない。

145号溝（ＳＤ145，第30・31図，図版18）

Ｂ地区３号墳の南側裾部にめぐる溝で，幅4.82m，深さ0.15mを測る。幅は広いが浅く，底面からの立ち上がりは緩やかである。３号墳の周溝の可能性があるが，現状では断定できない。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とし下層には地山の土がやや多く混じる。埋土除去後底面で方形の土坑ＳＫ149を検出した。出土遺物はない。

157号溝（ＳＤ157，第30・31図，図版18）

Ｂ地区３号墳の北側に位置する東西方向の溝でＳＤ144と分岐する。幅0.90m，深さ0.24mを測る。３号墳の周溝の可能性があるが，現状では断定できない。西端は古墳の裾から離れて谷状地の傾斜へつながっていく。埋土は黒褐色粘土質シルトの単層である。出土遺物はない。

Ｃ　土　坑

149号土坑（ＳＫ149，第34図，図版18）

Ｂ地区の中央東側，ＳＤ145の埋土除去後に検出した。長軸1.49m，短軸1.37m，深さ0.35mを測る。方形を呈し，底面は平坦で壁面は直立する。黒褐色粘土質シルトを基調とし，下層には地山の土がやや多く混じる。出土遺物はないが，ＳＤ145の埋土下で確認したことから古墳時代の遺構としておく。

（３）古　代

Ａ　掘立柱建物

１号掘立柱建物（ＳＢ１，第32・38図，図版19・20・24）

Ｂ地区の北側に位置する３間×２間の南北棟側柱建物である。桁行5.89m，梁行4.36m，面積は25.68㎡である。主軸はＮ－16°－Ｗである。柱穴の平面形は円形または楕円形で，規模は径0.42～0.92m，深さは0.31～0.79mである。埋土は黒色粘土質シルト及び黒褐色粘土質シルトを基調とする。単層のものが多く，柱痕は確認されなかった。出土遺物はＳＰ114・132・135の弥生土器，ＳＰ115・126の土師器，ＳＰ129の須恵器（*28*）である。弥生土器は小片で，遺構の時期とは異なる遺物が混入したものであろう。

*28*は須恵器甕の口頸部である。外傾し端部は水平に面を取る。８世紀以降のものである。

建物の時期については，年代のわかる出土遺物が少ないものの，ＳＢ２と近接し棟方位を同じくすることから，あまり時間を隔てず建て替えられたものと推測する。ただし切り合いがないため前後関係は不明である。

2号掘立柱建物（ＳＢ２，第33・38図，図版19・20・24）

Ｂ地区の北側に位置し，ＳＢ１南側に隣接する２間×２間の南北棟側柱建物である。桁行4.93m，梁行4.10m，面積は20.21㎡である。主軸はＳＢ１と同じくＮ－16°－Ｗで，あまり時間を隔てず建て替えられたものと推定する。柱穴の平面形は円形または楕円形で，規模は径0.36～0.78m，深さは0.21～0.60mである。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とする。単層のものが多く，柱痕は確認されなかった。建物範囲内に焼土坑ＳＫ121が位置するが，建物との新旧関係は不明である。出土遺物はＳＰ122の弥生土器・須恵器（*29*），ＳＰ138の弥生土器であるが，弥生土器は小片で，遺構の時期とは異なる遺物が混入したものであろう。

*29*は須恵器長頸壺で，埋土の上位から中位にかけて，割れた状態で出土した。口頸部を欠損しているが，胴部は完形に近く，割れ口が丸く開口しており断面に打ち欠いた痕跡があることから，故意に口頸部が除去されたものとみられ，祭祀に使用された可能性も考えられる。肩部には杯の破片が溶着している。肩が張り明瞭な稜をもつ器形から，８世紀第２四半期のものと考えられる。

建物の時期については，須恵器長径壺の年代から８世紀第２四半期の可能性もあるが，周辺の包含層から出土した須恵器の多くは８世紀後半頃のものとみられることから，８世紀中頃～後半と考えておきたい。

Ｂ　土　坑

6号土坑（ＳＫ６，第34図，図版８）

Ａ地区の北東斜面に位置する。平面形は不整楕円形を呈し，長径1.26m，短径0.81m，深さ0.14mを測る。埋土は黒褐色粘質土を基調とし，炭化物・焼土粒を含む。土坑の西側は炭化物の混入が顕著であり，被熱による焼土の形成も認められる。炭化物の放射性炭素年代は1,230±20yrBP，暦年較正年代は717～865cal ADの結果が得られた。

7号土坑（ＳＫ７，第34図）

Ａ地区の西側斜面に位置する。調査区外に続くため，平面形は不明であるが，おそらく楕円形を呈すると思われる。規模は長径1.09m，深さ0.17mを測る。埋土はにぶい黄褐色粘質土を基調とし，下層には炭化物を多く含む。土坑底面には焼土の形成も認められる。炭化物の放射性炭素年代は1,340±20yrBP，暦年較正年代は655～675cal ADの結果が得られた。

8号土坑（ＳＫ８，第34図）

Ａ地区の南側斜面に位置する。平面形は楕円形を呈し，長径0.80m，短径0.60m，深さ0.13mを測る。埋土は黒色粘質土を基調とし，炭化物を含む。炭化物の放射性炭素年代は1,180±20yrBP，暦年較正年代は778～887cal ADの結果が得られた。

106号土坑（ＳＫ106，第34図，図版20）

Ｂ地区の南側斜面の落ち際からやや北に位置する。平面形は円形を呈し，直径1.10m，深さ0.70mを測る。上部は擂鉢状を呈するが，中央が柱穴状に深くなる。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とし，炭化物が混じる。出土遺物は土師器または弥生土器の小片のほかに多量の炭化木がある。炭化木は細かく割れた状態で，一片を樹種同定した結果カツラであった。遺物は弥生土器または土師器の小片であり，時期は不明である。

110号土坑（ＳＫ110，第34図）

Ｂ地区の南側斜面の落ち際からやや北に位置する。平面形は楕円形を呈し，長径1.84m，短径1.00m，深さ0.22mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とし，炭化物を含む。出土遺物はなく，時

期は不明である。

121号土坑（ＳＫ121，第34図，図版20）

Ｂ地区の北側に位置し，ＳＢ２の範囲と重複するが，ＳＢ２との新旧関係は不明である。建物に附属する施設の可能性がある。平面形は隅丸方形を呈し，長軸0.86m，短径0.78m，深さ0.11mを測る。壁面と底面に被熱による焼土の形成が認められる。底面は平坦で壁面にかけて緩く湾曲して立ち上がり，下層に炭化物を多く含む黒褐色粘土質シルトが壁面から底面にかけて薄く堆積する。上層埋土も黒褐色粘土質シルトを基調とし，炭化物を含む。出土遺物はない。南北に隣接して柱穴状の小土坑ＳＫ128・ＳＫ171があるが，これらはＳＫ121に付随するものである可能性もある。

包含層出土の遺物（第37・38図，図版23・24）

25・*26*は土師器甕である。谷の南端の落ち際から出土した。*25*は長胴の甕で，胴部は肩の張りがなく頸部から口縁部にかけて緩やかに外反する。器壁は薄く，内面は横方向のハケメを施すが，外面は磨滅している。*26*は小型の甕で，口縁部は短く外反し，胴部は球胴で底部は中央を窪ませて自立させる。上から見ると口縁部は長径15.4㎝，短径12.2㎝の楕円形を呈し，胴部も楕円形を呈する。外面に縦方向，内面に横方向のハケメを施す。

30～*40*は須恵器である。*30*・*31*は杯で底外面は回転ヘラ切りである。*32*は杯蓋で全面ロクロナデを施し，口縁部外面にのみ自然釉がかかる重ね焼き痕がある。*33*～*38*は有台杯で底外面は回転ヘラ切りである。*39*・*40*は横瓶の口縁部で，湾曲気味に外傾し端部は水平に面を取る。

41～*43*は土師器である。*41*・*42*は椀で内外面摩滅するが，*41*は回転糸切り痕が残る。*43*は皿で，回転糸切りの底部に高めの高台がつく。

*44*は灰釉陶器皿で，高台は低く，高台内の中央部を除きロクロナデを施す。

（４）中　世

Ａ　集石遺構

集石遺構１（ＳＸ１，第24・39図，図版２・３・７・８・25）

Ａ地区の丘陵頂部に位置する。丘陵頂部は長軸15m，短軸10m程の平坦面となっている。その平面形は北西側からの抉り込みがやや強い，いびつな瓢箪形を呈する。この平坦面の丘陵南東端でＳＸ１を確認した。

ＳＸ１の平面形は不整円形を呈し，規模は5.5×5.0mを測り，高さ0.8mのマウンドを形成する。マウンドは，にぶい黄褐色粘質土，黒～黒褐色粘質土の順に盛土することにより構築される。マウンド頂部の３×３ｍの範囲に拳～人頭大の礫を用いて集石が形成される。集石には複数の石材が用いられており，それぞれサンプルを採取した。石材は花崗岩･片麻岩･石英斑岩･凝灰岩･泥岩を確認した。これらの石材は氷見市北部丘陵地帯で確認される第三紀層に由来すると考えられ，遺跡に近接する宇波川で採取した礫を用いたと考えられる。また，集石に用いられる石材の内，泥岩は色調が黄灰色を呈し，他の石材に比べ視覚的に目立つ。その位置は集石内に散在する以外に，マウンド裾部の四隅に比較的大きめの泥岩を配しているようにも見受けられた。ただし，礫の大きさは一様ではなく，その位置も南西・南東隅ではマウンド裾部からやや距離を置いている。礫が原位置から移動している可能性もあることから，本来はマウンドの範囲を示すように泥岩を配していた可能性もある。なお，ＳＸ１の東側では長さ1.5m，幅0.3mとなる大型の泥岩が出土している。特に加工痕は無く，地山が泥岩層であることから自然の転石である可能性が高い。

出土遺物には集石内から珠洲・銅銭（*56*・*57*），黒褐色粘質土内から砥石（*54*・*55*）がある。*56*は大観通宝（初鋳1107年），*57*は淳化元宝（初鋳990年）である。*54*・*55*の砥石は流紋岩または流紋岩質の凝灰岩を石材とし，*55*には深さ４㎜の穿孔痕がある。

ＳＸ１の時期は出土銅銭からは12世紀代以降と考えられる。ただし，銅銭のみでは時期を判断し難いため，調査区内の他の遺物を参考とするが，時期を判断できる遺物は包含層出土の珠洲擂鉢（*45*）のみである。こちらはＩ３～Ⅱ期の所産と考えられる。このように時期を判断する手がかりは僅かであるが，ＳＸ１の形成時期は12世紀末～13世紀前半を中心に考えておきたい。

なお，ＳＸ１の位置する丘陵頂部は熊野神社古墳群の２号墳として認識されていた。しかし，丘陵頂部全体についてＳＸ１を除去した後に精査したが，埋葬施設は確認されなかった。出土遺物も古墳時代に該当するものは皆無であった。これらの点から古墳ではないと判断した。また，丘陵尾根を切断して先端部を独立させている点については，谷を挟んだ丘陵地に宇波城跡が存在することから，それに関係して行われた堀切の可能性がある。

集石遺構182（ＳＸ182，第35・39図，図版21・25）

Ｂ地区の南東端の平坦面落ち際から斜面にかけて検出した集石をＳＸ182とした。調査当初から地表面に礫が数点露出しており，礫を残して表土を掘り下げていった結果，平坦面の落ち際と，そこから約３ｍ下のテラス状の小平坦地でまとまった集石を検出した。盛土らしき堆積層は確認されず，積まれた礫が表土に埋まっていったという状況が見受けられた。積み方は不規則で，最大で約40㎝の高さがある。全体では東西約６ｍ，南北約12ｍの範囲に分布するが，斜面の礫は散らばった状態で，上から転がり落ちたものと考えられる。使用されている礫は川原石で特に加工があるものはなく，多くは10～15㎝大の円礫で，30㎝大のものも不規則に混じっている。平坦部落ち際の集石の下では東西方向の溝ＳＤ180を検出し，埋土に集石と同様の礫が混じることから集石との関連性があるものと考えられる。

一段下の小平坦地で検出した集石の下からは石仏？（*58*）が出土した。出土位置は地山直上ではあるが斜面に対し斜めに倒れた状態で，元位置を留めているようには見えない。この他の出土遺物としては，礫の間から弥生土器甕・高杯，須恵器甕の破片が出土しているが，遺構の時期とは異なるものが混入したものであろう。

*58*は長さ46.3㎝，厚さが最大で7.6㎝の板状の石製品で，凹凸があり，風化のため形は不鮮明であるが，浮彫の石仏か。裏面はほぼ平坦である。石の節理に沿って柳葉形の穴があるが，風化によるものとみられる。石材は極粗粒の明灰色石灰質砂岩で，最大径２㎝の軽石礫が混じる。

集石遺構183（ＳＸ183，第36図，図版22）

Ｂ地区の南西端の斜面落ち際で検出した東西方向の集石をＳＸ183とした。使用されている礫はＳＸ182同様の川原石で，一部に２～３個が重なっている状況もみられるが，積み上げられた状態ではなく，等高線に沿ってほぼ平坦に東西に広がっている。礫は地山直上か，地山の上に10～15㎝の層厚で堆積する暗褐色粘質シルト層の中で検出した。この土層は表土に似た土層でしまりがなく，盛土である可能性は低い。礫の間から弥生土器甕と須恵器甕の破片が出土したが，遺構の時期とは異なるものが混入したものと考えられる。

B　溝

180号溝（ＳＤ180，第35・36図，図版22）

Ｂ地区の南東端の斜面落ち際，ＳＸ182の下で検出した。長さは約6.02mで，ほぼ等高線に沿って掘られている。下層には暗褐色粘土質シルト，上層には表土の黒褐色シルトが堆積する。埋土にはＳＸ182の集石と同様の自然礫が混じることから，ＳＸ182に関連するものと考えられる。

C　包含層の遺物（第38・39図，図版25）

45・*46*は珠洲である。*45*は擂鉢で，Ａ地区の尾根切り通しの表土から出土した。細密な櫛歯原体を用い疎らな放射状の卸目を施入する。底部内面に煤が厚く付着する。焼成不良でやや軟質であり，外面は摩滅している。*46*は甕で，頸部がくの字に屈曲する短い方頭を呈する。

*47*は中国製染付で，外面には芭蕉葉文が描かれ，見込みには意匠は不明であるが界線で囲まれた染付がある。釉はやや青みがかり，畳付を除いて全面に施される。

*48*は越中瀬戸の匣鉢で，内面下半を除いて鉄釉が施される。

49・*50*は唐津である。*49*は皿で，高台内の削り込みは粗雑で高台幅が一定でない。高台周辺を除いて灰釉が施され，内面に砂目が残る。*50*は椀で，高台の削り込みが浅く中央には小さく突出した削り残しがある。外面下半は露胎で，内面から外面上半は厚く鉄釉が施される。

51・*52*は伊万里である。*51*は青磁椀で，全面施釉後畳付の釉を剥ぎ取るが，高台の内外面，特に内面に多く砂が付着する。*52*は染付皿で内面に山水文が描かれる。畳付は露胎で内面に砂が付着する。

*53*は樽形の土錘でナデにより器面調整する。

*59*は砥石で，中砥である。砥面は正面，右側面，裏面の３面で，正面と裏面は湾曲し，左側面には刃物痕が残る。石材は緑色凝灰岩である。（越前慎子・青山　晃）

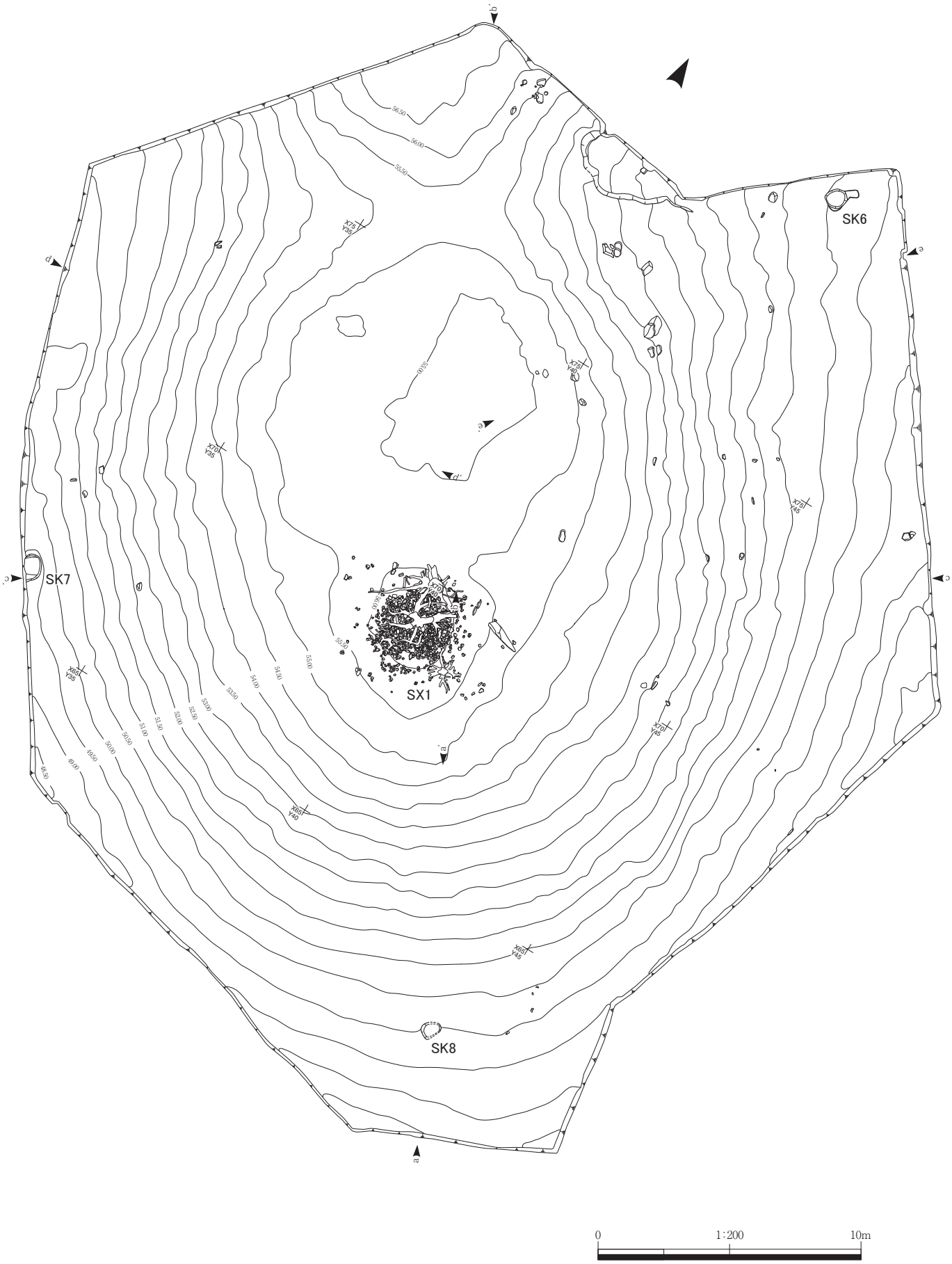
注

注１　４　自然科学分析（２）植物珪酸体分析・花粉分析・樹種同定に詳しい。
注２　モモ核の種実同定は島田亮仁氏による。
注３　富山県文化振興財団　2012『平成23年度埋蔵文化財年報』
注４　谷の深さはトレンチにより確認しており，Ｙ55以西は完掘していない。

参考文献

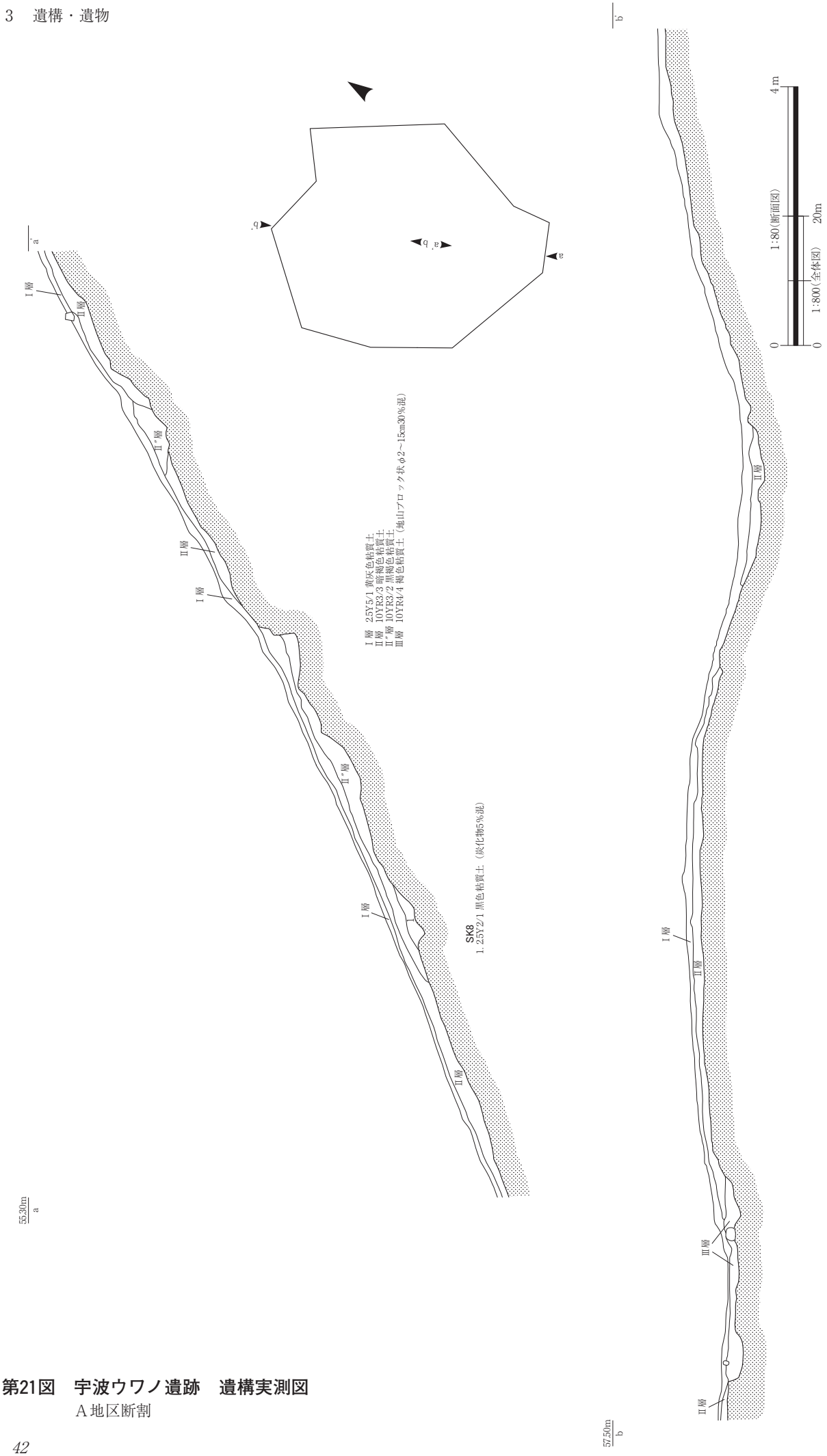
大橋康二　1984「肥前陶磁の変遷と分布」『国内出土の肥前陶磁』九州陶磁文化館
九州近世陶磁学会　2000『九州陶磁の編年　九州近世陶磁学会10周年記念』
石川考古学研究会・北陸古代土器研究会　1988『シンポジウム　北陸の古代土器研究の現状と課題』
岡本淳一郎　2006「砺波平野北部の古墳出現期土器」『下老子笹川遺跡発掘調査報告－能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅴ－』富山県文化振興財団
吉岡康暢　1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館

第19図　宇波ウワノ遺跡　現況測量図



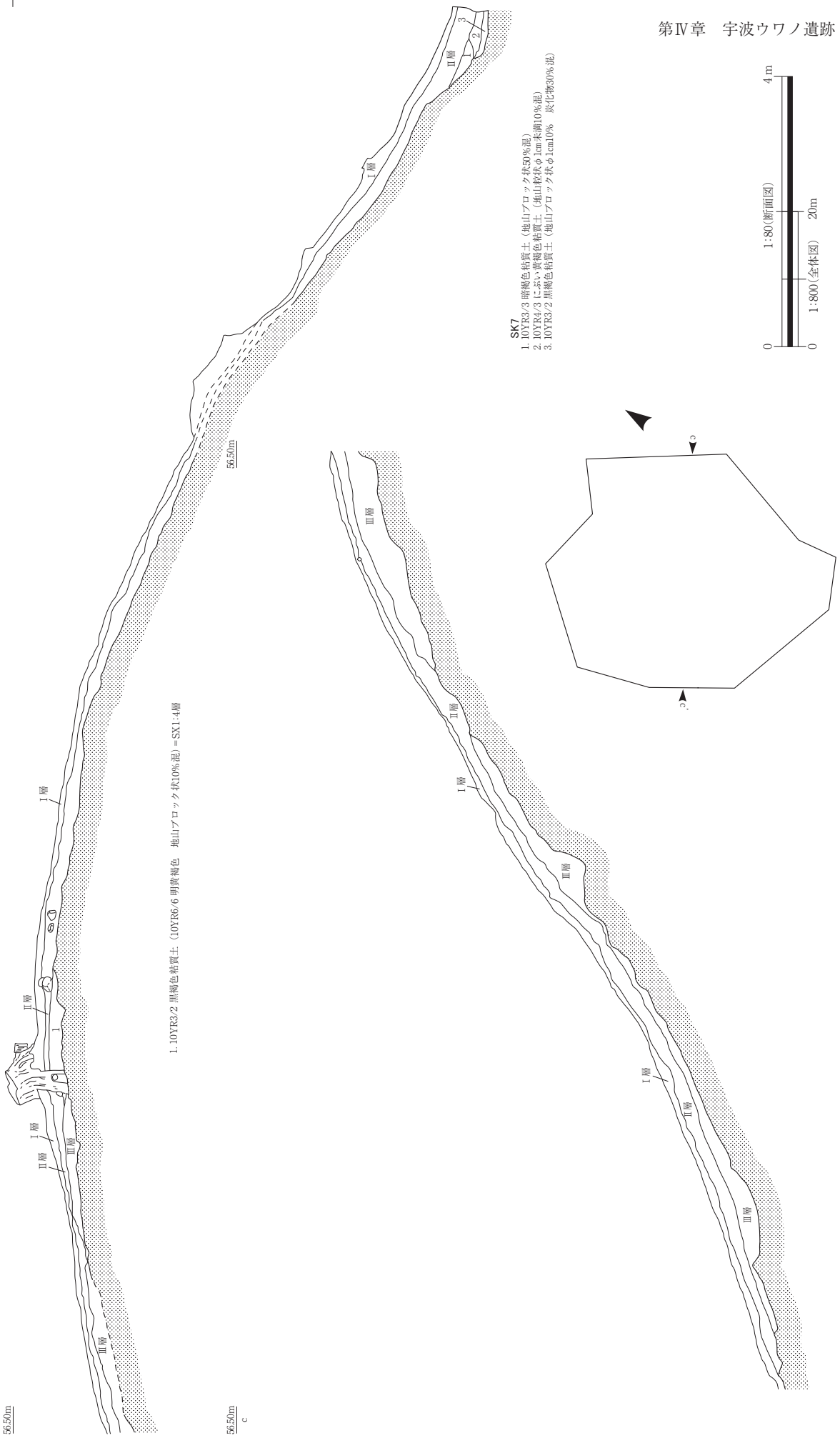
0　1:200　10m

第20図　宇波ウワノ遺跡　全体図
A地区



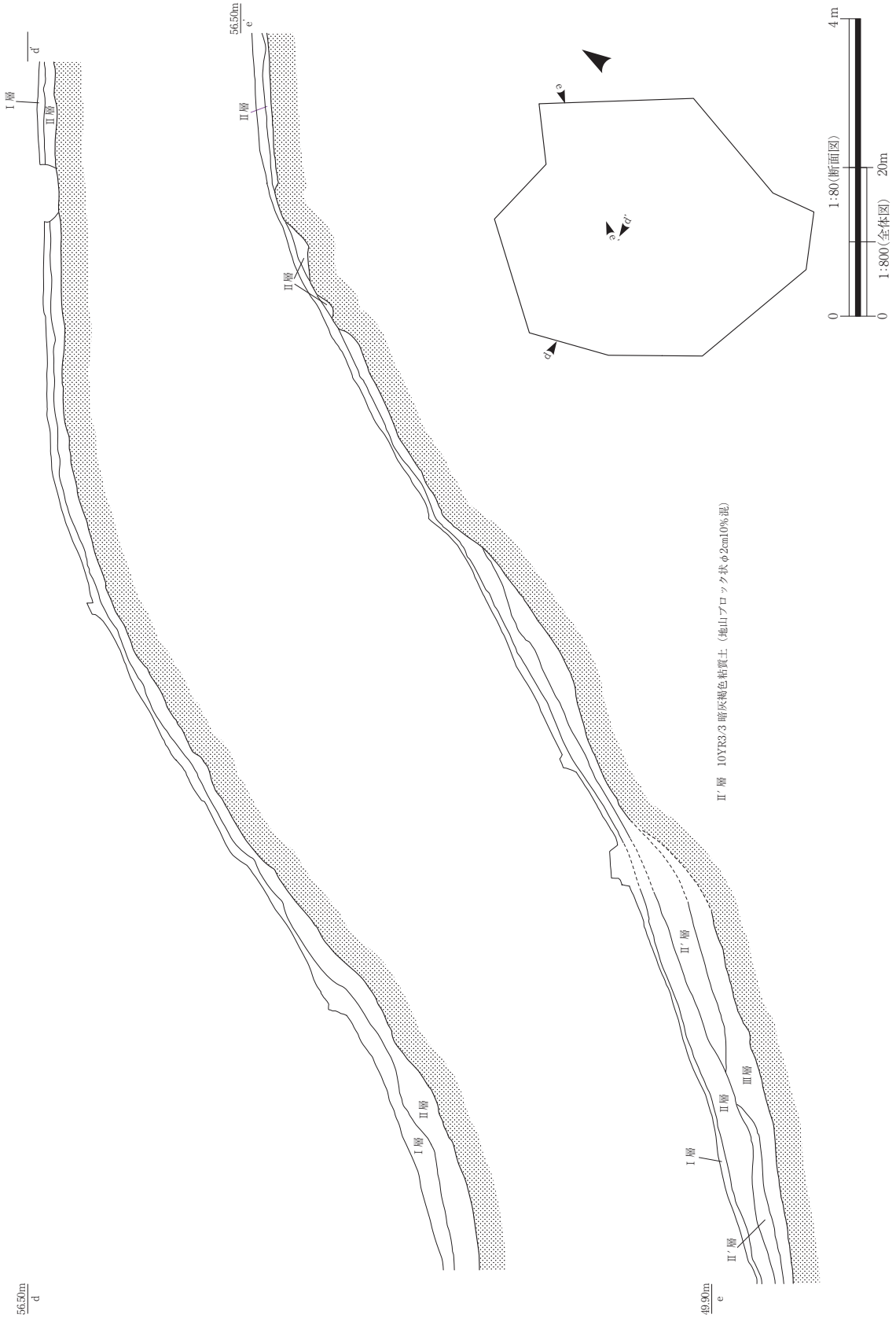
第21図　宇波ウワノ遺跡　遺構実測図

A地区断割



第22図　宇波ウワノ遺跡　遺構実測図

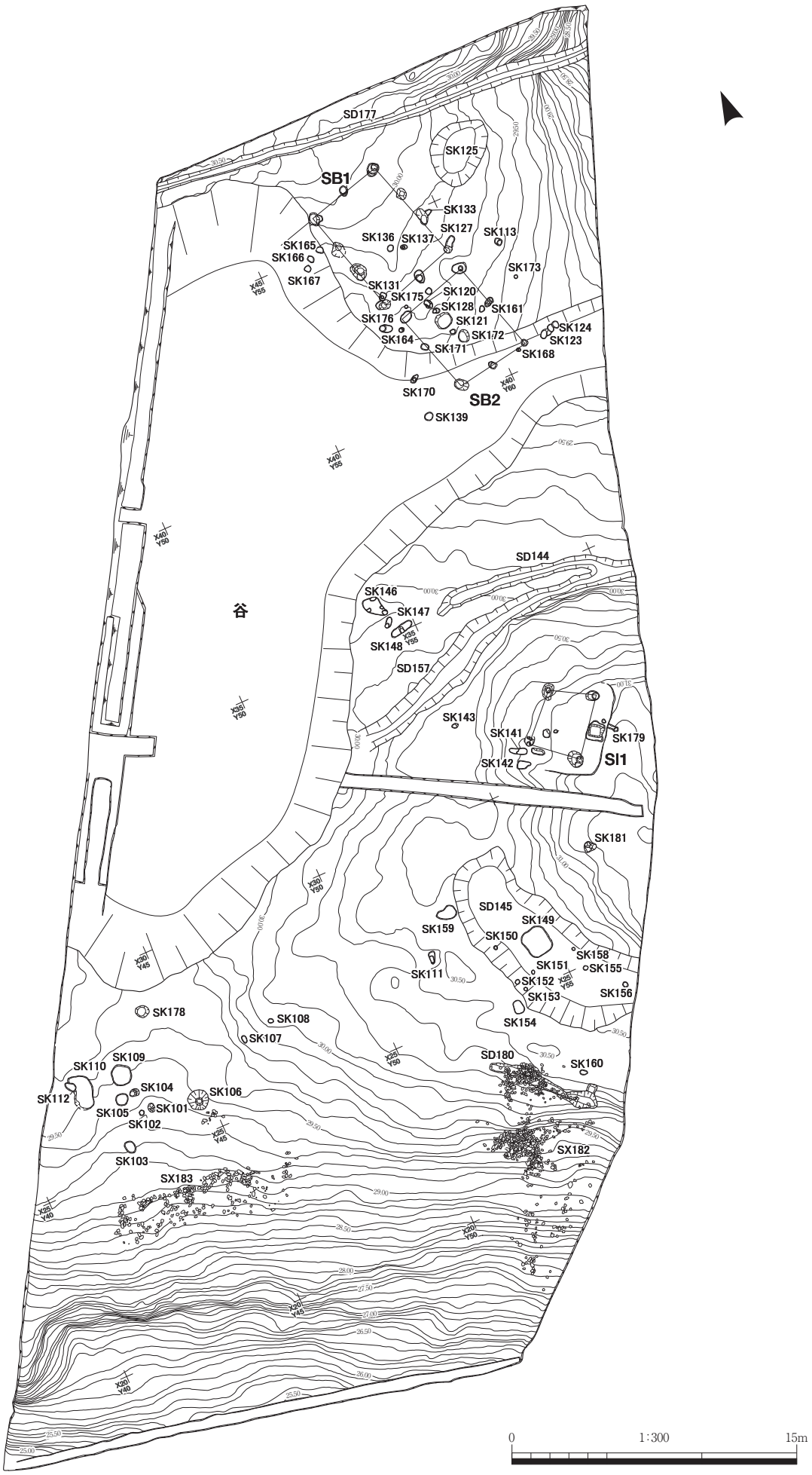
Ａ地区断割



第23図　宇波ウワノ遺跡　遺構実測図

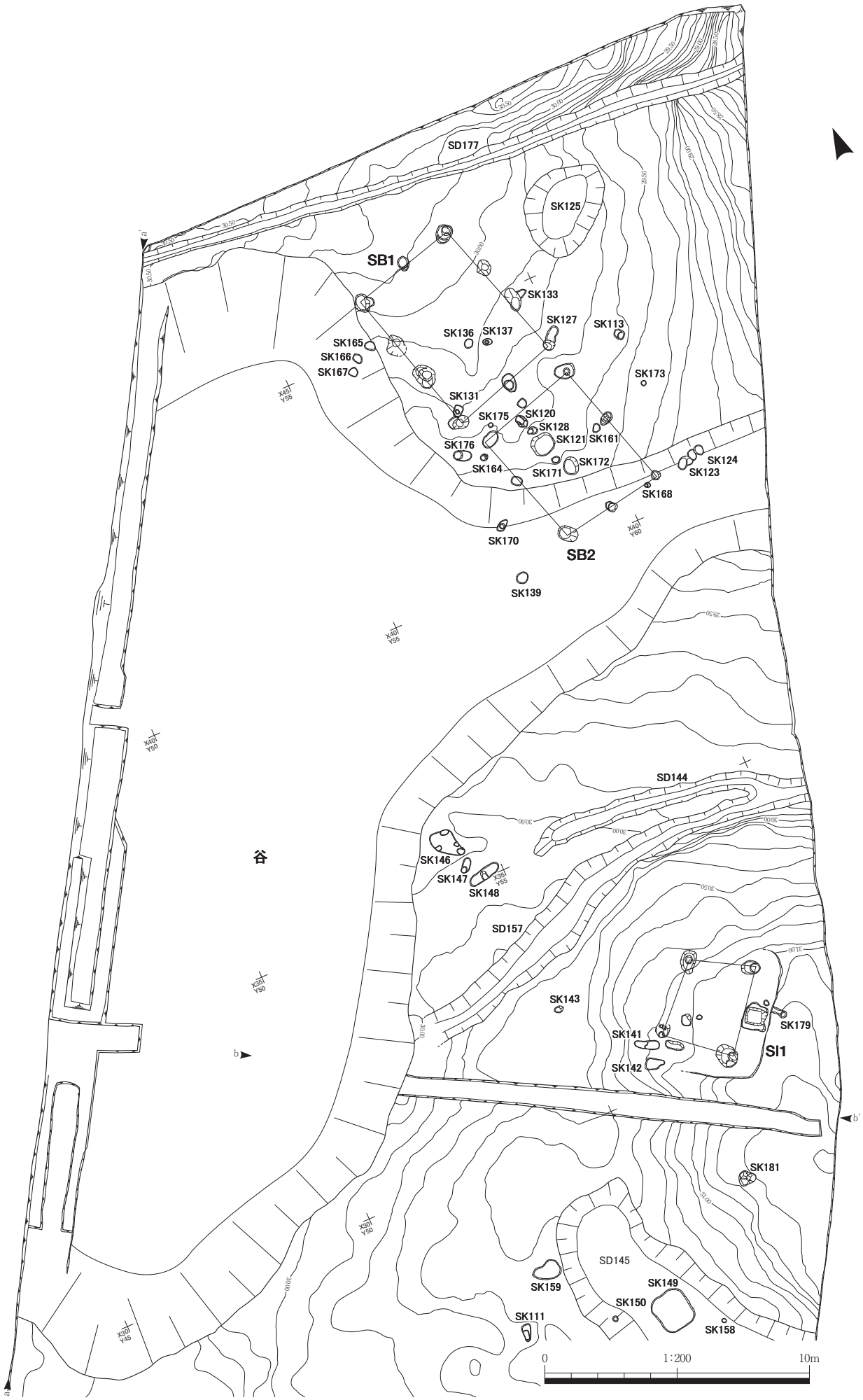
A地区断割

第24図　宇波ウワノ遺跡　遺構実測図
SX1



第25図　宇波ウワノ遺跡　全体図

B地区

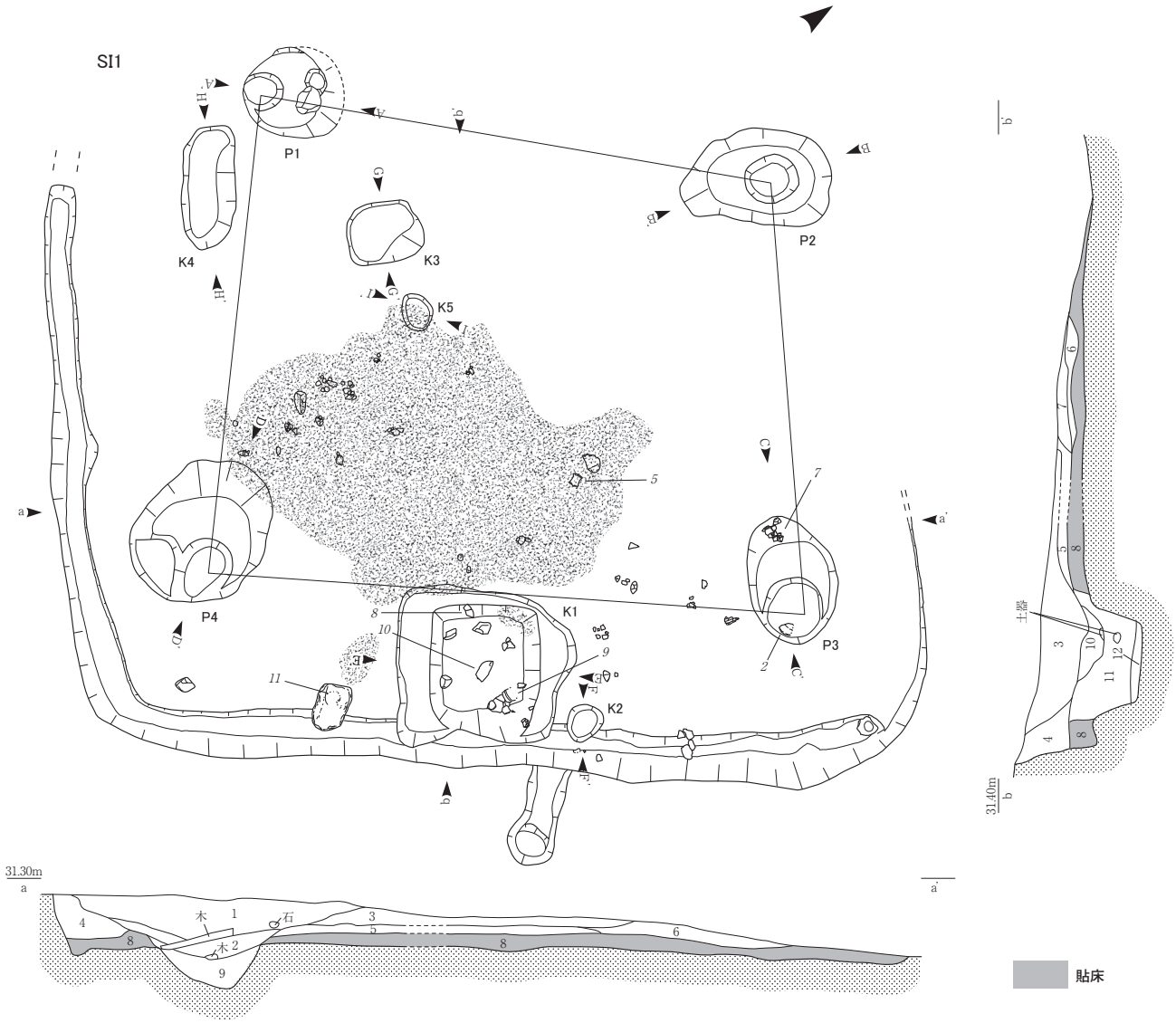


第26図　宇波ウワノ遺跡　全体図

B地区

第27図　宇波ウワノ遺跡　全体図

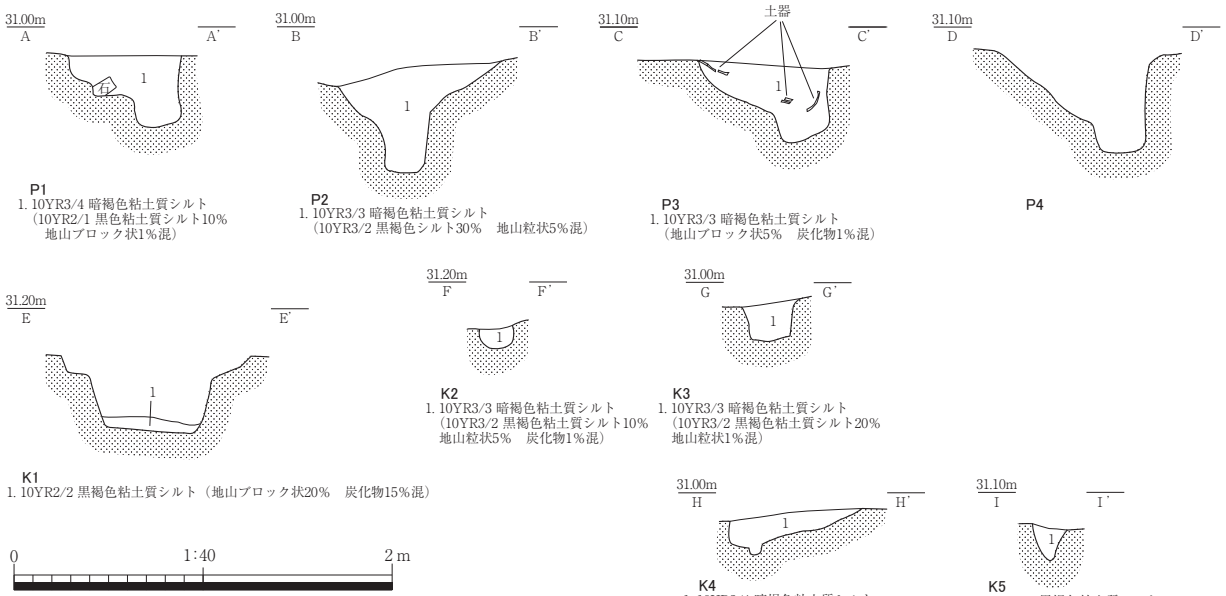
B地区



SI1
1. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト（地山ブロック状5%　炭化物1%混）
2. 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト（地山ブロック状5%　炭化物3%混）
3. 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト（10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト30%　地山ブロック状10%　炭化物1%混）
4. 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト
5. 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト（炭化物20%　地山粒状5%混）
6. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト（地山ブロック状5%　炭化物5%混）
7. 10YR1.7/1 黒色粘土質シルト（炭化物20%　地山ブロック状1%混）
8. 10YR5/3 にぶい黄褐色粘土質シルト（地山ブロック状30%
10YR3/2 黒褐色粘土質シルトφ1cm～3cm10%　地山ブロック状5%混）　貼床

P4
9. 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト（地山ブロック状10%　炭化物1%混）

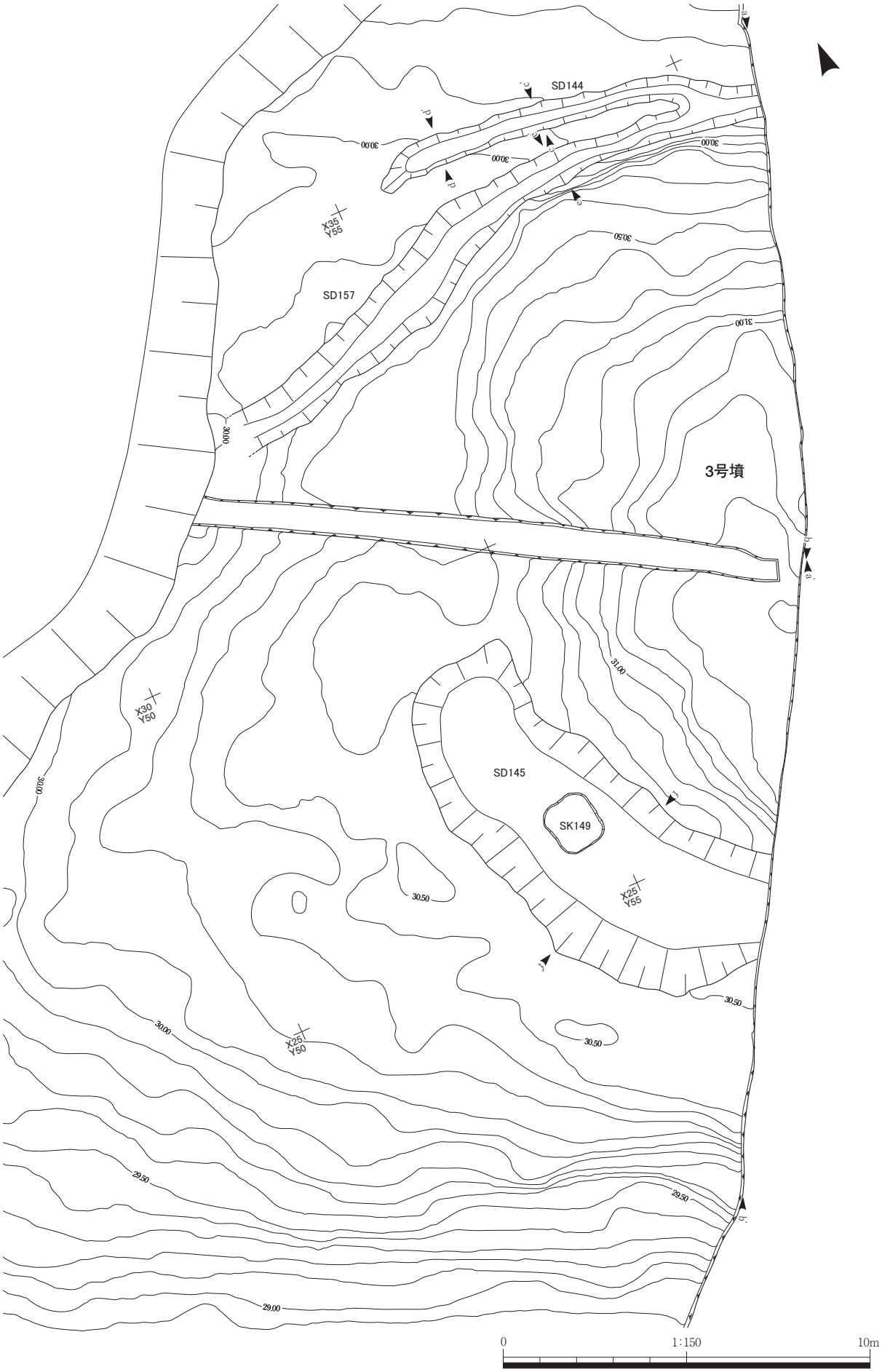
K1
10. 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト（10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト10%
地山ブロック状1%　炭化物1%混）
11. 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト（地山粒状5%　炭化物5%混）
12. 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト（地山ブロック状20%　炭化物15%混）



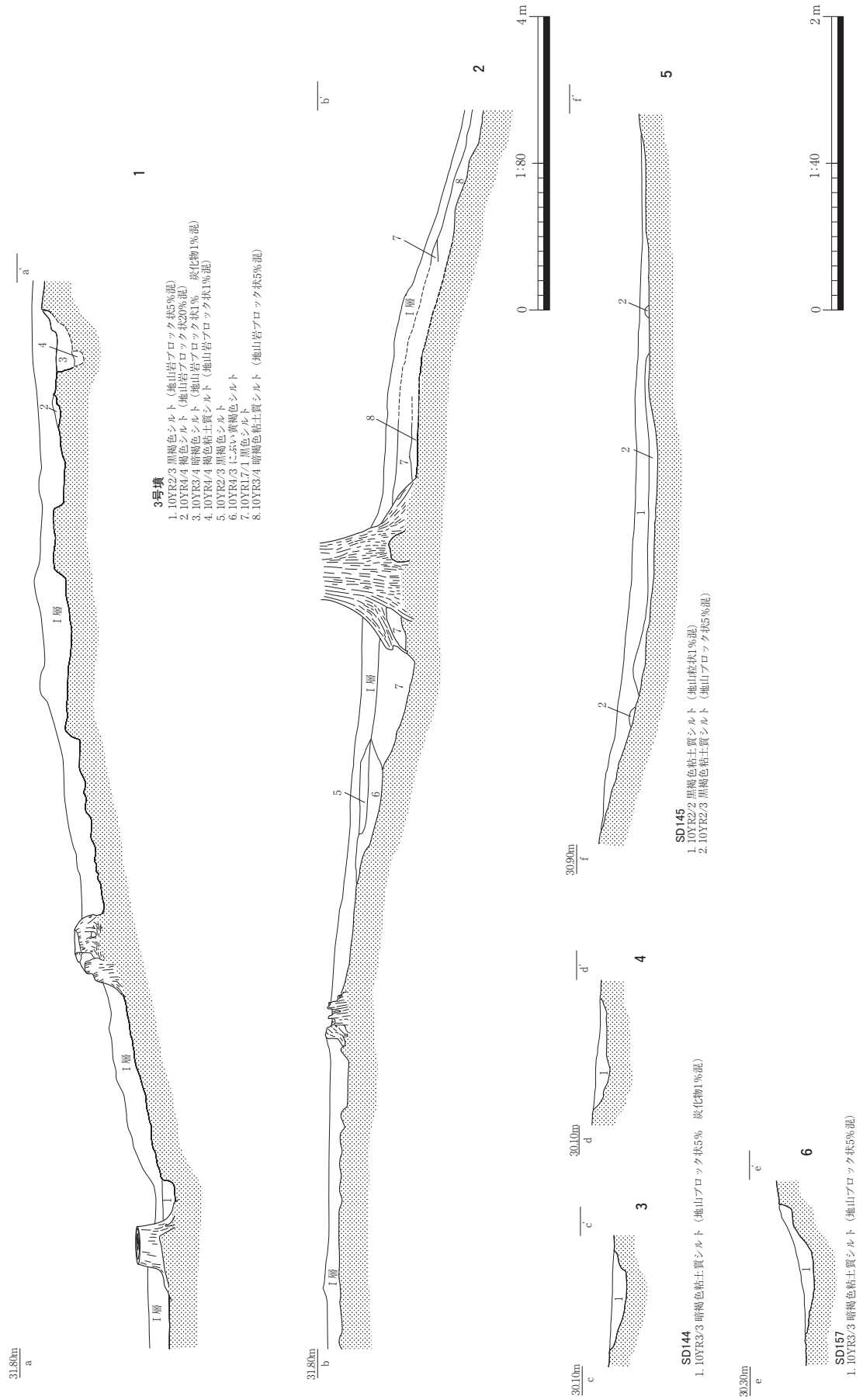
第28図　宇波ウワノ遺跡　遺構実測図
SI1

第29図　宇波ウワノ遺跡　遺構実測図

1. 谷・SD177　2. 3号墳

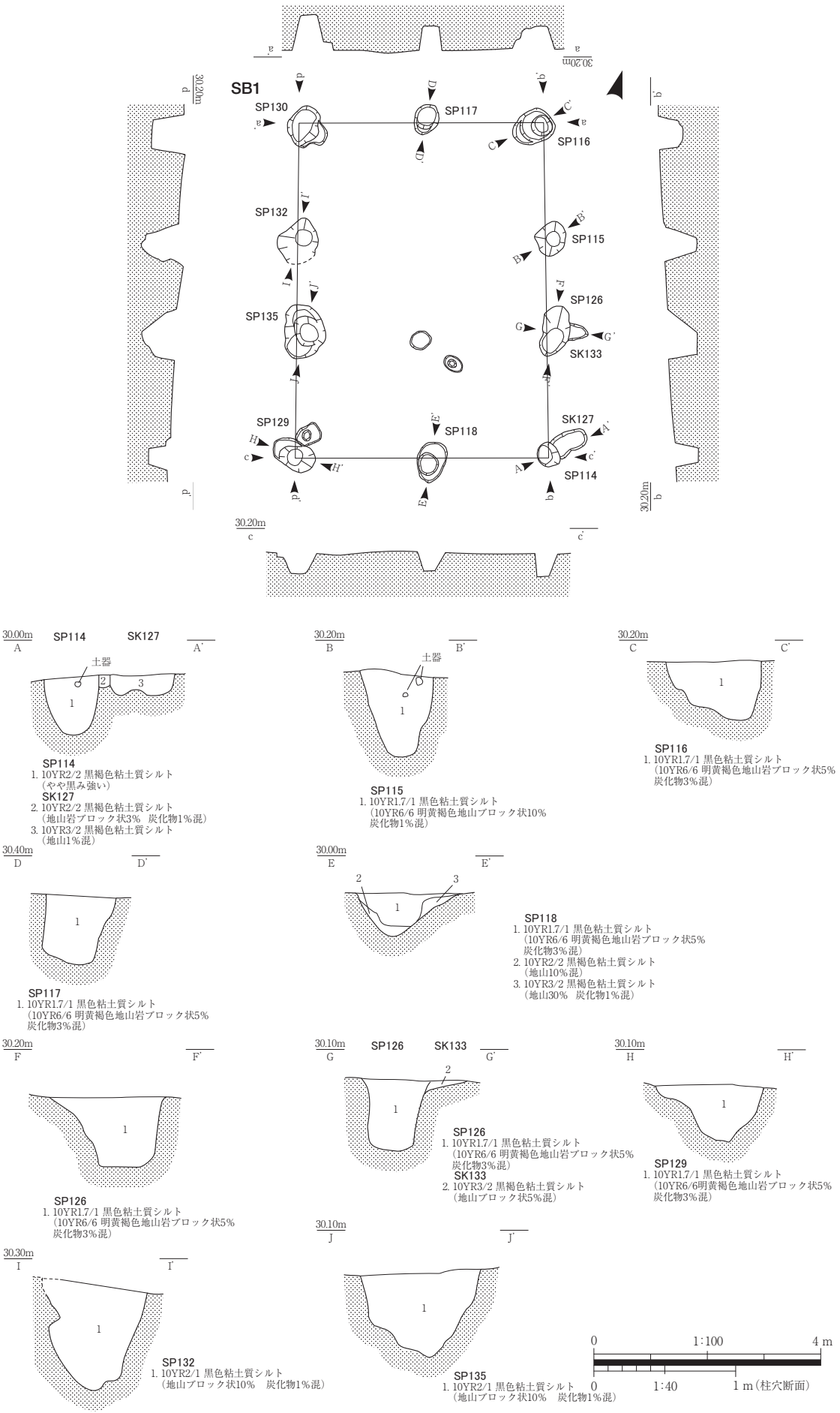


第30図　宇波ウワノ遺跡　遺構実測図
3号墳　SD144　SD145　SD157

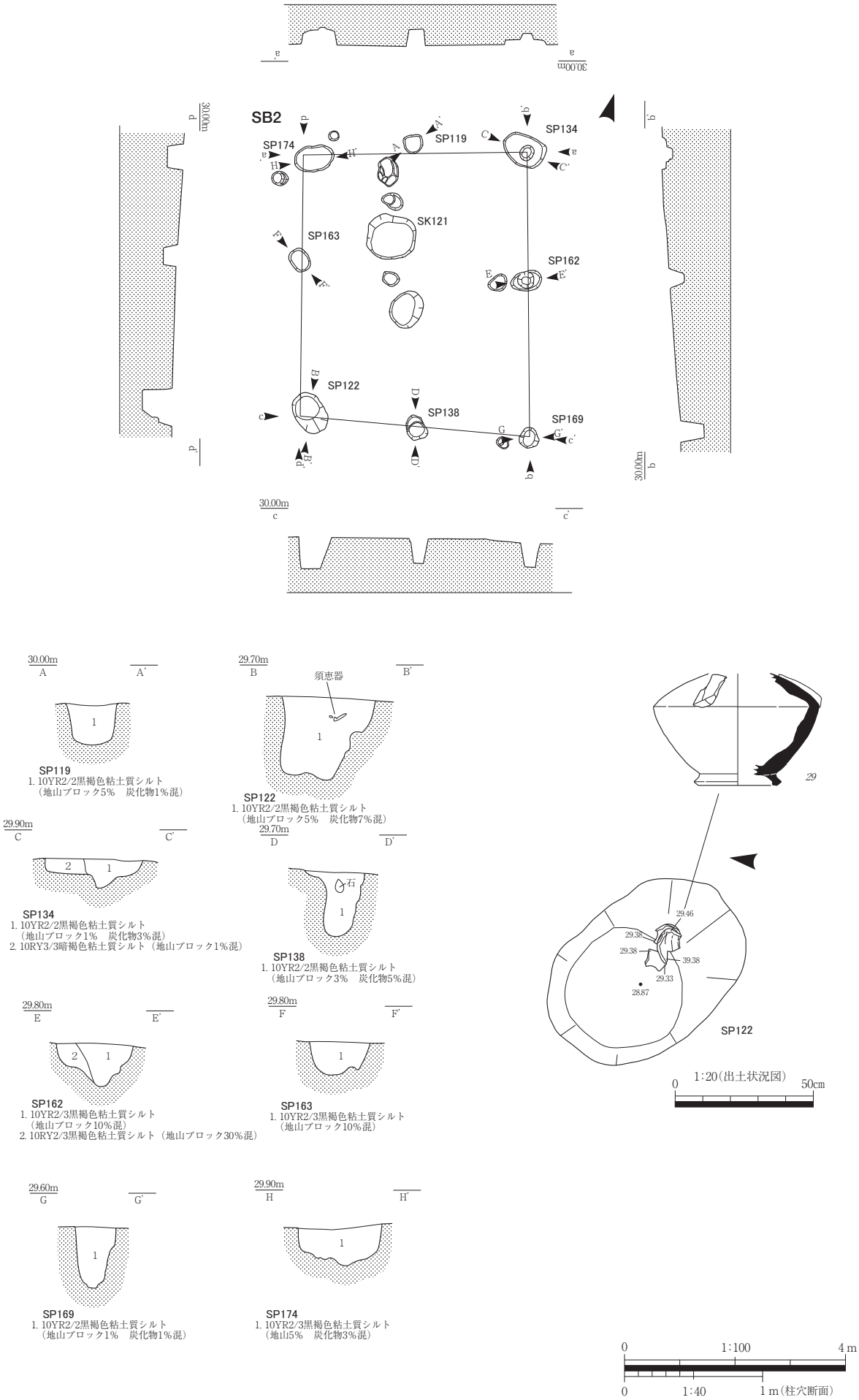


第31図　宇波ウワノ遺跡　遺構実測図

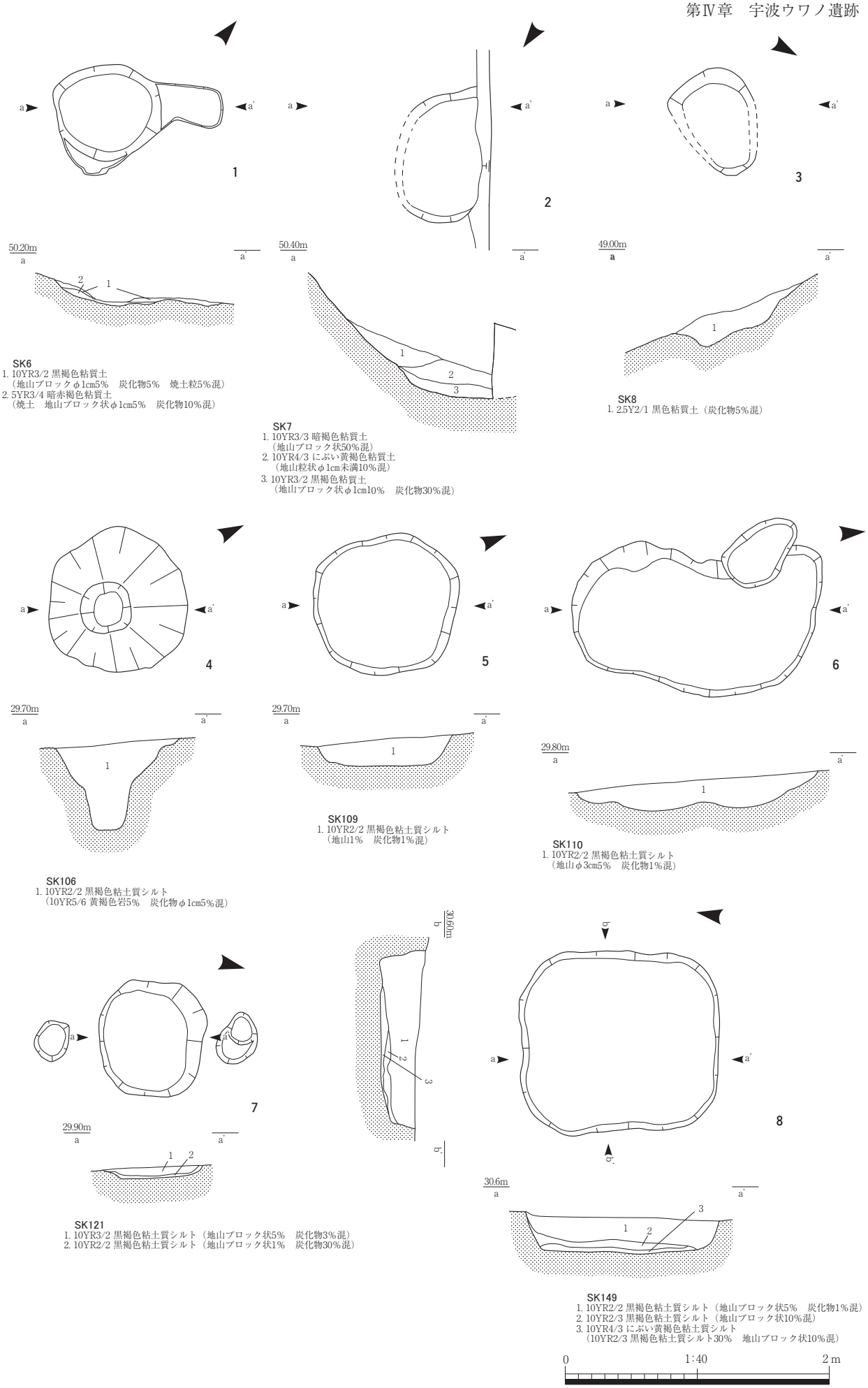
1・2.　3号墳　3・4.　SD144　5.　SD145　6.　SD157



第32図　宇波ウワノ遺跡　遺構実測図
SB1

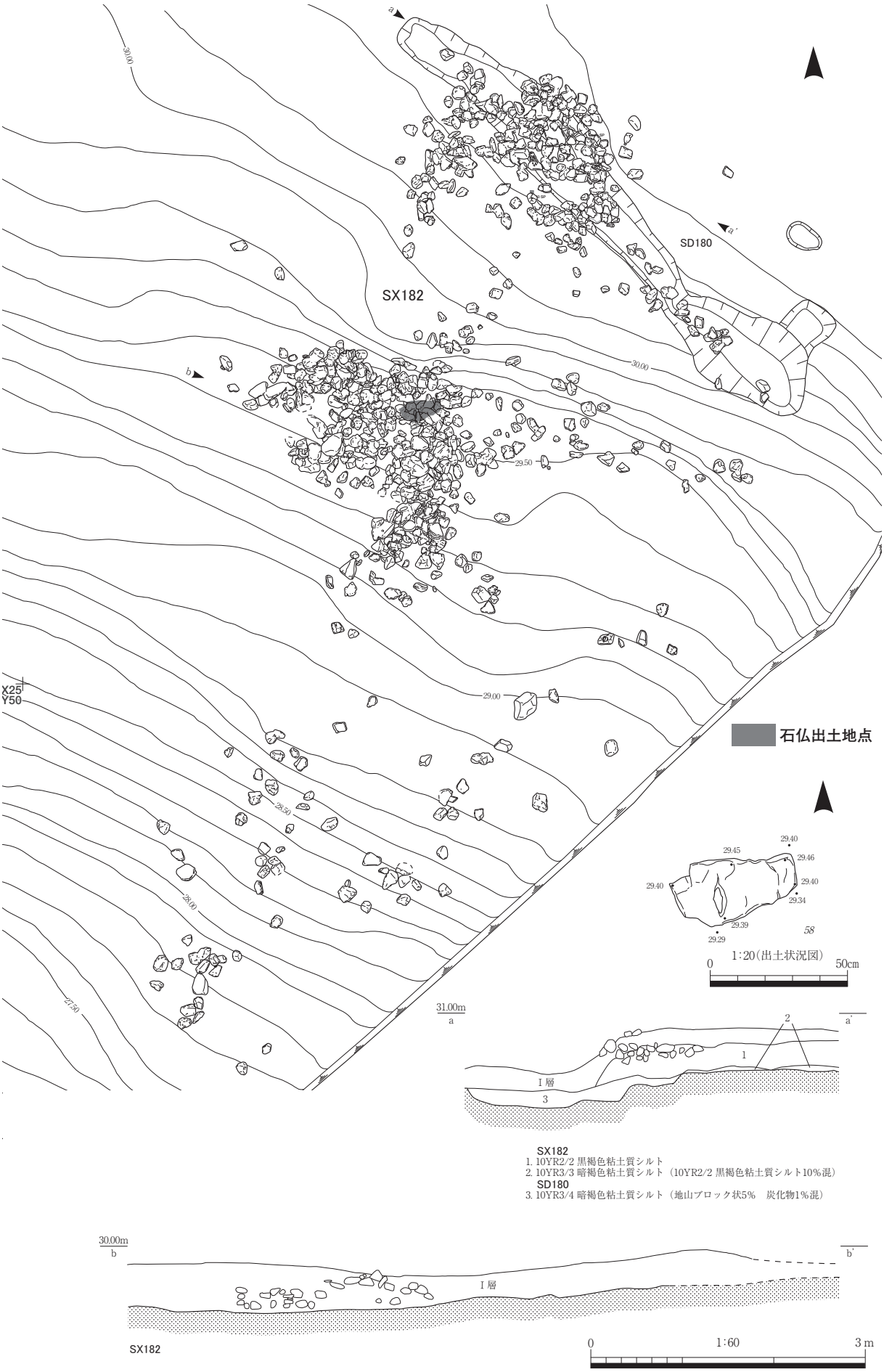


第33図　宇波ウワノ遺跡　遺構実測図
SB2

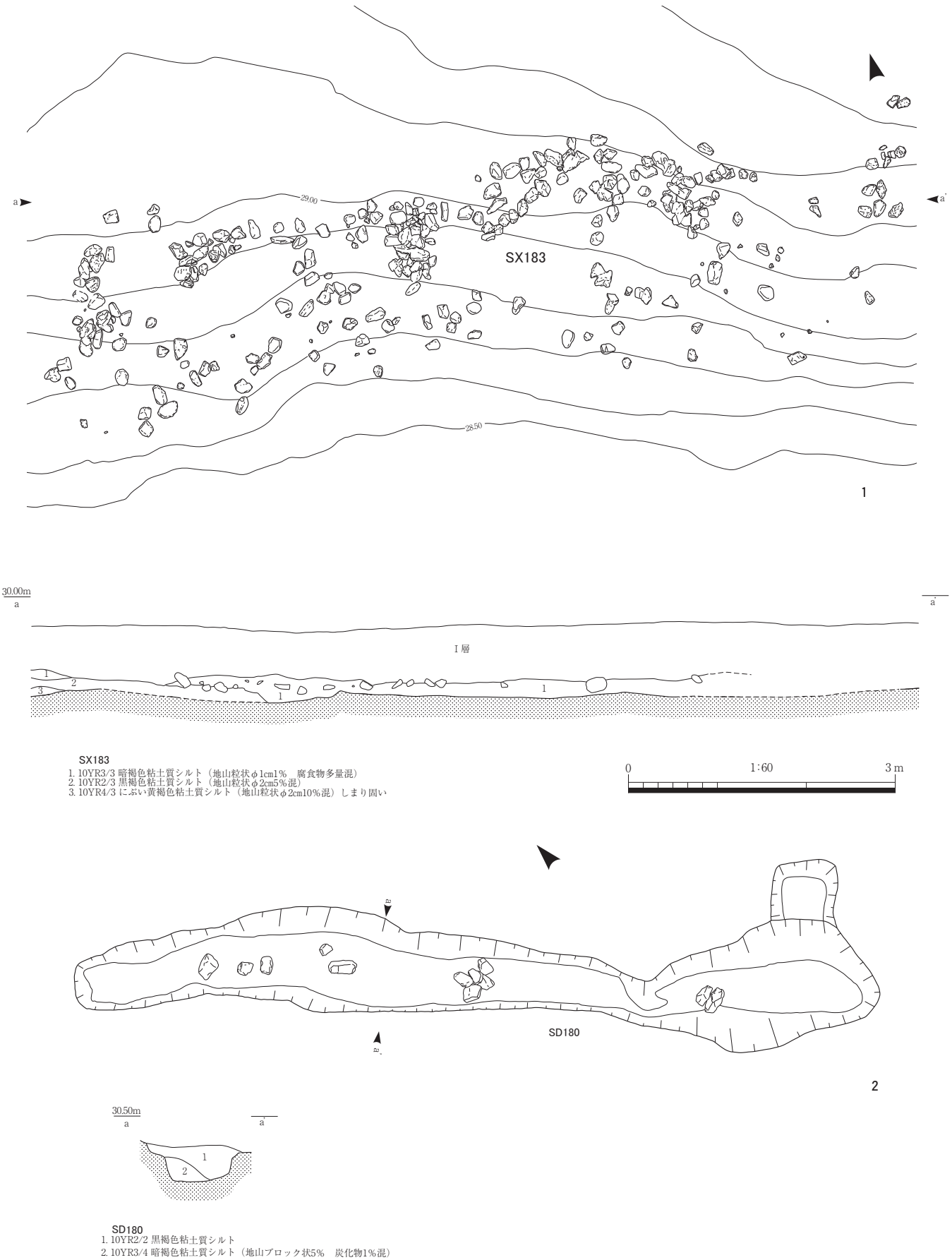


第34図　宇波ウワノ遺跡　遺構実測図

1. SK6　2. SK7　3. SK8　4. SK106　5. SK109　6. SK110　7. SK121　8. SK149

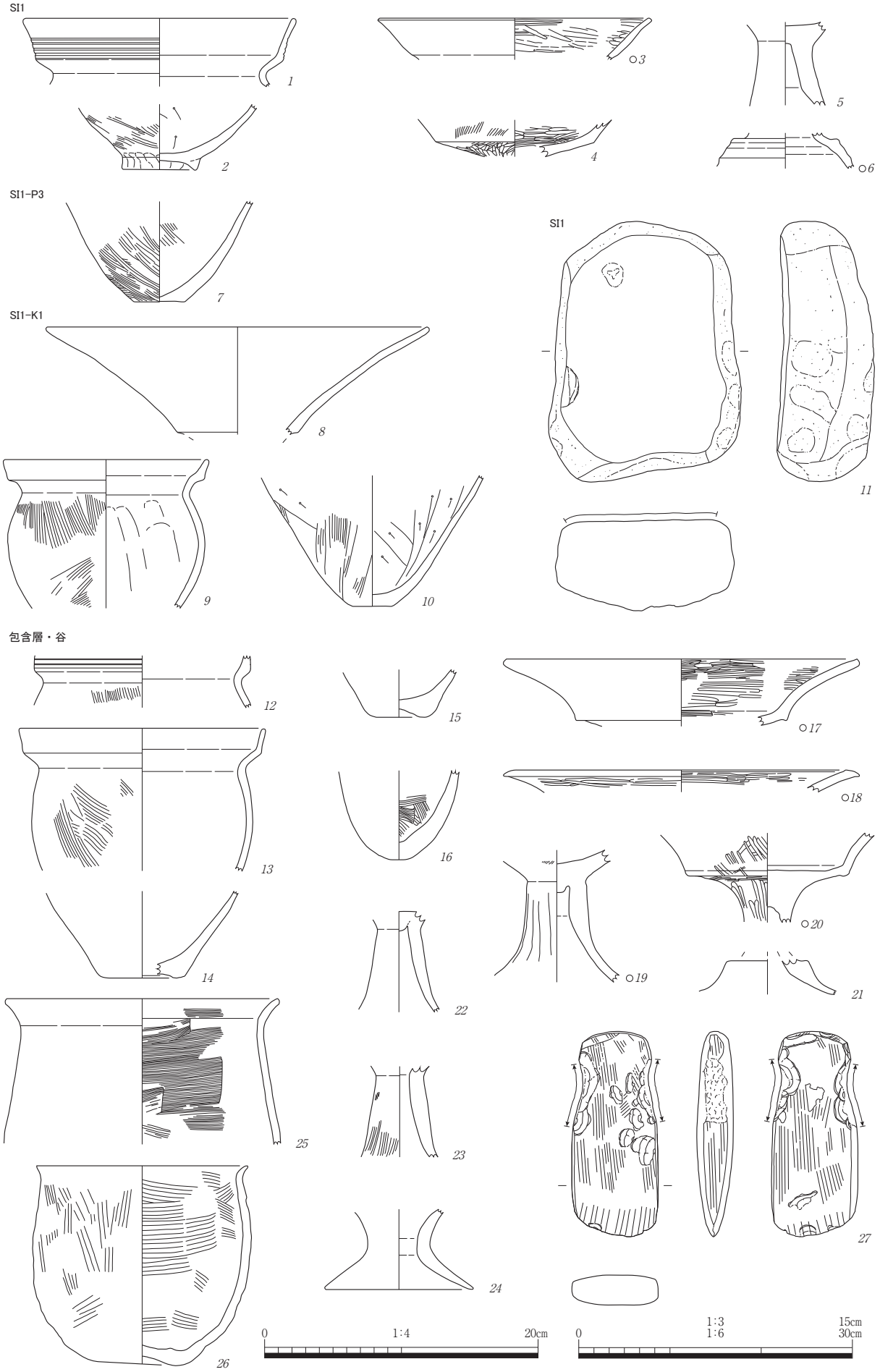


第35図　宇波ウワノ遺跡　遺構実測図
SD180　SX182

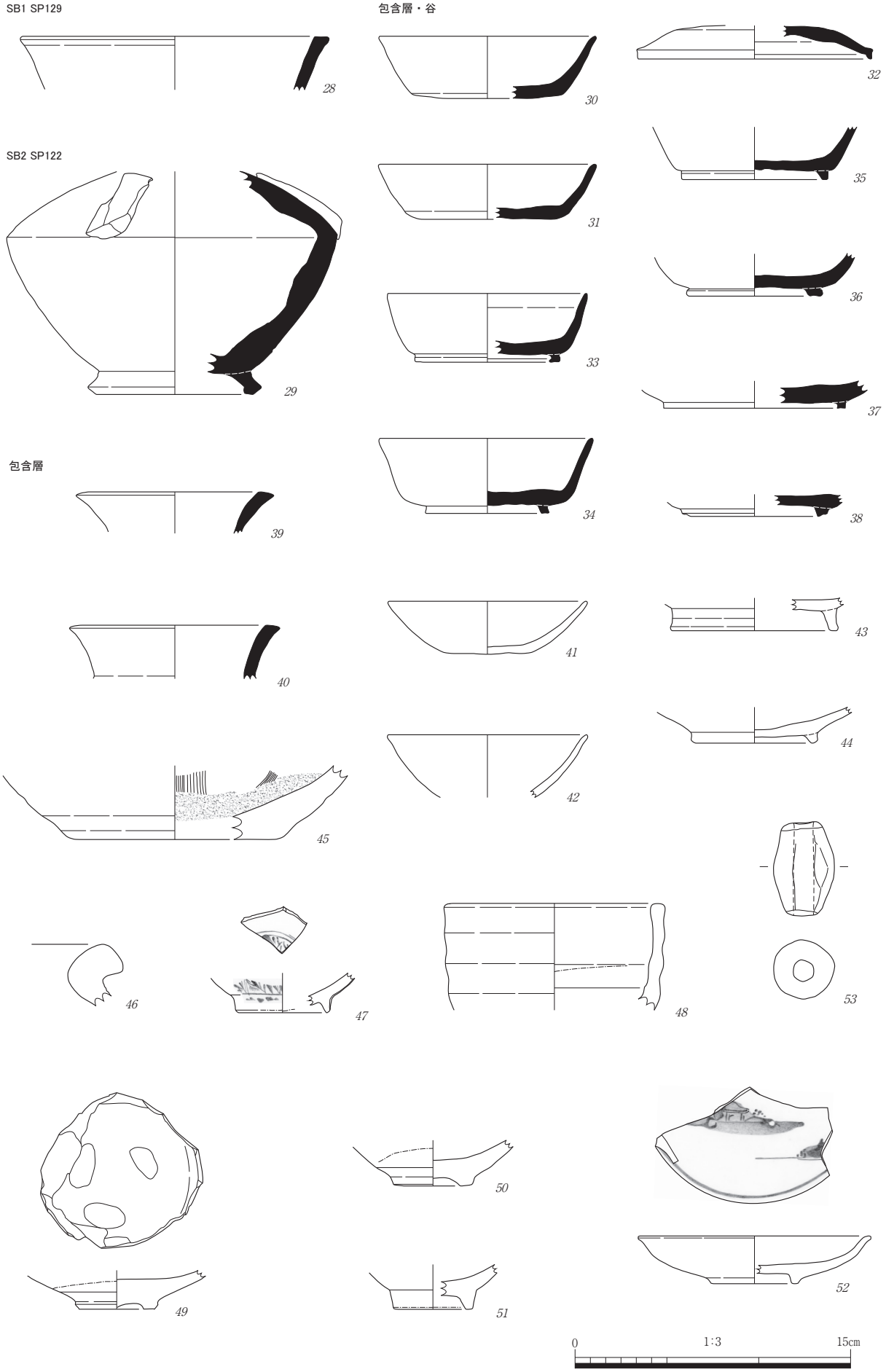


第36図　宇波ウワノ遺跡　遺構実測図

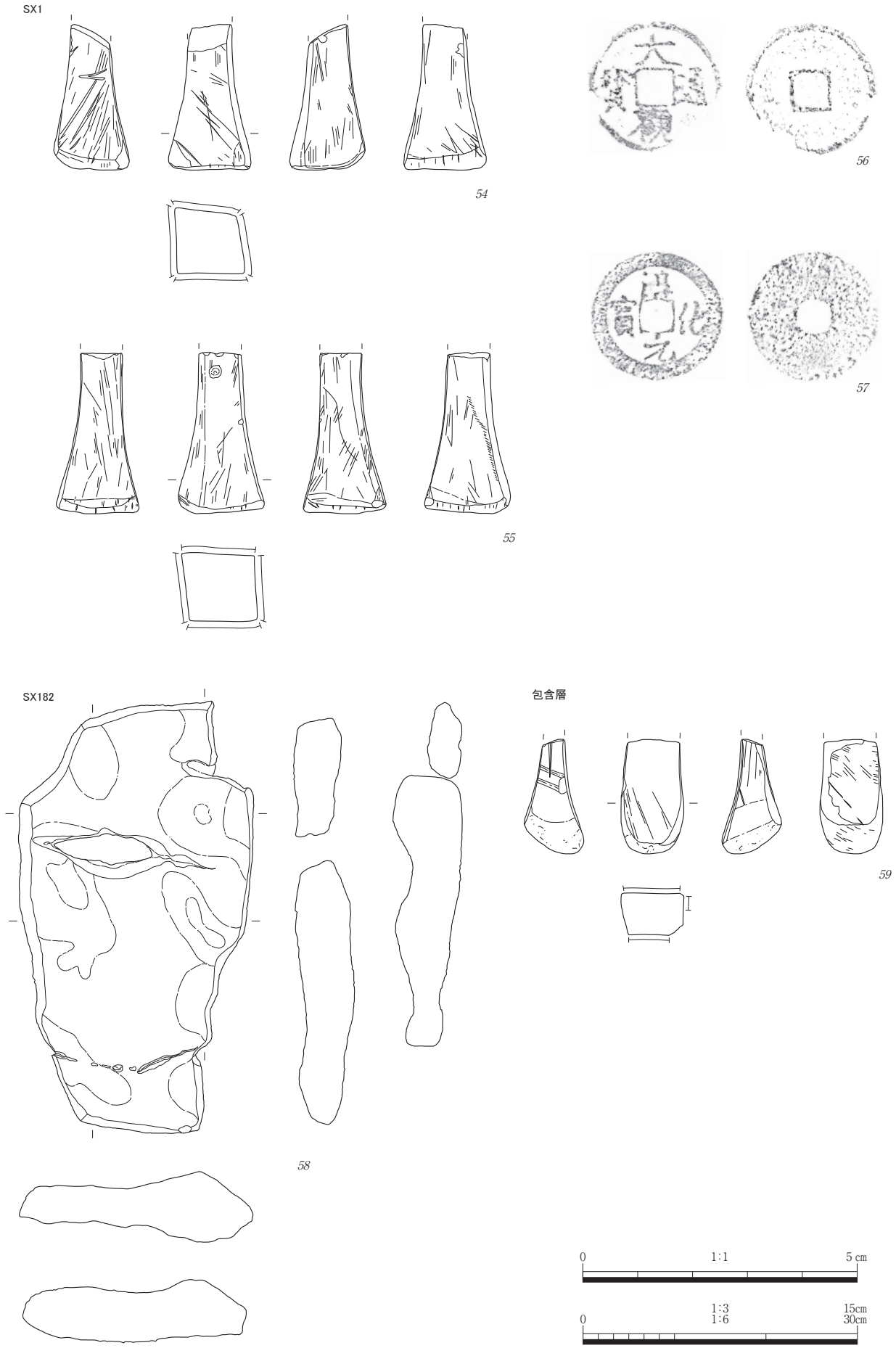
1. SX183　2. SD180



第37図　宇波ウワノ遺跡　遺物実測図（*27*　1/3，*1*～*10*・*12*～*26*　1/4，*11*　1/6）
SI1（*1*～*6*・*11*）　SI1-P3（*7*）　SI1-K1（*8*～*10*）　包含層・谷



第38図　宇波ウワノ遺跡　遺物実測図（1/3）
SB1　SP129（*28*）　SB2　SP122（*29*）　包含層・谷



第39図　宇波ウワノ遺跡　遺物実測図（*56・57*　1/1，*54・55・59*　1/3，*58*　1/6）
SX1（*54～57*）　SX182（*58*）　包含層

4　自然科学分析

（1）放射性炭素年代測定（AMS法）

A　測定対象試料

宇波ウワノ遺跡は，富山県氷見市宇波字上野（北緯36.9204°，東経137.0054°）に所在し，宇波川左岸の丘陵尾根上に立地する。測定対象試料は，A地区の斜面に検出された土坑出土木炭３点である（第９表）。A地区では丘陵頂部に集石があり，石群内からは中世の銅銭と砥石が出土した。一方，斜面に点在し，木炭が出土した土坑については，古代と見られる掘立柱建物との関連が指摘される。

B　測定の意義

木炭が出土した土坑の年代を明らかにする。

C　化学処理工程

①メス・ピンセットを使い，根・土等の付着物を取り除く。

②酸－アルカリ－酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後，超純水で中性になるまで希釈し，乾燥させる。AAA処理における酸処理では，通常１mol/ℓ（１M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い，0.001Mから１Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が１Mに達した時には「AAA」，１M未満の場合は「AaA」と第９表に記載する。

③試料を燃焼させ，二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

④真空ラインで二酸化炭素を精製する。

⑤精製した二酸化炭素を，鉄を触媒として水素で還元し，グラファイト（C）を生成させる。

⑥グラファイトを内径１㎜のカソードにハンドプレス機で詰め，それをホイールにはめ込み，測定装置に装着する。

D　測定方法

加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し，^{14}Cの計数，^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C），^{14}C濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

E　算出方法

①δ^{13}Cは，試料炭素の^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し，基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（第９表）。AMS装置による測定値を用い，表中に「AMS」と注記する。

②^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は，過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され，1950年を基準年（０yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には，Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C年代はδ^{13}Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を第９表に，補正していない値を参考値として第10表に示した。^{14}C年代と誤差は，下１桁を丸めて10年単位で表示される。また，^{14}C年代の誤差（±１σ）は，試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2％であることを意味する。

③pMC（percent Modern Carbon）は，標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。pMCが小さい（^{14}Cが少ない）ほど古い年代を示し，pMCが100以上（^{14}Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値もδ^{13}Cによって補正する必要があるため，補正した値を第９表に，補正していない値を参考値として第10表に示した。

④暦年較正年代とは，年代が既知の試料の^{14}C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ，過去の^{14}C濃度変化などを補正し，実年代に近づけた値である。暦年較正年代は，^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり，１標準偏差（１σ＝68.2％）あるいは２標準偏差（２σ＝95.4％）で表示される。グラフの縦軸が^{14}C年代，横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は，δ^{13}C補正を行い，下１桁を丸めない^{14}C年代値である。なお，較正曲線および較正プログラムは，データの蓄積によって更新される。また，プログラムの種類によっても結果が異なるため，年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは，暦年較正年代の計算に，IntCal13データベース（Reimer et al. 2013）を用い，OxCalv4.2較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については，特定のデータベース，プログラムに依存する点を考慮し，プログラムに入力する値とともに参考値として第10表に示した。暦年較正年代は，^{14}C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

Ｆ　測定結果

測定結果を第９・10表に示す。

宇波ウワノ遺跡出土試料の^{14}C年代は，１が1230±20yrBP，２が1340±20yrBP，３が1180±20yr BPである。暦年較正年代（１σ）は，１が717～865cal ADの間に４つの範囲，２が655～675cal ADの範囲，３が778～887cal ADの間に３つの範囲で示される。これらの試料が出土した土坑は，古代と見られる掘立柱建物との関連が指摘されているが，試料の年代は２が古墳時代終末期頃，１，３が奈良時代から平安時代前半頃に相当する値となった（佐原2005）。

試料の炭素含有率はすべて60％を超える十分な値で，化学処理，測定上の問題は認められない。

なお，本分析の試料は，公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所にて株式会社加速器分析研究所の管理技術者山田しょうが貸与された。その後，同社にて小原圭一らが必要量の試料を採取し，化学処理，測定，算出の作業を行った。本報告は，山田，小原との協議を踏まえ，早瀬亮介が執筆した。

（株式会社加速器分析研究所　早瀬亮介・小原圭一・山田しょう）

第９表　宇波ウワノ遺跡　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C補正値）

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C（‰）（AMS）	δ^{13}C補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC（%）
IAAA-140246	1	宇波ウワノ遺跡土坑（ＳＫ６）	木炭	AAA	－25.29±0.56	1,230±20	85.81±0.25
IAAA-140247	2	宇波ウワノ遺跡土坑（ＳＫ７）	木炭	AAA	－26.22±0.49	1,340±20	84.59±0.25
IAAA-140248	3	宇波ウワノ遺跡土坑（ＳＫ８）	木炭	AAA	－25.86±0.32	1,180±20	86.36±0.24

第10表　宇波ウワノ遺跡　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C未補正値，暦年較正用^{14}C年代，較正年代）

測定番号	δ^{13}C補正なし		暦年較正用(yrBP)	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
	Age(yrBP)	pMC(%)			
IAAA-140246	1,230±20	85.76±0.23	1,229±23	717calAD-743calAD(20.8%) 766calAD-779calAD(10.7%) 791calAD-829calAD(21.4%) 838calAD-865calAD(15.4%)	691calAD-749calAD(31.4%) 762calAD-881calAD(64.0%)
IAAA-140247	1,360±20	84.37±0.23	1,344±23	655calAD-675calAD(68.2%)	645calAD-694calAD(91.2%) 747calAD-763calAD (4.2%)
IAAA-140248	1,190±20	86.20±0.23	1,178±22	778calAD-792calAD(13.0%) 804calAD-842calAD(30.9%) 860calAD-887calAD(24.2%)	772calAD-895calAD(92.3%) 928calAD-940calAD (3.1%)

［参考値］

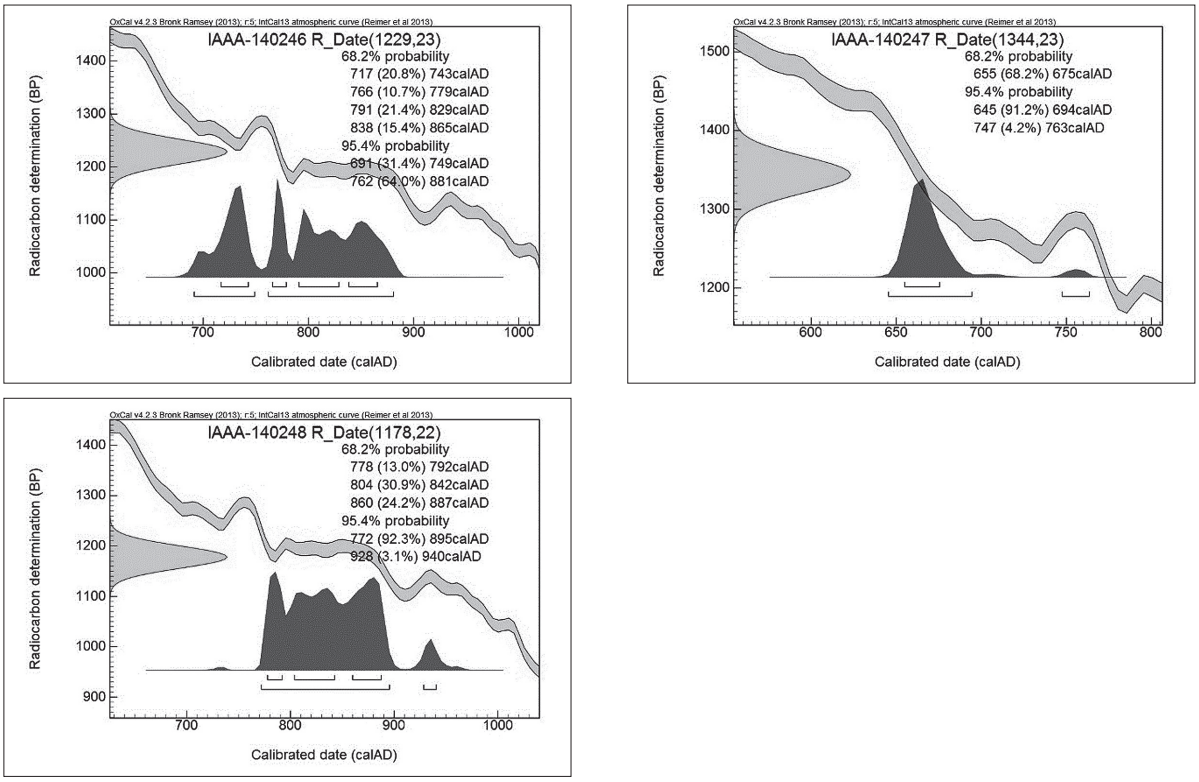
参考文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55(4), 1869-1887

佐原眞 2005 日本考古学・日本歴史学の時代区分, ウェルナー・シュタインハウス監修, 奈良文化財研究所編集, 日本の考古学　上　ドイツ展記念概説, 学生社, 14-19

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363



第40図　宇波ウワノ遺跡　暦年較正年代グラフ（参考）

（２）植物珪酸体分析・花粉分析・樹種同定

A　はじめに

氷見市宇波吉田地内に所在する宇波ウワノ遺跡は，氷見市北部の宇波川左岸の丘陵尾根上の先端部に立地する。平成26年度に実施されたＢ地区の発掘調査では，弥生時代の竪穴建物，古代の掘立柱建物や土坑，中世の集石遺構，土坑，溝が検出されている。

本報告では，弥生時代終末期と推定される竪穴建物と建物内部から検出された貯蔵穴とみられる土坑を対象に，当時の植生・環境を復元するとともに土坑の性格を検討するための基礎資料を得る目的で，花粉分析と植物珪酸体分析を実施することになった。また，古代とみられる土坑から出土した炭化材の樹種同定を行い，当時の木材利用についても検討する。

B　試　料

分析試料は，弥生時代終末期とされる竪穴建物（ＳＩ１）より採取された土壌３点（ＳＩ１：試料№23，ＳＩ１のＢ区炭層：試料№25およびＳＩ１－Ｋ１：試料№26）と，古代とみられる土坑（ＳＫ106）から出土した炭化材（試料№24）１点である。

C　植物珪酸体分析

植物珪酸体は，植物の細胞内に珪酸（SiO_2）が蓄積したもので，植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は，この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり，イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000）。また，イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山，1984）。

a　分析方法

植物珪酸体の抽出と定量は，ガラスビーズ法（藤原，1976）を用いて，次の手順で行った。

１）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
２）試料約１ｇに対し直径約40㎛のガラスビーズを約0.02ｇ添加（0.1mgの精度で秤量）
３）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理
４）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
５）沈底法による20㎛以下の微粒子除去
６）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
７）検鏡・計数

同定は，400倍の偏光顕微鏡（Nikon社製 OPTIPHOT2-POL）下で，おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は，ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に，計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率を乗じて，試料１ｇ中の植物珪酸体個数を求めた。

また，おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重）を乗じて，単位面積で層厚１㎝あたりの植物体生産量を算出した。これにより，各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる（杉山，2000）。タケ亜科については，植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

b　分析結果

1）分類群

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い，その結果を第11表および第41図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

イネ，ウシクサ族Ａ（チガヤ属など）

〔イネ科－タケ亜科〕

チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など），ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など），未分類等

〔イネ科－その他〕

表皮毛起源，棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来），未分類等

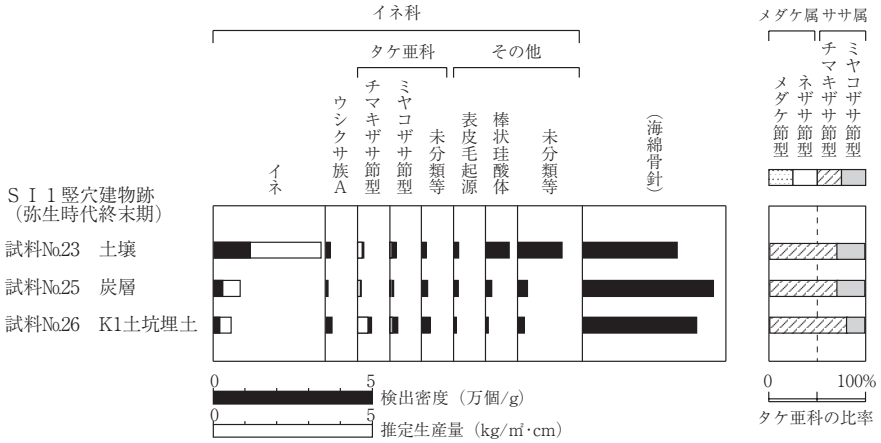
2）植物珪酸体の検出状況

生時代終末期とされるＳＩ１竪穴建物跡の土壌（試料№23），炭層（試料№25）およびＫ１土坑埋土（試料№26）について分析を行った。その結果，すべての試料からイネが検出された。このうち，土壌（試料№23）では密度が11,800個/ｇと高い値であり，稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている5,000個/ｇを上回っている。また，炭層（試料№25）とＫ１土坑埋土（試料№26）では2,900個/ｇおよび1,900個/ｇと比較的低い値である。その他の分類群では，ウシクサ族Ａ，チマキザサ節型，ミヤコザサ節型などが検出されたが，いずれも少量である。おもな分類群の推定生産量によると，土壌（試料23）ではイネが卓越しており，その他の試料でもイネが優勢となっている。なお，これらの試料では海綿動物に由来する海綿骨針（宇津川ほか，1979）が29,600～41,000個/ｇと多量に検出された。

第11表　宇波ウワノ遺跡　植物珪酸体分析結果

検出密度（単位:×100個/ｇ）

分類群	学名	地点・試料 ＳＩ１ 23	25	26
イネ科	Gramineae			
イネ	*Oryza sativa*	118	29	19
イネ籾殻（穎の表皮細胞）	*Oryza sativa*（husk Phytolith）			
ムギ類（穎の表皮細胞）	*Triticum-Hordeum*（husk Phytolith）			
ヨシ属	*Phragmites*			
シバ属型	*Zoysia* type			
キビ族型	Paniceae type			
ウシクサ族A	Andropogoneae A type	13	6	19
Cタイプ	C type			
タケ亜科	Bambusoideae			
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa			
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.	20	12	45
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	20	12	25
未分類等	Others	13	17	25
その他のイネ科	Others			
表皮毛起源	Husk hair origin	13	12	6
棒状珪酸体	Rod-shaped	72	17	6
未分類等	Others	138	29	19
樹木起源	Arboreal			
その他	Others			
（海綿骨針）	Sponge spicules	296	410	357
植物珪酸体総数	Total	408	133	166
おもな分類群の推定生産量（単位：kg/㎡・cm）：試料の仮比重を1.0と仮定して算出				
イネ	*Oryza sativa*	3.48	0.85	0.56
ヨシ属	*Phragmites*			
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa			
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.	0.15	0.09	0.33
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	0.06	0.03	0.08
タケ亜科の比率（%）				
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa			
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.	71	71	81
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	29	29	19
メダケ率	Medake ratio	0	0	0



第41図　宇波ウワノ遺跡　植物珪酸体分析結果

c　植物珪酸体分析から推定される農耕，植生と環境

弥生時代終末期とされるＳＩ１竪穴建物跡では，すべての試料からイネが検出され，とくに土壌（試料№23）では密度が11,800個/ｇと高い値である。竪穴建物跡の試料であることから，ここで検出されたイネについては何らかの形で利用された稲藁に由来する可能性が考えられる。稲藁の利用としては，建物の屋根材や壁材，藁製品および燃料など多様な用途が想定される。

また，各試料から海綿骨針が多量に検出されることから，海綿（スポンジ）が何らかの形で利用されていた可能性が示唆される。海綿の利用としては，塩の流通のために海綿（に含まれる塩）が利用されたことや，建物跡内での海綿（スポンジ）の利用などが想定される。なお，海綿骨針は堆積環境との関係に未解明な部分があることから，珪藻分析を行うなどさらに詳細な検討が必要と考えられる。

D　花粉分析

花粉分析は，一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生･環境の復原に応用されており，遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。しかし花粉などの植物遺体は，水成堆積物では保存状況が良好であるが，乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

a　分析方法

花粉の分離抽出は，中村（1967）の方法をもとに，以下の手順で行った。

1）試料から10ｇを秤量
2）水酸化カリウムによる泥化
3）水洗処理後，0.5㎜の篩で礫などの大きな粒子を除去
4）重液（臭化亜鉛，比重2.3）による有機物の分離
5）25％フッ化水素酸溶液による鉱物質の除去
6）水洗処理の後，氷酢酸によって脱水し，アセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１のエルドマン氏液を加え１分間湯煎）による植物遺体中のセルロースの分解
7）再び氷酢酸を加えて水洗処理
8）沈渣をグリセリンゼリーで封入してプレパラート作製
9）検鏡・計数

検鏡は，生物顕微鏡（Nikon社製 ECLIPSE E600）によって400倍で行った。花粉の分類は同定レベルによって，科，亜科，属，亜属，節および種の階級で分類し，複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。同定分類には所有の現生花粉標本，島倉（1973），中村（1980），三好ほか（2011）を参照して行った。

b　分析結果

出現した分類群は，樹木花粉７，草本花粉４，不明１，シダ植物胞子２形態の計14である。これらの学名と和名および粒数を第12表に示し，主要な分類群は顕微鏡写真に示した。なお，残渣中には微細な炭化植物片（微粒炭）が認められ，とくにＳＩ１のＢ区炭層で多い傾向がある。微粒炭の多くは母材の推定が難しい不明型であったが，ＳＩ１およびＳＩ１のＢ区炭層では壁孔などの木材組織を有するタイプがわずかに認められた。

〔樹木花粉〕

ツガ属，マツ属，サワグルミ属，ハンノキ属，コナラ属コナラ亜属，コナラ属アカガシ亜属，ニレ属－ケヤキ属

〔草本花粉〕

イネ科，ナデシコ科，ヨモギ属，タンポポ亜科

〔シダ類胞子〕

イノモトソウ属，その他シダ類胞子

c　花粉分析から推定される農耕，土地利用，植生と環境

竪穴建物（ＳＩ１）の埋土および貯蔵穴（ＳＩ１－Ｋ１）の埋土より採取された土壌は，いずれの試料も花粉化石が少なく，古植生推定のための定量解析には至らなかった。一般的に堆積土壌が常に酸化状態にあるような場合，花粉は酸化や土壌微生物によって分解・消失するとされている（中村，1967；三宅・中越，1998など）。今回の場合，遺跡の立地から当時の地表面や遺構埋積物（埋土）の由来となった堆積物などは好気的環境下に曝されていたと思われ，経年変化などの影響により花粉やシダ類胞子の多くが分解・消失した可能性が考えられる。

第12表　宇波ウワノ遺跡　花粉分析結果

分類群		ＳＩ１		
学名	和名	23	25	26
Arboreal pollen	樹木花粉			
Tsuga	ツガ属	1	－	－
Pinus subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	－	－	1
Pterocarya	サワグルミ属	1	－	－
Alnus	ハンノキ属	1	－	－
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属	1	－	－
Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属	1	－	2
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属－ケヤキ属	2	－	－
Nonarboreal pollen	草本花粉			
Gramineae	イネ科	15	3	3
Caryophyllaceae	ナデシコ科	1	－	－
Artemisia	ヨモギ属	1	－	1
Lactucoideae	タンポポ亜科	－	1	－
Fern spore	シダ類胞子			
Pteris	イノモトソウ属	2	－	－
Others	他のシダ類胞子	15	3	2
Arboreal pollen	樹木花粉	7	0	3
Nonarboreal pollen	草本花粉	17	4	4
Unknown pollen	不明花粉	0	0	2
Fern spore	シダ類胞子	17	3	2
Total	合計（不明を除く）	41	7	9

なお，わずかに検出された花粉化石についてみると，樹木類では，ツガ属，マツ属，サワグルミ属，ハンノキ属，コナラ属コナラ亜属，コナラ属アカガシ亜属，ニレ属－ケヤキ属などが，草本類ではイネ科，ナデシコ科，ヨモギ属，タンポポ亜科などが確認された。これらの分類群は，本遺跡に隣接する宇波西遺跡の古墳時代～中世の自然流路や弥生時代末～古墳時代の集水を目的とした遺構の埋積物などの花粉群集組成でも認められている（パリノ・サーヴェイ株式会社，2014）。これらを参考にすると，ツガ属やマツ属，コナラ亜属，アカガシ亜属などは周辺の山地や丘陵などに分布する森林や二次林，サワグルミ属，ハンノキ属，ニレ属－ケヤキ属などは宇波川などの河川沿いに分布した林分などに由来すると考えられる。また，イネ科，ナデシコ科，ヨモギ属，タンポポ亜科などは竪穴建物周辺に分布した草地などに由来すると考えられる。

E　樹種同定

木材は，セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり，解剖学的形質から，概ね属レベルの同定が可能である。木材は，花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから，比較的近隣の森林植生の推定が可能である。

a　方　法

樹種同定の方法は，次のとおりである。まず，試料を割り折りして新鮮な横断面（木口と同義），放射断面（柾目と同義），接線断面（板目と同義）の基本三断面を作製した。同定は，落射顕微鏡（Nikon社製CM-10L）によって50～1000倍で観察し，解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

b　結　果

第13表に結果を示し，主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

第13表　宇波ウワノ遺跡　樹種同定結果

試料№	台帳番号	出土地点	時代	結果（学名／和名）	木取り
24	D140009	ＳＫ106	古代？	*Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc.カツラ	丸太状の一部

・カツラ　*Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc.　カツラ科

小型で薄壁の角張った道管が，単独ないし２～３個複合してかなり密に散在する散孔材である。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で，階段の数は20～40本ほどである。放射組織は異性である。道管内にチロースが多数存在する。放射組織は，異性放射組織型で，２細胞幅である。

以上の特徴よりカツラに同定される。カツラは北海道，本州，四国，九州に分布する。落葉高木で，通常高さ15～20m，径50～60㎝であるが，大きいものは高さ35m，径２mに達する。材は軽軟で靱性があり加工しやすく，建築材などに用いられる。

c　所　見

同定の結果，土坑（ＳＫ106）出土の炭化材，カツラであった。カツラは軽軟均質で，耐朽性・保存性は低いが，切削・加工が極めて容易である。渓流や水湿のある谷間等に生育する。カツラの出土例は比較的少ないが，富山県では桜町遺跡から出土している。また，板材や角材などの加工材が古くには見られるが，中世以降になると下駄や椀などの製品としての利用が見られるようになる。

F　まとめ

弥生時代終末期とされる竪穴建物（ＳＩ１）では，すべての試料からイネの植物珪酸体が検出され，稲藁が何らかの形で利用されていた可能性が認められた。稲藁の利用としては，建物の屋根材や壁材，藁製品および燃料など多様な用途が想定される。また，各試料から海綿骨針が多量に検出され，海綿（スポンジ）が何らかの形で利用されていた可能性も認められた。

なお，竪穴建物（ＳＩ１）より採取された土壌は，いずれも花粉化石が少なく古植生を推定するには至らなかった。隣接する宇波西遺跡の花粉分析結果を参考にすると，周辺の山地や丘陵などにツガ属やマツ属，コナラ亜属，アカガシ亜属などが森林や二次林として分布し，宇波川などの河川沿いにはサワグルミ属，ハンノキ属，ニレ属－ケヤキ属などが分布していたと考えられた。また，イネ科，ナデシコ科，ヨモギ属，タンポポ亜科などは竪穴建物周辺に分布していたと考えられた。

土坑（ＳＫ106）より出土した炭化材はカツラであった。カツラは，中世以降に下駄や椀などの製品として利用されるようになる。

（株式会社古環境研究所　杉山真二・松田隆二・金原正子）

文献

伊東隆夫・山田昌久（2012）木の考古学，雄山閣，p.449.
宇津川徹・細野衛・杉原重夫（1979）テフラ中の動物珪酸体 "Opal Sponge Spicules" について．ペドロジスト，23(2)，p.134-144.
小矢部市教育委員会（1987）富山県小矢部市　桜町遺跡県道改良工事に伴う雀谷地区の調査，小矢部市埋蔵文化財調査報告書第21冊.
佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49-100.
島倉巳三郎，1973，日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録　第５集，60p.
島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，296p.
杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p.189-213.
杉山真二・藤原宏志（1986）機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－．考古学と自然科学，19，p.69-84.
中村　純（1967）花粉分析．古今書院，232p.
中村　純（1980）日本産花粉の標徴　ＩＩ（図版）．大阪市立自然史博物館収蔵資料目録　第12，13集，91p.
パリノ・サーヴェイ株式会社（2014）宇波西遺跡の自然科学分析．稲積天坂遺跡・稲積天坂北遺跡・稲積オオヤチ南遺跡・宇波西遺跡発掘調査報告－能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告ＸＩＶ－，公益財団法人富山県文化振興財団・埋蔵文化財調査事務所，p.275-288.
藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）－数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，９，p.15-29.
藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5) －プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学，17，p.73-85.
三宅　尚・中越信和，1998，森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態．植生史研究，６，p.15-30.
三好教夫・藤木利之・木村裕子，2011，日本産花粉図鑑．北海道大学出版会，824p.

写真１　宇波ウワノ遺跡の植物珪酸体（プラント・オパール）

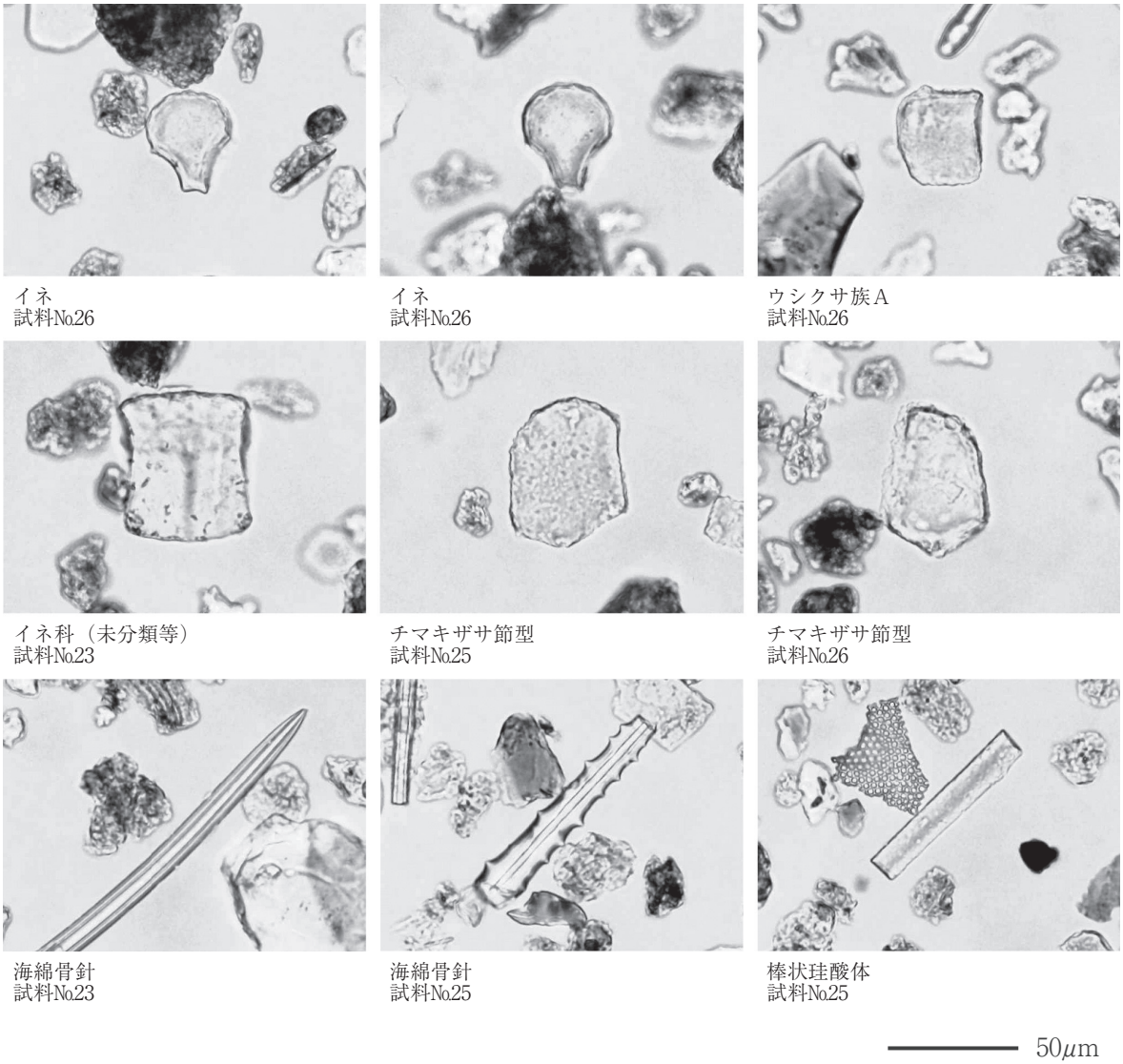
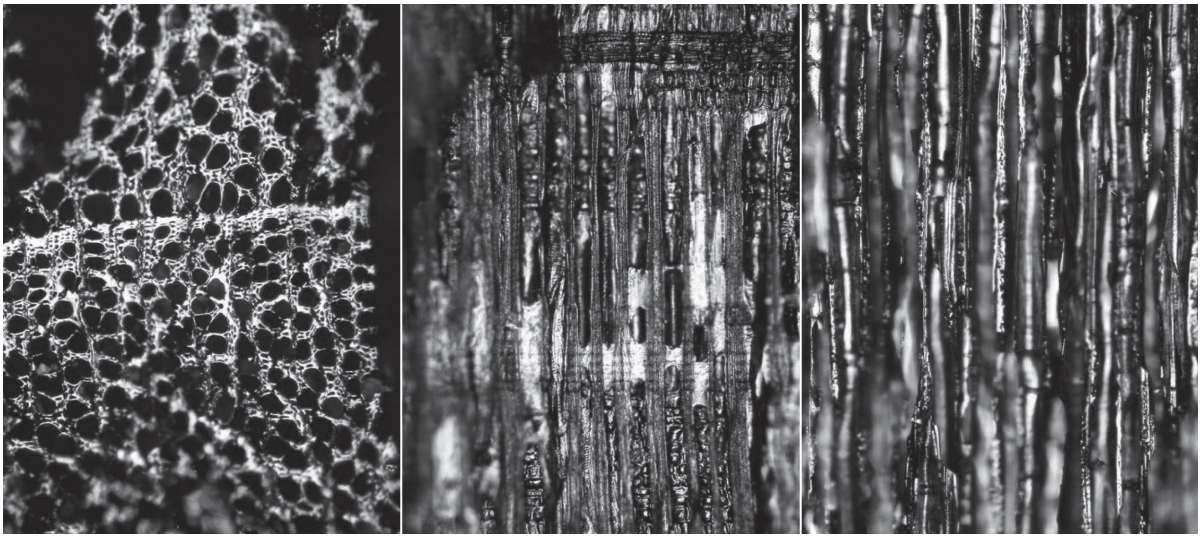


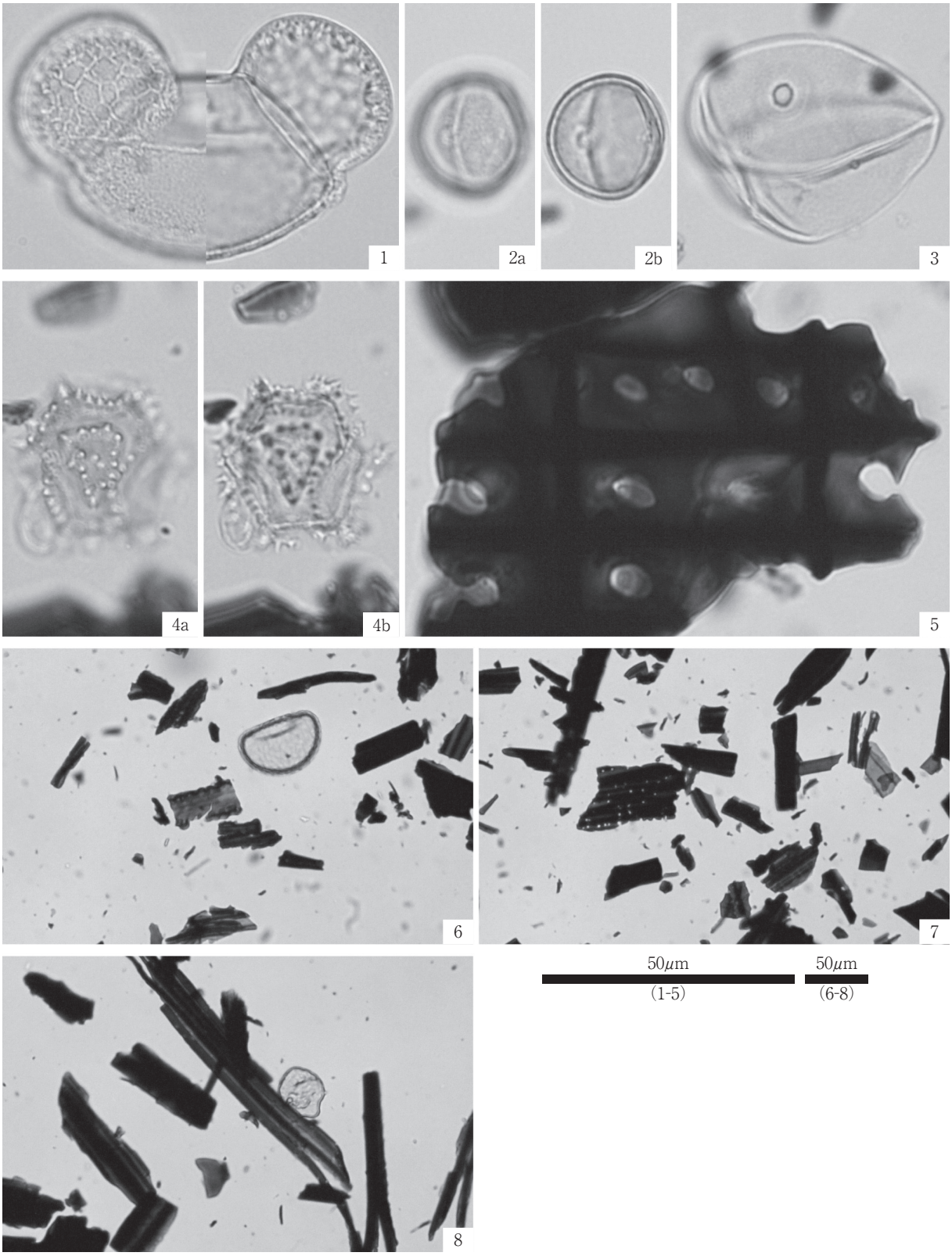
写真２　宇波ウワノ遺跡の炭化材



横断面　0.1mm　放射断面　0.1mm　接線断面　0.1mm

試料No.24 カツラ　D140009 SK106

写真 3　宇波ウワノ遺跡の花粉



1. マツ属（ＳＩ１－Ｋ１；試料№26）　2. コナラ属アカガシ亜属（ＳＩ１－Ｋ１；試料№26）
3. イネ科（ＳＩ１；試料№23）　4. タンポポ亜科（ＳＩ１；試料№23）
5. 微粒炭（木本由来）（ＳＩ１；試料№23）　6. プレパラート内の状況（ＳＩ１；試料№23）
7. プレパラート内の状況（ＳＩ１ Ｂ区炭層；試料№25）
8. プレパラート内の状況（ＳＩ１－Ｋ１；試料№26）

5　総　括

宇波ウワノ遺跡は，山地から派生した舌状の低丘陵に立地し，当初は頂部から尾根伝いに古墳が群集すると考えられていたが，調査の結果，予想されていなかった弥生時代，古代・中世の遺構が検出された。古墳については，確実ではないがその一部である可能性を残す墳丘状の地形を確認した。ここでは，時代ごとに調査成果と今後の課題をまとめ，総括としたい。

（1）弥生時代

検出した竪穴建物は終末期と推定される１棟（ＳＩ１）で，貯蔵穴をもち，出土遺物は日常生活に使用されたとみられるごく一般的な土器・石製品であることから，住居として使用された建物と考えられる。標高約31mの尾根上にあり，平野部との比高差は約16mだが，丘陵先端部の傾斜は緩やかなので登り下りにさほど労を要しない。隣接して谷底平野に広がる宇波西遺跡では，弥生時代終末期～古墳時代初頭の土器が出土した自然流路や集水施設と考えられる木組遺構が検出されているが（島田2014），建物は確認されておらず，小高い場所に住居を構えた人々が川べりに下りてきて自然河川の水を利用していた状況が想像される。

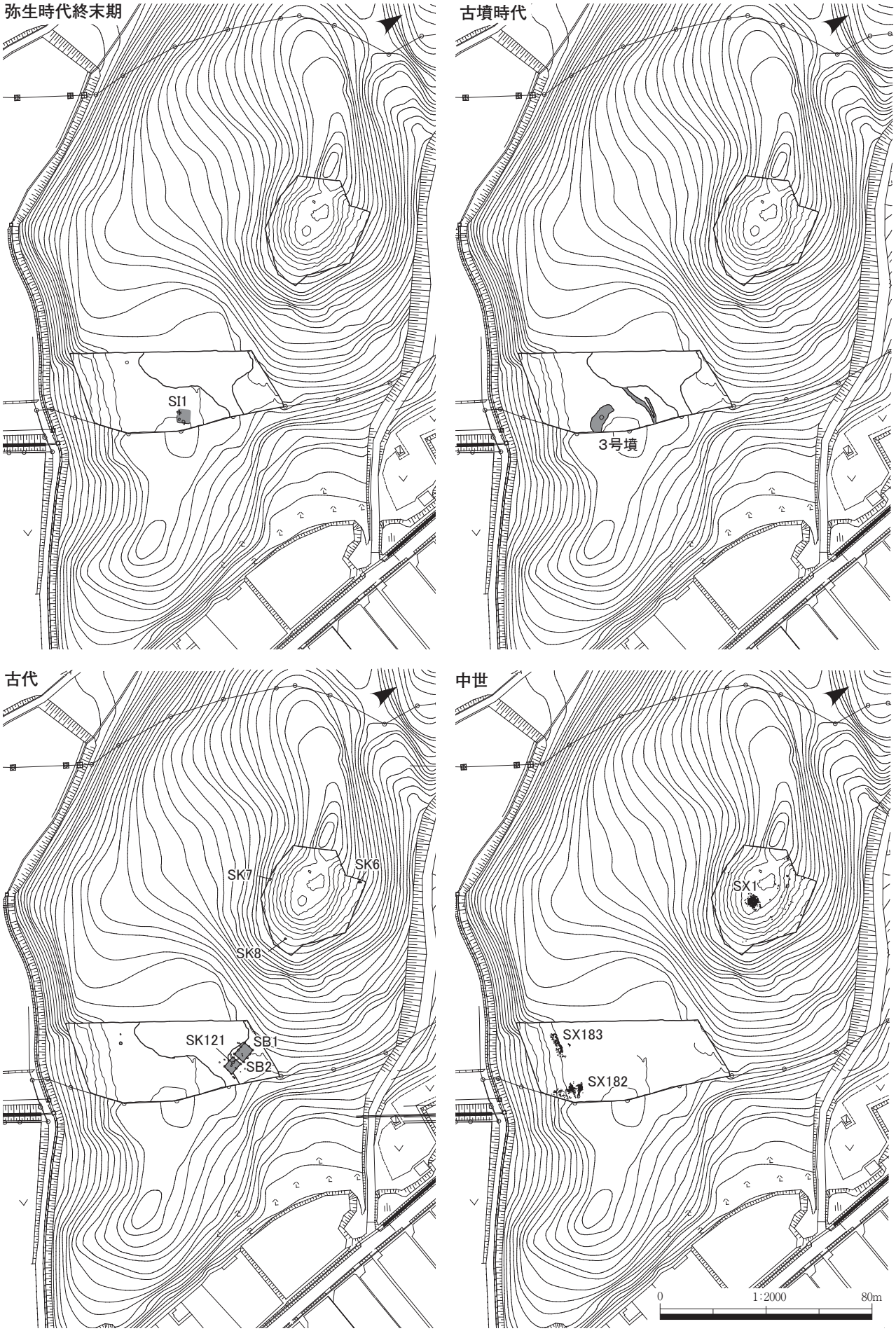
現在のところ宇波川流域の平野部では宇波西遺跡以外に弥生時代の遺跡が確認されておらず，近辺では海岸沿いに大境洞窟遺跡，大境エンニャマ洞窟遺跡が知られるのみである。宇波ウワノ遺跡の建物の土壌試料を対象とした植物珪酸体分析ではイネの植物珪酸体が検出され，弥生時代終末期という時代を考えても，生活基盤は水稲耕作におかれていたと推測される。今回の調査区内で検出した建物は１棟のみであるが，周辺の内陸部においては，丘陵上に生産共同体となる小集落を形成し，麓の平野部で水田経営を行った可能性が考えられる。

宇波川流域以外についてみると，氷見市内の丘陵上に立地する弥生時代の遺跡は，上庄川流域に小久米Ａ遺跡（終末期），鞍川横羽毛遺跡（後期～古墳時代前期頃），沖布Ａ遺跡（弥生時代～古代）があり，これらはいずれも丘陵先端部の標高20～40m付近に立地する（氷見市史2002）。発掘調査が実施された小久米Ａ遺跡では，狭い谷底平野に面した標高30～40m，比高差20mの丘陵先端部に弥生時代終末期の竪穴建物が４棟確認されており（氷見市教育委員会1985），宇波ウワノ遺跡と時期及び立地が共通する。

富山県内の弥生時代の集落遺跡は，主に扇状地扇端部等の低地に立地するが，後期以降に台地や丘陵上にも進出し，終末期には標高100mを超える丘陵頂部に「高地性集落」がみられるようになるとされる（町田2008）。北陸の「高地性集落」については麻柄一志氏が，軍事的防御機能をもつとは確定し得ない比高40m以下の丘陵上の集落跡を「低丘陵上集落」と呼び分け，弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけて北陸が軍事的緊張状態にあったとの仮説の上に，「低丘陵上集落」もそのような時代背景を受けて成立した集落である可能性もあるが「一概にその性格を特定することは困難」としている（麻柄1983）。小久米Ａ遺跡の報告ではこうした時代背景が同遺跡の立地にかかわったとの見方が示されているが，同遺跡や宇波ウワノ遺跡のように狭隘な谷底平野に面する低丘陵に立地する集落遺跡の場合，生産域の拡大や，河川の氾濫からの回避等，集落域の選定には他の要因も考えられよう。

（2）古墳時代

調査前の知見として，第Ｉ章に記したように宇波ウワノ遺跡では３基の古墳があると推定されてい



第42図　宇波ウワノ遺跡　主要遺構変遷図

たが，今回の調査では，２号墳とされていたＡ地区の墳丘状の地形は古墳ではないと結論づけられ，３号墳は墳丘状の地形と周溝状の溝が確認されたものの盛土や埋葬施設が確認できず，半分は調査区外にあたるため，円墳または方墳の可能性を残すものの古墳とは断定できないという調査結果となった。今回の調査対象範囲から外れた３号墳の東半部分と丘陵先端に近い地点にある１号墳の全容解明は今後の調査に委ねられる。

（３）古代

古代の主要な遺構は，掘立柱建物２棟（ＳＢ１・２）と，埋土に多量の炭化物を含み壁面や底面に焼土の形成が認められた土坑４基（ＳＫ６～８・121）である。ここではこの４基の土坑を「焼土坑」と呼称する。建物と焼土坑のひとつであるＳＫ121は丘陵頂部から下る急斜面の直下，Ｂ地区の平坦面に立地し，焼土坑ＳＫ６～８は丘陵頂部より少し下った斜面，Ａ地区の３方の端で確認された。Ａ地区の調査対象範囲は古墳と推定されていた丘陵頂部の調査を主目的として設定されており，同様の焼土坑が調査区外に存在した可能性も考えられる。

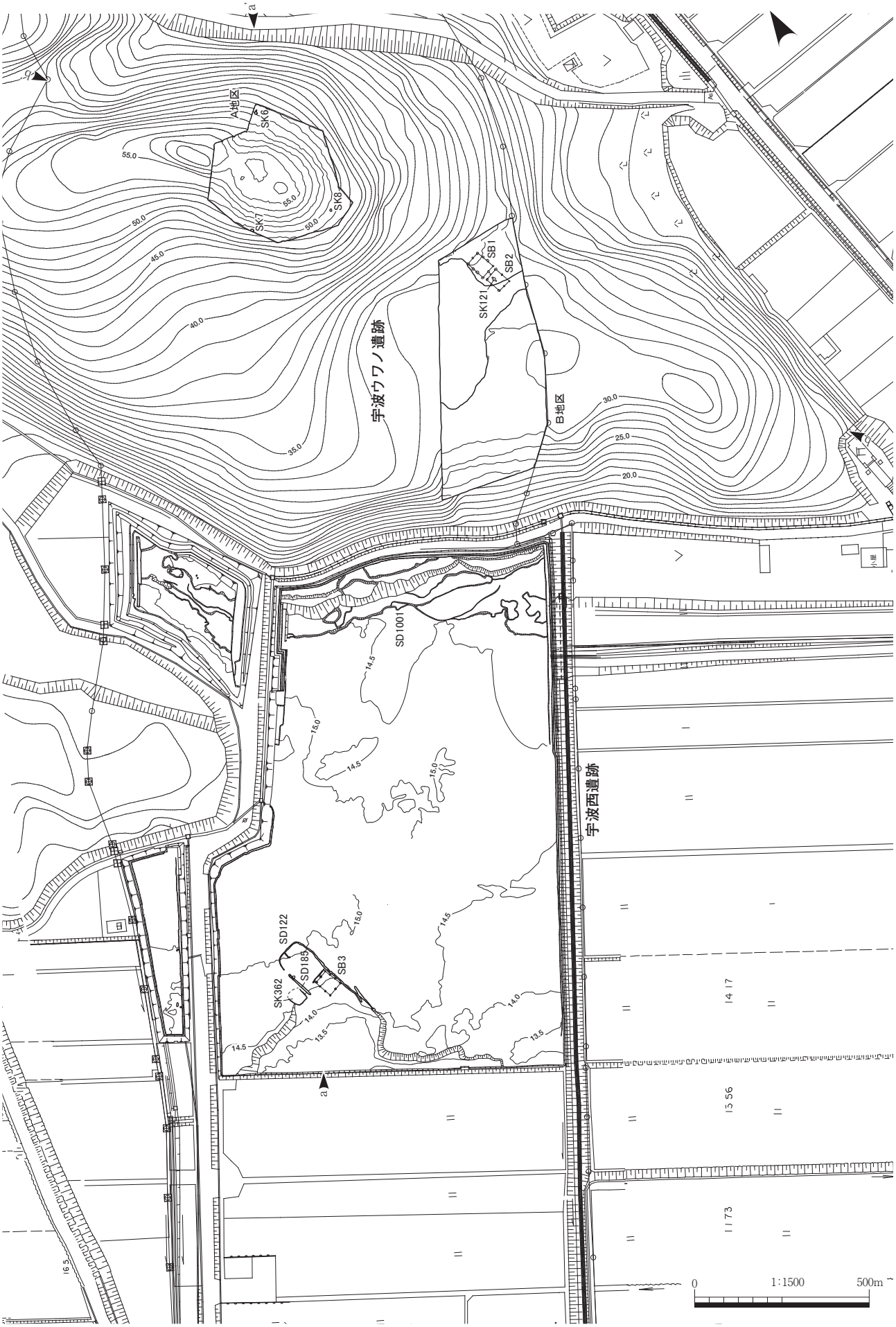
４基の焼土坑では火を使用した形跡が明らかであるが，ＳＫ６～８は斜面に位置し，平面形は楕円または不整楕円で底面には凹凸があり無造作に掘り窪められたようにみえるのに対し，ＳＫ121は尾根上の平坦面の建物付近に位置し，平面形は隅丸方形で底面は平坦に成形されている。このような立地と形態の違いから，ＳＫ６～８は一時的な使用に，ＳＫ121はＳＢ１またはＳＢ２に付随する恒常的な施設とすることを前提に構築されたと推測される。

建物の時期は８世紀中頃～後半で，主軸方向が同じではあるものの近接することからあまり時期を隔てず前後するものと考えられる。土器は建物付近から谷部にかけて多く出土しており，須恵器は供膳具・貯蔵具ともに多いことから建物が生活に使用されたことが窺える（第45図）。ＳＫ６～８は出土炭化物の放射性炭素の暦年較正年代が７～９世紀の範囲にあるが，立地と形状が似ていることから同様の時期・性格の可能性があり，建物と同時期の遺構ではないかと考えられる。また，宇波ウワノ遺跡に隣接する平野部の宇波西遺跡では，３小期に細分される古代の遺構が検出されており（島田2014），このうち掘立柱建物１棟，「コ」字状にめぐる溝１条，方形の土坑１基で構成されるⅡｃ期（８世紀前半～後半）の遺構が宇波ウワノ遺跡の建物や焼土坑と同時期の可能性が高い（第43図）。

平野部の集落跡としては，宇波川流域では宇波西遺跡の他には確認されていないが，宇波は越中国射水郡の十郷のひとつ宇納郷の遺称地と推定されており（氷見市史1963），同遺跡もその一部であった可能性が高い。南側の丘陵を隔てた阿尾川の河口付近には，有力農民の拠点集落とされる８世紀前半～中頃の阿尾島尾Ａ遺跡，８世紀後半～９世紀初頭の阿尾島田Ａ遺跡（氷見市教育委員会1996）がある。阿尾島尾Ａ遺跡では，倉庫を含む建物群や横板井籠組の井戸等が検出され円面硯や墨書土器が出土しており（氷見市史2002），宇波や阿尾周辺は律令国家の地方行政の管理下で開発が進んでいたものとみられる。

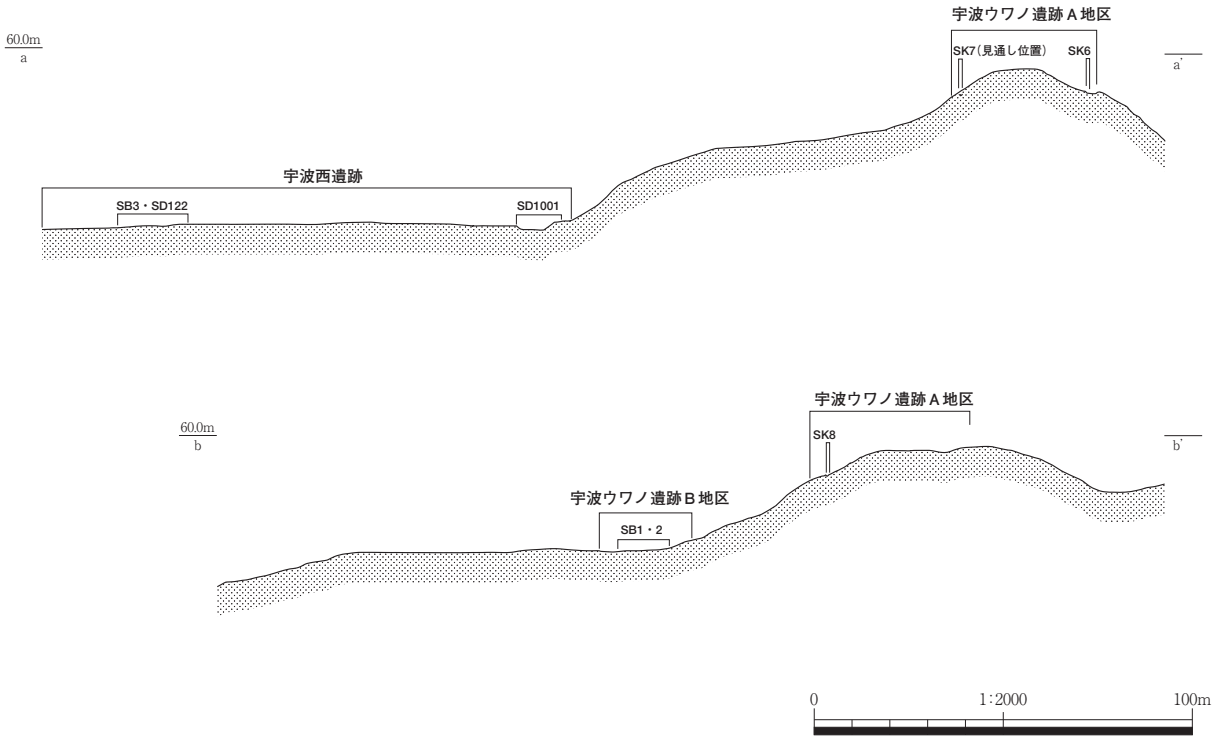
宇波ウワノ遺跡と宇波西遺跡の標高についてみると（第44図），Ａ地区の３基の焼土坑は約49～50ｍにあり，丘陵頂部から約６～７ｍ下に位置する。Ｂ地区の建物と焼土坑は約29～30ｍにあり，Ａ地区の焼土坑とは約20ｍの標高差がある。平野部の宇波西遺跡の遺構は約15ｍにあり，さらに15ｍの標高差がある。宇波西遺跡の建物がある位置からは宇波ウワノ遺跡の建物と焼土坑のある丘陵頂部付近を見通すことができ，これらは有機的に結びついた施設であったとみることもできる。

現在のところ，氷見市内には古代の建物や焼土坑が丘陵上で確認された例がなく，これらの性格を

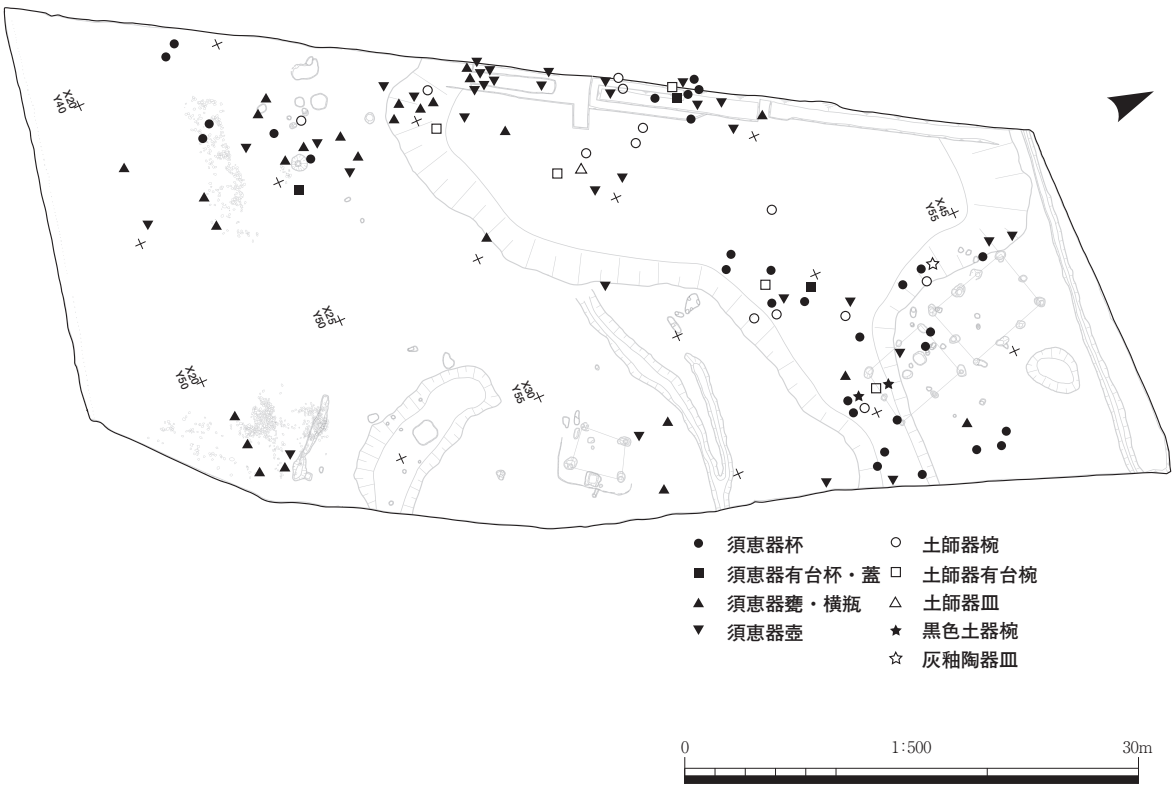


第43図　宇波ウワノ遺跡・宇波西遺跡（古代）平面図

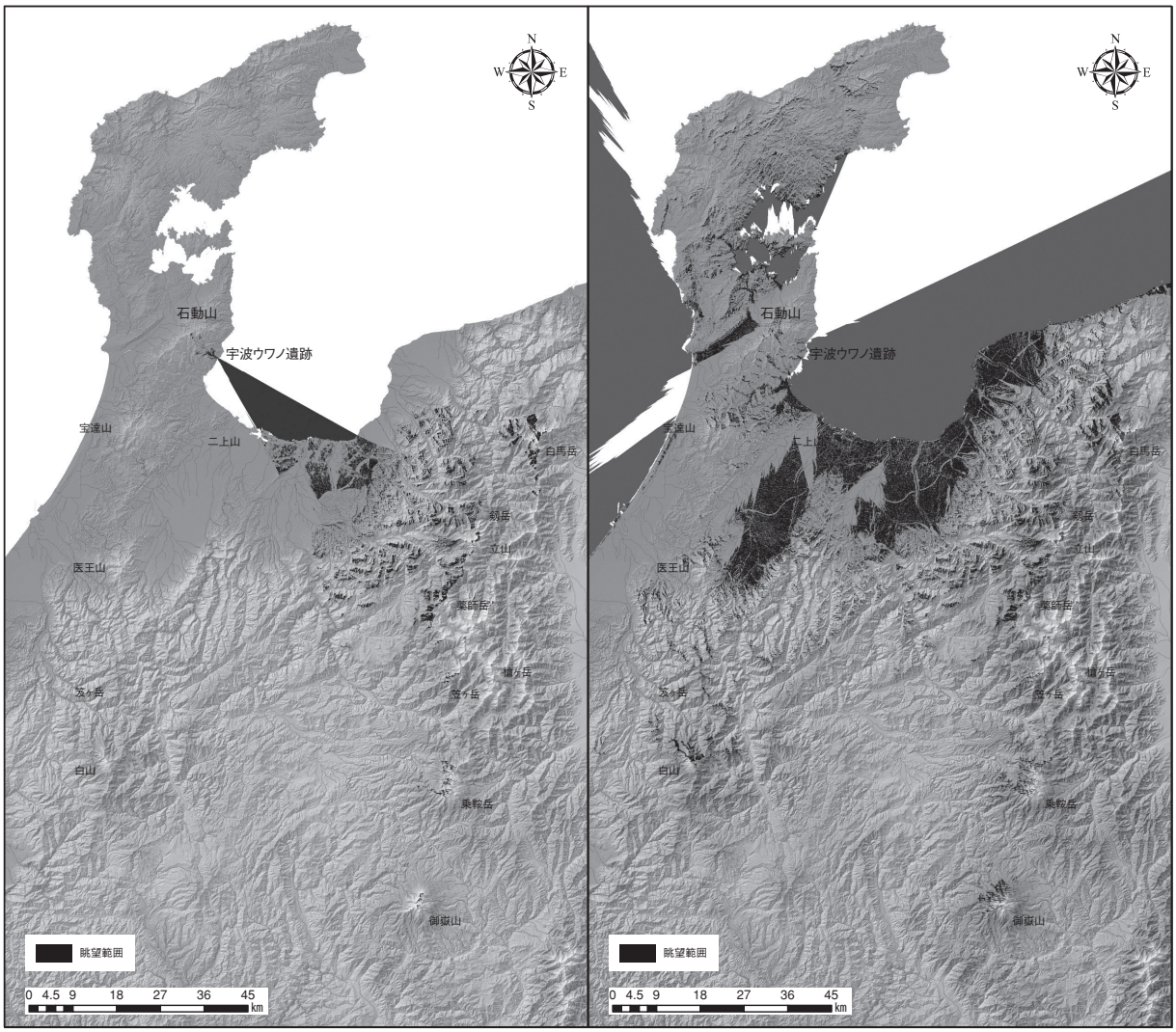
※宇波ウワノ遺跡Ｂ地区・宇波西遺跡は８世紀中頃～後半段階を抽出



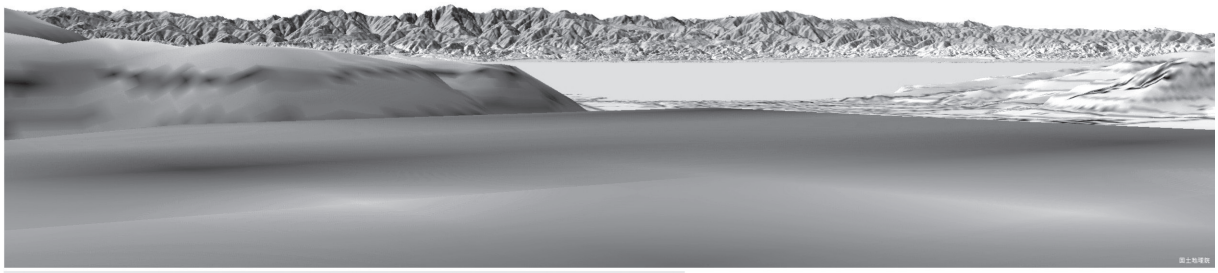
第44図　宇波ウワノ遺跡・宇波西遺跡断面図



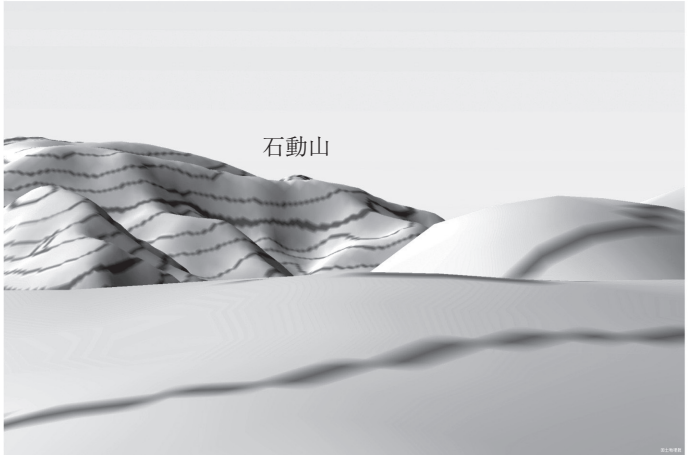
第45図　宇波ウワノ遺跡　Ｂ地区古代（８世紀以降）土器出土分布図（１：500）



宇波ウワノ遺跡からの眺望範囲　　石動山からの眺望範囲



宇波ウワノ遺跡から立山連峰を眺望



宇波ウワノ遺跡から石動山を眺望

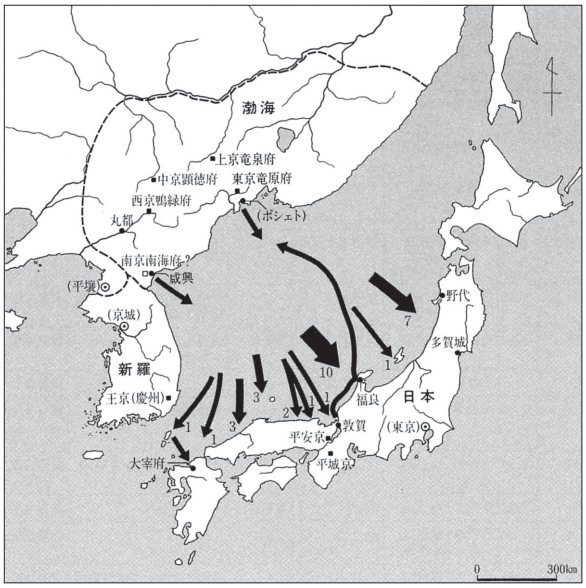
第46図　宇波ウワノ遺跡からの眺望解析
（岡田一広氏　作図）

特定することは難しいが，律令国家体制が成立し，北陸では渤海使の来着が頻繁になる８世紀の時代背景から，当時の高速伝達手段であった烽（とぶひ）関連の施設である可能性も視野に入れて，今後検討が必要と思われる。『日本三代実録』元慶7（883）年条によれば，渤海使を饗応するため越中・能登・越前国から酒・宍・魚・鳥・蒜などを加賀国に送らせており，８世紀においても渤海使が安置されることが多かった加賀郡には近隣諸地域から饗応のための食料が運び込まれたと推察されている（藤井2010）。また福良津のある能登国は天平13（741）年から天平宝字元（757）年は越中国に属しており，対外的な緊張と越中とは無関係ではなかったといえる。しかしながら，北陸に烽を置いたという記述は文献史料には見られず確証を得ない。

眺望解析によれば，宇波ウワノ遺跡の丘陵頂部からは，北西側は県境の石動山山頂（標高564m）が可視領域に入り，東側は富山湾越しに立山連峰の主要な山が望めるが，南北方向は尾根筋が干渉し谷筋しか望めないことがわかった[注1]（第45図）。高岡市にある越中国庁跡推定地までは見通せないが，宇波ウワノ遺跡は石動山への越中側からの主要な登山口とされる大窪口[注2]から谷間をぬけて平野に面する地点にあり，山岳信仰の対象でもあった石動山は，その開山縁起には養老年間の開山と伝えられることから石動山経由で石川県側へ通じるルートが８世紀に溯る可能性もあり，宇波ウワノ遺跡は能登西岸と越中国庁を結ぶルート上の要所に位置しているとみることもできる。

管見によれば，古代の烽関連と確実視されている建物跡には「烽家」の墨書が出土した宇都宮市飛山城跡ＳＩ18がある（今平1999）。竪穴建物でありながら掘立柱建物風の柱構造をもつ点と竈がつく点は異なるが，平面形と柱間の数は宇波ウワノ遺跡ＳＢ１に似る。また宇波ウワノ遺跡には墨書土器はなく，宇波西遺跡では「依」，「志ヵ津ヵ□」の墨書がある須恵器杯が出土しているが，遺跡の性格に結びつけることは難しい[注3]。

以上のように宇波ウワノ遺跡の古代の建物と焼土坑の性格については現状では確定が難しい。平野より一段高い場所につくられた一般集落の一部である可能性もあり，今後，類例の増加を待ってさらに検討したい。（越前慎子）



第47図　渤海・日本間の渡航経路推定図
（小嶋1990より転載）数字は渤海からの来着回数

（４）中　世

ここでは，Ａ地区で確認されたＳＸ１を中心として中世段階における様相をまとめておきたい。

ＳＸ１は丘陵頂部に位置し，現状では不整円形を呈している。ただし，集石の崩落・散逸や盛土が流出した可能性もあるため本来の形態は明らかではない。東・西側がやや直線的であることから方形を基調とした形状であったとも考えられる。その構築方法は，まず黒褐色粘質土を盛土するが，そこからは炭化物や焼骨は確認されず，砥石２点が出土したのみである。表層を覆う集石からも焼骨の出土はなく，出土したのは珠洲壺の胴部小破片１点と銅銭２点にとどまる。このようにＳＸ１は明確な埋葬や埋設の施設がなく，出土遺物もわずかであることから，墓や経塚といった性格を特定するには至らない。現時点では，その構築目的が明かでない塚と考えておきたい。塚については「構築するこ

と自体が目的であって，無遺物・無施設の塚が普遍性をもつ理由はここにある」（野村1986）とされるように，明確な目的等が判然としない場合が多い。ＳＸ１形成の起因となった目的も明かでないが，地域社会における信仰や要求が背景となったのであろう。特に信仰については，当地域の宗教的勢力であった石動山との関連が想起される。遺跡の位置する宇波地区は，石動山にとって越中側の海岸部へ接続する主要な玄関口であり，その影響力は海岸部に位置する脇方谷内出中世墓や髪塚の存在からも指摘されているところである（大野2003）。こうした事からも，ＳＸ１の形成に際して，石動山との関わりを想定することは可能であろう。また，ＳＸ１の位置する丘陵南西側の低地には宇波西遺跡がある。建物群は14～15世紀代であるが，13世紀代の遺物も出土しており，周辺における中世全般の活動を示唆している（島田2014）。こうした周辺の集落もＳＸ１形成に介在していたと思われる。

Ｂ地区では標高約30mの平坦面が広がり，その南東端では平野部への落ち際に集石遺構ＳＸ182・183が確認された。形成時期は明らかでないが，Ｂ地区では13世紀後半から16世紀代の遺物が包含層から出土しており，中世の段階に何らかの活動がなされていたことを示す。なお，宇波ウワノ遺跡の北東には宇波ヨシノヤ中世墓群（氷見市教育委員会2014）が隣接している。そこでは，標高25～30mの平坦面で３基の円形石組遺構があり，それらを小円礫で墳丘状に盛土した中世墓が確認された。火葬人骨の出土があり，14世紀後半頃の年代と推測されている。この他に近代以降の開墾や植林に際して片付けられたとみられる集石には15世紀以降の石造物が含まれている。

このように，宇波ウワノ遺跡周辺では低地部には集落があり，それに隣接する丘陵部の標高25～30m付近の平坦面には中世墓や集石遺構が形成されていた。さらに丘陵の高所にはＳＸ１が塚として築かれており，その造営は中世の比較的早い段階に行われたようである。こうした遺跡周辺における土地利用のあり方が想定されるが，今回の調査においては中世の遺構や遺物は少なく，不明確な点が多いこともまた事実である。周辺遺跡における調査の今後の進展を含め，さらに検討が加えられることが期待される。

（青山　晃）

注

注１　眺望解析については岡田一広氏にご教示頂いた。
注２　氷見市博物館　1984『石動山信仰文化展－石動山と越中登り口－』
注３　墨書土器の解読は鈴木景二氏にご教示頂いた。

参考文献

石井正敏　2001『日本渤海関係史の研究』吉川弘文館
今平利幸　1999『飛山城跡Ⅲ』宇都宮市教育委員会
大野究　2003「宇波地区の中世史」『図説　氷見の歴史・民俗』氷見市教育委員会
小嶋芳孝　1990「高句麗・渤海との交流」『海と列島文化　第１巻　日本海と北国文化』小学館
酒寄雅志　2001『渤海と古代の日本』校倉書房
島田亮仁　2014「第Ⅵ章　宇波西遺跡」『稲積天坂遺跡・稲積天坂北遺跡・稲積オオヤチ南遺跡・宇波西遺跡発掘調査報告』富山県文化振興財団
シンポジウム「古代国家とのろし」宇都宮市実行委員会　平川南・鈴木靖民編　1997『烽の道』青木書店
瀧川政次郎　1967「律令時代の国防と烽燧の制」『律令諸制及び令外官の研究』法制史論叢第４冊　角川書店
1967「唐兵部式と日本軍防令」『律令格式の研究』法制史論叢第１冊　角川書店
野村幸希　1986「４民間信仰　Ｂ塚」『日本歴史考古学を学ぶ（中）』坂詰秀一他編　有斐閣
氷見市教育委員会　1985『富山県氷見市小久米Ａ遺跡発掘調査報告書』
氷見市教育委員会　1996『氷見バイパス関連遺跡調査報告Ⅳ－阿尾島田Ａ遺跡・阿尾島尾山砦跡』
氷見市教育委員会　2014『宇波ヨシノヤ中世墓群』
氷見市史編さん委員会　2002『氷見市史７　資料編五　考古』
氷見市史編修委員会　1963『氷見市史』
藤井一二　2010『天平の渤海交流』塙書房
麻柄一志　1983「北陸の高地性集落とその評価」『富山市考古資料館紀要』第２号　富山市考古資料館
町田賢一　2008「富山県の家と村」『平成20年度　環日本海交流史調査研究集会「弥生時代の家と村」発表要旨・資料集』石川県埋蔵文化財センター

第14表　宇波ウワノ遺跡　建物一覧

建物	地区	種別	桁行(m)		梁行(m)		面積(㎡)	棟方位	柱穴規模(m)		柱間距離(m)		出土遺物	時期	詳細時期	挿図	写真図版
									径	深さ	桁行	梁行					
ＳＢ１	B	南北棟側柱	3間	5.89	2間	4.36	25.68	N－16°－W	0.42～0.92	0.31～0.79	1.72～2.16	2.04～2.32	弥生土器・土師器・須恵器	古代	8C中頃～後半	32	19・20
ＳＢ２	B	南北棟側柱	2間	4.93	2間	4.10	20.21	N－16°－W	0.36～0.78	0.21～0.60	1.97～2.78	2.00～2.08	弥生土器・須恵器	古代	8C中頃～後半	33	19・20

第15表　宇波ウワノ遺跡　柱穴一覧

建物番号	遺構番号	旧遺構番号	平面形	規模(m)			出土遺物	時期	詳細時期	切り合い	備考	挿図	写真図版
				長さ	幅	深さ							
ＳＢ１	ＳＰ114	Ｂ－ＳＫ14	円	0.42	0.37	0.41	弥生土器	古代	8C中頃～後半	＞ＳＫ127		32	19
	ＳＰ115	Ｂ－ＳＫ15	円	0.53	0.49	0.62	土師器					32	19
	ＳＰ116	Ｂ－ＳＫ16	円	0.74	0.60	0.43						32	19
	ＳＰ117	Ｂ－ＳＫ17	円	0.53	0.42	0.49						32	19
	ＳＰ118	Ｂ－ＳＫ18	楕円	0.72	0.49	0.31						32	19・20
	ＳＰ126	Ｂ－ＳＫ26	楕円	0.90	0.52	0.51	土師器			＞ＳＫ133		32	19
	ＳＰ129	Ｂ－ＳＫ29	楕円	0.78	0.46	0.40	須恵器			＞ＳＫ131		32	19
	ＳＰ130	Ｂ－ＳＫ30	円	0.73	0.64	0.37						32	19・20
	ＳＰ132	Ｂ－ＳＫ32	楕円	(0.82)	0.72	0.79	弥生土器					32	19・20
	ＳＰ135	Ｂ－ＳＫ35	楕円	0.92	0.73	0.59	弥生土器					32	19
ＳＢ２	ＳＰ119	Ｂ－ＳＫ19	円	0.37	0.32	0.30		古代	8C中頃～後半			33	19
	ＳＰ122	Ｂ－ＳＫ22	楕円	0.78	0.54	0.60	弥生土器・須恵器					33	19・20
	ＳＰ134	Ｂ－ＳＫ34	楕円	0.76	0.57	0.21						33	19
	ＳＰ138	Ｂ－ＳＫ38	楕円	0.43	0.32	0.47	弥生土器					33	19
	ＳＰ162	Ｂ－ＳＫ62	楕円	0.56	0.34	0.31						33	19
	ＳＰ163	Ｂ－ＳＫ63	楕円	0.42	0.33	0.25						33	19
	ＳＰ169	Ｂ－ＳＫ69	円	0.36	0.36	0.46						33	19
	ＳＰ174	Ｂ－ＳＫ74	楕円	0.72	0.45	0.30						33	19

第16表　宇波ウワノ遺跡　溝一覧

遺構番号	旧遺構番号	規模（m）			出土遺物	時期	切り合い	備考	挿図	写真図版
		長さ	幅	深さ						
ＳＤ144	Ｂ－ＳＤ44		0.76	0.12		古墳？		古墳周溝？	30・31	18
ＳＤ145	Ｂ－ＳＤ45		4.82	0.15		古墳？		古墳周溝？	30・31	18
ＳＤ157	Ｂ－ＳＤ57		0.90	0.24		古墳？		古墳周溝？	30・31	18
ＳＤ177	Ｂ－ＳＤ77		0.55	0.26	近代陶磁器	近代			29	
ＳＤ180	Ｂ－ＳＤ80	6.02	0.71	0.30		中世？		集石遺構の下で検出	35・36	22

第17表　宇波ウワノ遺跡　土坑一覧

遺構番号	旧遺構番号	平面形	規模(m)			出土遺物	時期	切り合い	備考	挿図	写真図版
			長さ	幅	深さ						
ＳＫ6	Ａ－ＳＫ6	不整楕円	1.26	0.81	0.14		古代		焼土坑　埋土に炭化物含む	34	8
ＳＫ7	Ａ－ＳＫ7	楕円	1.09	(0.45)	0.17		古代		焼土坑　埋土に炭化物含む	34	
ＳＫ8	Ａ－ＳＫ8	楕円	0.80	0.60	0.13		古代		焼土坑　埋土に炭化物含む	34	
ＳＫ101	Ｂ－ＳＫ1	円	0.41	0.35	0.26		不明				
ＳＫ102	Ｂ－ＳＫ2	円	0.26	0.24	0.21		不明				
ＳＫ103	Ｂ－ＳＫ3	楕円	0.63	0.53	0.12		不明				
ＳＫ104	Ｂ－ＳＫ4	楕円	0.50	0.38	0.51	土師器	古代?				
ＳＫ105	Ｂ－ＳＫ5	円	0.70	0.65	0.11		不明				
ＳＫ106	Ｂ－ＳＫ6	円	1.10	0.94	0.70	土師器・炭化材	古代？			34	20
ＳＫ107	Ｂ－ＳＫ7	楕円	0.44	0.24	0.06		不明				
ＳＫ108	Ｂ－ＳＫ8	円	0.26	0.24	0.11		不明				
ＳＫ109	Ｂ－ＳＫ9	円	1.08	1.08	0.20	弥生土器	弥生			34	
ＳＫ110	Ｂ－ＳＫ10	楕円	1.84	1.00	0.22		不明			34	
ＳＫ111	Ｂ－ＳＫ11	楕円	0.66	0.34	0.17		不明				
ＳＫ112	Ｂ－ＳＫ12	楕円	0.63	0.40	0.17		不明				
ＳＫ113	Ｂ－ＳＫ13	円	0.38	0.36	0.27	弥生土器	古代				
ＳＫ120	Ｂ－ＳＫ20	楕円	0.51	0.38	0.14		古代				
ＳＫ121	Ｂ－ＳＫ21	隅丸方	0.86	0.78	0.11		古代		焼土坑　炭化物層あり	34	20
ＳＫ123	Ｂ－ＳＫ23	不整	(0.86)	0.40	0.41		古代	＜ＳＫ124			
ＳＫ124	Ｂ－ＳＫ24	円	0.40	0.36	0.11		古代	＞ＳＫ123			
ＳＫ125	Ｂ－ＳＫ25	楕円	3.53	3.00	0.14		不明		自然地形の落ち込みか		
ＳＫ127	Ｂ－ＳＫ27	楕円	(0.58)	0.37	0.29		古代	＜ＳＰ114			
ＳＫ128	Ｂ－ＳＫ28	楕円	0.35	0.29	0.24		古代				
ＳＫ131	Ｂ－ＳＫ31	楕円	(0.38)	0.32	0.18		古代	＜ＳＰ129			
ＳＫ133	Ｂ－ＳＫ33	楕円	(0.35)	0.30	0.08		古代	＜ＳＰ126			
ＳＫ136	Ｂ－ＳＫ36	円	0.34	0.30	0.16		古代				
ＳＫ137	Ｂ－ＳＫ37	楕円	0.36	0.26	0.19		古代				
ＳＫ139	Ｂ－ＳＫ39	円	0.46	0.42	0.06		古代				
ＳＫ141	Ｂ－ＳＫ41	楕円	0.94	0.32	0.44		弥生？				
ＳＫ142	Ｂ－ＳＫ42	不整	0.70	0.42	0.12		弥生？				
ＳＫ143	Ｂ－ＳＫ43	楕円	0.36	0.26	0.26		不明				
ＳＫ146	Ｂ－ＳＫ46	楕円	1.42	0.88	0.18		不明				
ＳＫ147	Ｂ－ＳＫ47	楕円	0.59	0.28	0.26		不明				
ＳＫ148	Ｂ－ＳＫ48	楕円	1.30	0.40	0.29		不明				
ＳＫ149	Ｂ－ＳＫ49	方	1.49	1.37	0.35		古墳			34	18
ＳＫ150	Ｂ－ＳＫ50	円	0.20	0.17	0.12		不明				
ＳＫ151	Ｂ－ＳＫ51	円	0.22	0.17	0.12		不明				
ＳＫ152	Ｂ－ＳＫ52	円	0.26	0.24	0.26		不明				
ＳＫ153	Ｂ－ＳＫ53	円	0.20	0.18	0.15		不明				
ＳＫ154	Ｂ－ＳＫ54	楕円	0.66	0.54	0.24		不明				
ＳＫ155	Ｂ－ＳＫ55	円	0.26	0.24	0.22		不明				
ＳＫ156	Ｂ－ＳＫ56	円	0.30	0.26	0.14		不明				
ＳＫ158	Ｂ－ＳＫ58	円	0.16	0.16	0.22		不明				
ＳＫ159	Ｂ－ＳＫ59	楕円	1.10	0.72	0.26		不明				
ＳＫ160	Ｂ－ＳＫ60	楕円	0.41	0.27	0.14		不明				
ＳＫ161	Ｂ－ＳＫ61	楕円	0.35	0.28	0.28		古代				
ＳＫ164	Ｂ－ＳＫ64	円	0.27	0.25	0.32		古代				
ＳＫ165	Ｂ－ＳＫ65	楕円	0.42	0.33	0.16		古代				
ＳＫ166	Ｂ－ＳＫ66	楕円	0.37	0.30	0.12		古代				
ＳＫ167	Ｂ－ＳＫ67	円	0.34	0.33	0.19		古代				
ＳＫ168	Ｂ－ＳＫ68	円	0.23	0.18	0.26		古代				
ＳＫ170	Ｂ－ＳＫ70	楕円	0.55	0.26	0.56		古代				
ＳＫ171	Ｂ－ＳＫ71	円	0.28	0.24	0.41	弥生土器	古代				
ＳＫ172	Ｂ－ＳＫ72	楕円	0.65	0.58	0.46	弥生土器	古代				
ＳＫ173	Ｂ－ＳＫ73	円	0.20	0.18	0.22		古代				
ＳＫ175	Ｂ－ＳＫ75	円	0.19	0.18	0.11		古代				
ＳＫ176	Ｂ－ＳＫ76	楕円	0.67	0.40	0.24		古代				
ＳＫ178	Ｂ－ＳＫ78	円	0.66	0.62	0.32		不明				
ＳＫ179	Ｂ－ＳＫ79	楕円	(0.57)	0.26	0.21		弥生				
ＳＫ181	Ｂ－ＳＫ81	不整	0.62	0.62	0.25		不明				

第18表　宇波ウワノ遺跡　土器・陶磁器・土製品一覧（１）

挿図	遺物番号	写真図版	地区	遺構番号	出土地点	種類	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	時期	詳細時期	胎土色調		胎土の特徴	釉薬	釉色調		備考
37	1	23	B	ＳＩ１	Ｄ区	弥生土器	甕	19.5	(5.4)		弥生	弥生終末期	7.5YR6/6	橙色	長石　石英　骨針　雲母				
	2	23	B	ＳＩ１	№1	弥生土器	底部		(4.7)	5.3	弥生	弥生終末期	10YR4/1	褐灰色	骨針				
	3		B	ＳＩ１	Ｄ区上層	弥生土器	高杯	19.6	(3.0)		弥生	弥生終末期	7.5YR7/4	にぶい黄橙色	骨針				赤彩2.5YR4/8赤褐色
	4		B	ＳＩ１	Ａ区上層	弥生土器	高杯		(2.6)		弥生	弥生終末期	10YR5/3	にぶい黄褐色	長石　石英　骨針				
	5	23	B	ＳＩ１	№11	弥生土器	高杯		(6.1)		弥生	弥生終末期	2.5YR5/6	明赤褐色	骨針　雲母				
	6	23	B	ＳＩ１	Ｃ区	弥生土器	高杯		(2.6)		弥生	弥生終末期	7.5YR6/6	橙色	骨針				赤彩2.5YR4/8赤褐色
	7		B	ＳＩ１－Ｐ３	№2	弥生土器	甕		(7.2)	3.6	弥生	弥生終末期	10YR5/4	にぶい赤褐色	礫　長石　石英　骨針				外面煤付着
	8		B	ＳＩ１/ＳＩ１－Ｋ１	Ａ区/№3	弥生土器	高杯	27.8	(7.8)		弥生	弥生終末期	5Y5/6	明赤褐色	骨針　雲母				
	9	23	B	ＳＩ１－Ｋ１	№5	弥生土器	甕	14.8	(10.8)		弥生	弥生終末期	7.5YR7/4	にぶい黄橙色	長石　石英				外面煤付着
	10		B	ＳＩ１－Ｋ１	№2	弥生土器	甕		(9.5)	2.8	弥生	弥生終末期	10YR6/6	明黄褐色	礫　長石　石英　骨針				
	12		B		X27Y43Ｉ層	弥生土器	甕		(3.7)		弥生	弥生終末期	10YR6/4	にぶい黄橙色	長石　石英　骨針　雲母				
	13		B		X38Y59Ｉ層	弥生土器	甕	17.8	(10.3)		弥生	弥生終末期	7.5YR4/4	褐色	長石　石英　骨針　雲母				
	14		B		墳丘上Ｉ層　№1	弥生土器	甕		(6.3)	6.0	弥生	弥生終末期	7.5YR5/6	明褐色	長石　石英　骨針　雲母				
	15		B		X34Y48谷	弥生土器	甕		(3.3)	3.2	弥生	弥生終末期	7.5YR6/6	橙色	礫　長石　石英　雲母　骨針				
	16	23	B		X33Y45	弥生土器	甕?		(6.5)		弥生	弥生終末期	7.5YR5/4	にぶい褐色	礫　長石　石英　雲母				
	17	23	B		墳丘上Ｉ層　№1	弥生土器	高杯	25.6	(4.8)		弥生	弥生終末期	10YR6/4	にぶい黄橙色	長石　骨針　雲母				内外面赤彩5YR5/6明赤褐色
	18		B		X30Y45谷	弥生土器	高杯	26.0	(1.6)		弥生	弥生終末期	10YR6/4	にぶい黄橙色	長石　石英　骨針　雲母				内面赤彩2.5Ｙ Ｒ4/6赤褐色
	19	23	B		X26Y45Ｉ層	弥生土器	高杯		(9.6)		弥生	弥生終末期	10YR7/4	にぶい黄橙色	礫　長石　石英　骨針				内面赤彩2.5YR4/6赤褐色
	20		B		X35Y49 X34Y50谷	弥生土器	高杯		(7.8)		弥生	弥生終末期	7.5YR6/6	橙色	長石　石英　骨針				外面赤彩2.5YR5/6明赤褐色
	21	23	B		X35Y49谷	弥生土器	高杯		(2.5)		弥生	弥生終末期	7.5YR4/6	褐色	骨針				
	22	23	B		X21Y48Ｉ層	弥生土器	高杯		(7.3)		弥生	弥生終末期	2.5YR5/8	明赤褐色	骨針				
	23		B		X38Y60Ｉ層	弥生土器	高杯		(6.6)		弥生	弥生終末期	2.5YR5/6	明赤褐色	礫　長石　石英　骨針				
	24		B		X35Y49谷	弥生土器	器台		(5.9)	10.8	弥生	弥生終末期	5YR5/6	明赤褐色	長石　石英				
	25		B		X30Y46谷	土師器	甕	19.8	(10.6)		古代	７Ｃ前半	7.5YR6/6	橙色	礫　長石　石英　骨針　雲母				
	26	23	B		X30Y46谷	土師器	甕	15.4	14.5	5.7	古代	７Ｃ前半	7.5YR6/6	橙色	骨針				口径短径12.2cm
38	28	24	B	ＳＰ129		須恵器	甕	17.0	(2.9)		古代	８Ｃ以降	5Y5/1	灰色	長石　雲母				
	29	24	B	ＳＰ122		須恵器	長頸壺		(12.2)	9.5	古代	８Ｃ第２四半期	2.5Y6/2	灰黄色					肩部に杯破片付着
	30	24	B		X46Y57谷	須恵器	杯	11.9	3.4	8.4	古代	８Ｃ後半	2.5Y6/2	灰黄色	長石				
	31	24	B		X38Y54Ｉ層	須恵器	杯	11.8	3.0	7.6	古代	８Ｃ後半	2.5Y6/1	黄灰色	礫　長石				重ね焼き
	32	24	B		X41Y63Ｉ層	須恵器	杯蓋	12.8	(1.8)		古代	８Ｃ後半	5Y5/1	灰色	長石				重ね焼き
	33	24	B		X27Y45Ｉ層	須恵器	杯	10.9	3.8	7.9	古代	８Ｃ後半	2.5Y5/1	黄灰色	長石				
	34	24	B		X38Y54 X43Y63Ｉ層	須恵器	杯	11.8	4.1	6.8	古代	８Ｃ後半	5Y6/1	灰色					
	35	24	B		X40Y62Ｉ層	須恵器	杯		(2.9)	8.0	古代	８Ｃ後半	2.5Y6/1	黄灰色	長石				
	36	24	B		X40Y60Ｉ層	須恵器	杯		(2.3)	7.3	古代	８Ｃ後半	2.5Y5/1	黄灰色	長石				外面煤付着
	37	24	B		X24Y40Ｉ層	須恵器	杯		(1.5)	10.0	古代	８Ｃ後半	2.5Y5/1	黄灰色	長石				
	38	24	B		X24Y40Ｉ層	須恵器	杯		(1.2)	8.0	古代	８Ｃ後半	2.5Y5/1	黄灰色	長石　石英				
	39	24	B		X28Y45Ｉ層	須恵器	横瓶	10.8	(2.3)		古代	８Ｃ	2.5Y5/1	黄灰色	長石				
	40	24	B		X27Y65Ｉ層	須恵器	横瓶	11.6	(3.0)		古代	８Ｃ	2.5Y5/2	灰黄色	長石				
	41	24	B		X37Y49谷	土師器	椀	11.0	2.9	5.0	古代	９Ｃ後半	10YR6/4	にぶい黄橙色	骨針				
	42	24	B		X40Y60Ｉ層	土師器	椀	11.0	(3.4)		古代	９Ｃ後半	5YR5/6	明赤褐色	骨針				

第18表　宇波ウワノ遺跡　土器・陶磁器・土製品一覧（２）

挿図	遺物番号	写真図版	地区	遺構番号	出土地点	種類	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	時期	詳細時期	胎土色調		胎土の特徴	釉薬	釉色調		備考
38	43	24	B		X35Y49谷	土師器	皿		(1.8)	9.0	古代	9C後半以降	10YR7/4	にぶい黄橙色	長石　石英　骨針				
	44	24	B		X44Y57谷	灰釉陶器	皿		(2.0)	6.3	古代	O53窯式(10C前半)	10YR6/2	灰黄褐色					
	45	25	A		No.4	珠洲	擂鉢		(4.1)	11.0	中世	Ⅰ3～Ⅱ期(1190～1240年代)	2.5Y6/2	灰黄色	長石				内面炭化物付着
	46	25	B		X33Y49Ⅰ層	珠洲	甕		(3.4)		中世	Ⅳ期(1280～1370年代)	2.5Y5/1	黄灰色	長石　雲母　礫　骨針				
	47	25	B		X40Y50Ⅰ層	中国製染付	椀		(2.1)	5.0	中世	15C後半～16C	2.5Y7/1	灰白色					染付5PB3/6くすんだ青色 染付碗C群Ⅰ類
	48	25	B		X23Y45Ⅰ層	越中瀬戸	匣鉢	11.8	(5.3)		近世	16C末～17C	10YR6/2	灰黄褐色	長石	鉄釉	7.5YR3/4	暗褐色	
	49	25	B		X25Y43Ⅰ層	唐津	皿		(2.1)	4.2	近世	Ⅱ期(1610～1650年代)	2.5Y6/2	灰黄色	長石	灰釉	5Y6/4	オリーブ黄色	砂目積
	50	25	B		X38Y54Ⅰ層	唐津	椀		(2.5)	4.4	近世	Ⅰ期(1580～1610年代)	2.5Y6/2	灰黄色		鉄釉	2.5Y2/1	黒色	
	51	25	B		X39Y62Ⅰ層	伊万里	椀		(2.4)	4.2	近世	Ⅱ－2～Ⅲ期(1630～1690年代)	2.5Y8/1	灰白色		青磁釉	5G7/1	明緑灰色	高台砂付着
	52	25	B		X23Y46Ⅰ層	伊万里	皿	12.8	2.6	4.8	近世	Ⅱ－1期(1610～1630年代)	N8/0	灰白色					染付5B4/1暗青灰色　高台内砂付着
	53	24	B		X40Y49谷	土錘		(直径)3.3	5.1				10YR8/2	浅黄橙色	石英				

第19表　宇波ウワノ遺跡　石製品一覧

挿図	遺物番号	写真図版	地区	遺構番号	出土地点	種類	法量(cm・g) 長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
37	11	23	B	ＳＩ１	No.24	台石	28.0	20.6	10.4	6700	(軽石質)砂岩(中粒)	
	27	23	B		X39Y59Ⅰ層	磨製石斧	11.3	4.8	2.0	182	透閃石岩	
39	54	25	A	ＳＸ１	No.5	砥石	(8.0)	4.5	4.2	124.7	流紋岩または(流紋岩質)凝灰岩	
	55	25	A	ＳＸ１		砥石	(8.9)	4.7	4.6	160.4	流紋岩または(流紋岩質)凝灰岩	
	58	25	B	ＳＸ182	東側集石最下層(地山直上)	石仏？	46.3	25.2	7.6	9100	石灰質砂岩(極粗粒)	最大径２cmの軽石礫が混じる
	59	25	B		X30Y46Ⅰ層	砥石	(6.3)	3.5	3.2	47.28	緑色凝灰岩	

第20表　宇波ウワノ遺跡　金属製品一覧

挿図	遺物番号	写真図版	地区	遺構番号	出土地点	種類	法量(cm・g) 長さ	幅	厚さ	重さ	備考
39	56		A	ＳＸ１	No.1	銅銭	φ2.5		0.15	1.9	大観通宝(初鋳1107年)
	57		A	ＳＸ１	No.2	銅銭	φ2.4		0.1	2.9	淳化元宝(初鋳990年)

第Ⅴ章　惣領野際遺跡

1　概　要

惣領野際遺跡は，仏生寺川とその支流の鞍骨川に挟まれた谷底平野の中央部に立地する。周囲の平野は主に水田として利用され，丘陵縁辺部には集落が点在し，丘陵と平野を能越道が縦貫する。今回調査したＣ地区は能越道氷見南インター建設予定地であり，能越道本線敷Ｂ地区の東側に隣接する。

Ｃ地区では古墳時代・中世の遺構を確認した。古墳時代の遺構は自然流路２条で，木製品が多数出土したＢ地区の流路につながるものもあるが，今回の調査での出土遺物は種実のみである。中世の遺構は掘立柱建物２棟，自然流路１条，溝８条，土坑25基で，遺物には中世土師器・珠洲・越前・古瀬戸・瀬戸美濃・中国製青磁・木製品（独楽・円形板・板材）・石製品（石臼）・鉄滓がある。その他に，包含層出土遺物として，古代の土師器・須恵器，近世の越中瀬戸・唐津・伊万里がある。

2　層　序

基本層序は，Ⅰ層：表土・盛土，Ⅱ層：中近世遺物包含層，Ⅲ層：古墳時代遺物包含層（中世遺構面），Ⅳ層：地山（古墳時代遺構面）に大別した。

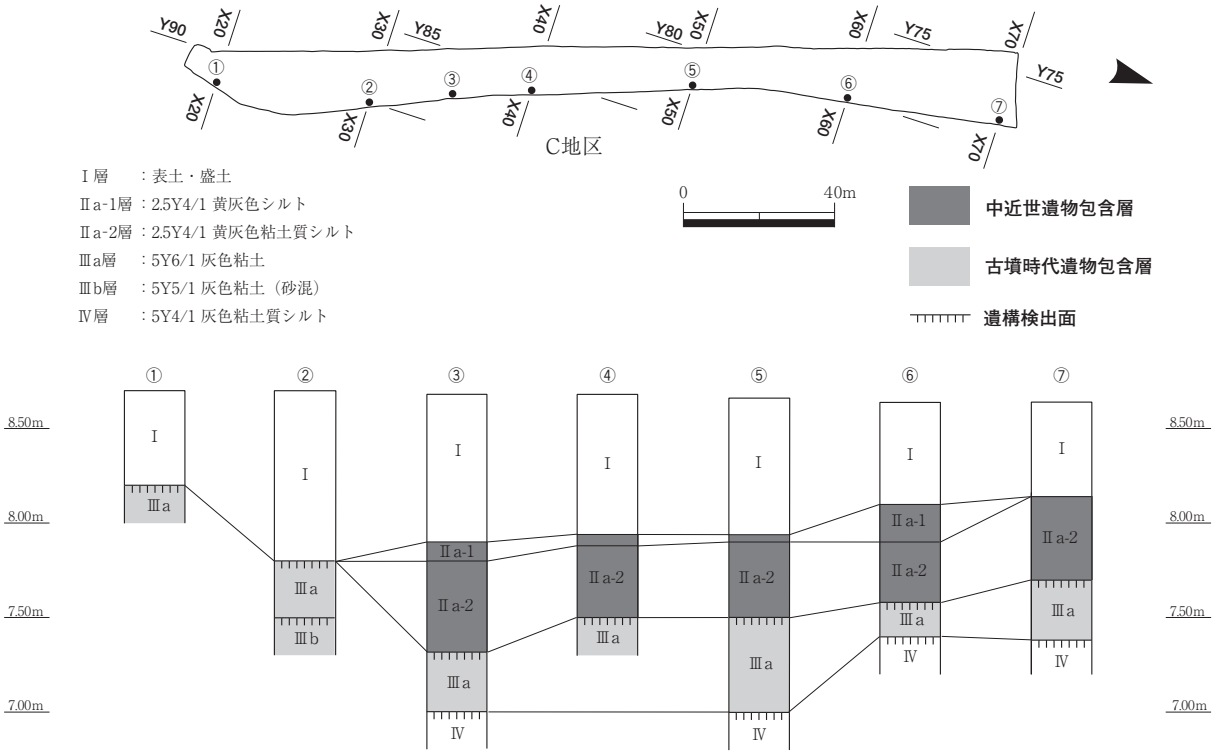
Ｃ地区の大部分は能越道本線敷の工事に伴い既に耕作土は撤去され，表面はシルト・砂からなる盛土で厚く覆われていた。Ｘ45以北では盛土の下，Ⅱ層の直上に，最大で直径約70㎝の泥岩の塊が混じる暗灰黄色シルトが約20～40㎝の厚さで広く堆積していたが，この層も近代以降の層であった。

Ⅱ層は既調査のＢ地区のⅡａ層に対応する層で，粘性によりⅡａ－１層，Ⅱａ－２層の上下２層に分かれるが時代を細別できるものではなく，Ⅲ層面が高くなる南端を除き約40～60㎝の層厚で広く堆積する。Ⅱ層からは近世の遺物も出土したが，下位のⅢ層上面で検出した遺構は出土遺物とＢ地区の調査結果から中世の遺構と考えられる。

Ⅲａ層は，Ｂ地区のⅢａ層に対応する層で調査区全域に堆積する。上面でＢ地区の中世面の延長を検出したが，古墳時代の包含層としてはＢ地区のように出土遺物は多くなく，土師器の小片と種実が出土したのみである。南端のＸ30付近ではⅢ層上面からⅣ層上面までに約70㎝の層厚があり，Ⅲａ層に砂が混じる層，黒褐色粘土層など複数に細分されるが，基本層序としてはＳＤ802を検出した砂混じりの灰色粘土層をⅢｂ層とした。ＳＤ802からは中世の遺物が出土しており，Ⅲａ層上面の遺構より若干早い段階の中世の遺構と考えられる。調査区中央のＸ45～55付近ではⅣ層との境界に泥炭が混じる層厚約10㎝のオリーブ黒色土層を挟むがⅢ層の一部として捉えている。これより北側ではⅢ層は約20㎝と薄くなる。

Ⅱ層とⅢ層の境界は断面が波状・火焔状となり（第51図），平面では渦状に回転する地層の変形構造がみられ，柱穴等の遺構埋土もこれに伴う擾乱を受けている（図版29）。この地層の変形は最大20㎝の幅で上下層が入り混じるため，検出したⅢ層を若干掘り下げなければ遺構の輪郭がわかりにくい場合もある。このような地層の変形は地震動によるものである可能性があり[注1]，各層の年代から中世以降の地震の影響を受けた可能性が考えられる。

Ⅳ層は上面で古墳時代の遺構を検出した層で，断面では最大約50㎝までの層厚を確認しているが，以下は無遺物層である。



第48図　惣領野際遺跡　層序模式図

3　遺構・遺物

（1）古墳時代

A　自然流路

601号自然流路（ＳＤ601，第51図，図版27）

Ｃ地区の北端に位置する。能越道関連で調査したＢ地区から続く自然流路で，さらに北東方向の調査区外へと延びている。北端は上層で検出した中世の溝ＳＤ301に削り取られている。Ｃ地区における最大幅は4.80m，深さは0.90mである。埋土上層は腐食した植物遺体を多く含むピートと灰色砂が互層になり，下層は炭化物を少量含む灰色粘土質シルトが厚く堆積する。Ｂ地区では建築部材や槽，刳物桶等の古墳時代の木製品が多数出土しているが，Ｃ地区での出土遺物は種実のみである。

803号自然流路（ＳＤ803，第51図，図版27）

Ｃ地区の中央南寄りに位置する東西方向の自然流路である。幅は約2.3mで，深さは0.82mを確認した。埋土はレンズ状に堆積し，灰色砂・砂質シルトと灰色粘土・黄灰色粘土・黒褐色粘土等が互層になる。上層では腐食した植物遺体や種実を多く含むピートが砂や粘土と互層になっている。人工遺物はなく，自然堆積により埋没した流路と考えられる。

（2）中近世

A　掘立柱建物・柱穴

Ｃ地区は調査区の範囲が狭いため，確認できた２棟の掘立柱建物のうち調査区外に延びる可能性がある１棟については規模を確定し得ない。また，建物を構成する柱穴と認識し得るもの以外にも柱穴状の小土坑が多数あるが，このうち柱痕の認められる１基についてのみ柱穴として報告する。

10号掘立柱建物（ＳＢ10，第54図，図版29）

Ｃ地区の中央に位置する。規模は南北が２間，東西は２間以上の総柱建物である。調査区の東側に延びる可能性がある。２間×２間であれば，南北棟で桁行4.95m，梁行3.90m，面積19.31㎡，主軸方向はＮ－６°－Ｅである。柱穴の平面形は円形がほとんどで楕円形のものもあり，規模は径0.20～0.32m，深さは0.11～0.42mである。埋土は灰色粘土及び黄灰色粘土質シルトを基調とし，単層のものが多く，柱痕は確認されなかった。Ｂ地区で多数検出された柱穴内の礎板はみられず，柱の安定のために柱穴内に置かれた可能性のあるものはＳＰ740の底付近から出土した直径約16㎝の自然礫のみである。出土遺物にはＳＰ720の土師器があるが，小破片で器種は不明である。

11号掘立柱建物（ＳＢ11，第54図，図版29）

Ｃ地区の中央に位置し，ＳＢ10と範囲が重複するが，切りあいはない。１間×２間の側柱建物で，桁行5.09m，梁行2.12m，面積10.79㎡である。主軸方向はＮ－２°－Ｅで，ＳＢ10よりやや西に振れる。柱穴の平面形は円形が多いが楕円形もあり，規模は径0.24～0.37m，深さは0.07～0.34mである。埋土はすべて灰色粘土の単層で，柱痕は確認されなかった。出土遺物には，ＳＰ726の土師器，ＳＰ742の珠洲甕があるが，小破片である。

746号柱穴（ＳＰ746，第55図，図版29）

Ｃ地区中央に位置する。切り合いからＳＤ736より新しい。長径0.29m，短径0.18mの楕円形を呈し，深さは0.29mで，埋土は灰色粘土を基調とし，柱痕部分には炭化物がやや多く混じる。周辺には柱穴状の小土坑が多く，掘立柱建物を構成する柱穴の可能性がある。出土遺物は板材・種実（エゴノキ）である。板材は加工が認められるものの小片で用途は不明である。

Ｂ　溝・自然流路

301号溝（ＳＤ301，第55・56図，図版30・32・33）

Ｃ地区の北端に位置し，Ｂ地区から続く東西方向の溝である。幅4.00m，深さ0.89mを測る。埋土はほぼ水平堆積で，上層は灰色粘土，下層は黄灰色粘土を基調とし，下層には炭化物をやや多く含む。最下層には灰色砂質シルトが混じる。出土遺物は土師器・須恵器・中世土師器・珠洲（*1*・*2*）・円形板（*3*）である。須恵器には長頸壺・甕，中世土師器には皿，珠洲には擂鉢・壺・甕がある。

1・*2*は珠洲擂鉢である。*1*は口縁内端部を上方につまみ上げる形態である。*2*は口縁部端面がほぼ水平になる形態で外面の一部に煤が付着し二次被熱したものとみられる。*3*は方形の板の隅を丸く削り取った円形板で，中央に孔が穿たれている。樹種はスギである。

304号溝（ＳＤ304）

Ｃ地区の北側に位置し，ＳＤ301に並行してＢ地区から直線的にのびている。幅2.50m，深さ0.15mを測る。埋土は灰色粘土質シルトを基調とする単層である。出土遺物はない。

347号溝（ＳＤ347，第55図，図版30）

Ｃ地区の北側に位置し，Ｂ地区南西から北東方向へと，やや蛇行しつつのびる溝である。幅1.30m，深さ0.22mを測る。埋土は灰色粘土を基調とし，炭化物を少量含む。出土遺物はない。

401号溝（ＳＤ401，第55図）

Ｃ地区の中央やや南寄りに位置し，Ｂ地区から直線的にのびる溝である。北側のＳＤ301・ＳＤ304から南へ約30m離れているが，方向はほぼ同じで同時期のものと考えられる。幅0.60m，深さ0.21mを測る。埋土は水平堆積で上下２層に別れるが上下層とも砂質シルトを基調とし，１～２㎝の礫が少量混じる。出土遺物には土師器椀があるが，小片である。

490号自然流路（ＳＤ490，第56図，図版31～33）

Ｂ地区から続くＣ地区南端で検出した浅い落ち込み状の遺構で，自然流路としたが埋土はⅢ層が堆積し，やや砂がまじるものの，明瞭な水成堆積は認められない。南側の肩付近では0.3m前後の深さがあるが，北側の立ち上がりは緩やかで，遺構検出面も北に向かって緩やかに傾斜しているため遺構の肩は明瞭ではない。出土遺物は土師器・須恵器・中世土師器（*5*）・珠洲（*6*）・越前・石臼（*7*）・鉄滓（*4*）である。須恵器には甕，珠洲には擂鉢・壺・甕，越前には甕があり，珠洲の出土が多い。

*4*は鉄滓で，椀形を呈する。*5*は中世土師器皿で，器壁は厚く，口縁部に一段ナデを施すが摩滅が著しい。*6*は珠洲甕で，口縁部は方頭で頸部が強く屈曲する。*7*は石臼である。上臼で，上面のくぼみには鑿痕が残り，下面はやや凹面をなして目が刻まれる。目の角度から８分画と考えられる。割れているが，供給口となる円形の穴と側面から挽き木を打ち込む方形の穴が確認できる。残存部には「ものくばり」の穴はなく，反時計回りに挽いたものであろう。石材は凝灰質砂岩である。

710号溝（ＳＤ710，第55図，図版30）

Ｃ地区の中央部に位置する。幅0.60m，深さ0.19mを測る。北端部は折れ曲がり，浅くなって途切れており，南端はＢ地区までは延びていない。溝状を呈するが性格は不明である。埋土は灰色粘土を基調とし，炭化物を少量含む。出土遺物はない。

717号溝（ＳＤ717，第55・56図，図版30・31）

Ｃ地区の中央に位置する直線的な溝である。北側は調査区外に延び，南側は浅くなって途切れるが，ＳＢ10の主軸方向とほぼ同じ向きであることから，建物と同時期の溝であった可能性が高く，南側の延長部が削平されたと考えられる。幅0.40m，深さ0.11mを測る。埋土は灰色粘土を基調とし，炭化物を少量含む。出土遺物は古瀬戸筒型香炉（*8*）で，小ぶりな足が底部外縁に貼り付けられ，内面に煤が付着する。外面の上端に灰釉が施され脚の一部にも釉が付着する。

736号溝（ＳＤ736，第55図，図版30）

Ｃ地区の中央に位置する直線的な溝である。北側は調査区外に延び，南側は浅くなって途切れるが，Ｂ地区のＳＤ489の延長線上にあり，本来つながっていた可能性もある。ＳＤ489はＢ地区のＳＢ８と平行することから屋敷地の境界を示すものと考えられているが，Ｃ地区のＳＢ11もＳＢ８と主軸方向が同じであり，これらの建物と溝は同時期のものと考えられる。幅0.70m，深さ0.14mで，埋土は灰色粘土を基調とし，炭化物を少量含む。出土遺物はない。

802号溝（ＳＤ802，第55・56図，図版30・33）

Ｃ地区の南端に位置する。北端と南端は調査区外に延びるが，Ｂ地区では検出されていない。位置的にはＳＤ490と重複する。ＳＤ490の埋土除去後のⅢａ層面では検出されず，Ⅲｂ層面で確認した。中世の遺物が出土したため，Ⅲａ層で検出した中世の遺構よりやや早い段階に属する中世の遺構と考えられる。幅1.20m，深さ0.30mで，埋土は灰色砂質シルト・黒褐色シルトを基調とする。中央で杭（*9*）が1本立った状態で出土した。出土遺物は杭のほかに土師器・珠洲がある。土師器は大型の器種の破片とみられるが全形は不明である。珠洲には擂鉢・甕の胴部片が各１点ある。*9*の樹種はマツ。

Ｃ　土　坑

土坑には，建物を構成する柱として確定し得ないが平面形が円形・楕円形でやや深い柱穴状のものが多く，他に平面形が円形・楕円形でやや大型のものもあるが，後者は浅く埋土も単層で性格不明なものが多い。遺物についても，出土していない遺構がほとんどで図化できるものはない。そのため土坑の個別の記述は省略し，一覧表として掲載した。

D　包含層の遺物（第56～58図，図版31～33）

*10*は須恵器杯である。底部は回転ヘラ切り後ナデを施す。

11～*18*は中世土師器皿で，すべて非ロクロ成形である。*11*～*13*・*15*～*17*は口縁部に一段ナデを施して外反させ，やや厚い底部との境界に稜がつく。*14*は底部から口縁部へ丸みをもって立ち上がり，口縁部内面に稜をもち端部が尖る。*18*はやや深身で口縁端部が尖り，見込み外周を外方へ押し出す。

19・*20*は古瀬戸である。*19*は卸皿で，見込みには鋭く切込まれた格子状の卸目があり，底外面には回転糸切り痕を残す。内面に灰釉を施す。*20*は小鉢で，底部は浅い削り出し高台である。体部外面に灰釉を施し，底外面の一部にも釉が付着するが，内面は露胎である。

*21*は瀬戸美濃天目茶椀である。削り出し輪高台で高台幅は狭く，削り込みは浅い。内外面に鉄釉が施され，高台周辺には濃い錆釉を施す。

*22*は中国製青磁椀である。角高台で高台外端を斜めに面取りするが粗く削り取られており面取りの幅は一定でない。高台内は深く抉るが中央には抉り残しがあり凸状になる。釉は不透明で半濁し，薄くかけられ，畳付から高台内は露胎である。見込みに花文の型押がある。

23～*38*は珠洲である。*23*～*31*は擂鉢で*24*・*25*には片口が付く。*23*～*27*・*29*は口縁端面が外傾し，*24*・*27*は端面がやや拡張する。*28*は端面が水平で内端がやや拡張し，波状文を施す。*30*は19目の細密な櫛歯原体を用いて卸目が施される。*31*は12目の櫛歯原体を用いた弧状の卸目を２条交差させる。底外面は静止糸切りの上に板状圧痕が残る。*32*は壺である。口縁端面は水平で外端をやや引き出す。*33*～*38*は甕である。*33*は円頭で頸部は強く屈曲する。*34*・*35*は円頭のくの字状口縁で，内面は円礫の当て具痕と斜位の指頭または礫によるナデ痕が残る。*36*・*37*は長めの円頭口縁で頸部の屈曲が少なく直立に近い。頸部外面の調整は粗雑で斜位の深い工具痕が口縁下部にまで及ぶ。*38*は口頸部の器厚が厚く体部との境が不明瞭で，外面叩きは浅く，胎土に含まれる砂粒の量が多い。

39～*46*は越中瀬戸である。*39*～*42*は壺で，口縁端部が水平に面を取るもの（*39*・*41*・*42*）と丸くおさめるもの（*40*）がある。ロクロ成形で内外面に錆釉を施す。*43*は建水または小型の匣鉢か。内外面に錆釉を施す。*44*は丸椀で内外面に鉄釉を施す。*45*・*46*は皿である。*45*は灰釉を口縁部内外面に施す。高台は低めで碁笥底状に削り出す。*46*は鉄釉を口縁部内外面に施す。高台は高めの削り出し高台である。二次被熱し内外面に煤が付着する。

*47*は唐津皿である。内面には灰釉を施し砂目跡が残る。高台内には墨書があるが判読できない。

48～*50*は伊万里である。*48*・*49*は染付の椀で，釉はやや厚く半濁している。*49*は高めの高台で，全面施釉後畳付の釉を剥ぎ取る。*50*は伊万里の白磁小杯で，全面施釉後畳付の釉を剥ぎ取る。

*51*は木製の独楽である。直径2.8cmのやや小型の独楽で，下端は欠損する。砲弾形を呈し，側面を叩いて回す鞭独楽とみられる。側面は縦方向に細かく削り，上面は不定方向に削って平坦にしている。樹皮を剝いだマツの芯持材を使用しており，木材の芯にあたる上面の中心に浅い凹みがあるが中は明瞭な調整痕がなく，故意に抉ったものかは不明である。

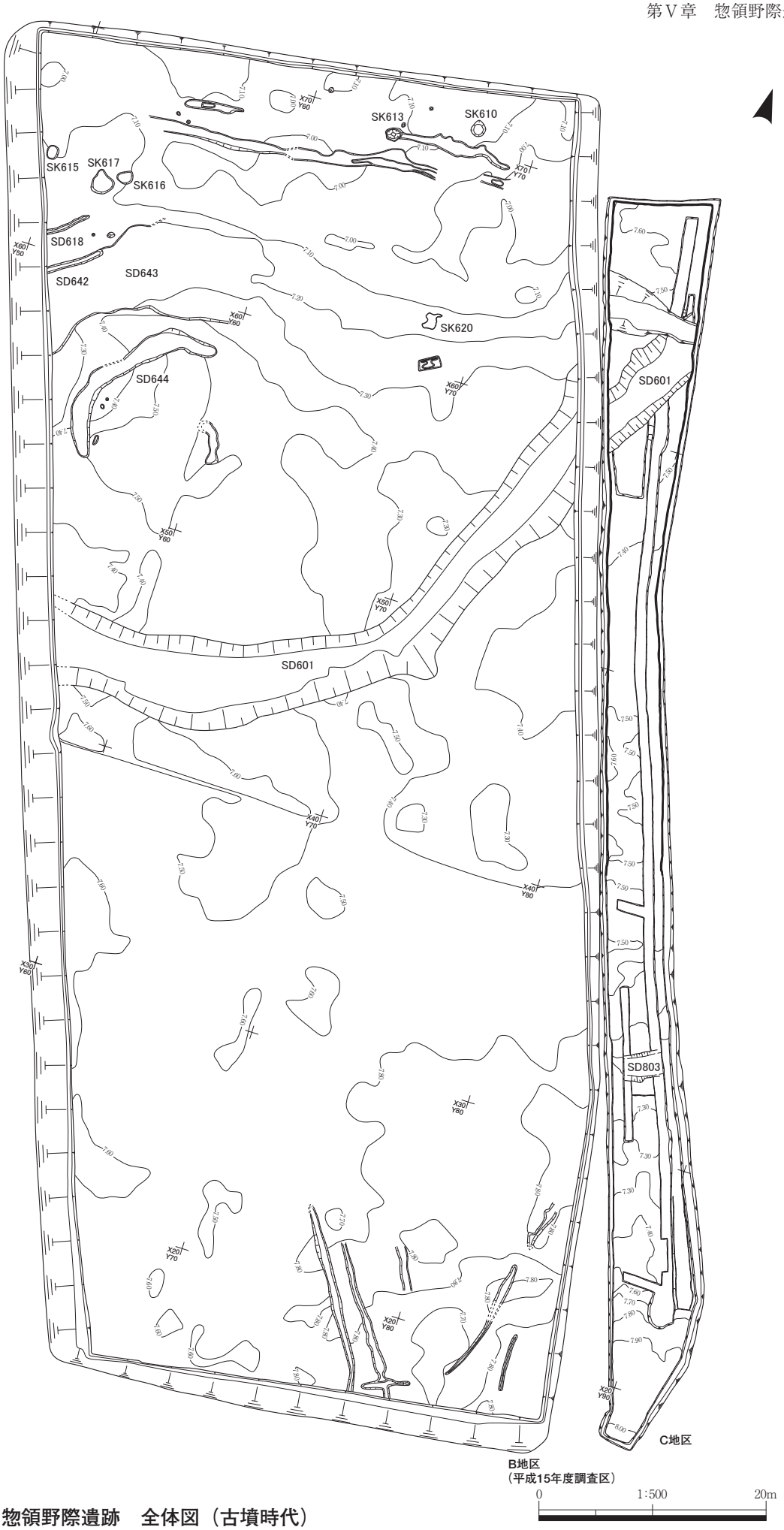
*52*は鉤状の鉄製品で，先端が尖り，断面は方形を呈する。（越前慎子）

注

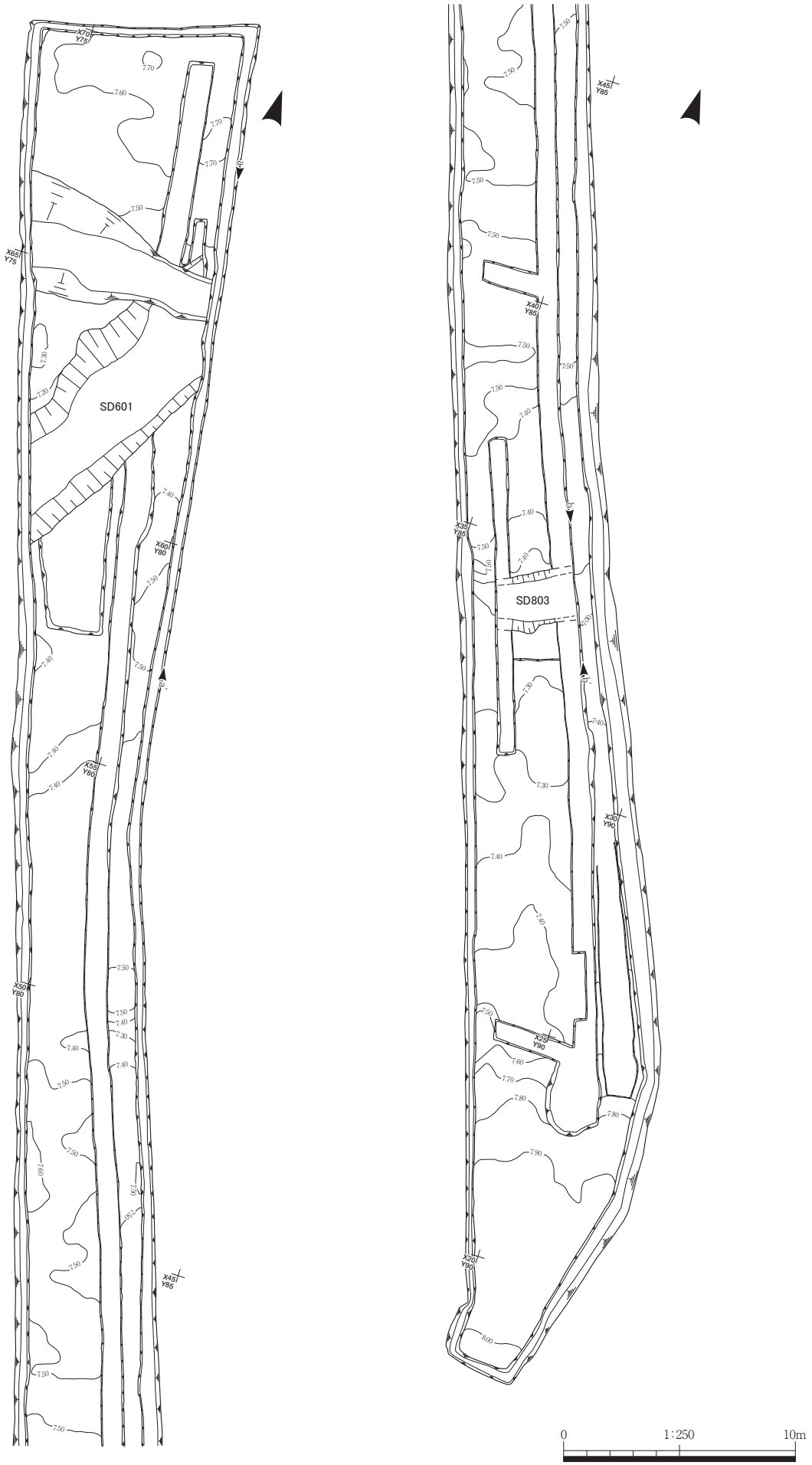
注１　松田順一郎　1996「泥質堆積物の地震による変形構造」『北島遺跡の耕作地跡と古環境－寝屋川南部流域植付ポンプ場土木工事に伴う北島遺跡第１次発掘調査報告書－』㈶東大阪市文化財協会

参考文献

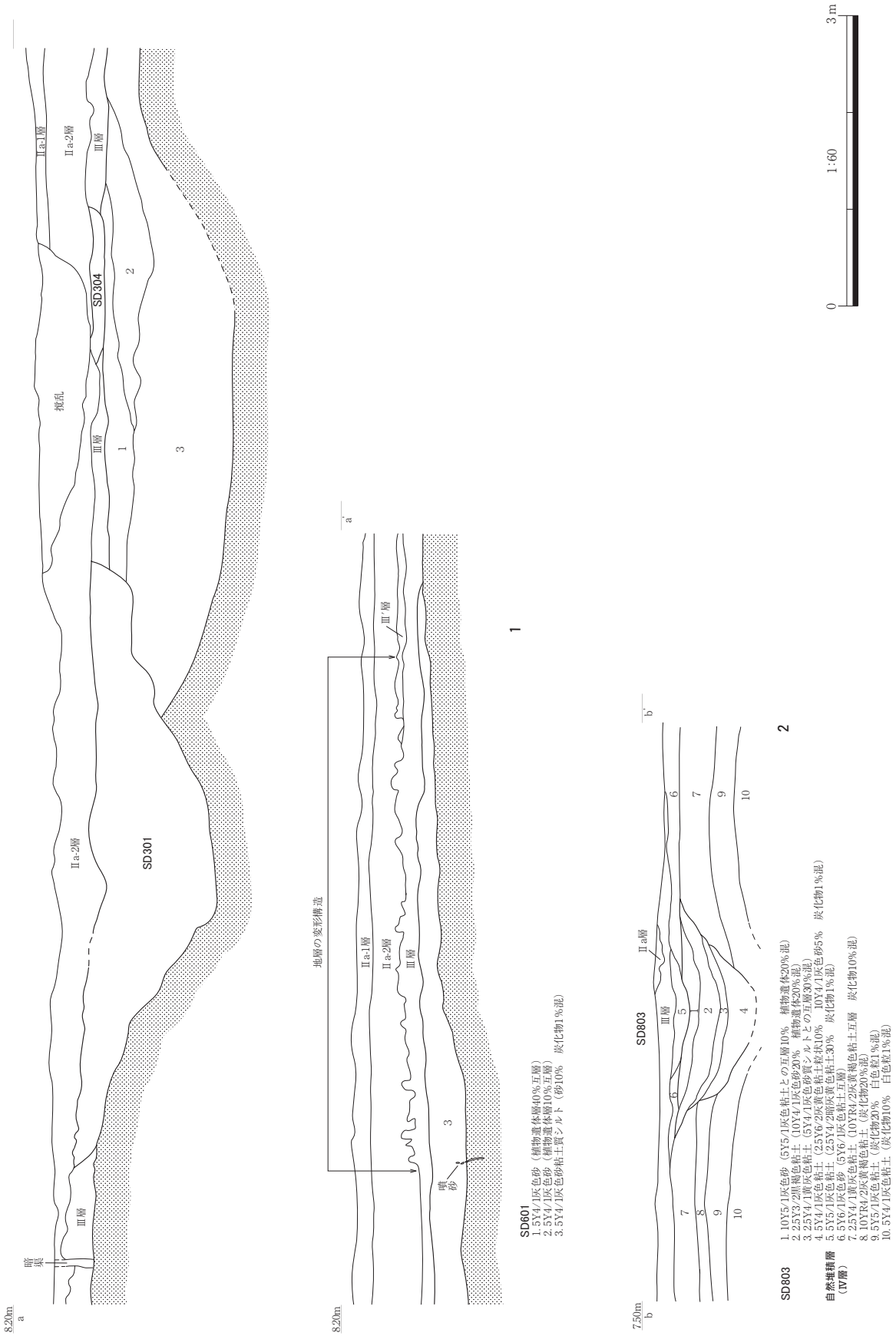
大橋康二　1984「肥前陶磁の変遷と分布」『国内出土の肥前陶磁』九州陶磁文化館
太宰府市教育委員会　2000『大宰府条坊跡ⅩⅤ－陶磁器分類編－』
藤澤良祐　1991「瀬戸古窯址群Ⅱ－古瀬戸後期様式の編年－」『瀬戸市歴史民俗資料館　研究紀要Ⅹ』瀬戸市歴史民俗資料館
宮田進一　1997「越中瀬戸の変遷と分布」『中・近世の北陸』北陸中世土器研究会
三輪茂雄　1978『ものと人間の文化史25　臼』法政大学出版局
山下峰司　1995「灰釉陶器・山茶椀」『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社
吉岡康暢　1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館



第49図　惣領野際遺跡　全体図（古墳時代）

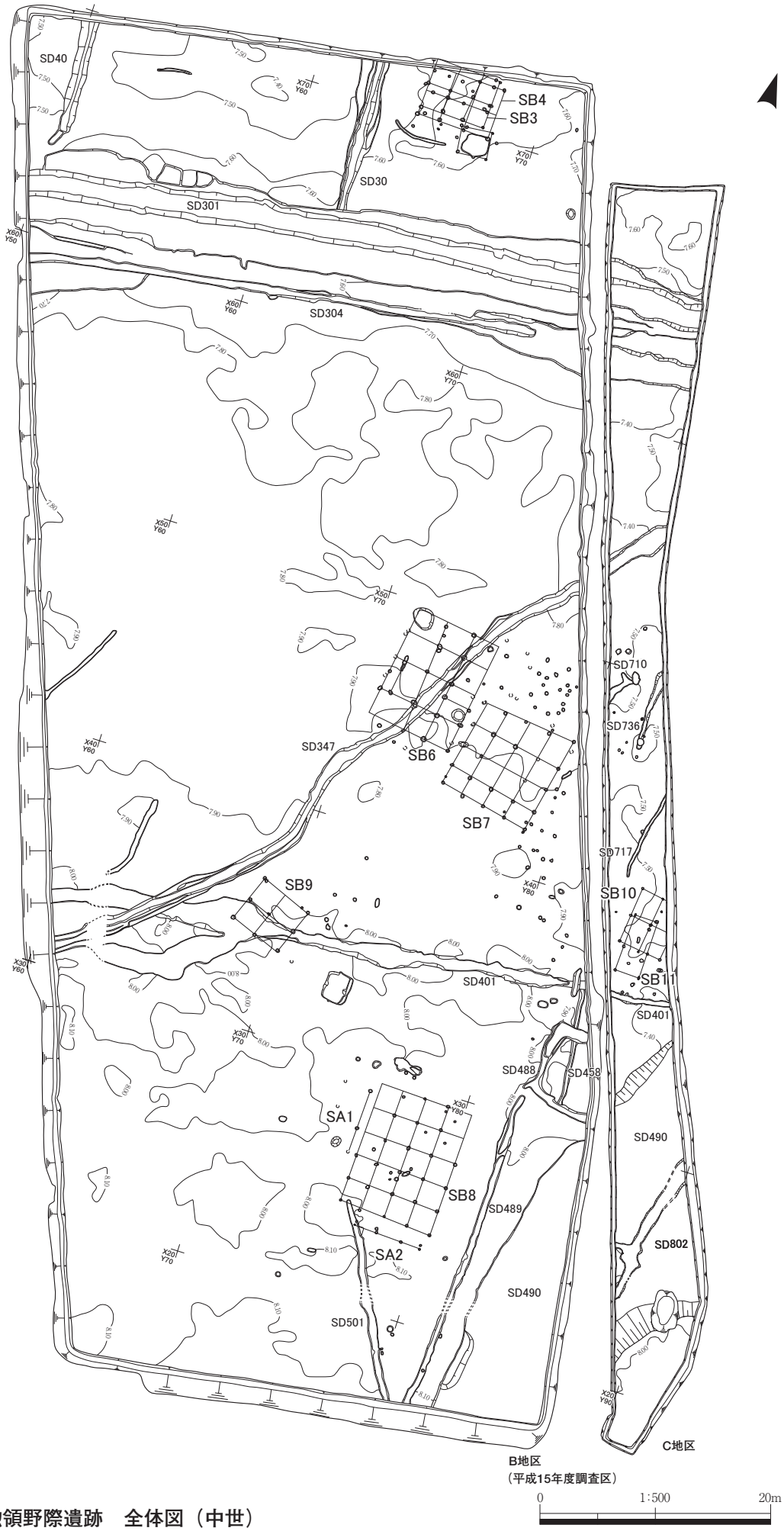


第50図　惣領野際遺跡　全体図（古墳時代）

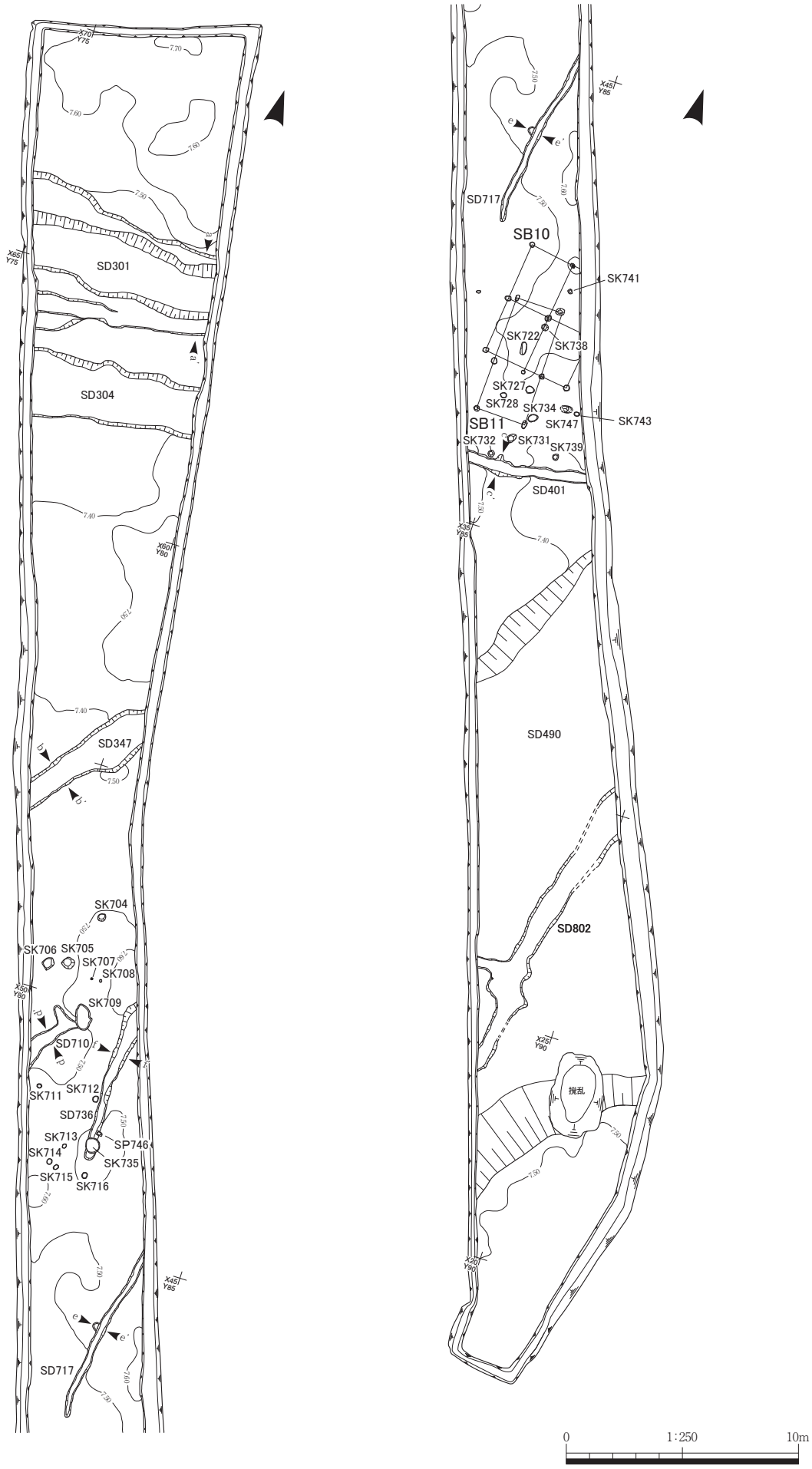


第51図　惣領野際遺跡　遺構実測図

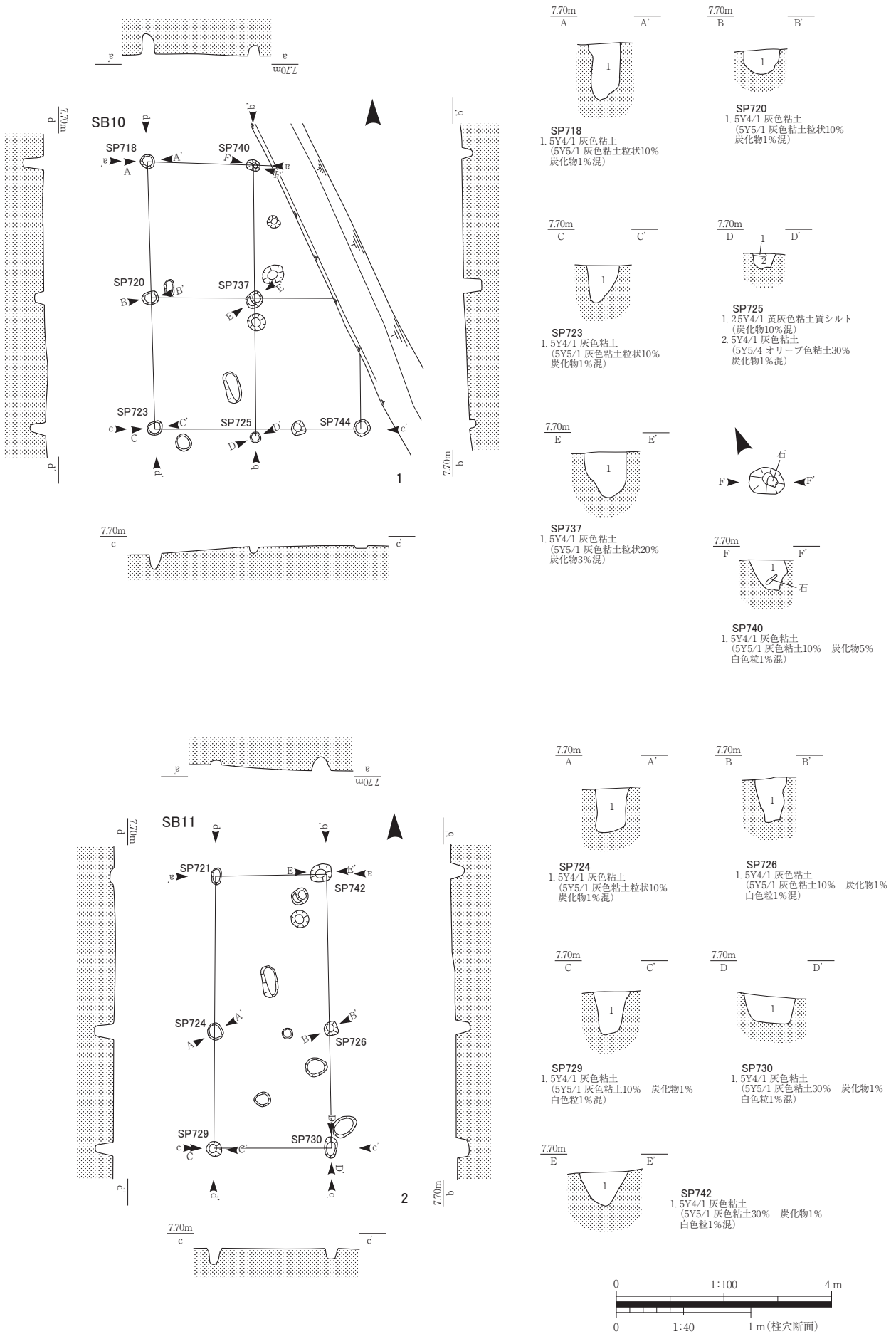
1. SD601　2. SD803　地震痕跡



第52図　惣領野際遺跡　全体図（中世）

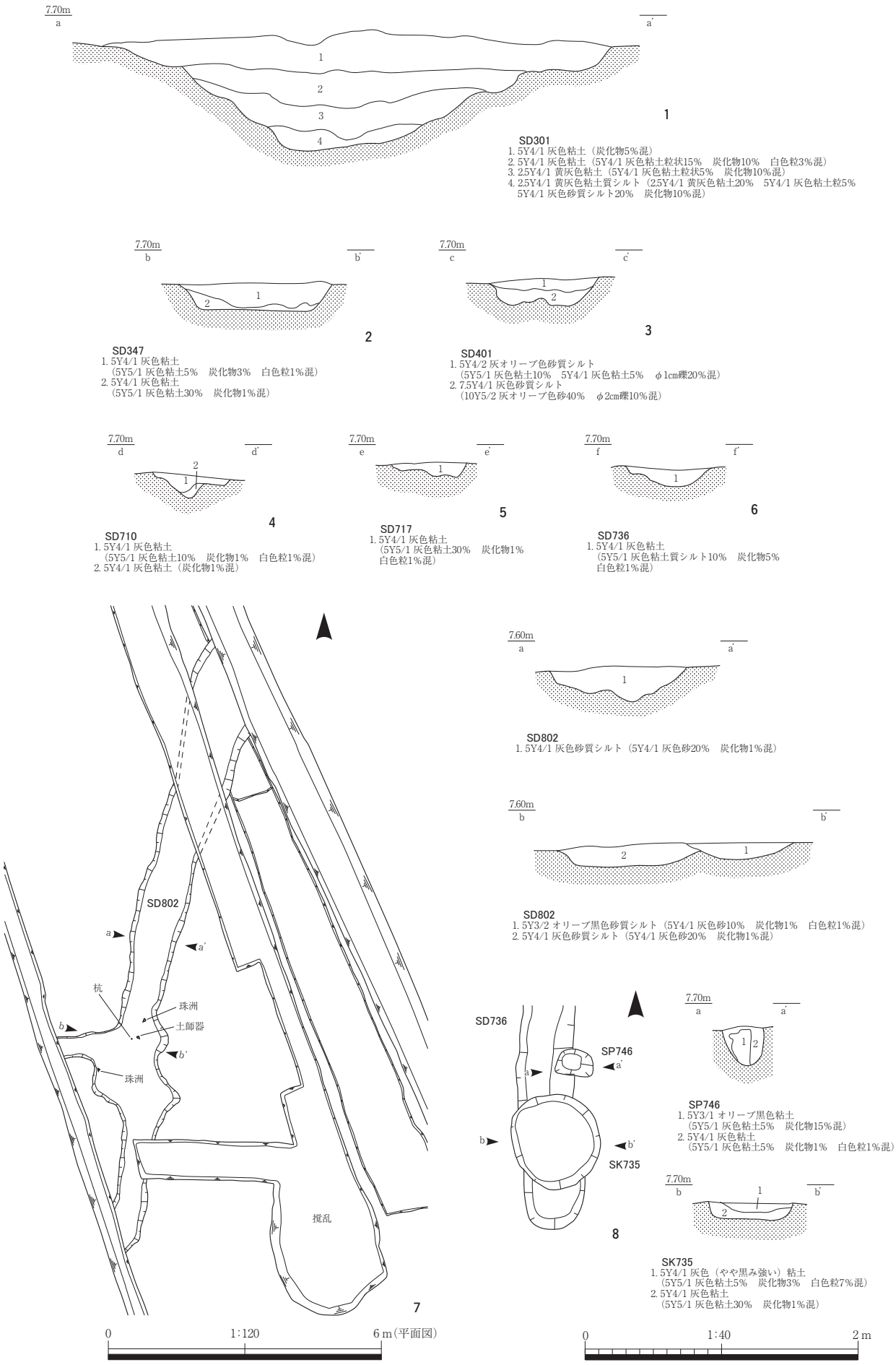


第53図　惣領野際遺跡　全体図（中世）



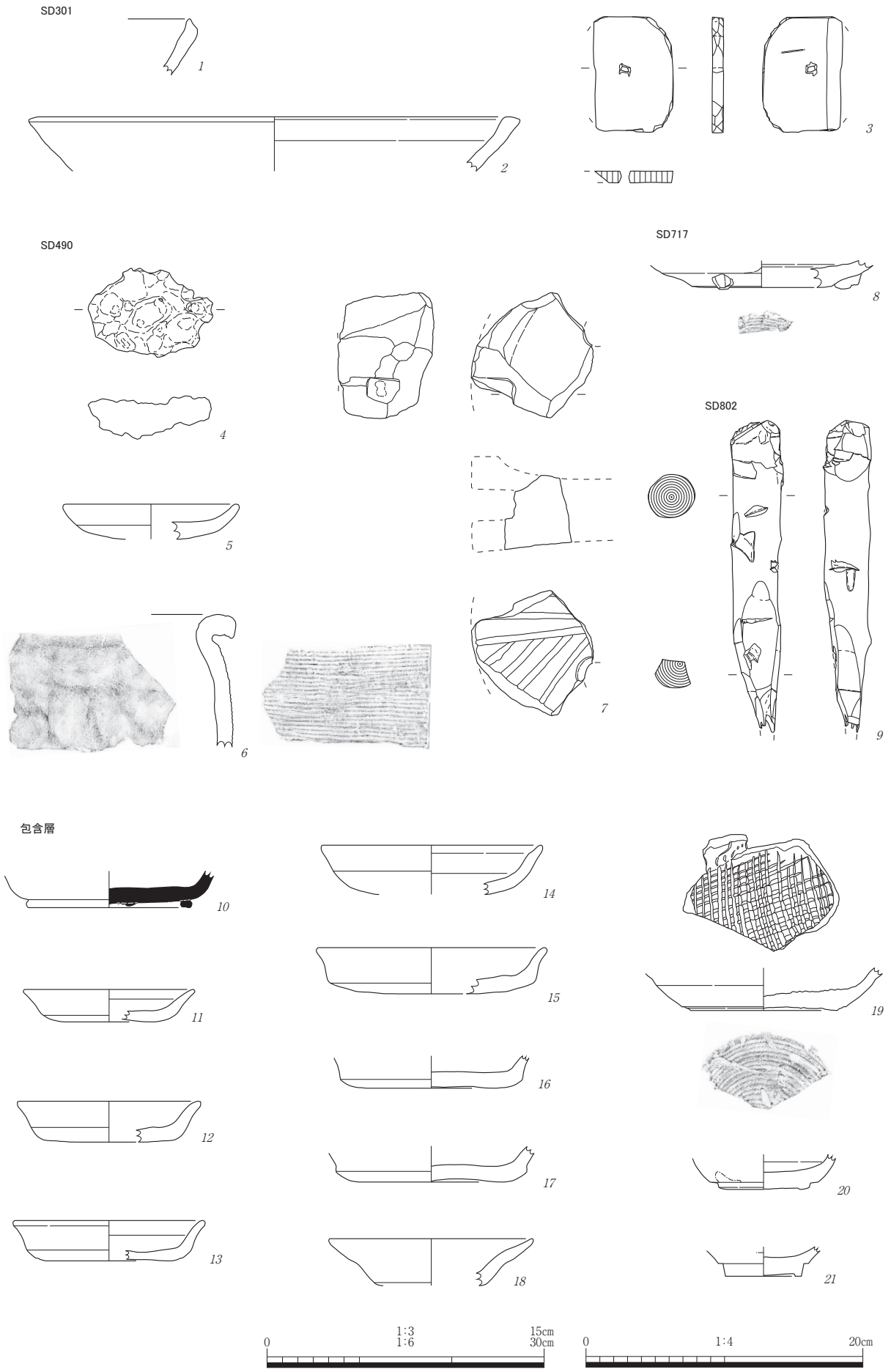
第54図　惣領野際遺跡　遺構実測図

1. SB10　2. SB11

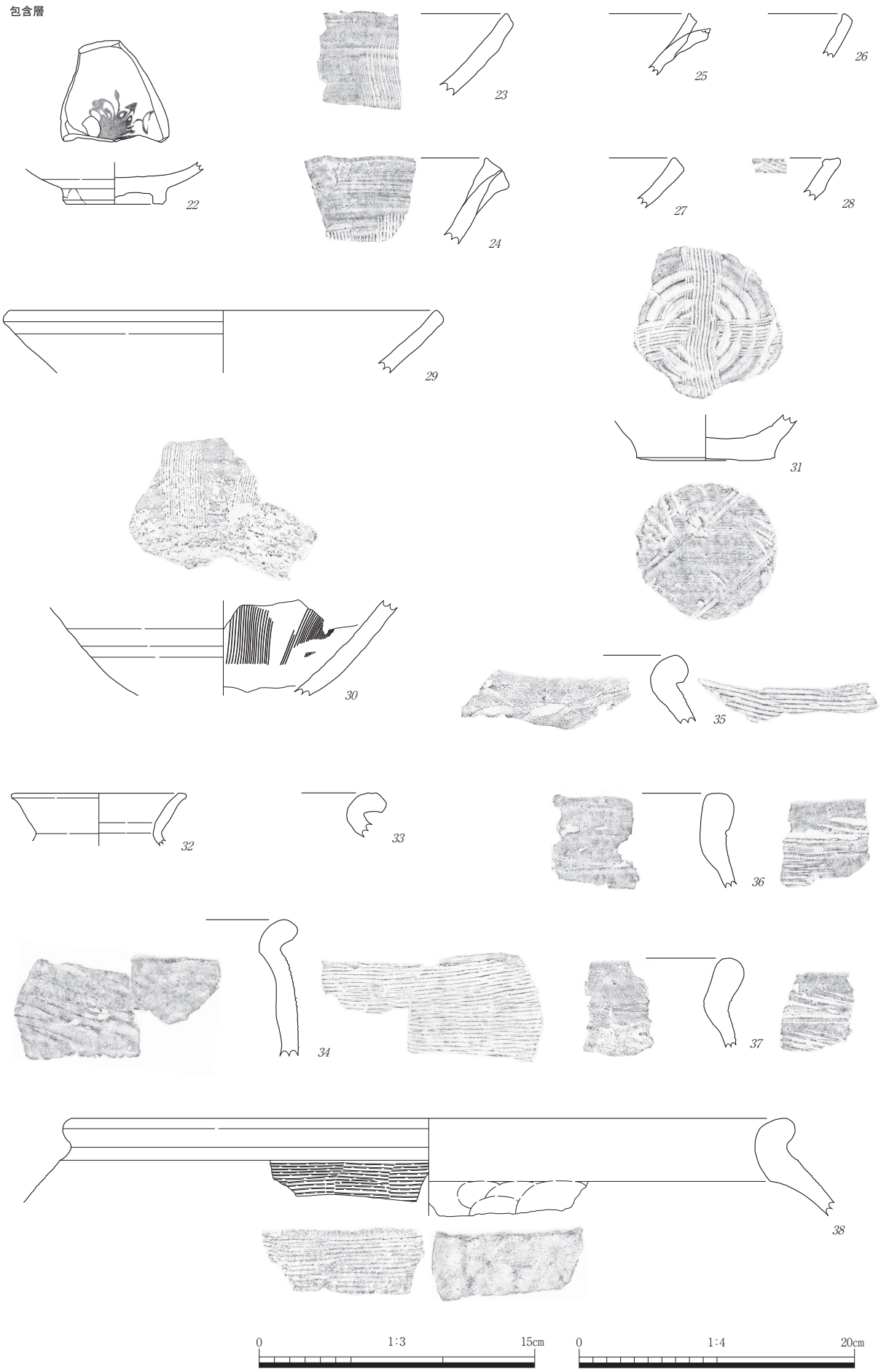


第55図　惣領野際遺跡　遺構実測図

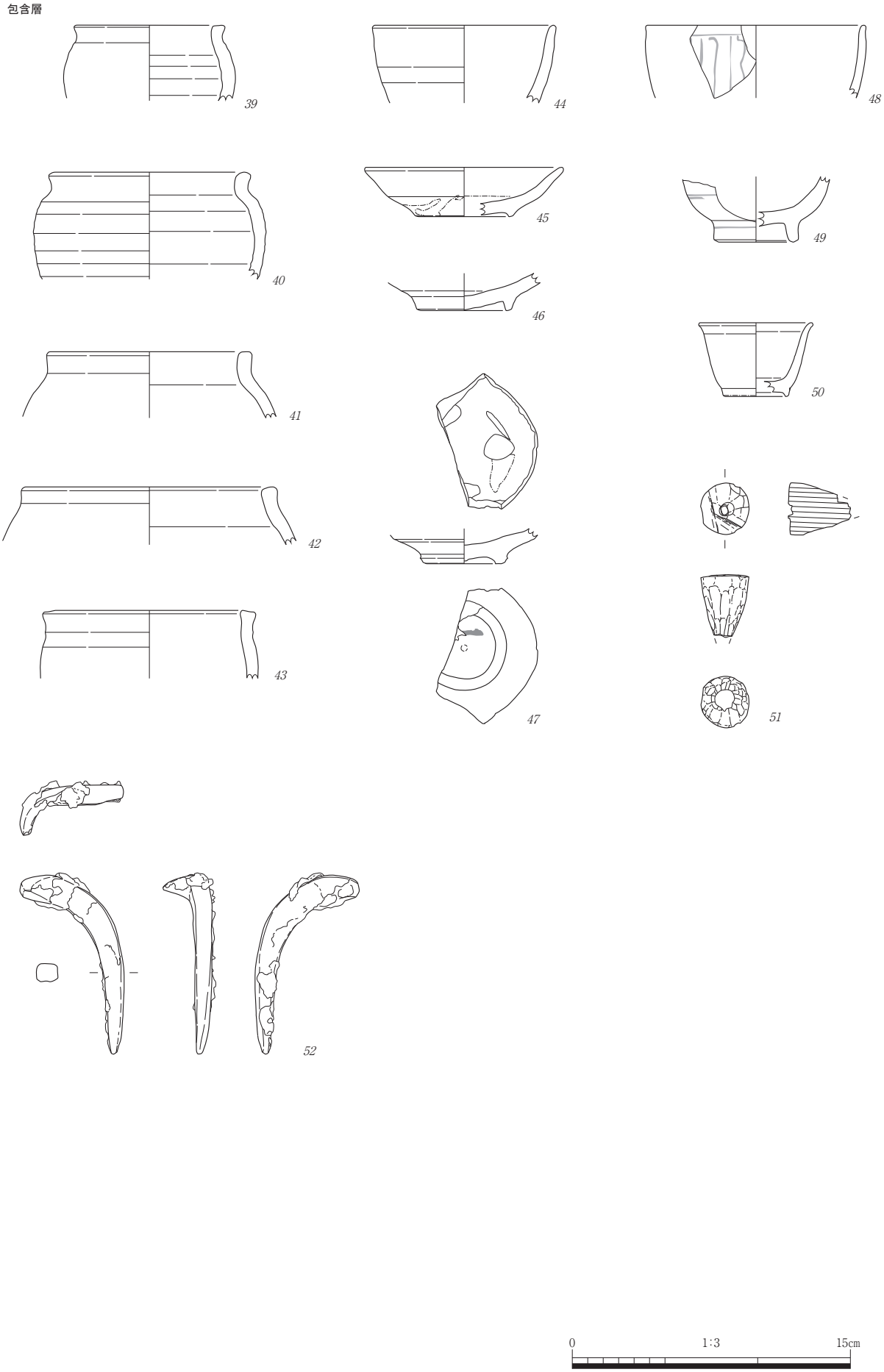
1. SD301　2. SD347　3. SD401　4. SD710　5. SD717　6. SD736　7. SD802　8. SP746　SK735



第56図　惣領野際遺跡　遺物実測図（*3～5・8・10～21*　1/3，*1・2・6*　1/4，*7・9*　1/6）
SD301（*1～3*）　SD490（*4～7*）　SD717（*8*）　SD802（*9*）　包含層



第57図　惣領野際遺跡　遺物実測図（*22*　1/3，*23*～*38*　1/4）
包含層



第58図　惣領野際遺跡　遺物実測図（1/3）
包含層

4　自然科学分析

（1）樹種同定

A　はじめに

富山県氷見市惣領地内に所在する惣領野際遺跡は，氷見市南部にある仏生寺川などの開析によって形成された十三谷とよばれる谷底平野の中央に位置する。遺跡は，仏生寺川とその支流である鞍骨川に挟まれた標高8.5mの沖積地に立地する。仏生寺川を挟んで北側には惣領浦之前遺跡が存在する。

平成26年度に実施されたＣ地区の発掘調査では，上層と下層２面の遺構検出面が確認された。上層からは中世の掘立柱建物，溝，土坑が，下層からは古墳時代の自然流路が検出されている。

本報告では，惣領野際遺跡の発掘調査で出土した木製品について樹種同定を行い，当時の木材利用について検討する。

B　試料と方法

試料は，惣領野際遺跡のＣ地区より出土した杭，独楽，円形板（試料№27～29）の木製品３点である。試料の詳細は，結果とともに第21表に記す。

樹種同定の方法は，次のとおりである。まず，試料からカミソリを用いて新鮮な横断面（木口と同義），放射断面（柾目と同義），接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製した。同定は，生物顕微鏡（Nikon社製ECLIPSE E100）によって40～1000倍で観察し，解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

C　結　果

第21表に結果を示し，主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

第21表　惣領野際遺跡　樹種同定結果

試料№	遺物番号	台帳番号	出土地点	時代	種類	結果（学名／和名）		木取り
27	*9*	M140001	ＳＤ802	中世	杭	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	丸太取り
28	*51*	M140002	Ⅱ層	中世	独楽	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	芯持ち取り
29	*3*	M140003	ＳＤ301	中世	円形板	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ	丸太取り

・マツ属複維管束亜属　*Pinus* subgen. *Diploxylon*　マツ科　　試料№27，№28

仮道管，放射柔細胞，放射仮道管及び垂直，水平樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は急な箇所と穏やかな箇所があり，垂直樹脂道が見られる。放射断面では，放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在する。接線断面では，放射組織が単列の同性放射組織型であるが，水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の特徴からマツ属複維管束亜属に同定される。マツ属複維管束亜属にはクロマツとアカマツがあり，どちらも北海道南部，本州，四国，九州に分布する常緑高木である。材はいずれも水湿によく耐え，広く用いられる。

・スギ　*Cryptomeria japonica* D.Don　スギ科　　試料№29

仮道管，樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行はやや急で，晩材部の幅が比較的広い。放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で，１分野に２個存在するものがほとんどである。放射組織は単列の同性放射組織型で，１～14細胞高ぐらいである。樹脂細胞が存在する。

以上の特徴からスギに同定される。スギは本州，四国，九州，屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で高さ40m，径２mに達する。材は軽軟であるが強靭で，広く用いられる。

D　所　見

樹種同定の結果，惣領野際遺跡出土の木製品は，マツ属複維管束亜属２点，スギ１点であった。

マツ属複維管束亜属は杭，独楽に利用されていた。マツ属複維管束亜属は重硬で水湿に良く耐え，腐りにくい材である。なお，杭としての利用例は各地に多く見られる。独楽の同定例自体はまだ少ないが，マツ属複維管束亜属を利用した例は見ることができる。マツ属複維管束亜属には，土壌条件の悪い岩山に生育し二次林を形成するアカマツと，砂地の海岸林を形成するクロマツとがあり，温帯を中心に広く分布する常緑針葉樹である。

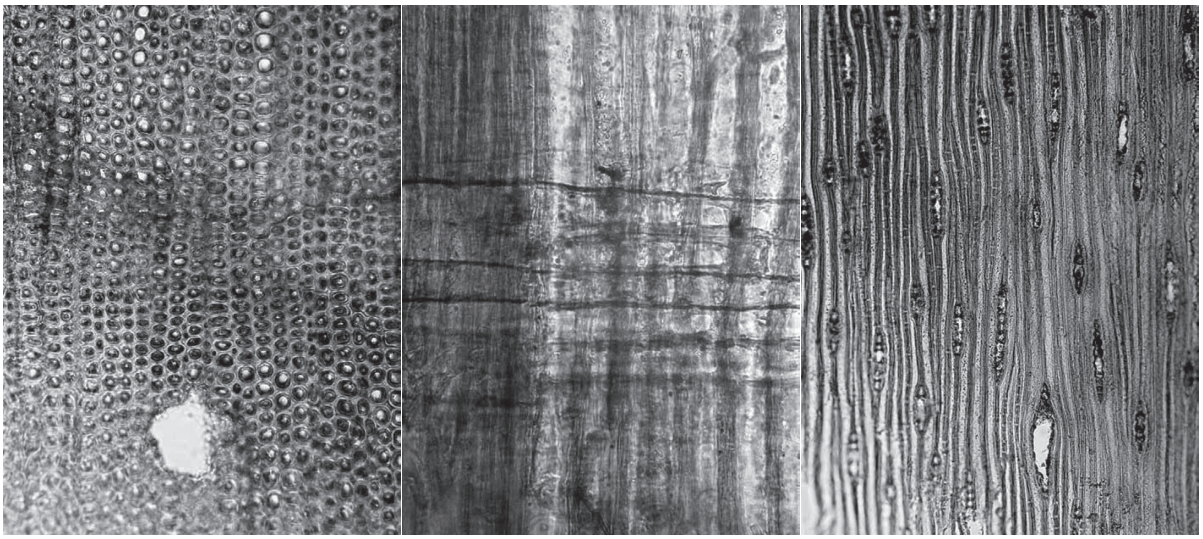
スギは板状に利用されていた。スギは加工工作が容易な上，大きな材がとれる良材で，建築材はもとより板材や小さな器具類に至るまで幅広く用いられる。温帯に広く分布し，特に中間域の積雪地帯で純林を形成する針葉樹で，肥沃で湿潤な土壌を好む。

いずれの樹種も温帯に分布する樹木であり，遺跡周辺に生育していたと考えられる。なお，スギは中部日本海側では地域的な森林要素として供給が多く，加工の容易さや広凡な用途により頻繁に利用される特徴がある。

（株式会社古環境研究所　金原正子・松田隆二）

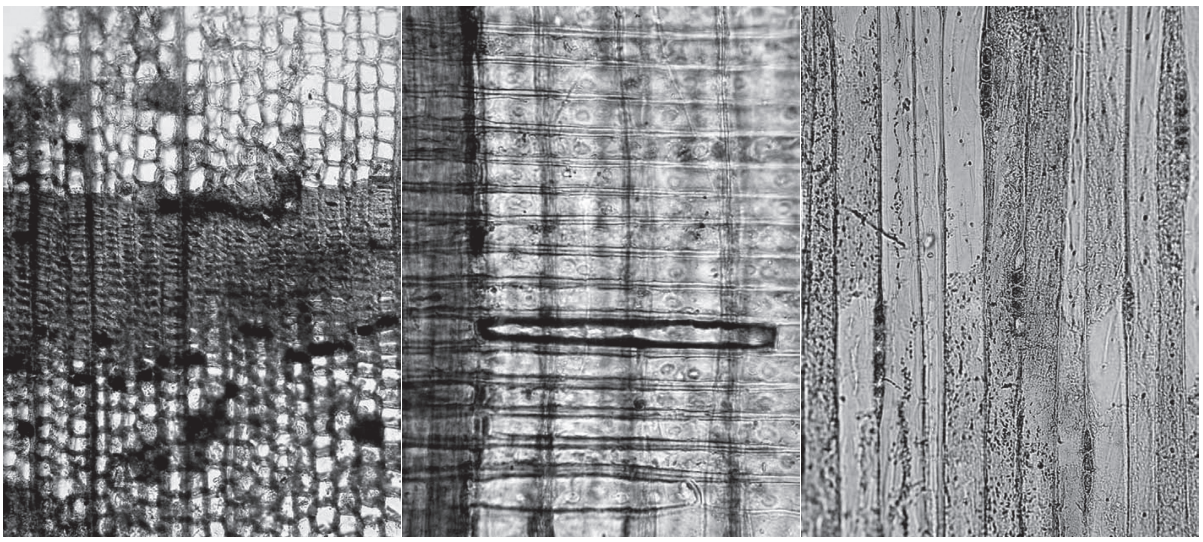
参考文献

伊東隆夫・山田昌久（2012）木の考古学，雄山閣，p.449.
佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.20-48.
佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49-100.
島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，p.296.
山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成，植生史研究特別第１号，植生史研究会，p.242.



横断面　0.1㎜　放射断面　0.1㎜　接線断面　0.1㎜

№27 マツ属複維管束亜属　（*9*）SD802



横断面　0.1㎜　放射断面　0.1㎜　接線断面　0.1㎜

№29 スギ　（*3*）SD301

写真４　惣領野際遺跡の木材

（２）種実同定

Ａ　はじめに

惣領野際遺跡は氷見市内を流れる仏生寺川とその支流の鞍骨川に解析された沖積低地に位置している。遺跡は弥生時代から中近世に至る複合遺跡で，主な時代は古墳時代，中世の２時期である。この報文では，主にＳＤ803から得られた種実遺体群を対象とし，惣領野際遺跡の古墳時代の古植生について検討してみる。

Ｂ　試料と分析方法

試料には大きく２種類ある。一つは発掘調査中に現地で取り上げられた比較的大きな種実遺体である。もう一つは古墳時代前期のＳＤ803の堆積物を定量して，筆者自身が3,500ccをオープニング1.0㎜メッシュの篩で，100ccをオープニング0.25㎜メッシュの篩でそれぞれ水洗選別によって得られた試料である。現地取り上げ試料については，遺構ごとに水漬けの状態で棒瓶に保管されていた。試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡下で観察し，同定は，属，亜属，種の階級で，主に現生標本との対比で行った。

Ｃ　同定結果と分類群の特徴

同定の結果，木本が25分類群，草本が５分類群の合計30分類群が同定された。同定結果を第22表にまとめ，同定の根拠となった形態的特徴を第23表に，また主要な分類群については写真をそれぞれ示した。計数については，部位のみ表記もしくは「完形」は概ね2/3以上が残存している個体を示し，部位の後に「半分」と表記されている個体は概ね1/3～2/3程度の残存の個体を，「破片」としている個体は1/3以下のものをそれぞれ示している。

ａ　分類群の特徴

種実遺体群で木本と草本の種数・個体数をみると，いずれも木本が卓越している。最も多く検出されたのは木本のトチノキである。次に多い分類群としてはサワグルミとブナがつづき，他にイヌシデ，アカメガシワ，ミズキなどがある。以上の６分類群で検出された種実遺体群の大半を占めている。個体数はさほど多くないものの，木本ではオニグルミ，サワシバ，アサダ，コナラ属アカガシ亜属，コナラ属コナラ亜属，ケヤキ，ムクノキ，ホオノキ，マツブサ，ミツバウツギ，カエデ属，ブドウ属，ツバキ属，エゴノキなどがあり，草本では，ミクリ属，カナムグラ，ノブドウ，ツリフネソウ属が検出された。

検出された分類群のうち木本では，コナラ属アカガシ亜属とツバキ属は常緑広葉樹である。それ以外の分類群はいずれも落葉広葉樹であるが，コナラ属のみは常緑広葉樹と落葉広葉樹の両方を含む。これらの中で，照葉樹林の構成要素となるものはコナラ属アカガシ亜属，ムクノキ，ツバキ属である。夏緑広葉樹林の構成要素となるものにはサワグルミ，サワシバ，イヌシデ，アサダ，ブナ，ケヤキ，ホオノキ，トチノキ，エゴノキがある。日当たりの良い開地や伐採地，人里などの人為的な影響下で成立する二次林的要素となる分類群としては，コナラ属コナラ亜属，サンショウ属，アカメガシワ，カエデ属，ブドウ属，ミズキ，クサギ，ガマズミ属が含まれる。コナラ属コナラ亜属の中には落葉広葉樹林の主要構成要素となる分類群も含まれる。ブドウ属やマツブサ，ノブドウは蔓性の植物で林内や林縁などに分布する。オニグルミ，サワグルミ，サワシバ，アサダ，トチノキ，エゴノキなどは沢や河川沿いなど土壌中の水分が多い適潤地に生育する分類群である。ブナは，現在県内の標高800m～1,500mに分布する冷温帯落葉広葉樹林の標徴種となっている。遺跡の後背山地の分水嶺は約260m程度であり，当時，低い山地にまでブナが分布していたことになる。特に，氷見地域の丘陵で

はブナを含む自然度の高い森林が，少なくとも弥生時代終末期まで分布していたことが推定されている（島田2009・2010）。今回の分析結果もそのことと整合的である。また，マツブサについては現在県内の自生は知られていないが，上久津呂中屋遺跡で縄文時代中期末葉の地層から確認されている（島田2009）。草本については大きく水湿地性植物と陸性植物に分けることができる。水湿地性植物ではミクリ属，ミゾソバがあり，溝や湿地状の水域に分布する。陸性植物にはカナムグラがあり，開けた日当たりの良いやや乾燥した場所に分布する。なお，栽培植物とみなされる分類群は確認されていない。

D　古植生について

現在の惣領野際遺跡周辺の植生は，丘陵ではスギ，モウソウチク，コナラなどが植林されている。また，平野は耕作地であり，水田が丘陵の裾部まで広がっている。ここでは，古墳時代における遺跡周辺の植生を，得られた種実遺体群から推定してみる。

古墳時代の植生は，木本と草本と比較すると，木本の方が種数・個体数共に優占している。このことから，丘陵や堆積地周辺には森林が分布していたと推定される。トチノキ，サワグルミ，ブナを中心に，サワシバ，イヌシデ，アサダ，コナラ属コナラ亜属，ケヤキ，ホオノキ，カエデ属，ミズキ，エゴノキなどの落葉広葉樹を主体に，コナラ属アカガシ亜属，ツバキ属の常緑広葉樹を交えた混交林が広がっていたと考えられる。特に，ブナは肥沃で自然度の高い森林を形成することから，豊かな森の存在が推定される。沢や河川沿いの適潤地周辺にはサワシバ，サワグルミ，アサダ，トチノキなどが分布していたと推定される。また，森林内や林縁にはブドウ属やマツブサなどの蔓性植物も分布していたと推定される。

その一方で，草本については水湿地性植物であるミクリ属やミゾソバが検出されていることから，堆積地である溝内や近隣は開けた場所であり，ミクリ属やミゾソバが繁茂していたと推定される。また，溝以外のやや乾燥した場所には陸性植物のカナムグラが分布していたと推定される。

（島田亮仁）

引用・参考文献

泉　治夫　2004　『二上山のブナ林』二上山総合調査研究会
大田　弘・小路登一・長井真隆　1983　『富山県植物誌』廣文堂
粉川昭平・吉井亮一　1984　「江上遺跡群出土の種実遺体」『北陸自動車道遺跡調査報告－上市町木製品・総括編－』上市町教育委員会
島田亮仁　2009　「上久津呂中屋遺跡における弥生時代の古植生と植物利用」『紀要　富山考古学研究』第12号　富山県文化振興財団
2010　「宇波西遺跡における弥生時代終末期の種実遺体群」『紀要　富山考古学研究』第13号　富山県文化振興財団

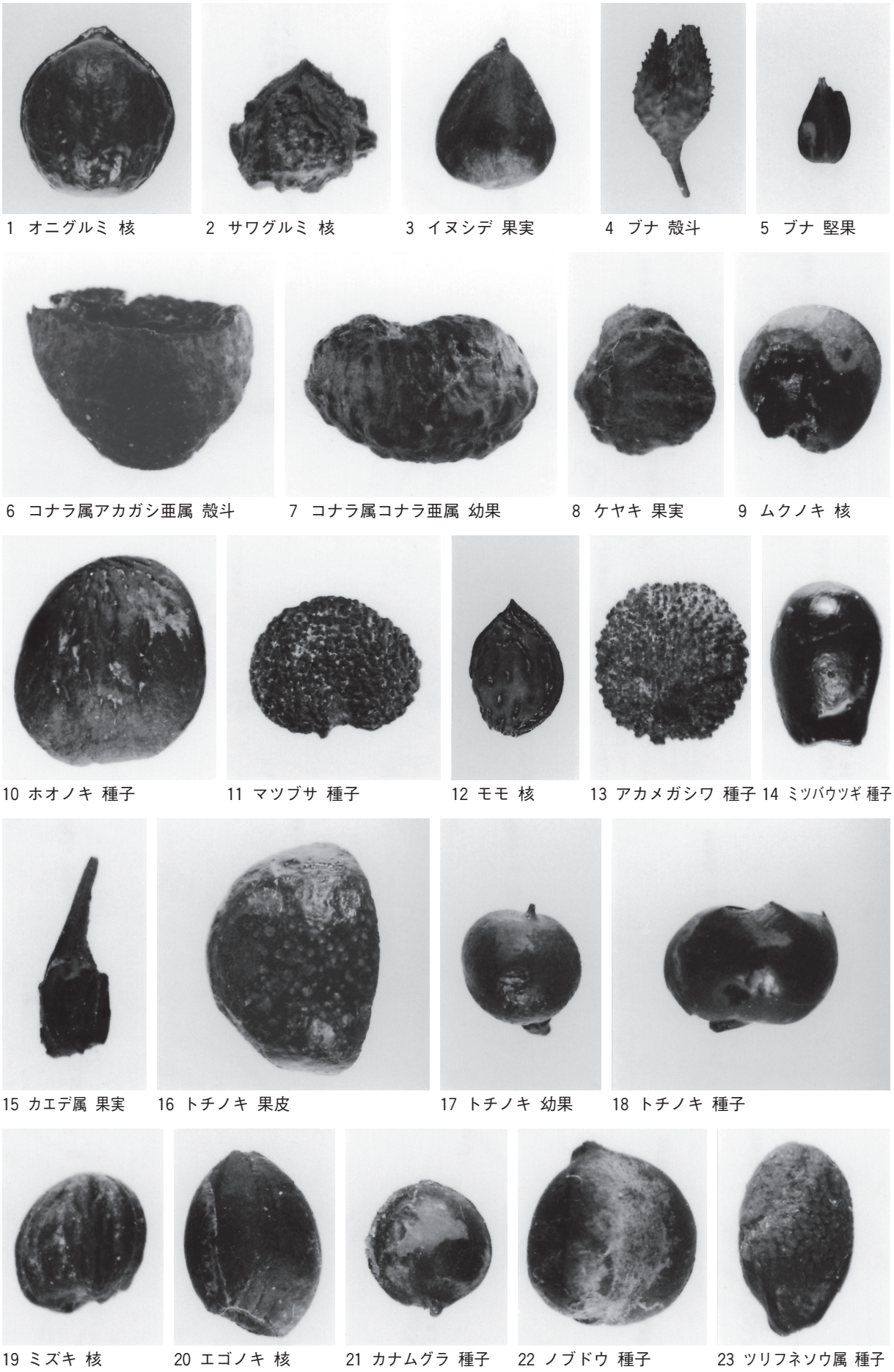
第22表　惣領野際遺跡出土の種実遺体一覧

分類群		部位		05SN					
(和名/学名)				SD803		SD601	SP746	Ⅱ層	Ⅲ層
				オーブニング1㎜ 3,500cc	オーブニング0.25㎜ 100cc	ピート層		X44Y82	X63Y79 砂・ピート互層
木本	arbor								
オニグルミ	*Juglans ailanthifolia* Carr.	核	半分	2					
			破片	1					
サワグルミ	*Pterocarya rhoifolia* Sieb. et Zucc.	核	完形	45					
			半分	21	2				
サワシバ	*Carpinus cordata* Blume	果実	完形	1					
イヌシデ	*Carpinus tschonoskii* Maxim.	果実	完形	15					
			半分	1					
アサダ	*Ostrya japonica* Sarg.	果実	完形	1					
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	殻斗	完形	2					
		幼果	完形	5					
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	殻斗	半分	1					
			破片	2					
		幼果	完形	2					
コナラ属	*Quercus*	堅果	半分	1					
			破片	1					
ブナ	*Fagus crenata* Blume	殻斗	完形	29					2
			半分	13					
			破片	20					
		堅果	完形	8					
			半分	2					
ケヤキ	*Zelkova serrata* Makino	果実	完形	9					
ムクノキ	*Aphananthe aspera* Planch.	核	完形	1					
			半分	2					
ムベ？	*Stauntonia hexaphylla* Decaisne ？	種子	完形	1					
ホオノキ	*Magnolia obovata* Thunb.	種子	完形	1					
			破片	1					
マツブサ	*Schisandra repanda* Radlk	種子	完形	1					
モモ	*Prunus persica* Batsch.	核	完形					1	
サンショウ属	*Zanthoxylum*	種子	完形	1					
アカメガシワ	*Mollotus japonicus* Muell. et Arg.	種子	完形	22					
			破片	9					
ミツバウツギ	*Staphylea bumalda* DC.	種子	完形	1					
カエデ属	*Acer*	果実	完形	2					
			半分	2					
トチノキ	*Aesculus turbinata* Blume	果皮	1/3	4					2
			破片	18					2
			小破片	25					
		種子	完形			1			
			半分						1
			破片	1					1
			小破片	35					
		幼果	完形	56	2				1
			果皮破片	34					1
		未成熟種子	完形	2					
			半分	7					
			破片	3					
ブドウ属	*Vitis*	種子	完形	3					
ツバキ属	*Comellia*	種子	破片	1					
ミズキ	*Cornus controversa* Hemsley	核	完形	14					
			半分	3					
エゴノキ	*Styrax japonica* Sieb. et Zucc.	核	完形	4					
			破片	3			1		
クサギ	*Clerodendron truchotomum* Thunb.	種子	完形	1					
草本	herb								
ミクリ属	*Sparganium*	核	完形	1					
ミゾソバ	*Polygonum thunbergii* Sieb. et Zucc.	果実	完形	1					
カナムグラ	*Humulus japonicus* Sieb. et Zucc.	種子	完形	4					
			半分	2					
ノブドウ	*Ampelopsis brevipedunculata* Trautv	種子	完形	2					
ツリフネソウ属	*Impatiens*	種子	完形	2					
不明	Unknown	果実－種子		17					
合計	Total			469	4	1	1	1	10

第23表　分類群の記載

樹木　arbor
オニグルミ(*Juglans ailanthifolia* Carr.)核；核は茶褐色～暗褐色で，広卵形を呈する。断面は円形で，縫合線が巡る。表面には不規則な隆起がみられる。長さ21.7㎜，幅23.1㎜である。
サワグルミ(*Pterocarya rhoifolia* Sieb. et Zucc.)核；核は淡褐色～暗褐色で，広楕円形を呈する。断面は楕円形で，表面には縦方向に特徴的なな隆起が走る。径3.7～7.3㎜である。
サワシバ(*Carpinus cordata* Blume)果実；果実は茶褐色で，楕円形を呈する。断面は両凸レンズ形で，縦方向に10～12本程度の筋が走る。長さ4.3㎜，幅2.7㎜である。
イヌシデ(*Carpinus tschonoskii* Maxim.)果実；果実は茶褐色で，広卵形を呈する。断面は両凸レンズ形で，縦方向に８～10本程度の筋が走る。長さ4.4～5.0㎜，幅3.1～4.0㎜である。
アサダ(*Ostrya japonica* Sarg.)果実；果実は淡褐色で，長卵形を呈する。断面は両凸レンズ形で，表面は鈍い光沢をもち，縦方向に10本程度の筋が走る。長さ4.1㎜，幅2.9㎜である。
コナラ属アカガシ亜属(*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*)幼果・殻斗；幼果は暗褐色で，広倒卵形を呈する。断面は円形で，表面には輪状に並ぶ総苞片がある。長さ5.9～7.4㎜，幅6.2～7.3㎜である。殻斗は暗褐色で椀形を呈する。表面には輪状に並ぶ総苞片がある。長さ8.2～8.6㎜，幅11.1～14.2㎜である。
コナラ属コナラ亜属(*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*)幼果・殻斗；幼果は暗褐色で，広倒卵形を呈する。断面は円形で，表面の鱗片は覆瓦状に並ぶ。殻斗は半分程度の個体が得られている。暗褐色で，表面の鱗片は覆瓦状に並ぶ。長さ7.0～10.1㎜，幅10.2～10.8㎜である。
コナラ属(*Quercus*)堅果；堅果の破片が得られた。暗褐色で，表面には筋状の模様があり，やや光沢がある。
ブナ(*Fagus crenata* Blume)殻斗・堅果；殻斗は淡褐色～暗褐色で，卵形を呈する。断面は円形で，表面には鈎状の突起がある。果柄が残存している個体がある。長さ16.8～25.5㎜，幅9.7～15.6㎜である。堅果は暗褐色で先端が尖る卵形を呈する。断面は三角形で，表面にはにぶい光沢がある。長さ10.6㎜，幅7.0㎜である。
ケヤキ(*Zelkova serrata* Makino)果実；果実は茶褐色～黒褐色で，腎形を呈する。断面は円形で，基部に円形のヘソがある。ヘソから繊維状の隆起が脈状に走る。長さ4.0～4.3㎜，幅3.5～4.2㎜である。
ムクノキ(*Aphananthe aspera* Planch.)核；核は灰褐色で，広倒卵形を呈する。基部には白色の微突起があり，表面には微細な網目模様がある。長さ6.6～6.9㎜，幅6.4～6.6㎜である。
ムベ？(*Stauntonia hexaphylla* Decaisne ？)種子；種子は黒褐色で，楕円形を呈する。下端にやや大きめな基部がある。表面には光沢があり，筋状の模様がある。長さ9.6㎜，幅5.7㎜である。
ホオノキ(*Magnolia obovata* Thunb.)種子；種子は淡褐色～茶褐色で，先端がやや尖る広卵形を呈する。表面には縦方向に微細な隆起がみられる。種皮は薄くて硬い。長さ10.0㎜，幅9.3㎜である。
マツブサ(*Schisandra repanda* Radlk.)種子；種子は黒褐色で，腎形を呈する。断面は広線形で，表面には瘤状の突起が密布する。長さ6.0㎜，幅4.9㎜である。
モモ(*Prunus persica* Batsch.)核；核は淡褐色～暗褐色で，先端がやや尖る卵形を呈する。断面は楕円形で，側面には縫合線が発達する。表面には特有の大きな隆起がある。長さ20.9㎜，幅15.1㎜，厚さ11.8㎜である。
サンショウ属(*Zanthoxylum*)種子；一端が欠失している個体が得られた。種子は黒色で，倒卵形ないし楕円形を呈する。断面は卵形で，側面には1/3程度の短いヘソがある。表面には網目模様がある。
アカメガシワ(*Mollotus japonicus* Muell. et Arg.)種子；種子は黒色で，円形を呈する。断面は楕円形で，一端に「Y」字状のヘソがある。表面全体には微細な瘤状の突起が密に分布する。径3.9～4.5㎜である。
ミツバウツギ(*Staphylea bumalda* DC.)種子；種子は茶褐色で，楕円形を呈する。断面は楕円形で，下端にややおおきな基部を有する。表面は光沢がある。長さ5.7㎜，幅4.3㎜である。
カエデ属(*Acer*)果実；果実は翼の部分が欠損している。茶褐色で，基部が切形となる楕円形を呈する。断面は円形で，表面には繊維状の微隆起が網目状に走る。長さ4.6～8.2㎜，幅3.6～4.4㎜である。
トチノキ(*Aesculus turbinata* Blume)果皮・幼果・種子・未成熟種子；トチノキの果実は成熟すると三片に裂果するのだが，得られた個体は一片づつとなったものである。暗褐色で，表面には斑紋が分布し，肉厚である。長さ30.6～51.8㎜である。幼果は暗褐色で，倒卵形を呈する。断面は隅丸状の三角形を呈する。長さ7.7～23.8㎜，幅4.5～18.6㎜である。種子は球形を呈し，暗褐色である。表面は光沢のある部分とない部分がある。種皮は薄くて硬い。径20.6～32.9㎜である。未成熟種子は完形の個体が多い。
ブドウ属(*Vitis*)種子；種子は茶褐色～暗褐色で，倒卵形を呈する。断面は楕円形で，腹面には２カ所に孔があり，背面には楕円形のヘソがある。長さ4.1～5.0㎜，幅3.2～3.7㎜である。
ツバキ属(*Comellia*)種子；種子の破片が得られた。淡褐色で，一カ所に付き部がある。種皮は薄くて硬い。
ミズキ(*Cornus controversa* Hemsley)核；核は淡褐色で，扁円形を呈する。断面は楕円形で，表面には縦方向に数条の隆起が発達する。径4.6～5.0㎜である。
エゴノキ(*Styrax japonica* Sieb. et Zucc.)核；淡褐色～茶褐色で，楕円形を呈する。一端には大きなヘソがある。断面は円形で，表面には３条の浅い溝が走る。長さ9.2～9.8㎜，幅5.6～6.9㎜である。
クサギ(*Clerodendron truchotomum* Thunb.)核；核は黒灰色で，倒卵形を呈する。断面は楕円形で，腹面は平滑，背面は大きな網目模様がある。長さ5.9㎜，幅4.8㎜である。
草本　herb
ミクリ属(*Sparganium*)果実；一端が欠失している個体が得られた。果実は淡褐色で，楕円形を呈す。断面は円形で，表面には縦方向に数条の溝が走る。果皮は硬い。
ミゾソバ(*Polygonum thunbergii* Sieb. et Zucc.)果実;実は茶褐色で先端が尖る広卵形を呈する。基部には果柄がみられる。断面は三角形で，表面には微細な網目模様がみられる。長さ4.4㎜，幅1.8㎜である。
カナムグラ(*Humulus japonicus* Sieb. et Zucc.)種子；灰黄褐色で，円形を呈する。断面は両凸レンズ形で，基部に心形のヘソがある。果皮は硬く，表面はやや粗い。径4.1～4.2㎜である。
ノブドウ(*Ampelopsis brevipedunculata* Trautv)種子；種子は黒灰色で，断面は円形で，腹面には２カ所に孔があり，背面にはカラザが長く伸びる。長さ4.0～4.2㎜，幅4.1～4.6㎜である。
ツリフネソウ属(*Impatiens*)種子；種子は茶褐色で，倒卵形を呈する。断面は楕円形で，表面には脈状に隆起があり，やや光沢がある。長さ4.5～4.7㎜，幅2.5～2.6㎜である。

写真５　惣領野際遺跡出土の種実遺体群



1 オニグルミ 核　2 サワグルミ 核　3 イヌシデ 果実　4 ブナ 殻斗　5 ブナ 堅果

6 コナラ属アカガシ亜属 殻斗　7 コナラ属コナラ亜属 幼果　8 ケヤキ 果実　9 ムクノキ 核

10 ホオノキ 種子　11 マツブサ 種子　12 モモ 核　13 アカメガシワ 種子　14 ミツバウツギ 種子

15 カエデ属 果実　16 トチノキ 果皮　17 トチノキ 幼果　18 トチノキ 種子

19 ミズキ 核　20 エゴノキ 核　21 カナムグラ 種子　22 ノブドウ 種子　23 ツリフネソウ属 種子

5㎜ 1，4，12，16，17，18
5㎜ 5
1㎜ 2，6，7，9，10，15，19，20
1㎜ 3，8，11，14，21
1㎜ 13，22，23

5　総　括

今回調査したＣ地区では，平成15年度に調査したＢ地区の遺構群の延長となる古墳時代と中世の２時期の遺構を確認した。調査面積が狭いため得られた知見は多くはないが，ここではそれぞれの時代の遺構の概要に若干の考察を加えて総括としたい。

（１）古墳時代

古墳時代の遺構は自然流路２条で，このうち北側を流れるＳＤ601は，平成15年度の調査で古墳時代前期の木製品が多く出土した自然流路の延長部分であるが，今回の調査区では種実等の自然遺物しか出土せず，古墳時代の集落は西方の上流域に存在したとする前回の調査報告の見解をさらに裏付ける結果となった。南側にあるＳＤ803についても自然遺物しか出土しておらず，沖積平野の堆積作用の中で形成され埋没していった自然流路と考えられる。

（２）中世（第59図）

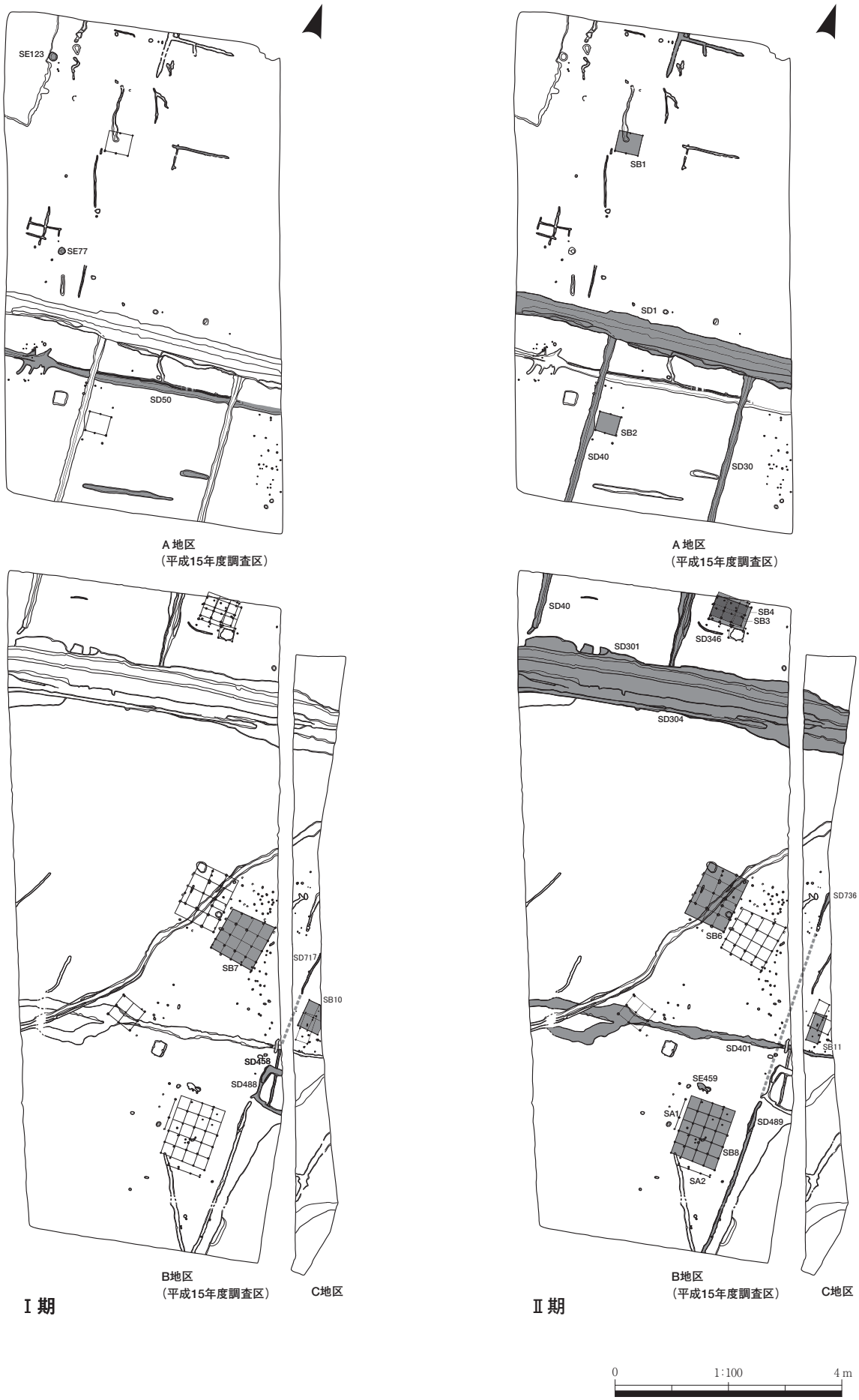
中世の遺構は掘立柱建物と溝が主な遺構であり，主軸方向が若干異なる２棟の建物が重複することから２時期に大きく分かれると考えられる。溝は，小規模ながら土地の境界を示す溝と考えられ，方向を同じくする建物と溝は同時期である可能性が高い。Ｃ地区内での同時期性の高い建物・溝の組み合わせはＳＢ10・ＳＤ717，ＳＢ11・ＳＤ736となり，前者にはＢ地区のＳＢ７が，後者にはＡ・Ｂ地区のＳＢ１～４・６・８が方向をほぼ同じくする。また，溝の方向からＳＤ717はＳＤ458またはＳＤ488に，ＳＤ736はＳＤ489につながる可能性が高い。ＳＤ736･489はＳＤ30･40とも方向が近似している。

Ａ・Ｂ地区の調査報告では，出土遺物の年代から遺跡の時期は13～14世紀と推定されている。柱穴から出土した礎盤等の放射性炭素年代はＳＢ６～８は13世紀後半となっているが，ＳＢ６とＳＢ７は距離が近すぎることから時期差があるとされている。溝については，ＳＤ１が13～14世紀，ＳＤ301・304が14世紀，ＳＤ40が13世紀後半と推定されており，これらと方向をほぼ同じくするＳＢ１～４は同時期の建物とされている。また，ＳＤ50は，切り合いからＳＤ30・40に先行する溝とされており，Ａ地区の井戸ＳＥ77・123は井戸枠等の放射性炭素年代から13世紀前半とされている。

以上から，Ｃ地区のみならずＡ～Ｃ地区全体においても大きく２時期に分けることが可能と考える。切り合い関係がないためＳＢ７・10が他の建物に先行する確証は得ないが，遺跡全体の出土遺物が概ね13～14世紀におさまり，総柱建物で，他の建物と主軸方向が似ており，建物規模にもあまり差がないことから，隔絶した時期の建物ではないと考えられ，集落に大規模な溝が開削される以前の建物群とみておきたい。

以上をまとめると，Ⅰ期は，丘陵裾に近く標高がわずかではあるが高くなっている南側の地域が居住域で，北側は耕地でやや規模の大きい水路ＳＤ50を主としていくつかの平行する小規模な溝が耕地を区画し，耕作に使用されたであろう井戸が設けられる。Ⅱ期は，居住域は変わらず，耕地には灌漑のための大規模な水路が開削され，耕地の管理等に使用されたであろう倉庫のような小規模な建物（ＳＢ１・２）が点在するようになる。ＳＢ３・４は中規模の建物であるが，耕作に関わる施設であろうか。各期の年代は，Ⅰ期を13世紀前半～中頃，Ⅱ期を13世紀後半～14世紀と考えておきたい。

氷見市では現地踏査により条里遺構が確認されており，惣領に近い布施地区や飯久保地区など，仏生寺川流域の平野部でもほぼ東西・南北の方角に沿って区画される条里地割が確認されている（中山



第59図　惣領野際遺跡　中世遺構変遷図

1956)。やや谷奥となる惣領では条里遺構が確認された記載はないが，惣領野際遺跡で検出した溝群の方向は東西・南北の方角に近く，中世前期の条里地割を示すものと考えられる。惣領の地名は至徳２（1385）年，足利義満が越中国耳浦庄のうち惣領分地頭職を飯尾兼行に安堵した記事が初出で，成立に関する史料はないが，上庄川流域の阿努庄の成立に関する史料は永暦元（1160）年の「前太政大臣家政所下文案」にあり[注1]，耳浦庄の成立も鎌倉時代に溯る可能性がある。発掘調査の結果から，遺跡周辺では13世紀前半には条里地割に則った開墾が進んでいたと考えられ，惣領野際遺跡の中世の遺構は耳浦庄に関連する遺構である可能性が高いと考えられる。

第60図　氷見平野の条里復原図（中山1956に一部加筆）

出土遺物のうち特記しておきたいものには，木製の鞭独楽がある。独楽は駒・高麗・胡魔の意をもつもので，鞭打って魔を追い払うというまじないの性格をもったものとされ[注2]，このような定型化した玩具は，中世になると，需要層が地方の武士，有力農民クラスの館，特定の経済的結節点の集落の構成員にまで広がったとされる[注3]。またＡ地区からは全国的にも出土例が少なく，城館遺跡や寺院の伝世品等の他にはあまりみられない青磁人物像が出土している[注4]。これらのような出土品からも当遺跡周辺が荘園に関連する集落であったことが推測される。

以上，惣領野際遺跡の概要について述べたが，今回の調査区で検出した遺構は東側に延びるとみられ，遺跡の範囲は東方へ広がっている可能性が高い。今後，より詳細な調査研究の進展が期待される。

（越前慎子）

注

注１　氷見市史編さん委員会　1998『氷見市史３資料編一　古代・中世・近世(1)』

注２　水野正好　1985「招福・除災－その考古学－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第７集

注３　山村信榮　1998「あそびの世界」『考古学による日本歴史12芸術・学芸とあそび』雄山閣出版

注４　石川ゆずは　2004「青磁人物像（燭台）について－惣領野際遺跡出土資料の紹介を兼ねて－」『紀要　富山考古学研究』第７号　富山県文化振興財団

参考文献

安芸毬子　2001「出土した人形と玩具」『加賀殿再訪　東京大学本郷キャンパスの遺跡』東京大学出版会

富山県　1976『富山県史通史編Ⅰ原始･古代』

富山県文化振興財団　2010『惣領浦之前遺跡・惣領野際遺跡発掘調査報告』

中山有志　1956「氷見平野における条里遺制」『越中史壇』第９巻

氷見市史編さん委員会　2002『氷見市史７資料編五　考古』

氷見市史編修委員会　1963『氷見市史』

第24表　惣領野際遺跡　建物一覧

建物	地区	種別	桁行(m)		梁行(m)		面積(㎡)	棟方位	柱穴規模(m)		柱間距離(m)		出土遺物	時期	挿図	写真図版
									径	深さ	桁行	梁行				
ＳＢ10	C	南北棟総柱	2間	4.95	2間	3.90	19.31	N-6°-E	0.20～0.32	0.11～0.42	2.44～2.48	1.92～1.98	土師器	中世	54	29
ＳＢ11	C	南北棟側柱	2間	5.09	1間	2.12	10.79	N-2°-E	0.24～0.37	0.07～0.34	2.19～2.90	1.95～2.16	土師器・珠洲	中世	54	29

第25表　惣領野際遺跡　柱穴一覧

建物番号	遺構番号	旧遺構番号	平面形	規模(m)			出土遺物	時期	切り合い	備考	挿図	写真図版
				長さ	幅	深さ						
ＳＢ10	ＳＰ718	C－ＳＫ18	円	0.25	0.24	0.42		中世			54	29
	ＳＰ720	C－ＳＫ20	円	0.27	0.24	0.18	土師器				54	29
	ＳＰ723	C－ＳＫ23	円	0.25	0.25	0.29					54	29
	ＳＰ725	C－ＳＫ25	円	0.20	0.17	0.11					54	29
	ＳＰ737	C－ＳＫ37	円	0.32	0.28	0.34					54	29
	ＳＰ740	C－ＳＫ40	楕円	0.27	0.20	0.23					54	29
	ＳＰ744	C－ＳＫ44	円	0.28	0.26	0.19					54	29
ＳＢ11	ＳＰ721	C－ＳＫ21	楕円	0.28	0.19	0.07		中世			54	29
	ＳＰ724	C－ＳＫ24	円	0.30	0.24	0.33					54	29
	ＳＰ726	C－ＳＫ26	円	0.24	0.26	0.34	土師器				54	29
	ＳＰ729	C－ＳＫ29	円	0.28	0.26	0.32					54	29
	ＳＰ730	C－ＳＫ30	楕円	0.37	0.22	0.23					54	29
	ＳＰ742	C－ＳＫ42	円	0.36	0.32	0.25	珠洲				54	29
	ＳＰ746	C－ＳＫ46	楕円	0.29	0.18	0.29	板材・種実		＞ＳＤ736		55	29

第26表　惣領野際遺跡　溝・自然流路一覧

遺構番号	旧遺構番号	種類	規模(m)		出土遺物	時期	切り合い	備考	挿図	写真図版
			幅	深さ						
ＳＤ301	C－ＳＤ1	溝	4.00	0.89	土師器・須恵器・中世土師器・珠洲・板材	中世			55	30
ＳＤ304	C－ＳＤ2	溝	2.50	0.15		中世				
ＳＤ347	C－ＳＤ3	溝	1.30	0.22		中世			55	30
ＳＤ401	C－ＳＤ33	溝	0.60	0.21	土師器	中世			55	
ＳＤ490	C－ＳＤ45	自然流路	18.00	0.33	土師器・須恵器・中世土師器・珠洲・越前・石臼・鉄滓	中世				
ＳＤ601	C－ＳＤ101	自然流路	4.80	0.90	種実	古墳			51	27
ＳＤ710	C－ＳＤ10	溝	0.60	0.19		中世			55	30
ＳＤ717	C－ＳＤ17	溝	0.40	0.11	古瀬戸	中世			55	30
ＳＤ736	C－ＳＤ36	溝	0.70	0.14		中世	＜ＳＰ746・ＳＫ735		55	30
ＳＤ802	C－ＳＤ102	溝	1.20	0.30	土師器・珠洲・杭	中世			55	30
ＳＤ803	C－ＳＤ103	自然流路	2.30	(0.82)	種実	古墳			51	27

第27表　惣領野際遺跡　土坑一覧

遺構番号	旧遺構番号	平面形	規模(m)			出土遺物	時期	切り合い	備考	挿図	写真図版
			長さ	幅	深さ						
ＳＫ704	C－ＳＫ4	円	0.38	0.32	0.13	土師器	中世				
ＳＫ705	C－ＳＫ5	隅丸方	0.49	0.49	0.14		中世				
ＳＫ706	C－ＳＫ6	隅丸方	0.49	0.46	0.07		中世				
ＳＫ707	C－ＳＫ7	円	0.13	0.13	0.24		中世				
ＳＫ708	C－ＳＫ8	円	0.15	0.13	0.22		中世				
ＳＫ709	C－ＳＫ9	楕円	1.10	0.62	0.08		中世				
ＳＫ711	C－ＳＫ11	円	0.20	0.20	0.22		中世				
ＳＫ712	C－ＳＫ12	円	0.30	0.28	0.11		中世				
ＳＫ713	C－ＳＫ13	円	0.24	0.20	0.11		中世				
ＳＫ714	C－ＳＫ14	円	0.26	0.24	0.18		中世				
ＳＫ715	C－ＳＫ15	楕円	0.28	0.20	0.12		中世				
ＳＫ716	C－ＳＫ16	円	0.30	0.26	0.27		中世				
ＳＫ719	C－ＳＫ19	楕円	0.21	0.13	0.14		中世				
ＳＫ722	C－ＳＫ22	楕円	0.56	0.28	0.10		中世				
ＳＫ727	C－ＳＫ27	円	0.40	0.34	0.14		中世				
ＳＫ728	C－ＳＫ28	円	0.27	0.25	0.31		中世				
ＳＫ731	C－ＳＫ31	楕円	0.44	0.30	0.45		中世				
ＳＫ732	C－ＳＫ32	円	0.30	0.30	0.33		中世				
ＳＫ734	C－ＳＫ34	楕円	0.46	0.34	0.26		中世				
ＳＫ735	C－ＳＫ35	円	0.68	0.62	0.14		中世	＞ＳＤ736		55	
ＳＫ738	C－ＳＫ38	円	0.32	0.32	0.35	土師器	中世				
ＳＫ739	C－ＳＫ39	円	0.30	0.30	0.28		中世				
ＳＫ741	C－ＳＫ41	円	0.24	0.22	0.41		中世				
ＳＫ743	C－ＳＫ43	楕円	0.28	0.20	0.16		中世				
ＳＫ747	C－ＳＫ47	楕円	(0.57)	0.30	0.32		中世				

第28表　惣領野際遺跡　土器・陶磁器・土製品一覧（１）

挿図	遺物番号	写真図版	地区	遺構番号	出土地点	種類	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	時期	詳細時期	胎土色調		胎土の特徴	釉薬	釉色調		残存率(%)	備考
56	1	32	C	S D301		珠洲	擂鉢				中世	Ⅱ期(13C第１～第２四半期)	5Y6/1	灰色	白色粒 骨針					
	2	32	C	S D301	X65Y79	珠洲	擂鉢	35.4			中世	Ⅳ２期(1320～1350年代)	2.5Y7/2	灰黄色	白色粒				6	二次被熱
	5	31	C	S D490	X29Y87　X34Y86Ⅱ層	中世土師器	皿	9.4			中世	13～14C	10YR7/4	にぶい黄橙色	赤色粒 骨針				15	
	6	32	C	S D490	X28Y90	珠洲	甕				中世	Ⅲ期(13C中葉頃～1270年代)	5Y6/1	灰色	白色粒 骨針					
	8	31	C	S D717	X44Y84	古瀬戸	筒型香炉			7.6	中世	古瀬戸後Ⅰ～Ⅱ期 (14C後半～15C初)	2.5Y8/2	灰白色	白色粒	灰釉	5Y7/3	浅黄色	(底)11	内面煤付着
	10		C		X69Y76Ⅱ層	須恵器	杯B			9.0	古代	８～９C	5Y6/1	灰色	白色粒				(底)23	
	11	31	C		X39Y87Ⅱ層	中世土師器	皿	9.0	1.8		中世	13～14C	7.5YR8/4	浅黄橙色	赤色粒 骨針				35	
	12	31	C		X39Y86Ⅱ層	中世土師器	皿	10.0	2.2		中世	13～14C	2.5Y6/2	灰黄色	黒色粒 骨針				31	
	13	31	C		X44Y82Ⅱ層	中世土師器	皿	10.5	2.2		中世	13～14C	10YR5/2	灰黄褐色	赤色粒　黒色粒 骨針				29	
	14	31	C		X54Y80Ⅱ層	中世土師器	皿	12.0			中世	14C	10YR7/3	にぶい黄橙色	赤色粒 骨針				4	
	15	31	C		X57Y81Ⅱ層	中世土師器	皿	12.4	2.5		中世	13～14C	7.5YR7/2	明褐灰色	赤色粒				6	
	16	31	C		X61Y78Ⅱ層	中世土師器	皿				中世	13～14C	2.5Y7/3	浅黄色	赤色粒 骨針					
	17	31	C		X58Y81Ⅱ層	中世土師器	皿				中世	13～14C	7.5YR6/4	にぶい橙色	赤色粒　白色粒 骨針					
	18	31	C		X44Y84Ⅱ層	中世土師器	皿	11.2			中世	15C～	7.5YR6/3	にぶい褐色	赤色粒 骨針				10	二次被熱
	19	31	C		X54Y81Ⅱ層	古瀬戸	卸皿			8.0	中世	古瀬戸前Ⅳ～中Ⅲ期 (13C後半～14C中頃)	2.5Y7/2	灰黄色	黒色粒	灰釉	7.5Y6/3	オリーブ黄色	(底)35	
	20	31	C		X27Y91Ⅰ層	古瀬戸	小鉢			5.0	中世	古瀬戸後Ⅲ～Ⅳ期 (15C第２四半～中頃)	2.5Y8/2	灰白色	白色粒	灰釉	5Y7/3	浅黄色	(底)58	
	21	31	C		X49Y83Ⅰ層	瀬戸美濃	天目茶椀			4.0	中世	大窯Ⅰ段階(1480～1530年)	7.5YR7/3	にぶい橙色	黒色粒	錆釉 鉄釉	2.5YR3/1 2.5Y2/1	暗赤灰色 黒色	(底)85	
57	22	31	C		X20Y92Ⅰ層	中国製青磁	椀			5.2	中世	G期(14C初頭～後半)	2.5Y8/1	灰白色		青磁釉	7.5Y7/1		(底)56	龍泉窯系青磁椀Ⅳ類イ
	23	32	C		X27Y88Ⅱ層	珠洲	擂鉢				中世	Ⅲ期(13C中葉頃～1270年代)	5Y7/1	灰白色	白色粒 黒色粒					
	24	32	C		X28Y90Ⅱ層	珠洲	片口鉢				中世	Ⅳ１期(1280～1310年代)	5Y6/1	灰色	白色粒 骨針					
	25	32	C		X42Y83Ⅱ層	珠洲	片口鉢				中世	Ⅲ期(13C中葉頃～1270年代)	5Y7/1	灰白色	白色粒 黒色粒					
	26	32	C		X64Y78Ⅱ層	珠洲	擂鉢				中世	Ⅲ期(13C中葉頃～1270年代)	5Y7/1	灰白色	白色粒 骨針					
	27	32	C		X27Y80Ⅱ層　X27Y88Ⅱ層	珠洲	擂鉢				中世	Ⅳ１期(1280～1310年代)	2.5Y7/1	灰白色	白色粒 黒色粒					
	28	32	C		X44Y85Ⅱ層	珠洲	擂鉢				中世	Ⅳ２期(1320～1350年代)	2.5Y6/1	黄灰色	白色粒					口縁部波状文
	29	32	C		X27Y88Ⅱ層	珠洲	擂鉢	31.0			中世	Ⅲ期(13C中葉頃～1270年代)	5Y7/1	灰白色	白色粒 骨針				13	
	30	32	C		X48Y82Ⅰ層　X53Y81Ⅰ層	珠洲	擂鉢				中世	Ⅲ～Ⅳ期(13C中葉～1370年代)	10YR6/4	にぶい黄橙色	白色粒 骨針					二次被熱　内面煤付着
	31	32	C		X64Y78Ⅱ層	珠洲	擂鉢			10.0	中世	Ⅱ～Ⅲ期(13C第１四半～1270年代)	5Y5/1	灰色	赤色粒　白色粒 骨針				(底)100	
	32	32	C		X66Y75Ⅰ層	珠洲	壺	12.8			中世	13～14C	N6/0	灰色	白色粒 骨針				9	
	33	32	C		X26Y90Ⅱ層	珠洲	甕				中世	Ⅲ期(1250～1270年代)	N6/0	灰色	白色粒 骨針					
	34	32	C		X62Y78Ⅱ層　X70Y78Ⅱ層	珠洲	甕				中世	Ⅳ期(1280～1370年代)	5Y6/1	灰色	白色粒 骨針					
	35	32	C		X33Y90Ⅱ層	珠洲	甕				中世	Ⅳ期(1280～1370年代)	2.5Y6/1	黄灰色	白色粒 骨針					

第28表　惣領野際遺跡　土器・陶磁器・土製品一覧（２）

挿図	遺物番号	写真図版	地区	遺構番号	出土地点	種類	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	時期	詳細時期	胎土色調		胎土の特徴	釉薬	釉色調		残存率(%)	備考
57	36	32	C		X82Y60Ⅰ層	珠洲	甕				中世	Ⅴ期(1380～1440年頃)～	2.5Y6/1	黄灰色	白色粒　砂粒 骨針					
	37	32	C		X21Y94Ⅱ層	珠洲	甕				中世	Ⅴ期(1380～1440年頃)～	2.5Y6/1	黄灰色	白色粒　砂粒 骨針					
	38	32	C		X25Y90Ⅲ層	珠洲	甕	53.2			中世	Ⅵ期(1450～1470年代)	5Y6/1	灰色	白色粒　石英 骨針				8	
58	39	33	C		X72Y77Ⅰ層	越中瀬戸	壺	8.2			近世	16C末～17C	5Y6/2	灰オリーブ色	白色粒　石英	錆釉	10YR4/2	灰黄褐色	8	
	40	33	C		X40Y86Ⅰ層	越中瀬戸	壺	11.0			近世	16C末～17C	10YR7/3	にぶい黄橙色	白色粒	錆釉	2.5YR3/1	暗赤灰色	15	
	41	33	C		X40Y86Ⅰ層	越中瀬戸	壺	11.2			近世	16C末～17C	10YR7/3	にぶい黄橙色	赤色粒 白色粒	錆釉	2.5YR4/1	赤灰色	13	
	42	33	C		X60Y79Ⅰ層	越中瀬戸	壺	14.0			近世	16C末～17C	2.5Y7/3	浅黄色	白色粒	錆釉	5YR4/2	灰褐色	8	
	43	33	C		X59Y77Ⅰ層	越中瀬戸	建水 or 匣鉢	11.6			近世	16C末～17C	7.5YR7/4	にぶい橙色	赤色粒 白色粒	錆釉	5YR4/2	灰褐色	14	
	44	33	C		X59Y77Ⅰ層	越中瀬戸	丸椀	9.8			近世	16C末～17C	7.5Y6/1	灰色	黒色粒 白色粒	鉄釉	5YR4/4	にぶい赤褐色	11	
	45	33	C		X41Y86Ⅱ層	越中瀬戸	皿	10.7	2.7	5.4	近世	Ⅱ期(17C初～前半)	10YR7/3	にぶい黄橙色	赤色粒 白色粒	灰釉	2.5Y8/2	灰白色	8　(底)23	
	46	33	C		X34Y88Ⅱ層	越中瀬戸	皿			5.2	近世	16C末～17C	2.5Y6/2	灰黄色	白色粒	鉄釉	10YR3/2	黒褐色	(底)38	内外面煤付着 二次被熱か
	47	33	C		X70Y76Ⅰ層	唐津	皿			4.4	中世	Ⅱ期(1610～1650年代)	2.5Y7/1	灰白色	白色粒	灰釉	5Y7/1	灰白色	(底)53	高台内墨書か　砂目積
	48	33	C		X66Y77Ⅰ層	伊万里	椀	11.8			近世	1650～1660年代	5Y8/1	灰白色		透明釉			8	染付2.5PB5/3 くすんだ青色
	49	33	C		X37Y87Ⅱ層	伊万里	椀			4.6	近世	1650～1660年代	5Y8/1	灰白色		透明釉			(底)16	染付2.5PB5/3 くすんだ青色　二次被熱
	50	33	C		X38Y86Ⅱ層	伊万里	小杯	6.2	4.0	3.6	近世	1650～1740年代	7.5Y8/1	灰白色		透明釉			23　(底)19	

第29表　惣領野際遺跡　木製品一覧

挿図	遺物番号	写真図版	地区	遺構番号	出土地点	種類	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	樹種	木取り	備考
56	3	33	C	ＳＤ301	X66Y74	円形板	6.3	(4.3)	0.6	スギ		孔１箇所
	9	33	C	ＳＤ802	No. 2	杭	33.1	5.0	4.5	マツ属複維管束亜属	芯持ち材	
58	51	33	C		X45Y85Ⅱ層	独楽	(3.4)	2.6	2.8	マツ属複維管束亜属	芯持ち材	

第30表　惣領野際遺跡　石製品一覧

挿図	遺物番号	写真図版	地区	遺構番号	出土地点	種類	法量(cm・g) 長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
56	7	33	C	ＳＤ490	X26Y89	石臼(上臼)	(13.3)	(12.9)	7.9	1670	凝灰質砂岩	

第31表　惣領野際遺跡　金属製品一覧

挿図	遺物番号	写真図版	地区	遺構番号	出土地点	種類	法量(cm・ｇ) 長さ	幅	厚さ	重さ	備考
56	4	33	C	ＳＤ490	X29Y89	鉄滓	4.9	6.8	2.0	70.60	
58	52	33	C		X33Y87　Ⅱ層	鉤状	9.7	5.7	1.2	74.69	

中波後山遺跡　遠景・全景

1. 遠景（北西から） 2. 全景（南から）

中波後山遺跡　集石遺構・平坦地

1. SX1（西から）　2. 上段平坦地（南西から）

中波後山遺跡　集石遺構

1. SX1石仏出土状況（東から）　2. SX1珠洲(*6*)出土状況（北から）　3・4. SX1珠洲出土状況
5. SX1-P1検出状況（東から）　6. SX1-P1断面（南から）　7. SX2・8～10（北東から）　8. SX12（南から）

図版 4

宇波ウワノ遺跡　遠景

1. 遠景（東から）　2. 遠景（北から）

宇波ウワノ遺跡　全景

1.　B地区全景（真上から）　2.　B地区全景（北から）

宇波ウワノ遺跡　竪穴建物（弥生時代）

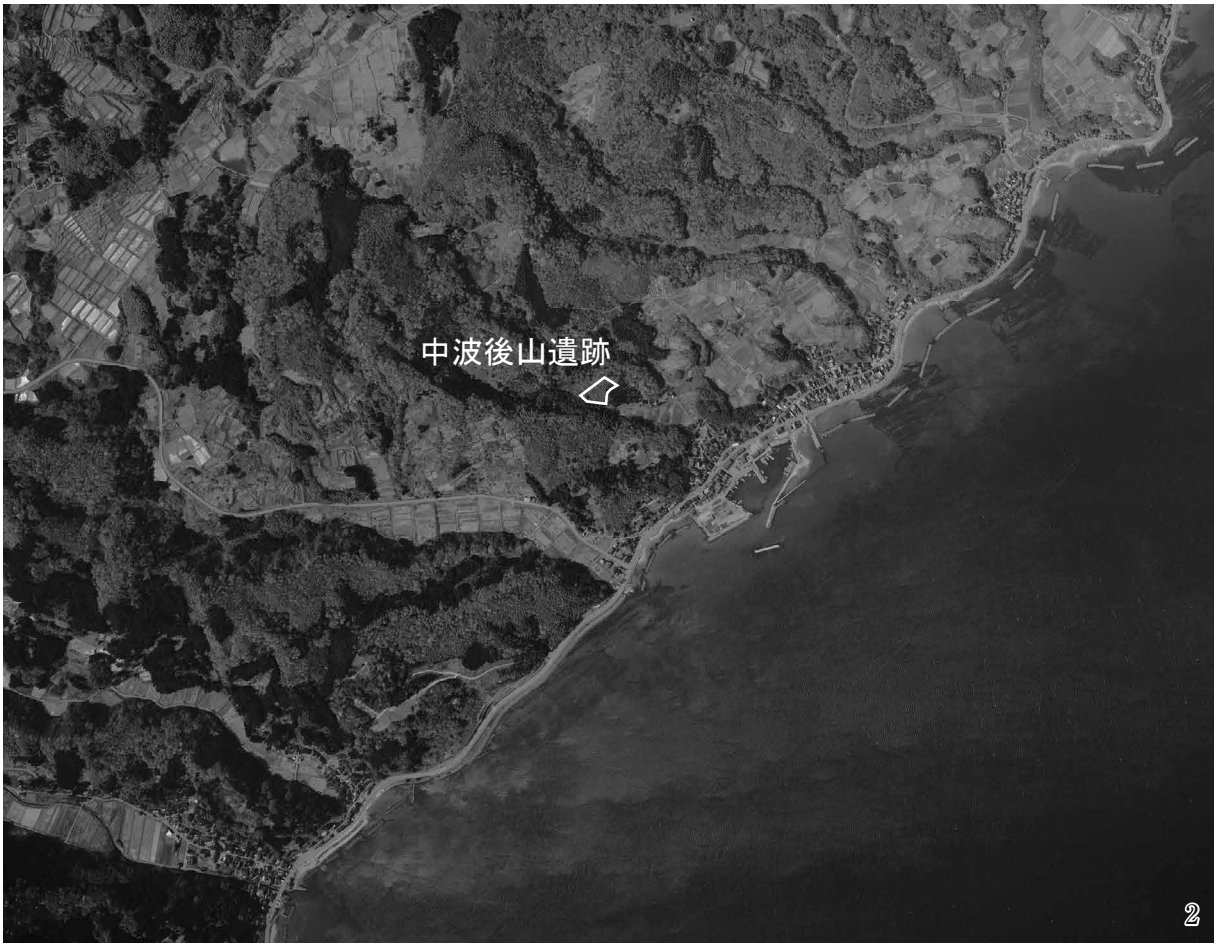
1･2. SI1炭層検出状況（西から）　3･4. SI1断面（東から）　5･6. SI1断面（北から）　7. SI1-K1土器出土状況（東から）
8. SI1-K1完掘（北から）

宇波ウワノ遺跡　集石遺構（中世）

1. SX1（南東から）　2. SX1（西から）

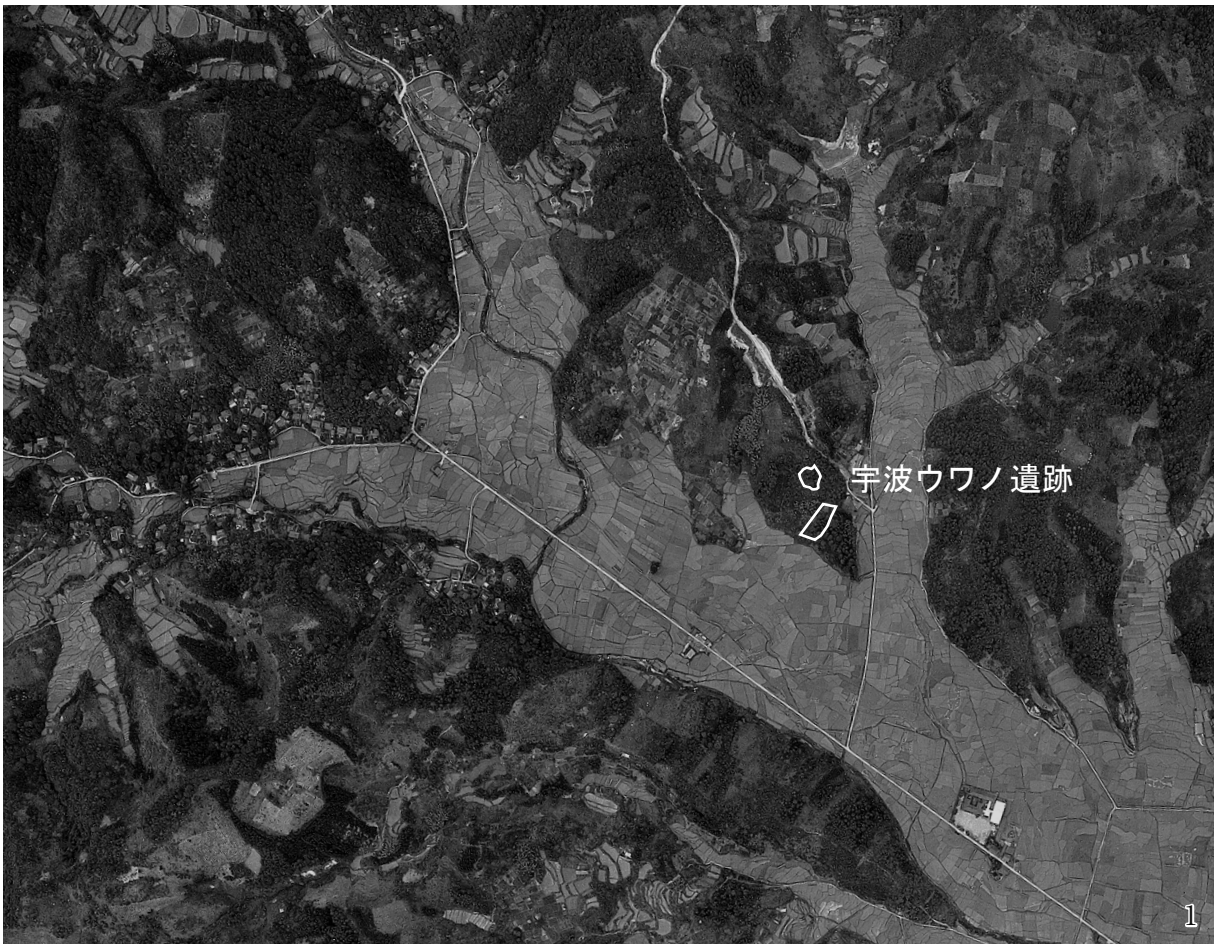
宇波ウワノ遺跡　集石遺構・焼土坑（中世・古代）

1. SX1断面（南から）　2. SX1現況（北から）　3. SX1砥石出土状況（南から）　4. SK6断面（南東から）
5. SK6完掘（南東から）　6・7. A地区作業風景



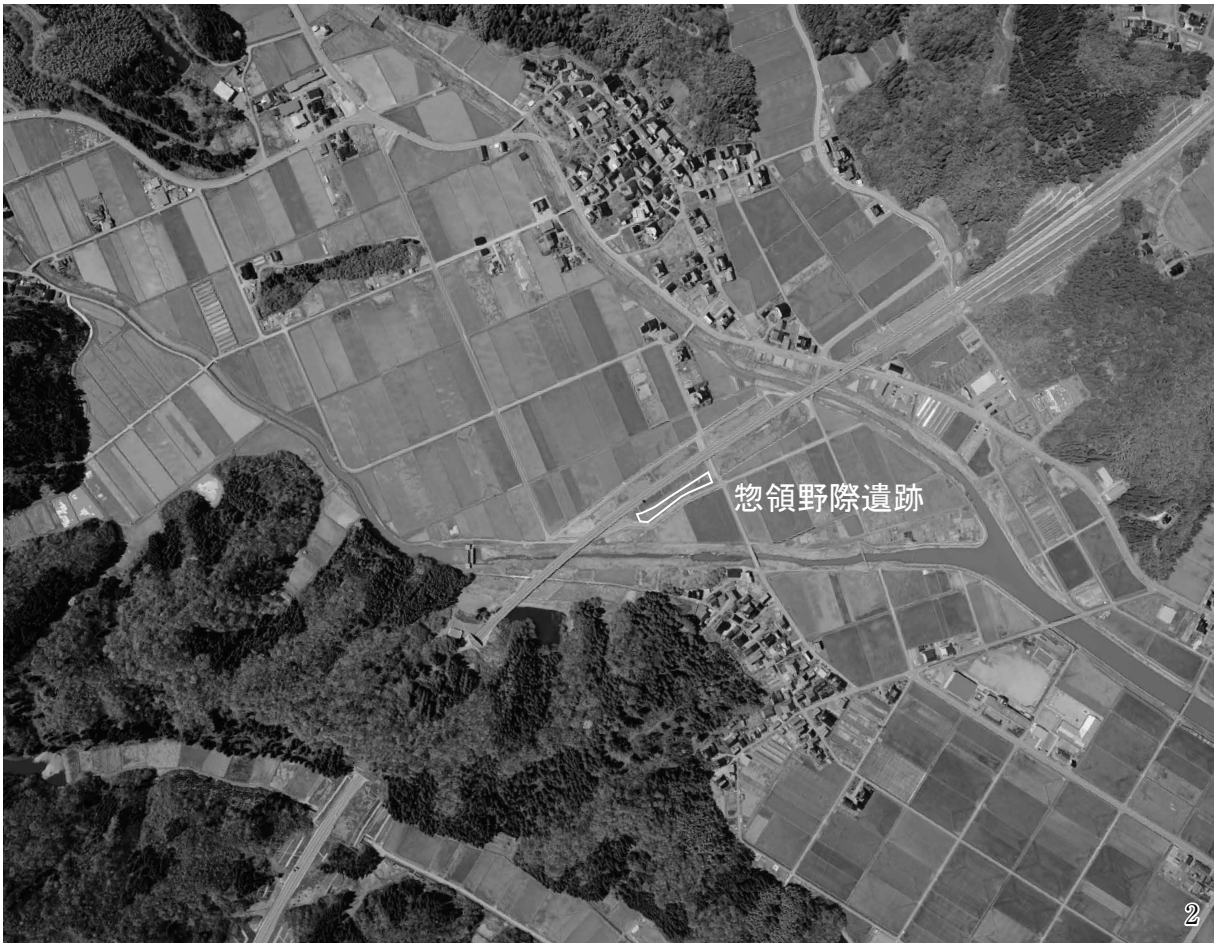
中波後山遺跡　航空写真

1. 1963年米軍撮影　2. 2010年国土地理院撮影



宇波ウワノ遺跡　航空写真

1. 1963年米軍撮影　2. 2009年国土地理院撮影



惣領野際遺跡　航空写真

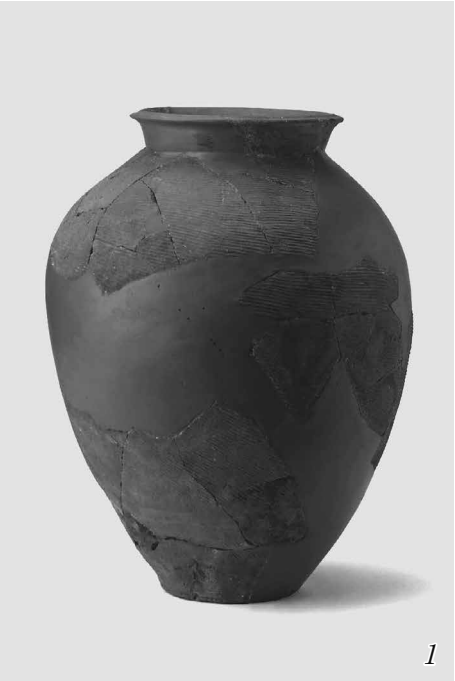
1. 1952年米軍撮影　2. 2009年国土地理院撮影

中波後山遺跡　集石遺構

1. SX1（北から）　2. SX1盛土除去後（北から）

中波後山遺跡　集石遺構

1. SX1周辺（北西から）　2. 上段平坦地（北東から）



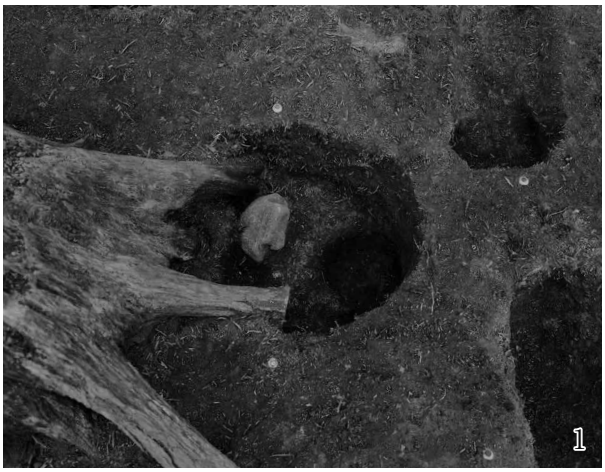
中波後山遺跡　珠洲・石仏
SX1（*1・6・10・11*）

宇波ウワノ遺跡　全景

1. Ａ地区全景（北西から）　2. Ａ地区全景（南西から）

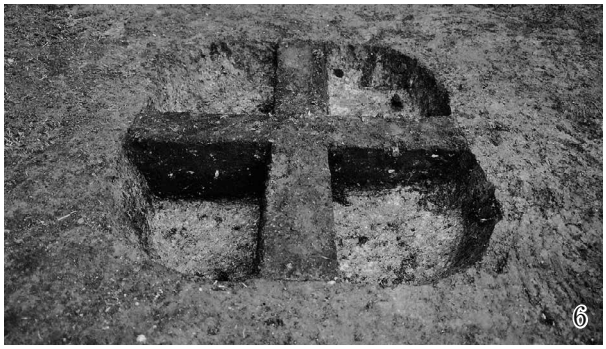
宇波ウワノ遺跡　竪穴建物（弥生時代）

1. SI1（南から）　2. SI1（西から）



宇波ウワノ遺跡　竪穴建物（弥生時代）

1. SI1-P1（西から） 2. SI1-P2（西から） 3. SI1-P3（北から） 4. SI1-P3（南から） 5. SI1-P4（南から）
6. SI1壁溝（北から） 7. SI1台石出土状況（西から） 8. SI1弥生土器出土状況（北から）

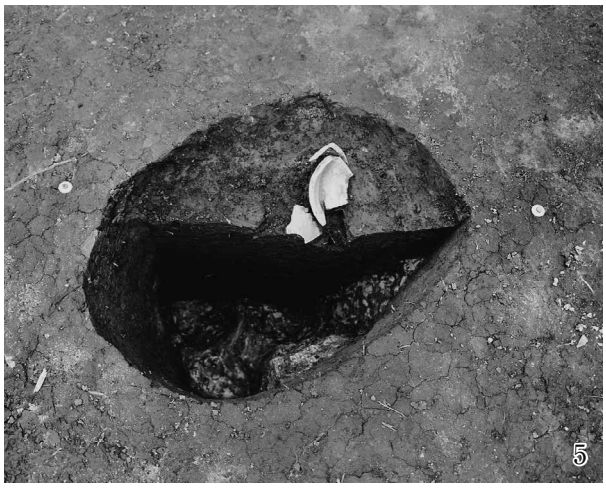


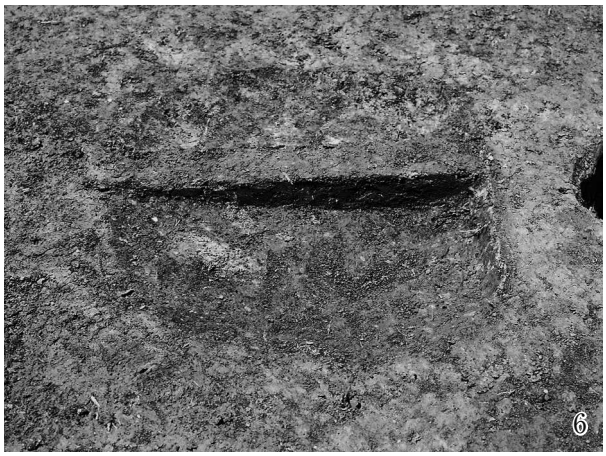
宇波ウワノ遺跡　古墳・土坑（古墳時代）

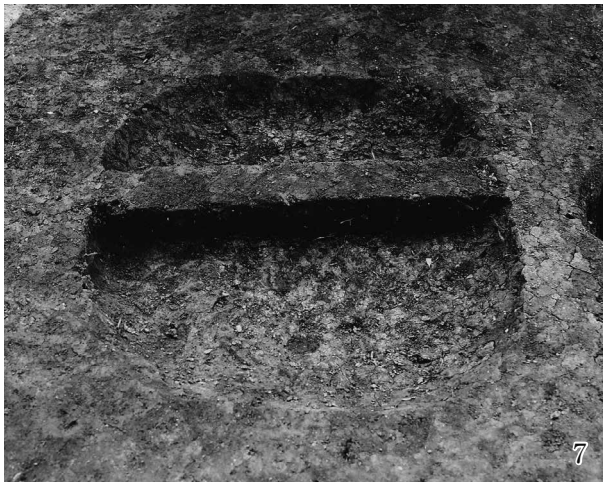
1.　3号墳（北から）　2.　周溝SD144断面（東から）　3.　周溝SD157（西から）　4.　周溝SD145（南西から）
5.　周溝SD145断面・SK149検出状況（西から）　6.　SK149断面（北から）

宇波ウワノ遺跡　掘立柱建物（古代）

1. SB1・SB2（北から）　2. SB1（西から）

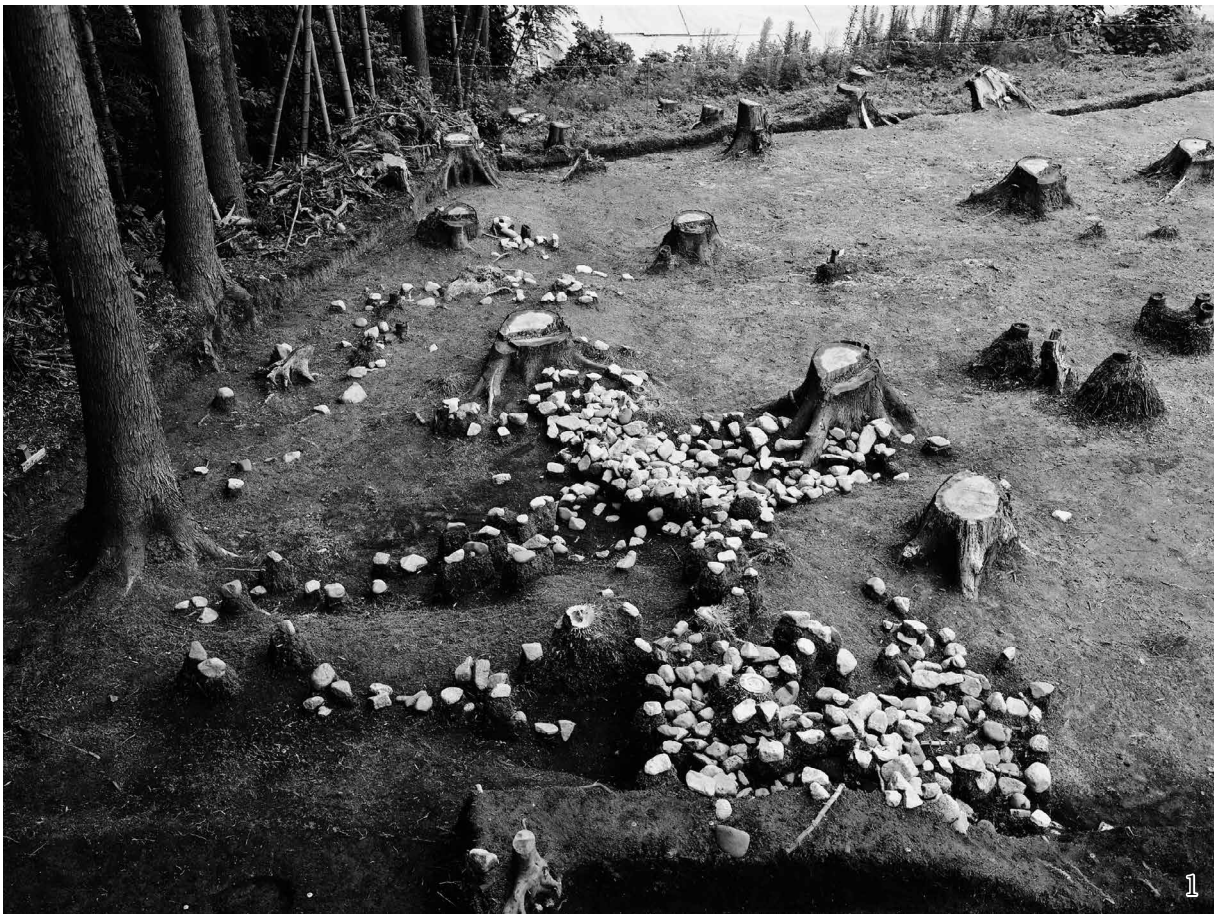






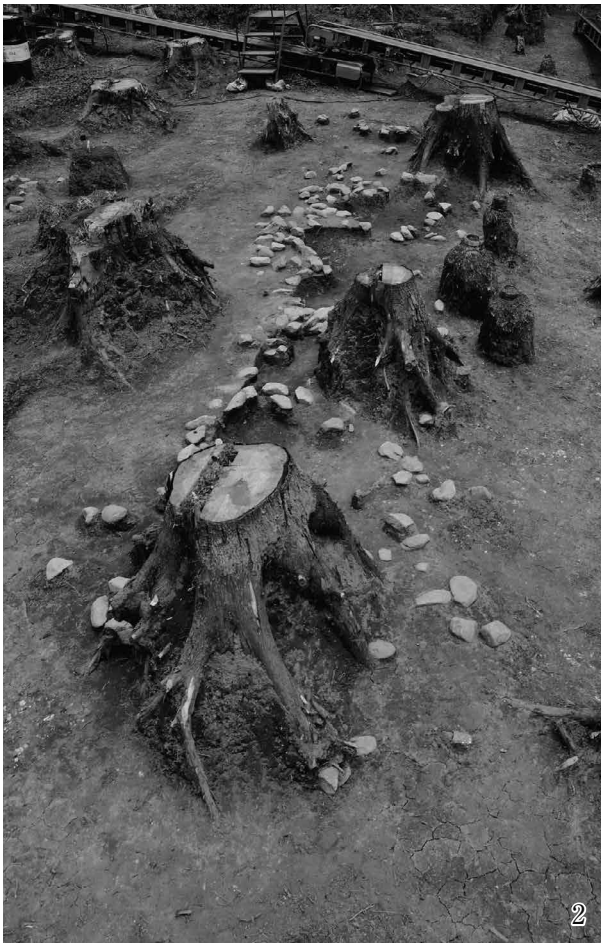
宇波ウワノ遺跡　掘立柱建物・焼土坑（古代）

1. SB2（西から） 2. SB1　SP118（東から） 3. SB1　SP130（南から） 4. SB1　SP132（東から）
5. SB2　SP122須恵器出土状況（西から） 6. SK121炭層検出状況（東から） 7. SK121断面（東から）
8. SK106（東から）



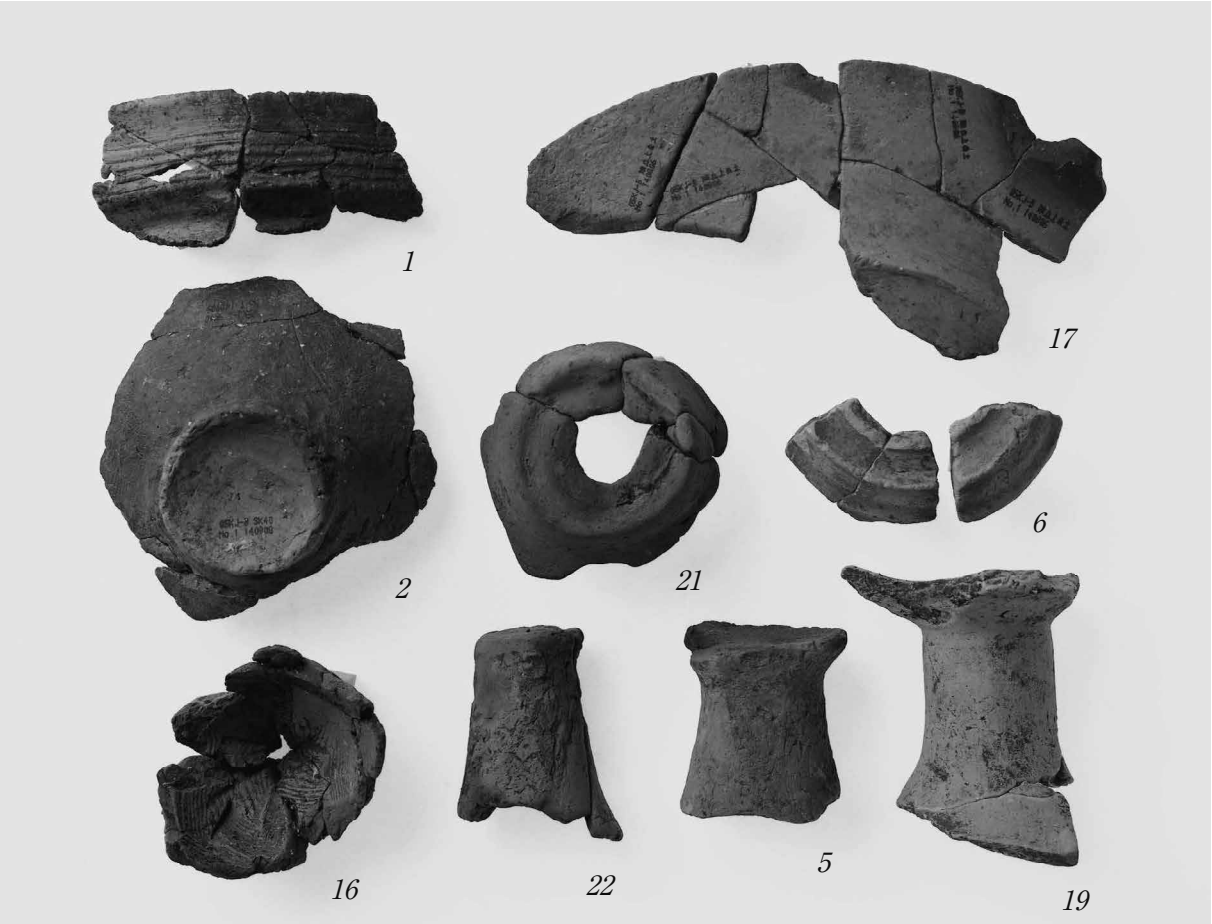
宇波ウワノ遺跡　集石遺構（中世）

1. SX182（北から）　2・3. SX182（西から）　4. SX182（南から）　5. SX182石仏？出土状況（東から）



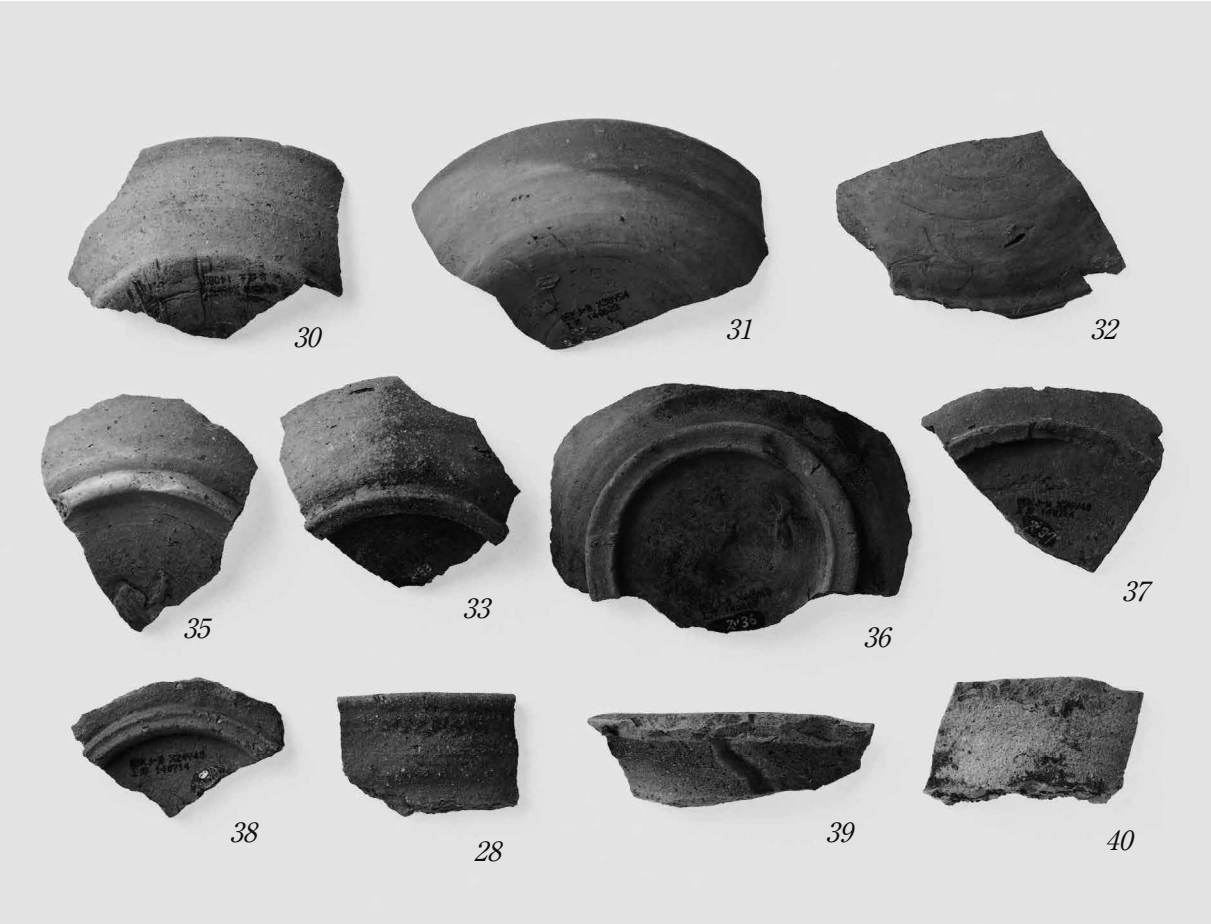
宇波ウワノ遺跡　集石遺構・構（中世）

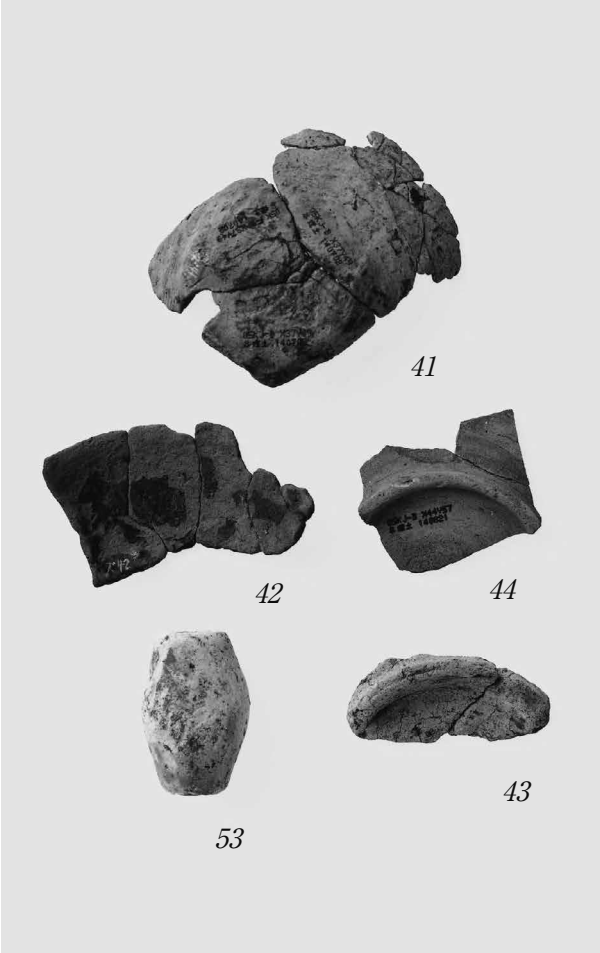
1. SX183（南から） 2. SX183（西から） 3. SD180（西から） 4. SD180（東から）



宇波ウワノ遺跡　土器・石製品

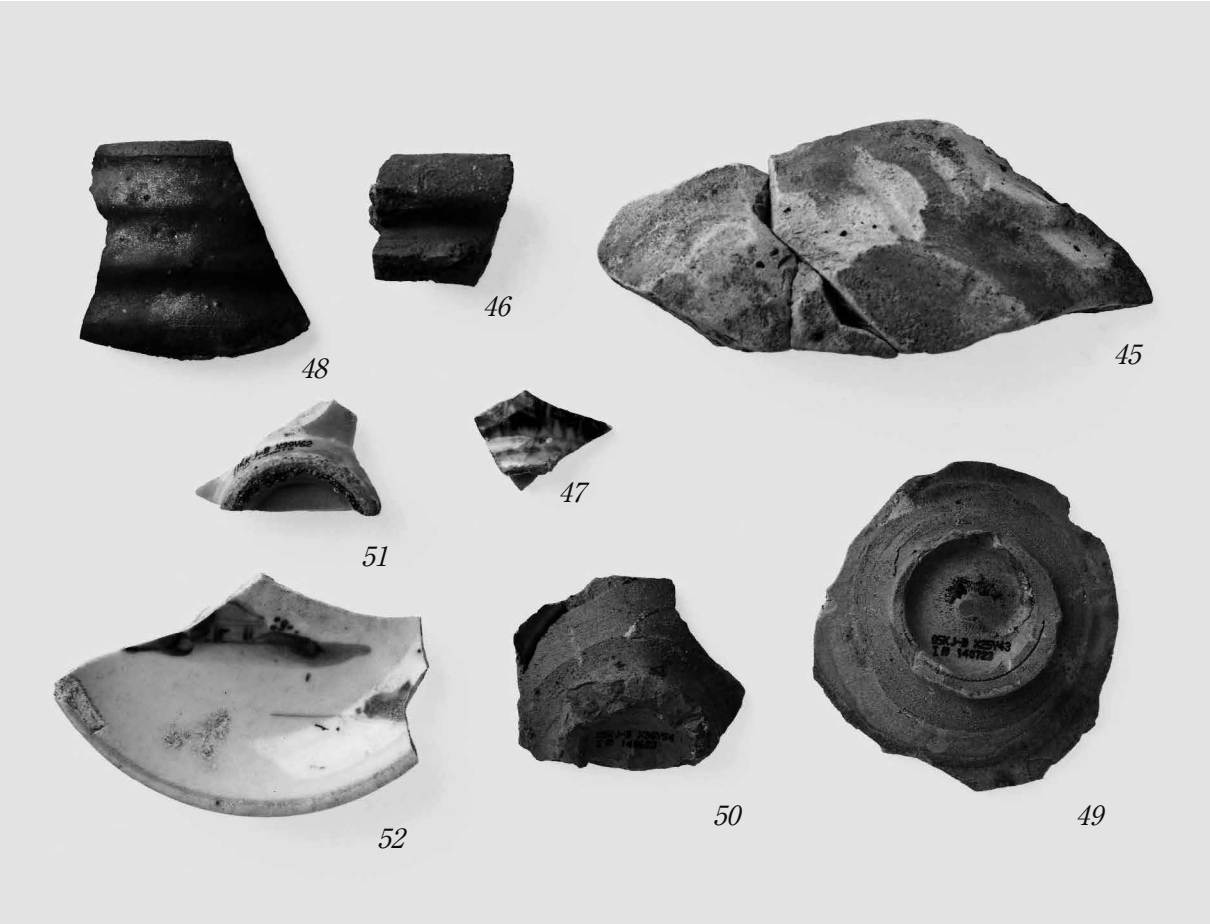
SI1（*1・2・5・6・11*）　SI1-K1（*9*）　包含層





宇波ウワノ遺跡　土器・土製品

SP122（*29*）　SP129（*28*）　包含層

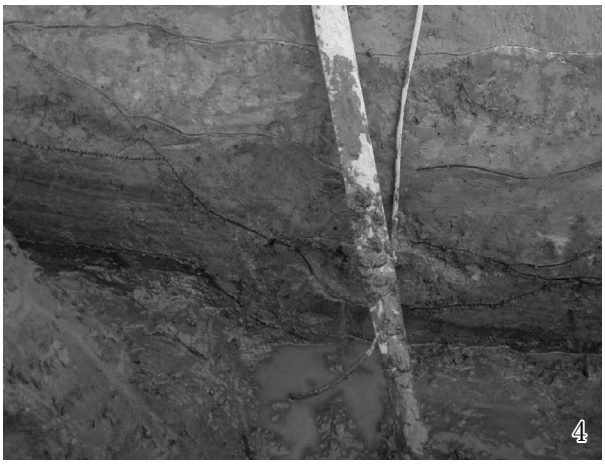


宇波ウワノ遺跡　土器・陶磁器・石製品

SX1（*54*・*55*）　SX182（*58*）　包含層

惣領野際遺跡　遠景・全景

1. 遠景（東から）　2. 古墳時代全景（北から）

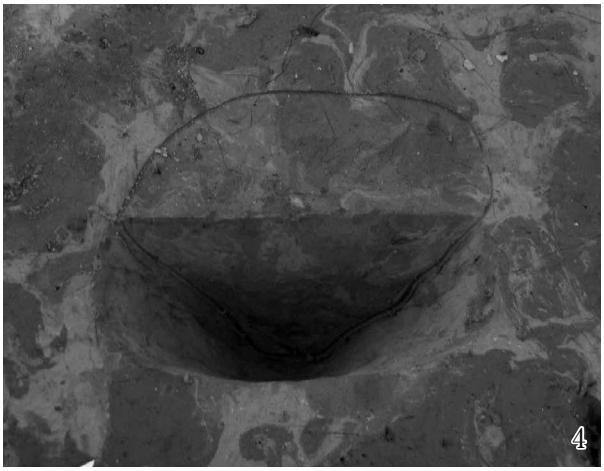


惣領野際遺跡　全景・自然流路（古墳時代）

1. 全景（南から） 2. SD601（北から） 3. SD803断面（西から） 4・5. SD601断面（西から）

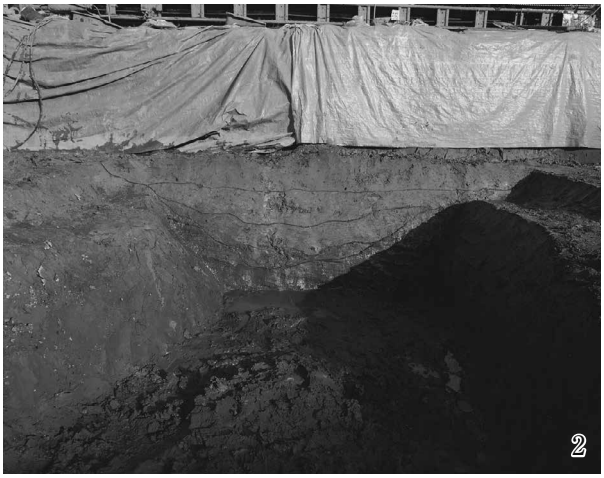
惣領野際遺跡　全景（中世）

1. 全景（北から） 2. 全景（南から） 3. 全景（真上から） 4. 北半部（真上から）



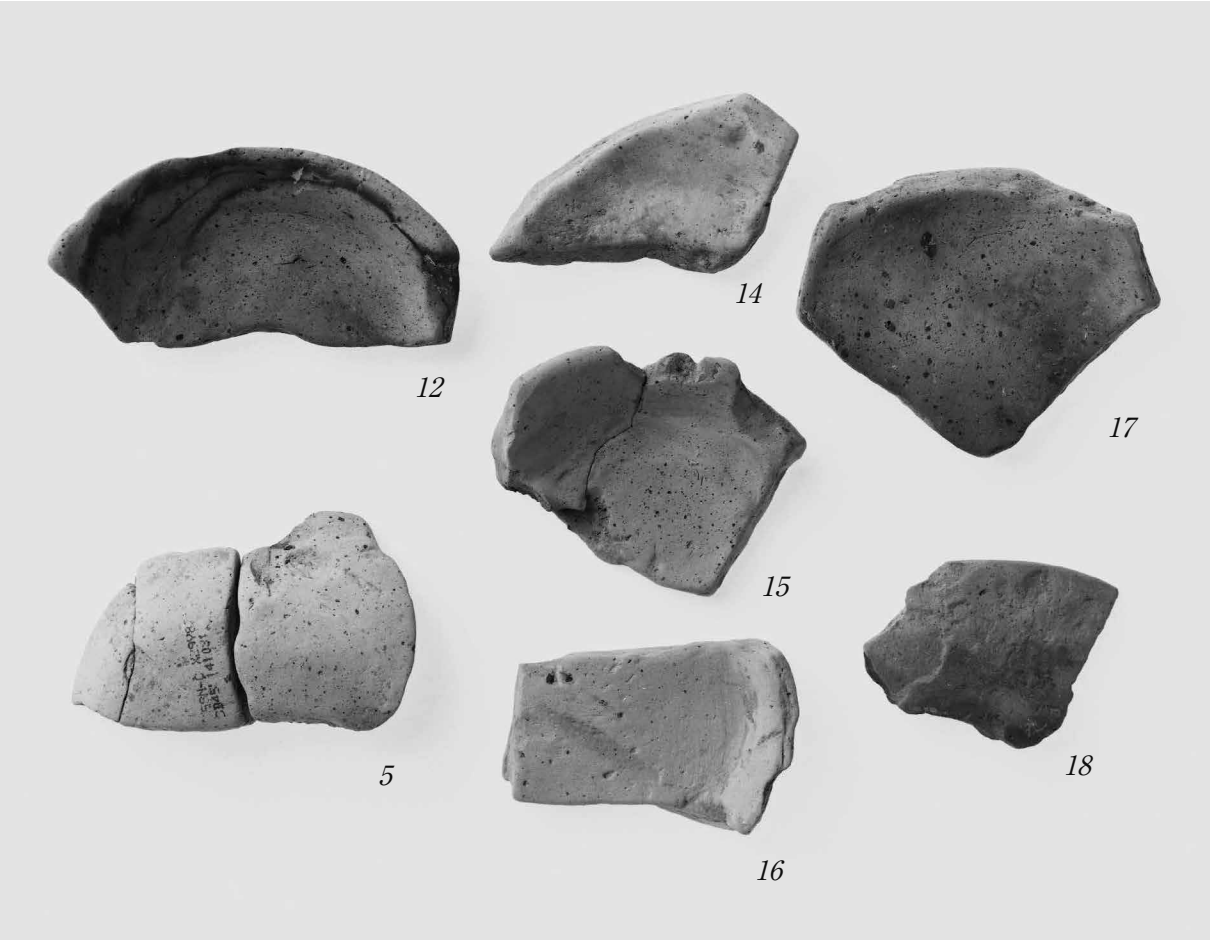
惣領野際遺跡　掘立柱建物（中世）

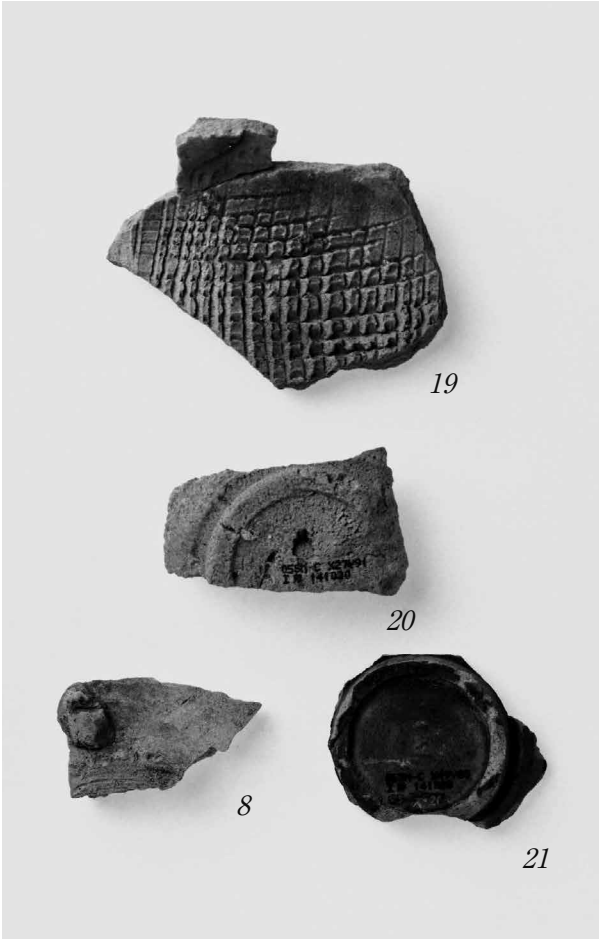
1. SB10・SB11（東から）　2. SB10　SP740（南から）　3. SB11　SP726（南から）　4. SB11　SP742（南から）
5. SP746（北から）



惣領野際遺跡　溝（中世）

1. SD347・SD710・SD736・SD717（南東から）　2. SD301断面（西から）　3. SD347断面（西から）
4. SD710断面（東から）　5. SD802出土状況（北から）



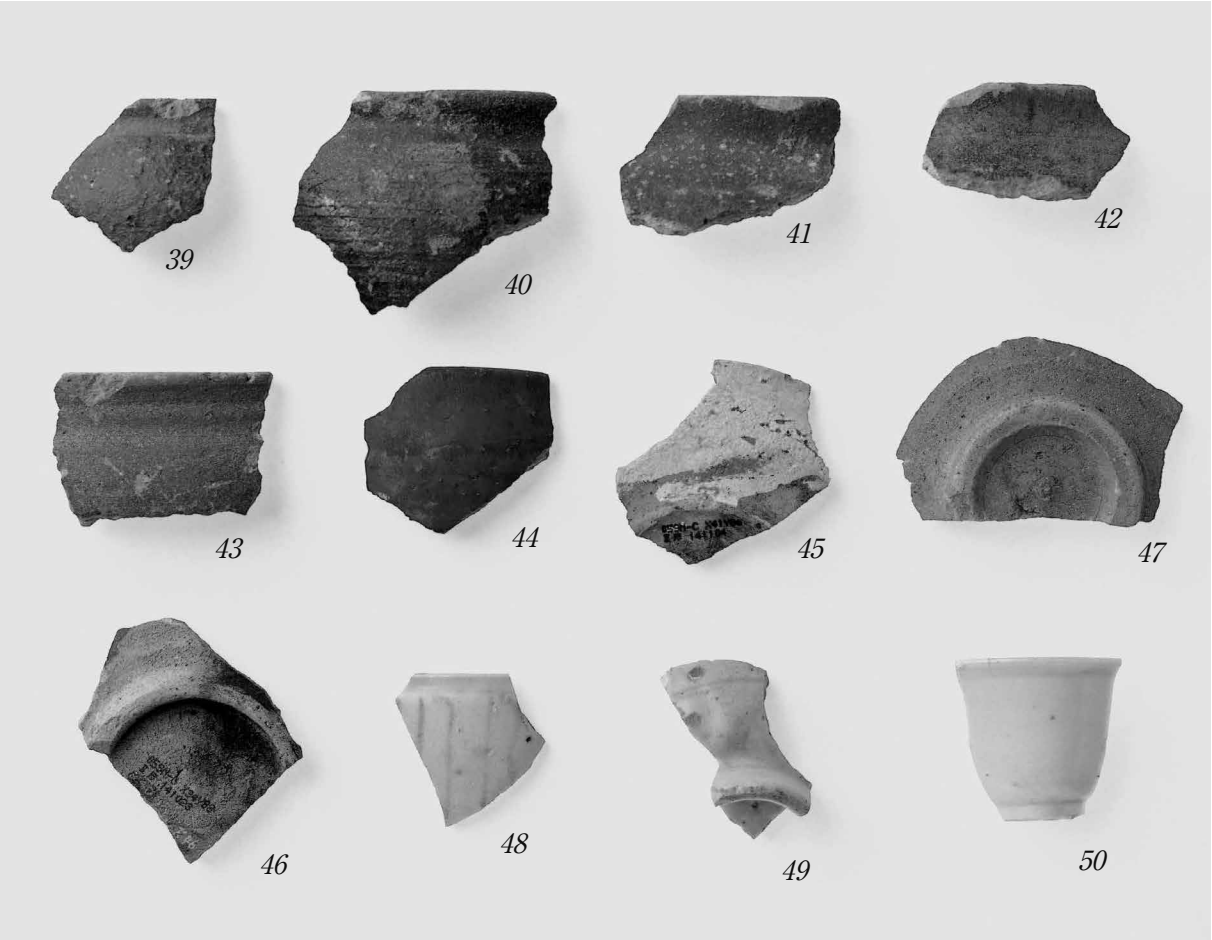


惣領野際遺跡　土器・陶磁器

SD490（*5*）　SD717（*8*）　包含層

惣領野際遺跡　珠洲

SD301（*1*・*2*）　SD490（*6*）　包含層



惣領野際遺跡　土器・陶磁器・木製品・石製品・金属製品

SD301（*3*）　SD490（*4・7*）　SD802（*9*）　包含層

報告書抄録

ふりがな	なかなみうしろやまいせき･うなみうわのいせき･そうりょうのぎわいせきはっくつちょうさほうこく
書名	中波後山遺跡・宇波ウワノ遺跡・惣領野際遺跡発掘調査報告
副書名	能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告
巻次	XV
シリーズ名	富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	第68集
編著者名	越前慎子，青山　晃，島田亮仁，新宅　茜
編集機関	公益財団法人富山県文化振興財団　埋蔵文化財調査事務所
所在地	〒930-0887　富山県富山市五福4384番１号　TEL 076-442-4229
発行年月日	2016年３月11日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
なかなみうしろやま 中波後山	とやまけん 富山県 ひみし 氷見市 なかなみ 中波	16205	205397	36° 57′ 9″	137° 2′ 8″	20131029～20131219	3,140	道路 （能越自動車道） 建設に伴う 事前調査
うなみ 宇波ウワノ	とやまけん 富山県 ひみし 氷見市 うなみ 宇波	16205	205112	36° 55′ 15″	137° 0′ 19″	20130917～20131018 20140610～20140912	2,930	
そうりょうのぎわ 惣領野際	とやまけん 富山県 ひみし 氷見市 そうりょう 惣領	16205	205311	36° 48′ 18″	136° 57′ 9″	20141001～20141210	1,200	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中波後山	集石遺構	中世	集石遺構　11箇所 平坦面　５箇所	珠洲・土師質土器・石製品	13～15世紀の集石遺構 石仏が出土
		中世以降	道路　１条 土坑　１基		
宇波ウワノ	集落 古墳？ 集石遺構	弥生時代終末期	竪穴建物　１基 土坑　４基	弥生土器・石製品	
		古墳時代	古墳？　１基 土坑　１基	土師器	
		古代	掘立柱建物　２棟 焼土坑　４基 土坑　25基	土師器・須恵器・灰釉陶器	８世紀の掘立柱建物と焼土坑
		中世	集石遺構　３箇所 溝　１条	珠洲・中国製染付・土製品・石製品・金属製品	集石遺構のうち１基は12～13世紀の塚
		近世～近代	溝　１条	越中瀬戸・唐津・伊万里	
惣領野際	集落	古墳時代	自然流路　２条	土師器・種実	
		中世	掘立柱建物　２棟 溝　８条 自然流路　１条 土坑　25基	中世土師器･中国製青磁･珠洲・越前・古瀬戸・瀬戸美濃･木製品･石製品･金属製品	13～14世紀の集落

要約

・中波後山遺跡では，中世の集石遺構と平坦面を検出した。集石遺構は13世紀後半から15世紀代の間に３段階の変遷を経ている。平坦面も同時期に利用されていたと考えられる。蔵骨器と推測される珠洲の壺や石仏の出土があり，葬送や宗教的な活動に関わる場所であった可能性が高い。

・宇波ウワノ遺跡では，弥生時代終末期の竪穴建物，古代の掘立柱建物と焼土坑，中世の集石遺構等を検出した。古墳については，墳丘状の地形と周溝状の溝を確認したが埋葬施設や盛土は検出されなかった。焼土坑は眺望の良い丘陵頂部付近にあり，炭化物の放射性炭素年代測定では７～９世紀の年代が得られた。一段低い尾根上の平坦地には８世紀の掘立柱建物があり，これらは古代の烽に関連する可能性もあるが断定できない。中世の集石遺構は丘陵頂部と斜面にあり，頂部の１基は盛土を伴う塚とみられるが，構築の目的は不明である。

・惣領野際遺跡では，古墳時代前期の自然流路と，中世前期の掘立柱建物や溝からなる集落を検出した。溝の方向は東西・南北の方角に近く，13世紀前半には条里地割に則った開墾が進んでいたとみられ，耳浦荘に関連する集落の可能性がある。

2016（平成28）年３月１日　印刷
2016（平成28）年３月11日　発行

富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第68集

中波後山遺跡
宇波ウワノ遺跡　発掘調査報告
惣領野際遺跡

－ 能越自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘報告ＸＶ －

編集・発行　公益財団法人富山県文化振興財団
埋蔵文化財調査事務所
〒930-0887　富山市五福４３８４番１号
TEL　076－442－4229

印　　刷　株式会社富山フォーム印刷
〒939-8214　富山市黒崎１７３番１
TEL　076－492－5565